

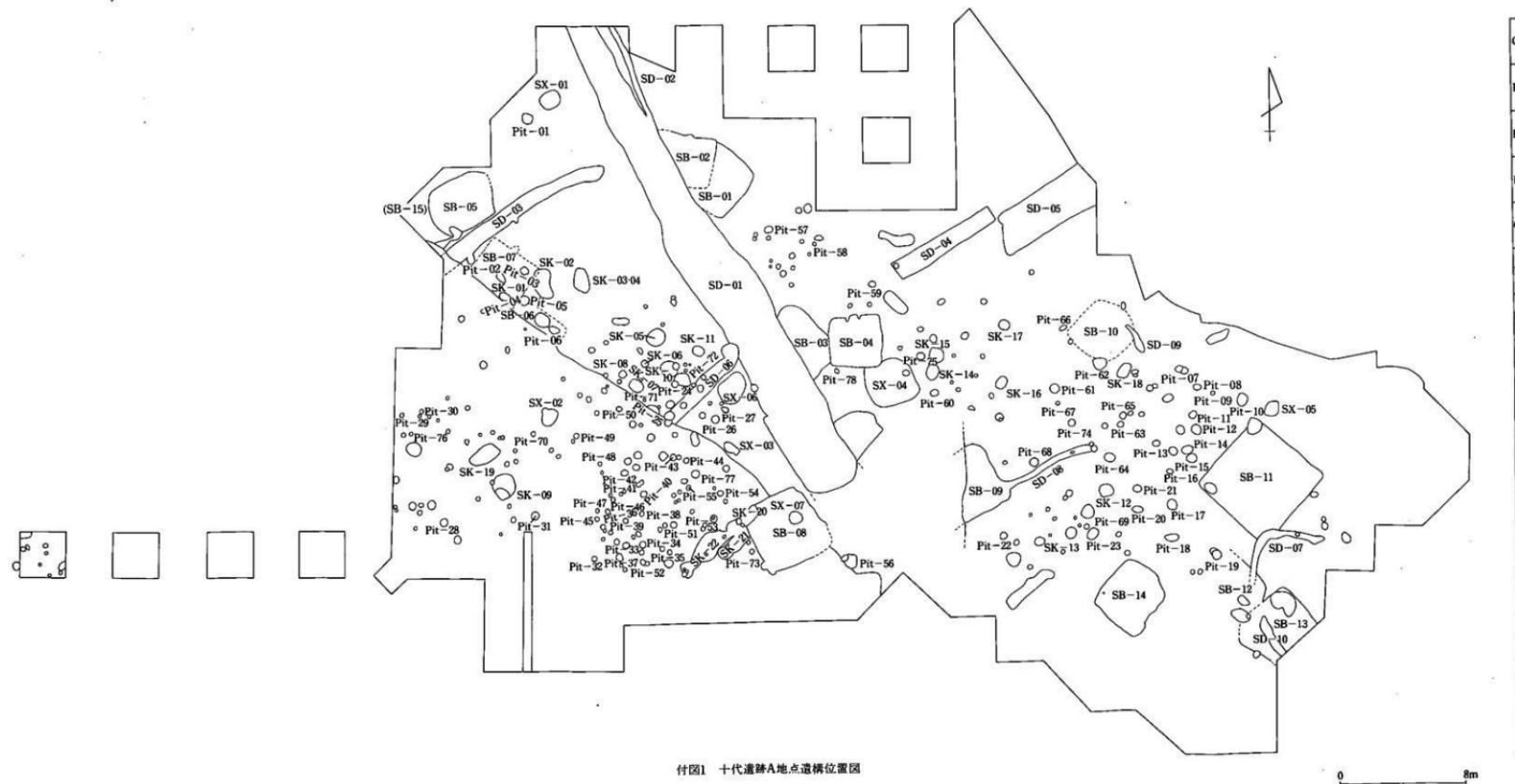
ヒヨウ だい みやにし わくわく 十代・宮西・若宮

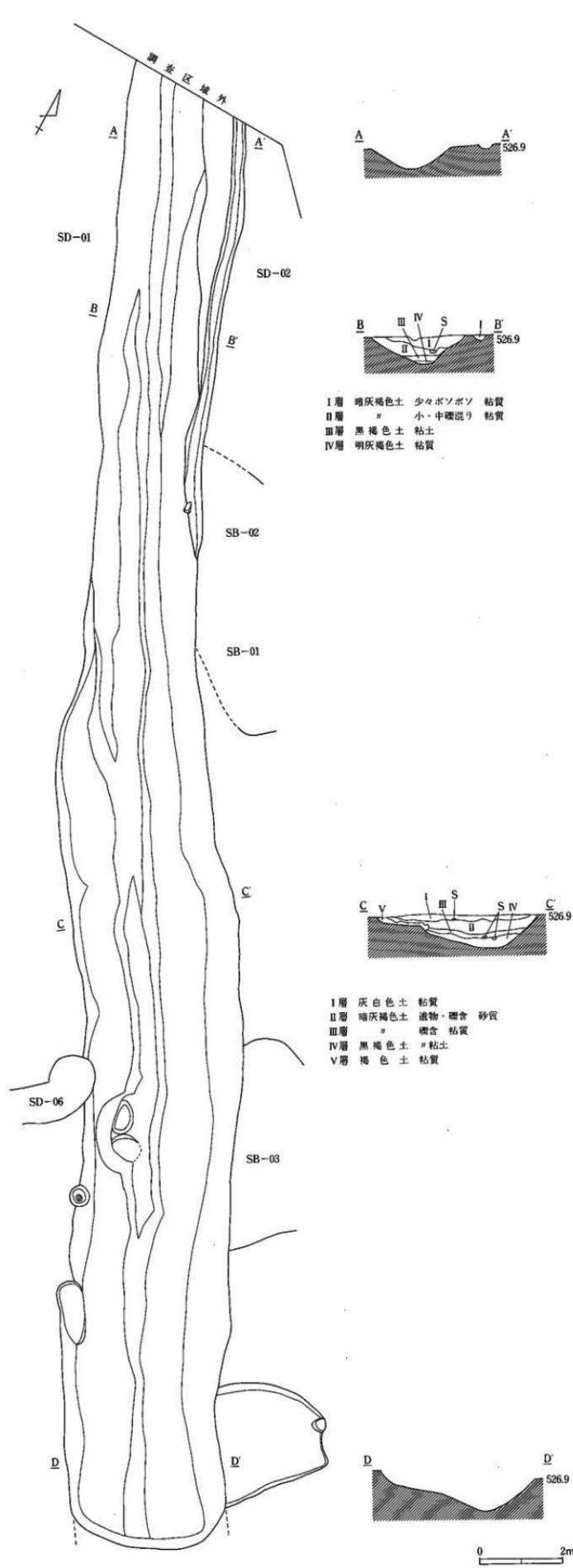
—十代遺跡・宮西遺跡・若宮遺跡・次原遺跡、

前田遺跡・唐元遺跡 記念発掘調査報告書—

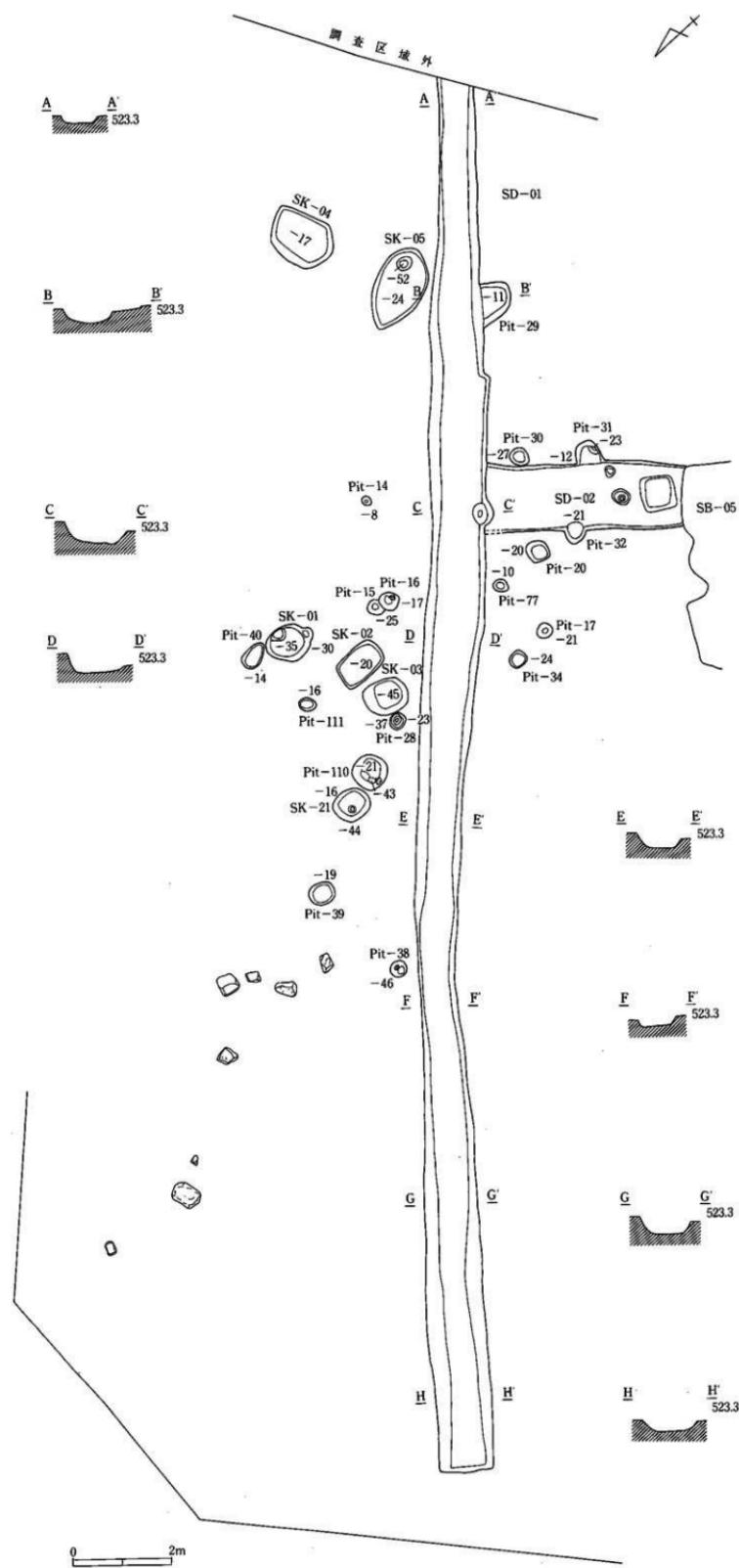
1994.3

東部町教育委員会

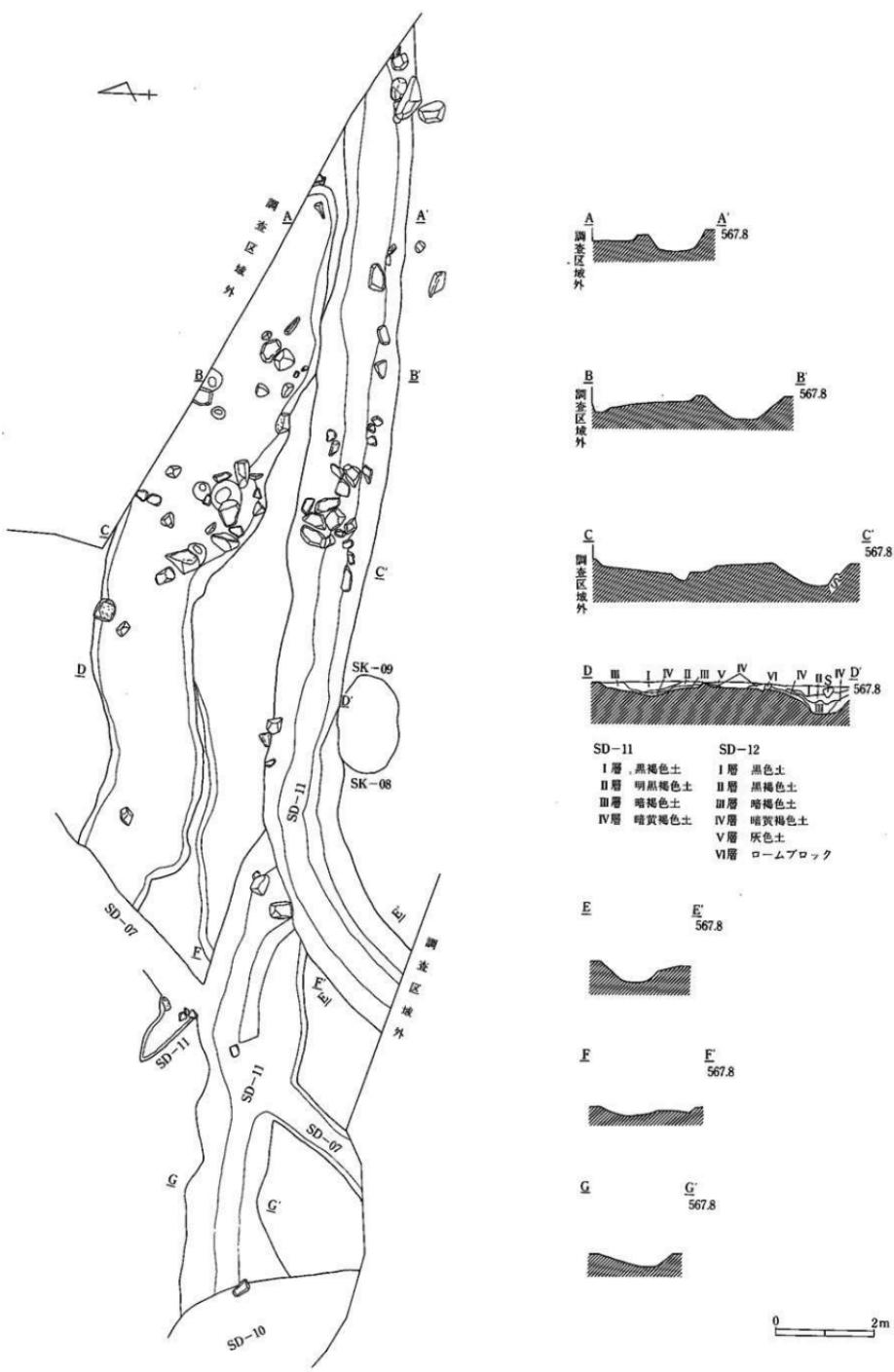




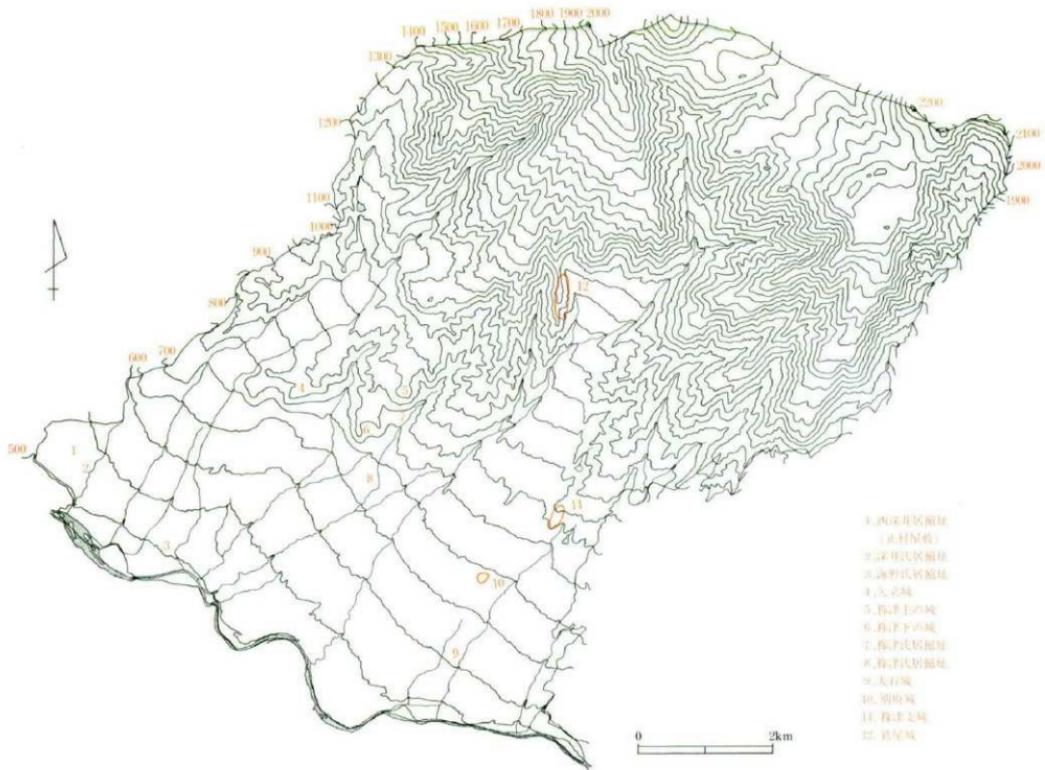
付図2 十代遺跡A地点 SD-01・02 実測図



付図3 十代遺跡C地点 SD-01・02 他実測図



付図4 若宮遺跡 SD-11-12 実測図



付図5 東部町の地形と中世城館跡

じゅうだい みやにし わかみや
十代・宮西・若宮

—十代遺跡・宮西遺跡・若宮遺跡・次郎淵遺跡・
前田遺跡・唐沢遺跡 緊急発掘調査報告書—

1994・3

東部町教育委員会



1 東部町全景航空写真



2 東部町西部航空写真



1 十代遺跡A地点 SB-01・02



2 十代遺跡A地点 SB-01 炉



1 十代遺跡A地点 SB-11



2 十代遺跡A地点 出土遺物（灰釉陶器・青磁・鐵製品）



1 十代遺跡C地点 SB-01~06他



2 十代遺跡C地点 柱穴列-01他



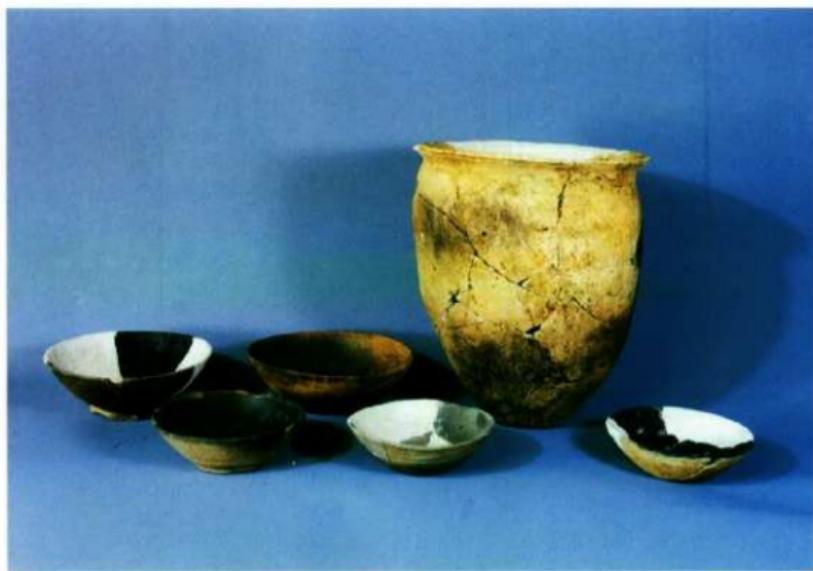
1 十代遺跡C地点 SK-24 遺物出土狀態



2 十代遺跡C地点 出土遺物（石製品・灰釉陶器）



1 宮西遺跡 SB-04 カマド断面



2 宮西遺跡 出土遺物



1 若宮遺跡 出土土器



2 若宮遺跡 出土土製品



1 若宮遺跡 出土石器・石製品



2 若宮遺跡 出土石器

例 言

1. 本書は、農村活性化住環境整備事業（深井地区）に先立ち実施された長野県小県郡（ちいさがたぐん）東部町大字和（かのう）に所在する十代遺跡・宮西遺跡・若宮遺跡・次郎淵遺跡・前田遺跡・唐沢遺跡の緊急発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査は、東部町教育委員会が組織した東部町遺跡発掘調査団が平成4年4月20日から同年11月12日まで実施した。平成5年度の前田遺跡・唐沢遺跡の立ち会い調査は、東部町教育委員会が工事ごとに実施した。
 3. 今回の発掘調査により、整理用コンテナ約80箱にのぼる多量の出土遺物があつたため、十分な検討を加えることができなかつた。そのため本書では、調査結果の報告に重点を置いて、記述は最小限に止めるにとした。
 4. 整理作業は、塩入秀敏の指導により、堀田雄二・西沢 浩・坂井美闇・西島洋子・若林勝子・塩川美代子・塩沢むつき・池田育子・荻原貴子・川瀬まつ子が主体となつて行つた。
 5. 本書の編集は塩入秀敏・堀田雄二が行い、遺構および遺物の実測・製図は、堀田雄二・若林勝子・塩川美代子・塩沢むつき・池田育子・荻原貴子・川瀬まつ子が主体となつて行つた。また、執筆者はそれぞれ文末に記したとおりである。
 6. 図中の北は磁北を示し、レベルは海拔高度（単位：m）を記した。
 7. 遺構・遺物図等の縮尺は、すべて図中にスケールを付したが、おおむね以下のとおりに統一した。
遺構図 住居址 $\frac{1}{10}$ 、土壙・集石・炉等 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{10}$ 遺物・土器実測図 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 石器・土製品等 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、古錢拓影 $\frac{1}{2}$ また、図中のスクリーントーンは以下の通りである。

8. 発掘調査の現場において、あるいは整理作業を通して、本書が上梓されるまでには、多くの方々や諸機関の御理解・御協力を賜った。以下、御芳名を記して深く感謝の意を表したい。

(敬称略)

五十嵐幹男・岩佐今朝人・尾見智志・川上 元・川崎 保・倉沢正幸・久保田敦子

児玉卓文・小山 益・塙崎幸夫・林 和男・森嶋 稔・山口 明・若林勲夫

上小地方事務所土地改良課・長野県教育委員会文化課・地元園場整備委員

地元西深井区の皆様・地元東深井区の皆様

目 次

例言

第一章 環境

第1節 自然的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3節 深井地区の環境	11

第二章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過	19
第2節 発掘調査団の構成	20
第3節 試掘調査の結果	21
第4節 発掘調査日誌	35
第5節 遺物整理と報告書の作成作業	37

第三章 十代遺跡の調査

第1節 調査の概略	39
第2節 A 地点の調査結果	41
第3節 B 地点の調査結果	80
第4節 C 地点の調査結果	88

第四章 宮西遺跡の調査

第1節 調査の概略	111
第2節 検出された遺構とその出土遺物	114
第3節 遺構外から出土した遺物	119

第五章 若宮遺跡の調査

第1節 調査の概略	127
第2節 検出された遺構とその出土遺物	128
第3節 遺構外から出土した遺物	164

第六章 次郎瀬遺跡・前田遺跡・唐沢遺跡の調査

第1節 調査の概略	165
第2節 検出された遺構と出土した遺物	167

おわりに

参考・引用文献

第一章 環 境

第1節 自然的環境

長野県の東部に位置する小県郡東部町は、北方に連なる高峰山(2,092m)・東竜ノ登山(2,227m)・西竜ノ登山(2,212m)・三方ヶ峰(2,040m)・湯の丸山(2,105m)・烏帽子岳(2,066m)などの東信火山群に属する山々の稜線を以て群馬県吾妻郡嬬恋村・小県郡真田町に、また西流する千曲川を南の境として北佐久郡北御牧村・小県郡丸子町に接し、東の小諸市・西の上田市によって挟まれた略菱形を呈する約90km²の町である。

北に高く南に低い南面傾斜の地形は、上記東信火山群の雄大な裾野地形の一部であり、それは大きく三つに分けることが出来る。一つは山体部であり、二つはその山体部を深く刻み浸食して流下する河川の形成した押出扇状地であり、三つは千曲川がつくった河岸段丘台地および沖積氾濫原である。田中橋付近の千曲川河床が海拔500m弱、上田市染屋台地から連続する第一段丘が町役場で533m、山麓線は称津東町・西宮で700mあり、町の東端と西端とではそれぞれに50~100mの差があり、また第一段丘を認められない部分があるものの、概ねこの傾向で三つの地形が連続する。

山体を浸食して放射状に流れ下る河川は、東から深沢川・大石沢川・西沢川・所沢川・求女沢川・三分川・金原川・成沢川・笠石川・瀬在川などがあり、すべて千曲川に注ぐ。このうち、深沢川は下流地域が、大石沢川は中流地域が小諸市に属する。また、瀬在川は中流地域と下流地域が上田市に属する。深沢川の形成する大規模な押出扇状地は殆どが小諸市にはいるので別として、所沢川と金原川・成沢川のつくる扇状地も大規模なもので、東部町の可耕地の殆どが大部分がこの二つの扇状地の上にあると言つてよい程である。特に、烏帽子岳・三方ヶ峰の裾合を流下する所沢川の土砂運搬量は大きく、東部町最大の扇状地をつくり、扇端は田中から大石におよび、所どころで第一段丘を覆い尽くしている。この川はしばしば氾濫して被害の記録も多く残しているが、中でも寛保2(1742)年の大洪水(いわゆる「寛保戊の満水」)はいくつもの集落を壊滅させる大惨事となつた。また金原川・成沢川は双子川で、共に田沢の奥深くから扇状地を形成して大きな合成扇状地をつくって、下方では第一段丘を破壊している。この両河川も寛保2年の大洪水で大被害を与えた。

この大規模な押出扇状地は、下部は巨大な砾をもつ砂礫層で、地表部は火山灰・火山砂からなり、有機物を含んで黒灰色を呈する。これは、俗に「黒ボク」と呼ばれ、軽く且つ粗いため保水力が弱い。その上河川が短小で水量も少ないので、水田面積は広くない。水田の2倍の面積を有する広い畑地帯は全国一のクルミの栽培地帯である。しかし最近は、巨峰・りんごの栽培面積が

急増している。

集落は、山麓線沿いに東から原口・新張・出場・袴津・益村田・東上田・大川・栗林と連なり、典型的な山麓集落の形をなし、これを袴津街道が結んでいる。また千曲川に沿って河岸段丘上あるいは氾濫原を北国街道が走り、その宿場や街村集落として赤岩新田・片羽・牧家・加沢・常田・田中・本海野・西海野が連続している。そしてこの二者の中間である扇央・扇端部に、東の中屋敷・別府・金子・大石から西の曾根・東深井・西深井に至るまで多くの集落が立地している。上記の他に、奈良原・姫子沢・東入・西入の谷頭集落、横堀・田沢の谷平野集落が有る。

上記の如く、最高所の東篠ノ登山(2,227m)から最低の西海野千曲川河床(485m)まで約1,740mの比高差をもち、火山から大河川まで有する東部町の地形は、全体的には雄大な火山裾野地形をなす。しかし、微細にみると多くの変化に富んだ地形によってなり、遺跡もこれら小地形の誓約を少なからず受け立地していることは言うまでもない。

1998年には長野市を中心にして冬期オリンピックが開催される。それに向けて交通網の整備や周辺開発の音が日増しに高くなっている。東部町においては、上信越自動車道が町を東西に横断することになっており、またインターチェンジとサービスエリアが建設される。浅間山麓広域農道も全て供用されており、周辺の開発が始まっている。さらに、長野県土地開発公社による住宅団地の造成なども行われ、土地利用が大きく変貌しつつある。

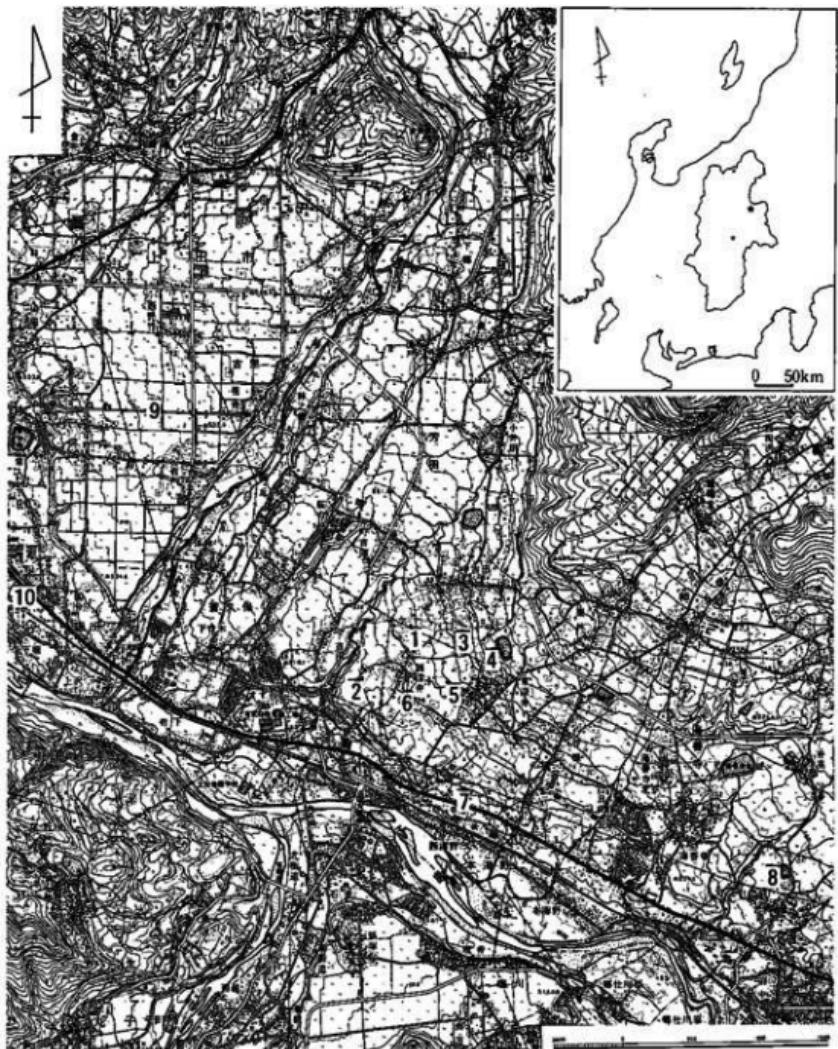
このような状況の中で、遺跡を取り巻く環境・景観もまた変わらざるをえない。遺跡は周辺の景観と相まって歴史的風土をつくり、文化財としての価値をもつものだが、本来の価値は望むべくもないのが現状である。記録保存を目的とする発掘調査である以上、遺跡の自然的環境・景観を常に考慮しつつ、遺跡のもつ意味を考えるものである。

第2節 歴史的環境

ここ10年ばかりにわたって実施されているは場整備事業に先立つ発掘調査により、東部町の原始古代史は年々書き替えの必要に迫られている。それらの新しい成果も踏まえながら歴史的環境についてみてみよう。

(1)旧石器時代

昭和59~61年度の3年間にわたった大字出場の上の原遺跡および上前橋遺跡から旧石器時代の遺物が出土している。すなわち、上の原遺跡C地点からはグレイバーファシットを有する剝片石器・石核の剥離面再生剝片・石刃上剝片など、E地点からは安山岩製ナイフ形石器および剝片、上前橋遺跡C地点からは小石核・御子柴型尖頭器がそれぞれ出土している。いずれも旧石器人が生活活動を営んでいた根拠にはならないが、上前橋Cのローム層中炭化物の存在が見られたことから、彼らの活動の場であったことは確実視できる。現在までのところ、これらが東部町で発見された最古の遺物で、今から1万数千年ないし2万年ほど遡れるものである。このほかにも、和



第1図 深井地区の環境

1. 次郎瀬遺跡 2. 十代遺跡 3. 宮西遺跡 4. 若宮遺跡
 5. 前田遺跡 6. 唐沢遺跡 7. 中曾根親王塚古墳 8. 茂
 替遺跡 9. 染屋条里的遺構 10. 信濃國分寺・尼寺跡

の田沢地区や、祢津の奈良原、滋野の聖などは、地形的に見てもこの期の遺跡が存在する可能性が高いと言える。

②縄文時代

旧石器時代に続く縄文時代幕開けの草創期については全く分かっていない。ただ、奈良原や滝ノ沢からかつて有舌尖頭器が出土したというので、それが事実ならばこの期に所属させてよい可能性がある。現物の行方が不明で実見していないので、いろいろ言うのは危険だが、いずれもこの期の遺物が出土しておかしくない場所である。

早期の遺物としては、昭和53年に発掘調査した海善寺の大門田遺跡出土の撫糸文系土器や押型文土器が知られていたが、その後の調査で、滋野の塚穴遺跡・天神遺跡、祢津の古屋敷遺跡A・B・C地点・上の原遺跡A地点、和の中尾遺跡・大川遺跡・井高遺跡などから押型文系土器・表裏繩文系土器や絡状体圧痕・貝殻腹縁圧痕をもつ土器が出土している。また、東海地方に分布の中心をもつ木島系土器の出土も見られる。そのように、よく分かっていない草創期に比べ、早期の遺物を出土する遺跡が増えていることが分かる。そして、その多くが山麓台地上に立地しており、それが一つの特徴でもあるようだ。

前期に至るとわかれに遺跡数が増加し、山麓地帯から扇状地上そして河岸段丘上まで、選地にも幅がみられる。かなりの数の遺跡が数えられる中で発掘調査された遺跡としては、花積下層式併行の尖底ないし丸底の土器をもつ住居址が検出された祢津真行寺遺跡・諸磯式併行土器を出土した和の大門田遺跡があげられる。その後の場整備事業に先立つ一連の発掘調査では、滋野の塚穴遺跡・陣場遺跡・禪津の久保在家遺跡・清水尻遺跡・上の原遺跡C・D・E地点・古屋敷遺跡A・B地点・田中の高呂添遺跡・伊勢原遺跡・新屋の石原田遺跡・和の大川遺跡B地点などがあり、上信越自動車道建設予定地で長野県埋文センターが調査した和の中原遺跡からもこの時期の住居址が4軒まとまって検出されている。中でも、久保在家遺跡・清水尻遺跡・古屋敷遺跡は近接した遺跡であり、神ノ木・関山・黒浜・諸磯など前期各期の土器がみられる。また上の原遺跡E地点からは羽状繩文系の土器がまとまって出土しており、塚穴遺跡の土器などとともに良好な資料と言える。今までのところ住居址の検出はごく少なく、集落としてはとらえにくいが、真行寺遺跡・中原遺跡の例などから数軒の住居址により構成される集落が、東部町の各地に存在していたようである。

1万年にも及ぶ縄文時代の中で最盛期である中期は、八ヶ岳南麓から山梨県にかけての一帯を中心に中部高地にその華が咲いた。しかし、東部町における中期の特徴としては、中頃の最盛期よりはむしろ中葉すぎの爛熟期から末葉の退廃期に属するものが多い点があげられる。この現象が何を意味するのかその理由については様々に考えられているが、ともかくこの期の大きな遺跡が東信火山群山麓の海拔700~800mの地帯にベルト状に集中する傾向があり、軽井沢町・御代田町・小諸市・東部町・真田町と連なる。成立・不動坂・古屋敷・真行寺・油田・桜畠・中原・鍾輪堂・辻田の各遺跡は東部町を代表する中期の大遺跡である。中でも成立遺跡は大石沢川扇状地

扇顶部近くに當まれた遺跡で、昭和5年に敷石住居址が発見され、全国でも最も早い指定に入る国指定史跡となった。昭和58・59年の範囲確認調査でも、2軒の敷石住居址、3軒の竪穴式住居址およびそれに伴う大量の遺物が検出され、面積60,000m²にも及ぶ広大な遺跡であることが確認された。また、昭和62年の道路工事に先立つ調査では、中期の竪穴式住居址32軒と後期の敷石住居址1軒が発見されて龐大な遺物が出土し、改めて母村的集落で且つ保存状態が良好であることが確認されている。現在、その保存と活用について多方面から検討されている。

後期遺跡も町内各地に存在する。その中で代表的なものは成戸遺跡と和の中原遺跡・滋野の桜井戸遺跡である。成戸遺跡からは堀之内式期から加曾利B式期に至る良好な資料が出土しているし、中原遺跡では敷石住居址とそれに伴う堀之内式併行と考えられる土器が検出されている。また、桜井戸遺跡は信越線複線化工事に先立つ発掘調査により、後期前葉の敷石住居址と土器が出土した。古屋敷遺跡もこの期の大遺跡で、A地点では加曾利B式期の石棺墓が3基が並んで検出され、C地点では堀之内式期に属する柄鏡式の敷石住居跡が検出されている。B地点からも称名寺式期・堀之内式期・加曾利B式期の土器が大量そして満遍なく出土している。和の大川遺跡、井高遺跡、林津の清水尻遺跡、上の原遺跡などからもこの時期の土器が出土している。しかし、中期中葉から後葉にかけての様相に比して遺跡数は減少の傾向をみせる。

晩期の遺跡は他地方と同様に激減して、町内では現在までのところ、末葉の浮線網状文が施された水式土器の破片1点を出土した塚穴遺跡を含め5遺跡が知られているにすぎない。

(3)弥生時代

弥生時代遺跡はすべて後期後半の箱清水式期に属するもので、当時の生活がそれまでの狩猟・採集が中心だったものから稻作などの栽培中心に変わったので、遺跡の立地も縄文時代とは対照的である。すなわち、押出扇状地の扇端部からの湧水を活発に利用した河岸段丘上に圧倒的多数が存在しており、城の前遺跡・長繩手遺跡・大門田遺跡・三分南遺跡・次郎測遺跡などが知られていた。井高から海善寺にかけての凹地は山を背にしており洪水に際して安全地帯であったため、小遺跡が集中する傾向がみられる。大門田遺跡の溝址は、その凹地の湧水を引いた灌溉用水路だったと考えられる。その後、天神遺跡・高呂添遺跡・石原田遺跡・舎輪堂遺跡・東五町遺跡・西五町遺跡などが調査され、この時期の遺構や遺物が検出されている。その中で高呂添遺跡で検出された住居址は良好な土器セットをもつ。

大川・栗林の山麓線集落下方の金原川・成沢川扇状地上に点々と遺跡が存在するのは、良好な湧水が得られたからであろう。しかし、いずれも規模は小さく、次郎測遺跡は例外的にやや規模が大きい。遺物の包蔵地あるいは散布地として登録されている遺跡の数は決して少なくないが、散発的な遺物出土の小遺跡が多く大遺跡が見られないのは、河岸段丘上の後背湿地の面積が狭いこと、扇状地上は滞水性が悪く当時の技術をもってしても水田化が困難だったことなどから、開発の後進地であったためと考えられている。



第2図 深井地区的道路と周辺の道路

第1表 深井地区の遺跡と周辺の遺跡(1)

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	保存状態	備考
1	次郎淵遺跡	○	○		○	○			ほぼ良好	昭和28年度発掘調査
2	屋敷遺跡					○	○	良	好	『正村屋敷』
3	十代遺跡	○	○	○	○	○			ほぼ全壊	平成4年度発掘調査
4	唐沢遺跡			○	○				ほぼ良好	
5	琵琶塚古墳			○					半壊	
6	宮西遺跡	○			○				ほぼ全壊	平成4年度発掘調査
7	前田遺跡				○	○			ほぼ良好	
8	若宮遺跡	○	○			○			一部残存	平成4年度発掘調査
9	耳塚古墳			○					石室露出・半壊	
10	下平遺跡	○	○	○	○				一部破壊	昭和49年度発掘調査
11	下平古墳群			○					一部破壊・ほぼ全壊	3基あり
12	原前遺跡		○	○					ほぼ全壊	
13	ののう林の古墳			○					石室の一部残存	
14	王塚遺跡		○	○	○				一部破壊	
15	王塚古墳			○					一部破壊	町指定史跡
16	臣村遺跡	○	○	○	○				一部破壊	
17	月夜平遺跡	○	○	○	○				ほぼ半壊	
18	刀塚古墳			○					ほぼ全壊	
19	中曾根親王塚古墳			○					ほぼ良好	県指定史跡
20	右近塚古墳			○					全壊	昭和24年度発掘調査
21	西成沢遺跡	○			○				ほぼ半壊	昭和59年度発掘調査
22	王田遺跡		○	○	○				ほぼ全壊	

第1表 深井地区の遺跡と周辺の遺跡(2)

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	保存状態	備考
23	海野(岩下)遺跡				○	○			ほぼ半壊	
24	西原遺跡	○	○	○	○				ほぼ良好	
25	西原古墳			○					ほぼ全壊	
26	明神塚古墳			○					ほぼ全壊	
27	成沢遺跡	○	○	○	○	○			ほぼ半壊	昭和49年度・平成5年度発掘調査
28	上の山古墳群			○					ほぼ半壊	3基あり、一基は富士塚か。
29	中原遺跡群	○	○	○	○				ほぼ全壊	昭和28年度・平成2年度発掘調査
30	中原古墳			○					ほぼ半壊	
31	大川遺跡	○	○	○	○				一部破壊	平成2年度発掘調査
32	大川古墳			○					全壊	
33	上権田古墳			○					全壊	頭椎太刀出土
34	竹内氏裏古墳			○					一部破壊	
35	上権田遺跡	○	○	○	○				一部破壊	昭和49年度発掘調査
36	上曾利遺跡			○					ほぼ半壊	
37	王三田遺跡	○	○	○	○				ほぼ半壊	
38	下曾利遺跡				○				全壊	
39	西田遺跡	○		○					ほぼ全壊	
40	赤石遺跡				○				ほぼ全壊	
41	カブト塚古墳			○					一部破壊	海野氏関連の塚か
42	八幡社前古墳			○					壊滅	昭和24年度発掘調査
43	地獄沢古墳			○					全壊	杏葉・菅等出土、出土品町指定

(4)古墳時代

古墳時代に入ても開発の急激な進展はなかったらしく、初めのうちは遺跡の急増・拡大・進出は認められず、多くは弥生時代遺跡と重なっている。

古墳は町内各地に約50基が点在しているが、和地区に過半数の32基が集中している。その中で県指定史跡の中曾根親王塚古墳は一辺約40m、高さ約10mの東信地方最大の規模をもつ方墳で、方墳としては県内最大である。明確ではないが周溝をめぐらしたらしく、葺石と埴輪の存在も知られている。内部主体は不明であるものの、詳細な実測調査と埴輪の特徴から5世紀後半の築造と考えられている。二子塚古墳は墳丘・石室とも略完存しており、人物埴輪・朝顔型円筒埴輪など多くの埴輪が出土して注目された。王塚古墳は上面の封土を失い天井石が露呈してはいるが、石室は完全に残っている。東上田の児玉山古墳群は7基の小円墳より成り、完存するものはないが、山腹に営まれた群集墳として町内唯一の例である。

竹津の塚原古墳群は5基ほどにより構成される古墳群だが、そのうちの2基は明確に方墳で、周溝の四隅が切れる形態をもち、4世紀末ないし5世紀初頭の土器が出土している。この2基といい、5世紀初頭と考えられている上田の八幡大藏京古墳、5世紀後半とされる中曾根親王塚古墳といい、上田小県地方の古い古墳はすべて方墳であるという特徴が知られるようになった。

竹津・滋野地区は稻作適地が狭隘で、古墳築造のための経済的基盤が小さいので古墳も少なく、塚穴古墳以外に知られているものは10基ばかりにすぎない。その中で、昭和59年に発掘調査された狐山古墳は、土地改良事業対象地区内に存在しながら保存されることになった古墳で、埋蔵文化財保護の貴重な先例となったものであるが、水稻栽培に主眼をおいて考えた場合、不毛の地に近い地帯における古墳として、その経済的基盤や被葬者の正確など解明すべき多くの問題を内蔵している。

高呂添遺跡からは古墳時代全期を通じての土器が、セットとしてとらえ得る良好な状態で出土しており、編年試案が試みられた。また、伊勢原遺跡・東五町遺跡・大川遺跡からも前期および後期の住居址と土器が出土している。

ともあれ、古墳集中地帯は弥生時代遺跡が集中する地帯とほとんど一致し、新たな進出が乏しいことは、稲以外の栽培、たとえば麻の栽培などが想定されはしても、扇状地面の開発の進歩状況が決して順調なものではなかったことを物語っている。

(5)奈良・平安時代

奈良時代のこととして文献資料が登場する。正倉院御物麻袋の「信濃國小県郡海野郷 爪工部君調」という墨書きと、『日本鎧異記』に見られる宝亀5年(774)の頃の「信濃國小県郡都郷里人大伴連忍勝」がそれである。前者は、貴人にさしかける「蓋(きぬがさ)」などの制作に携わっていた伴部の姓をもつが、実際の工人であったか否かは別にして、麻布を「調」として貢進していたことが分かる史料である。また、後者は地方において氏寺ではあっても私寺を建立することができた財力豊かな豪族の存在を示すものであり、大族「大伴氏」の地方進出の一例でもある。さ

らに伴造的氏族の存在は、この地方の政治的状況について考える上で、大切な史料でもある。

『日本靈異記』の説話中、信濃国に関するものは二話あり、いずれも小県郡を舞台としている。このことは、東山道を経由して中央の文物が移入せられた結果であり、文化水準が高かったことを物語っているとされている。「海野郷」「娘里」は『倭名類聚抄』所載の「童女郷」と同じものであり、弥生時代・古墳時代を通じて遺跡が最も集中した和地區から田中地区にかけて郷が成立し、ここを中心に本格的な開発が始められたのである。

平安時代には、山麓や扇状地面は信濃十六牧（官牧）の一つ「新張牧」として牧場に関わる開発が行われる一方、畑作も行われ麻の栽培も広く行われていたものと考えられる。その結果、平安時代の遺跡は町内至るところに所在するようになるのである。

奈良・平安時代の遺跡は多いが、比較的まとまった遺物を出土している遺跡としては、塚穴遺跡、陣場遺跡、高呂添遺跡、石原田遺跡、七ツ石遺跡、東五町遺跡があげられる。中でも、高呂添遺跡では奈良時代の、陣場遺跡では平安時代の土器セットが見られる。

⑥中世以降

中世およびそれ以降の遺物を出土した遺跡としては、まず古屋敷遺跡をあげなければならない。15世紀に所属させられる船載青磁・青白磁と各時期の国内産の陶器類・土師系土器（かわらけ）および古銭が出土している。隣接する不動坂遺跡からは中世に属する兼石遺構・配石遺構が検出され、この種の遺構は加沢の善福寺遺跡・祢津の桜畠遺跡等で検出され、廃寺に関連する墓址とされていることから、同様に中世の墓址群と理解される。また、久保在家遺跡で検出された土壙からは、歯・人骨・鉄製品が出土しており、歯は30~40代と思われる1個体分であり、遺構は墓址と考えられた。鉄製品は柄に包まれていたと思われる刀子であり、葬送および埋葬について好個の資料を提供している。土師系土器や内耳土器を出土する遺跡はこのほかにも多いが、現在の集落に重なっている部分もかなりあると思われる。

（塩入秀敏）



第3節 深井地区の環境

東部町の最西端に位置する深井地区は、北側と東側は成沢川・金原川が形成した大きな合成扇状地の端部に含まれる。したがって、北東側が高く南西側へ緩やかに傾斜しており、火山灰・火山砂・礫を主体とした保水力が弱い土砂で覆い尽されている。東深井出身で養蚕をはじめとした農業振興に一生を捧げた深井功の勧めによりかつてはクルミの栽培が大規模に行われていたが、現在は巨峰・りんご等の果樹主体に変わってきており、西側は瀬在川・南側は千曲川によって作られた第一河岸段丘台地であり、強粘土が厚く堆積している。町内では珍しく広範囲に粘土地が見られ、海拔も520~540m前後と低いため、おいしいお米が多量に生産される良好な水田地帯である。

深井地区は、現在東深井区と西深井区に分かれているが、明治初年以前は上深井村・下深井村と呼ばれていた。さらに江戸時代前期以前は深井村であったようで、承応三年（1654）に分村したという（小県郡史）。このことは、長野県町村誌・東信篇（昭和11年・長野県刊）の上深井村の項に「深井上下往昔同村なり。仙石氏の領となり二村と分れて、上深井と称す。神長官文書、深井郷の名見ゆ、深井氏代々の住地たるは同書に寶徳二年海野持幸代官深井依満、應応三年より文明二、三、六、七、十三、十五、十六年、海野信濃守氏幸、代官深井肥前守滋満、長享二年海野代官、深井氏、初勘解由、左衛門満信と見え、大塔物語、應永七年海野宮内少輔幸義の族、深井氏見えたり。方今東深井と称す。」とあるとおり、上田藩主が真田氏から仙石氏に変わった頃に二村に分かれたようである。またこの文書から、深井氏が代々海野氏の代官を勤めたことがわかる。また、下深井村の項には「（前略）北国道開路の時、往還の利益を得んと、村人詰地に居を移して、海野新田と称す。後其田畠の隔絶、耕耘の弊を憂い、天明中舊地に帰住の者あり、文政年間村長、地頭に乞て許可を得、大に宅居を移して舊地に復す。嘉永に至り又村長、移住を計るに居を移す者多し。（後略）」とある。下深井村（現西深井）の人々が北国街道開設時に移住させられ海野新田（現西海野）を作り、後に荒廃した旧村に戻った様子がわかる。したがって、現在でも両地区間に親戚関係が多く見られ、田畠、墓地等の交錯が認められる。

この地に人々の生活の痕跡が認められるのは、縄文時代中期から、若宮遺跡において中期中葉から後半にかけての竪穴住居址などが発見されている。この他に、次郎淵遺跡、十代遺跡、宮西遺跡からも、少量ながら縄文土器・石器・石斧などが出土している。

弥生時代の遺物はほぼ全遺跡から出土しているが、遺構が検出されたのは昭和28年に小範囲の発掘調査が行われた次郎淵遺跡と、今回調査された十代遺跡A地点から、各1棟の竪穴住居址が検出されたにすぎない。おそらく、今回調査対象にならなかった畠地・果樹園に集中しているものと思われる。

古墳時代に至っても、弥生時代と様相はさして変わらない。今回の調査では、わずかな遺構・遺物しか発見できなかった。古墳時代後期に作られたと思われる古墳が二基残されている。西深

井の東端にある琵琶塚古墳と、東深井の北端にある耳塚古墳である。いずれも破壊が進んでおり、規模は明確ではないが、直径10m強の円墳と思われ、南側に開口した横穴式石室を有する。琵琶塚古墳は堂裏地蔵にあるが、墳丘上に〔琵琶〕の形をした大きな石があることから、琵琶塚と呼ばれている。この石の他に、天井石と思われる平坦な石5個が堆然と置かれている。裏ごめ石が崩れた西側からは、玄室の構築



琵琶塚古墳

礎と思われる石積みが看取される。深井地区の南東側の曾根区一帯には、県史跡の中曾根親王塚古墳をはじめ、右近塚・刀塚・王塚古墳などが点在し、北東側の栗林区には、下平古墳群・明神塚・上の山古墳群などが集中している。東部町に残された古墳の約半数を占める和地区の中でも、特にこの一帯には集中しており、「蟻里」・「海野郷」と呼ばれた郷が成立する経済基盤を色々と形成していたのであろう。

奈良・平安時代には、上田市国分に信濃國分寺・国分尼寺が造営された。おそらく近辺に信濃國府も造られたのであろうが、残念ながらその存在は今のところ確認されていない。東部町に「信濃國小郡蟻里人大伴連忍勝」が氏寺を建立したことが『日本靈異記』に記されているが、その館跡・寺院址も発見されていない。東山道の推定ルートに近い深井から県にかけての千曲川第一あるいは第二河岸段丘上にあったと考えられ、事実この一帯には該期の大遺跡が数多く残されている。その中で長襦手遺跡と久保田遺跡（調査者は藏替遺跡と誤認している）からは大規模な掘立柱建物址が確認されており、これらとの関係が想起される。開発が進むこの地域での綿密な発掘調査なしでは、古代史を語ることはできないであろう。

中世以降については、発掘調査で知り得る情報が古代までよりかえて少なくなってしまい、不明な点が多い。このことは、住居形態の大変革と共に、中世以降の集落の上に現在に至る集落が營々と築かれている場合が多く、破壊が進んでいるためなどによる。深井地区でも同様で、深井氏の居館址と推定されている前田遺跡の調査でも、裏付けになる結果は得られなかった。また正村屋敷と呼ばれている屋敷遺跡周辺（次郎淵遺跡・十代遺跡）においても、良好な遺構・遺物は発見されず、白鬚神社跡には調査が及ばなかった。

このように概観してみると、深井地区は東部町をはじめとする一帯の歴史を考える上で重要な位置を占めるのであるが、不明な点が多く、今回の発掘調査で明らかになった事はほんのわずかである。今回の調査対象地外の遺跡に開発が及んだ時、十分な解説がなされる事を望む。

次に、深井地区の民話を三話（ふるさとの民話・東部町農協・1985年より引用）紹介しよう。

1. 耳塚

和、東深井の耳塚古墳にはこんな話があります。

今から千五百年前か、それよりも昔、東深井にひとりの坊さんが現われました。その坊さんは、破れたまんじゅう笠を目深くかぶり、色あせた衣をまとひ、片手に鉢を持った見るからにみすばらしい男でした。足を引きずりながら歩くその姿は、いかにもあわれでし



耳塚古墳

たが、村中を一軒一軒回ってお経を唱えるので、村人たちも「氣の毒に。」と同情して、その坊さんの差し出す鉢の中にお金やらお米やらを少しづつ入れてやりました。そうこうしているうちに、この坊さんは東深井がたいそう気に入った様子で、村はずれに小さい庵あんを建てる、そこで暮らすようになりました。

ところがこの坊さんの暮らしぶりときたらまったく自由奔放なもので、体がよごれても川で水浴びをする程度で風呂にはぜったい入らず、食事も食べたい時に勝手に食べ、睡眠も眠くなったらいつでも眠る——という実に不規則なものでした。そして、かんじんのお勤めはというと、気が向いた時には村々を回って托鉢とうぱくをしますが、気が向かなければ二日でも三日でも庵に引きこもってお経を唱えているという有様でした。そんな坊さんなので、はじめのうち「変わり者の坊さんだこと。」と噂うわさしていた村人たちも、だんだん「あの坊さんは、馬鹿だ。頭がおかしいに相違ない。」と言ってあざけるようになりました。しかし、当の坊さんは、そんなことは一向に気にせず、あいかわらずの生活を続けていました。そんな日々が続いたある日、坊さんがいつもの様に気が向いて、たまたまお経をあげていると、突然どこからか仏様の声が聞こえてきました。「人間は、だれでも一度は死なねばならない運命にあります。どんなにお金のある人でも、どんなに偉い人でも、どんなに丈夫な人でもいつかはきっと死ななければなりません。あなたは、いつも気ままな生活を送っているようですが、あなたにも『死』は必ず訪れるのですよ。その日まで、あなたも一生懸命生き、坊主という与えられた道を全うしてみてはいかがですか。」

この仏様のお声は、それは美しく坊さんの胸に響きました。その日から坊さんは、目が覚めたように一心に仏道に励み、すべての煩惱、すべての欲望を捨てて努力をしました。まるで人が変わったようでした。

ところで、坊さんが熱心に仏に仕えれば仕えるほど、坊さんの頭の中には、ある思いが芽はばえきました。「こうして昼夜、仏に仕えていても、やがては私も死んでしまう。どうせ死ぬのなら、何の苦もなく安心して極楽へ行きたいものだ。」そう悟りを開いた坊さんは、その後幾日か経って

から、自分の庵のそばへ大きな穴を掘り始めました。そして、不思議に思った村人たちが方々から集まって来るのを見計らってこう言いました。

「私は、生きたまま成仏したいと思います。今日から七日後にはこの世を去って極楽に行くことにしたいので、この穴の中に入つてお経をあげ、その日を待つことにします。だから、私がこの中に入つたら上から蓋をして土をかぶせて下さい。中から鉦の音がしなくなったら、私が成仏したと思って下さい。」

これを聞いた村人たちは、さすがにびっくりしましたが、穴の中でじっと目を閉じて座っている坊さんを見ると、逆らうこともできず言われた通りに穴の上に蓋をして土をのせました。それでもわずかに息ができるようにと、だれかが節を抜いた竹を立ててあげました。

さて、それから一日、二日と穴の中からはお経を唱える元気な声と鉦の音が聞こえきました。しかし、村人はまだ坊さんの言ったことが信じられず、「気ままな坊さんのことだから、そのうちにやになって出てくるだろう。」と噂していました。けれど、説教の声は、三日たっても四日たっても聞こえています。そんな情景に、村人たちの顔色も変わり出し、「これは坊さん、本氣で成仏するかもしれないぞ。」と、案じる声が起きました。それでもだれも何もできません。五日たち六日ごろになると、初めのうちはみんな元気だった声も次第に弱々しく、とぎれとぎれになり、今にも消え入るかと思われる程になりました。そして、とうとう七日目の朝が来ました。夜が白々とあける朝もやの中、耳をすましてみても、あたりは静まりかえっており物音ひとつ聞こえません。坊さんの声も鉦の音もピタリと止んでしまいました。ついに坊さんは成仏されたのでした。

「坊さんが成仏されたぞう。」「坊さんが穴の中で成仏されたぞう。」と村人は口々に叫びましたが、この時になって初めて、この坊さんの容易ならない信仰の心と、きびしい仏道への修業に心打たれました。

そして、この坊さんの眠っている所に大きな石を運んで古墳を作り、ねんごろに祭って坊さんの冥福を祈ったそうです。

それが現在、耳塚古墳、また御身塚と呼ばれ、「貴人の塚」の意味であろうと言われています。

※こういった民話は比較的多く各地に残されています。仏教を国教として全国に広めた時代、仏教によって荒廃した人心を救おうとした時代を経て、お寺によって民衆を統治・管理した時代に至り、仏教とは全く関係のない古墳を信仰心を高めるために利用したのでしょうか。古墳に眠っている人にとっては、迷惑な話です。仏教の普及によって、古墳築造が禁止された（薄暮令、646年）のですから。

なお、耳塚の石室の天井石は南側に移動され、仏像、石碑の台座となっています。土地所有者がむき出しになっている石室を掘った所、直刀二口、耳環1個をはじめ多くの副葬品が出土したため、それらを額にして大切に保管されています。（写真図版35-3）

2. 深井の貧乏神

むかし、むかし、和の深井という所に、貧乏なじいさまとばあさまがいました。この老夫婦は朝から晩まで働いて、着る物にも食べる物にもぜいたくをせず、つましやかに暮らしていましたが、生活の方は、相変わらず苦しいものでした。けれども、温厚な二人はだれをうらむでもなく、一日一日平和に過ごせたことに感謝しながら暮らしておりました。

さて、ある年の暮のことです。じいさまとばあさまは、バチバチと燃えるいりの火にあたって、年越しそばを食べながら、「ばあさんや、今年も無事に年が越せそうだな。」

「じいさんや、病気もせずに働くことができましたね。まあ、ほんの少しでもたくわえができるたし、ほんに、いい年でしたね。」

すると、じいさまとばあさまの後ろでドスンと物の落ちる大きな音がしました。

じいさまとばあさまがふり向くと、そこには、よれよれのかっこうをした男が、肩をふるわせて泣いていました。

じいさまは、よれよれのかっこうをした男に聞きました。

「あなたは、いつ家に入つて来たのかね。いったい名前はなんというのかい。」すると、よれよれのかっこうをした男は、いっそう大きな声で泣きながら、

「私は、この家の天井裏に住んでいる貧乏神です。もう、この家に住みついで五十年はたつでしょう。しかし、おじいさんとおばあさんが一生けん命働くので、来年になるとこの家の福の神がやって来ます。そのため、私はこの住みなれた家を出でていかなくてはなりません。それが悲しくて泣いているのです。長い間、何も食べてていなかったので泣き疲れて足をふみはずして天井から落ちてしまったのです。」

じいさまとばあさまはそれを聞くと「なんとかわいそうに。」と言って、正月用のお節料理を出すと、貧乏神は泣きながら、あっという間に、じいさまとばあさまの二人分のお節料理を平らげてしまいました。

貧乏神は「私がこの家に住みついたばかりに、じいさんたちが長い間金持ちになれなくて貧乏でいたのは申し訳がない。しかし私は、この家も、おじいさんおばあさんも、みんな好きなんです。除夜の鐘が鳴ると、私はこの家を出て行きます。長い間ほんとうにお世話になりました。」と言って、しくしく泣き続けました。

じいさまは、「そんなにこの家が気に入っているなら、出て行かないで、これからも住んでいいればいい。わしらはいっこうにかまわんでな。」

ばあさまも「そうとも、わしらにかまわず、住んでいればいい。人を泣かすような福の神なんか、わしらが応援するから、追い返しておやりよ。」

そうこうしているうちに、除夜の鐘が聞こえてきました。にこにこ顔の福の神がやって来て、じいさまの家の戸を開きました。



第3図 深井地区の小字

貧乏神は福の神を見ると体をふるわせて後ずさりを始めました。じいさまは、貧乏神の背中を押さえながら、福の神に、「なんでこの家にやって来た。おまえなんか用はない。早く出でていけ。」と言いました。

「じいさんの言うとおりだ。お前になんか用はない。早く出でていけ。」とばあさまは、いろいろにかけてあったなべのふたを取って福の神に投げつけました。

びっくりしたのは福の神です。今まで福の神が行くと、どの家でも喜ばれ、にこにこ顔で迎えられたからです。あまりびっくりしたので、帽子と小づちを置き忘れて、いま来た道を逃げ帰って行きました。

貧乏神は、福の神が置きわされた帽子をかぶり、小づちを持って床の間にすわりました。そのため、貧乏神は福の神に変わり、じいさまとばあさまは何不自由なく、のちのちまで仲よく暮らしたそう。

※この種の民話も多いものの一つです。しかし、なぜ深井の…なのでしょうか。当時は深井に限らず、どこの村にもあまりお金に縁のない家は一軒や二軒はあったはずです。江戸時代にはむしろそういう家の主流であったかもしれません。深井には、このおじいさん・おばあさんのように、働き者でやさしく、仲の良い夫婦がいたためにできたお話だと理解しておきましょう。

3. 月夜平の一つ目小ぞう

月夜平と書われても、今のはどのあたりになるか分からぬであります。なにしろいつの間にか新しい地名が付けられ、昔からの地名は忘れられてしましますから。中曾根親王塚から大屋寄りの一帯は月夜平と呼ばれていました。昔は大屋から深井、祢津、芳田の方へ行くには月夜平を通る道しかなかったのです。

今とちがって人家は少なく、道は悪い。そのうえ、林が多くて木がうっそうと茂り昼間もうす暗い小道ですから、夜ともなると月の光も差しません。しかし、月夜平は草が生えているだけで、月の光が差す草原でした。

いつのころからか、夜になると一人の少年が現われました。少年は月夜平を通る人の前を歩きだし、木が生い茂る林の中に入ると、少年の周りと通行人の前の小道が明るくなります。「ふしぎなことだ。」と思っているうちに、通行人の目的地の家や、自分の家の入口まで来ていきました。少年はと探すと、いつのまにか後ろにいて、にっこりして足早に月夜平に向かって去って行きます。

夜に月夜平を通る人は、必ずこの少年に会って道を照らしてもらうので、いつのまにか、この近くの村々で、この少年のことがうわさに立ちました。

「初めて、会った時は、びっくりして腰がぬけそうになったわい。」

「きつねかな。」

「いや、人間だが、目が一つしかないようだ。その目はちょうどちんより明るく照らすらしい。」

近くの村人は、この少年を「一つ目小ぞう」と呼ぶようになりました。初めは気味悪がっていた人も一つ目小ぞうに感謝するようになりました。夜になると月の光が全く差しませんから、それまでは、ずいぶん心細い思いをして夜道を通ったのです。

だれとなく、一つ目小ぞうに対する感謝の意味で月夜平の川べりに、おまんじゅうを置くようになりました。やがて、道を照らしてもらった人は必ずおまんじゅうを置くようになりました。真夜中になると川べりに、大きなおまんじゅう、小さなおまんじゅうと色々のおまんじゅうが置いてありました。朝そこを通るとそのおまんじゅうは消えていました。

何かのつごうで、おまんじゅうを置かなくても、一つ目小ぞうはちゃんと足元を照らしてくれました。

やがて、何年か経つうちに近くの村人は、一つ目小ぞうに感謝する心が薄くなってしまった。一つ目小ぞうが足元を照らしてくれるのが当たり前だと思うようになり、おまんじゅうの代わりに石を置く人さえ現われました。いつしかおまんじゅうを置く人がいなくなりました。みんなが、石を置くようになりました。それでも一つ目小ぞうは、不便な夜道を通る人のために足元を照らしてくれました。川べりの石は朝になるとちゃんと無くなっていました。

さらに、また何年か経ちました。村人は石さえも置かなくなりました。いつのころからか、一つ目小ぞうは月夜平に出なくなりました。

近くの村人は真暗な夜道を心細い思いをして通るようになりました。月夜平まで来て月の光を見て、一つ目小ぞうがいてくれたらと思っても、もう一つ目小ぞうは出てきませんでした。

※このお話を、国道十八号線から深井地区への入口あたりに残された民話です。この場所をなぜ月夜平というのかわかりませんが、そんな疑問から作られたお話かも知れません。

月夜平という地名は現在も小字として残されていますが、現在では使われなくなってしまった地名も、古文書には数多く見られます。第3図に深井地区とその周辺の小字図を示したが、古文書に書かれた地名を、参考までに列記します。(太字は現小字・重要な地名)

1. 上深井村田種惣貢之御報 承応三年(1654)松尾家文書 和村誌・歴史編1959年より引用
かご田・うしろ村・竹ノわき・よこしい・さぎ坂・宮ノわき・屋つく路・東うら・屋しき・宮ノ下・くね下・見みう・若宮・かぢばた・くぼ・宮ノまい・道六神・さわ・ぜにいい・清水・木下・中島・ほりノ内・なめし・清水尻・東沢・ひがし島・いまい・次郎五・山道・こひとつ・穴水・道下・くねぎわ・ばんば・だいもん・そり・白ひげ・ふたい・そり田・ひかけ・石はら・白ふち・ほそはた・まい・から沢・びやつた・はば下・せき下・つかはた・法のはた・くねそへ・西畠・金井・かしはた・ほりや敷・とうかいと・いつなめん・くぼう道下・屋けほまち・あいかわた

第二章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

深井地区は、東深井・西深井二区からなり、東部町最西端に位置する。南側と西側が河岸段丘形成時の急傾斜な崖で上田市に接している上に、北側の上田市下吉田から連続する緩傾斜地を、行政区分の境界線で東西にスパッと分離させた状態になっている。三方を上田市に取り囲まれているため、道路は行き止まりか急なつづら折りで道幅がせまく、集落内に河川・堰が流れており、道路拡幅も容易ではない。こうした地形及び行政上の理由により、生活環境は良好とは言えない面が少なからずあった。また、東深井76戸・226人、西深井36戸・142人（平成5年12月1日現在）と、合計しても周辺の他区よりも少なく、良好な住宅地の造成により定着人口の増加が望まれていた。

こうした様々な問題を解決するため、総合的な農業基盤整備事業の計画が平成3年夏に具体化してきた。地区内には数遺跡の存在が確認されていたため、平成3年9月27日に関係者が東部町中央公民館に集まり保護協議を行った。その結果、ほ場整備・農道改良により破壊されてしまう遺跡について発掘調査を行い記録保存を図ること・遺跡範囲や保存状態を把握するため稲刈り後町単独事業として試掘調査を行い、その結果をもとに改めて保護協議を行うこと等が確認された。試掘調査は同年11月1日から12月9日にかけて実施され、次郎瀬・十代・若宮・宮西・前田の五遺跡がほ場整備区域内に、若宮・前田・唐沢の三遺跡が農道改良区域内に含まれていることが判明し、12月19日に二回目の保護協議が東部町中央公民館において行われた。調査結果については第3節に記したため省略するが、調査遺跡が多く十分な整理期間の確保ができないため、平成4年度は発掘調査と遺物水洗程度の整理作業を行い、平成5年度に残りの整理作業と報告書刊行を行なうことが決められた。

以上の経過により、平成4年4月発掘調査に着手されることとなったのであるが、今回の農業基盤整備事業には、住宅団地造成・下水道設置・コミュニティーセンター建設・ため池（深井池）周辺整備等様々な事業が含まれる。それぞれ実施主体・年度がまちまちで、今後それぞれについて保護協議が行われ、一部発掘調査が実施されるであろう。十分な調査対応を切望する。

なお、前頁で記せなかった地名の続きを、場違いながら以下に記すこととする。

2. 下深井村田畠賀高御改帳 承応三年（1654）正村家文書 和村誌・歴史編 1959年より引用
畠之内・ひらしげ・道の前・次郎ふち・宮浦・くらさわ・道之内・キツ子・重代・下重代・正村
・なめし・宮下・あな水・あい川・ふたへ・六反田・道の浦・今井・道下・若宮・三ろえわき

第2節 発掘調査団の構成

調査団長 長岡克衛 (東部町教育長)
調査副団長 塩入秀敏 (日本考古学協会員・上田女子短期大学助教授)
調査担当者 堀田雄二 (長野県考古学会員)
調査員 西嶋洋子・西沢 浩・坂井美嗣
調査参加者 飯高徳保 池田育子 井出重人 井戸田五郎 井戸田三郎 萩原貴子
小野沢さち子 上條りさほ 川瀬まつ子 小林貢三 小林光男 塩川美代子
塙沢むつき 高藤きくい 高藤きくみ 高藤きの江 滝沢増夫 田中隆二
田中増次 塙田茂由 橋原節子 橋本寅吉 (平成5年9月没) 花岡いとし
原 平 深井大亮(高校生) 船田豊 間下優治 松沢政利 宮坂倫次 山内和夫
若林勝子 (以上発掘調査)
秋山美弥 池田育子 川瀬まつ子 塩川美代子 塙沢むつき 城田若江
鈴木けい子 高藤雪枝 中島ひで 中村順子 西川美紀 諸山和子 山崎妙子
柳崎きよく 若林けい子 (以上平成4年度室内整理)
池田育子 萩原貴子 川瀬まつ子 塩川美代子 塙沢むつき 中村順子
西川美紀 山崎妙子 若林勝子 若林けい子 (以上平成5年度室内整理)

平成3年度試掘調査(可单独事業)

調査担当者 西沢 浩 (日本考古学協会員)
調査参加者 飯高徳保 岩下公雄 小野沢さち子 後藤房子 小林貢三 小林辰夫 小林光男
小宮山国子 板口武男 佐藤金世 高藤きくい 高藤きくみ 高藤きの江
滝沢増夫 田中隆二 塙田清徳 塙田茂由 中沢寿龟雄 橋原節子 橋本寅吉(故人)
船田豊 星合たけ 間下優治 松沢政利 柳沢久美子 柳沢千歳
山内和夫

事務局 長岡克衛 (東部町教育長)
桜井明雄 (東部町教育次長)
柳沢慶一 (東部町教育課・文化財係長、平成5年3月まで)
麻見明利 (東部町教育課・文化財係長、平成5年4月から)
西沢 浩 (東部町教育課・文化財係、平成5年3月まで)
堀田雄二 (東部町教育課・文化財係)
坂井美嗣 (東部町教育課・文化財係)

(堀田雄二)

第3節 試掘調査の結果

次郎淵遺跡 TR-1~6 6本 1.5~1.8×9~10m

遺跡はは場整備対象外のリンゴ・ブドウ等の果樹園に広がる遺跡で、上田市分にも続く大遺跡であると考えられている。

TR-1・2 畑地であり、遺物が表面採集されるが、TR-1は土師器・須恵器片少量の出土で、TR-2は以前は水田で基盤層を掘り込んで造成が行われている。遺物は土師器・須恵器がやや多く出るが小破片でローリングも強いので、遺跡の残る可能性はほとんどない。

TR-3・4 遺物の出土量も少なく、小破片のため流れ込みと思われた。

TR-5・6 東側の畠地帯に続く地形であるが、TR-6は黒色土がなく、水田床土の下は基盤層となり、遺物も出土しない。TR-5は土師器・須恵器破片少量でローリングも強く流れ込みと思われた。

以上のことから、は場整備対象となる水田地帯は遺跡縁部もしくは隣接地と思われ、主体部分にはあたらないと考えられる。

十代遺跡 TR-1~22 22本 1.5~1.9×9~12m

遺跡は東側に小河川が流れ、その段丘上に位置している。地形的にはやや南面傾斜するものの、傾斜がゆるく平坦な段丘面である。

TR-14 住居址と考えられる焼土の残る黒色部分とピット2基検出され、その部分から土師器・須恵器中心に総量多い。

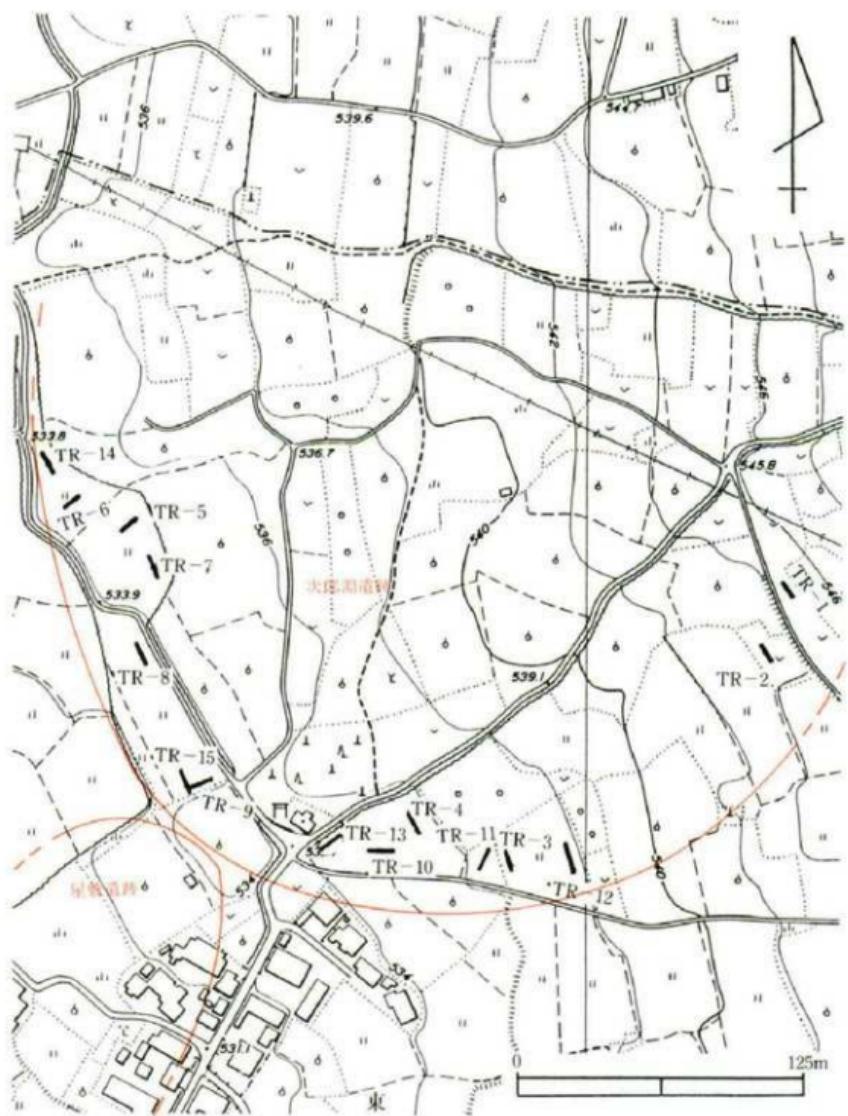
TR-21 住居址が検出されたが、南側が水田造成によって削られている。遺物は総量的に多い。

TR-22 住居址の一部と考えられる黒色部・配石を伴う土壇と土壙が検出される。遺物は極めて少量出土。

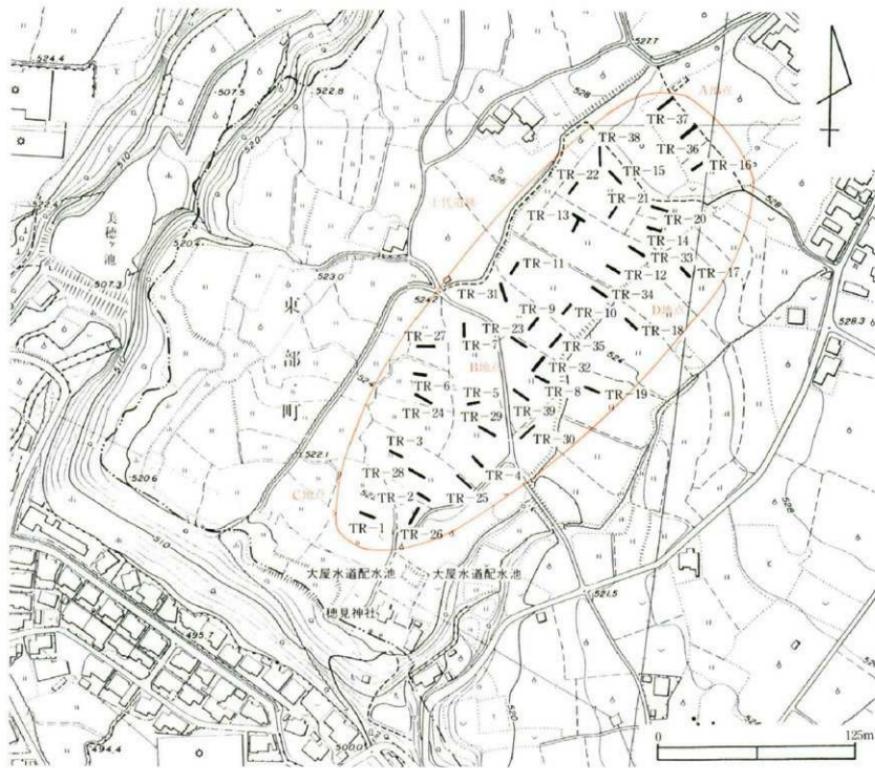
TR-13 住居址に伴うと思われるピットが7基検出された。おそらく、床面が削平されピットの下部のみが残されたものと考えられる。遺物は量的には多いが、小破片が大半である。

TR-20 住居址に伴うと思われるピットが4基検出された。遺物は量的には多いが、小破片が大半である。

以上の部分は検出面までの覆土が全体的に浅く、30~40cm程度で、黒色の遺物包含層がほとんど見られないので、遺構上部はほとんど削平されていると考えられる。が、ある程度の遺構は確認されるとみられる。



第4図 試掘トレイン位置図(1)



第5図 試掘トレンチ位置図(2)

TR-2~5 遺構は検出されないが、遺物は土師器・須恵器中心にやや多く出土する。出土量はTR-4・5が多く、TR-2・3は少なくなるので、TR-4・5付近が中心部であろうと推察されるが、ほとんどが小破片でローリングも強く受けている。おそらく、水田造成によって相当土が動かされていると考えられるので、遺構の確認は困難かもしれない。

TR-17~19 遺跡東側を流れる河川につづく谷地形部分にあたる。基盤層までは1m余の深さがあり、含まれる遺物も多くない。

他のトレンチはいずれも遺物の出土はほとんどなく、遺跡外と考えよい。以上のことから、遺構は、TR-14・21・22を中心とする部分及びTR-4・5を中心とする2箇所にその存在が推察されるが、水田造成による破壊も多いものと考えられる。

北側の部分は平面調査を要し、南側の部分は遺構等の残される部分は極めて少ないと思われるが、補足調査を要すると考えられる。

若宮遺跡 TR-1~4 4本 1.5×10~12m

遺跡はため池の北西側から東深井集落の西側まで広がる広範囲の遺跡であると考えられている。今回の試掘調査は遺跡北限にあたる畑地帯を行った。

TR-1 遺構は検出されなかったが、縄文土器破片が多く出土した。耕作等により相当動かされた状態でローリングも強い。トレンチ南側にはウネ状の擾乱が基盤層を振り込んで残されている。

TR-2 検出面までの覆土が、20~35cmの浅い堆積であるが全層的に縄文時代中期を主体とする土器片が多く出土する。トレンチは12mの長さで実施したが、東側6mは相当量出土するが、西側6mは極端に少ない。基盤層は東側でウネ状の掘り込みが多くみられたことから、耕作による深掘りに伴い遺物もかなり動いていると考えられる。

TR-3・4 現在水田地帯で基盤層を削り込んで水田造成が行われているらしい。遺物はほとんどが小破片でローリングを相当受けている。量的には、TR-1・2に比べ少なくなる。遺跡の縁部にあたると思われるが、遺構等の残される可能性はほとんどない。

以上のことから遺跡はTR-1・2の南東側の畑地帯に存在すると考えられるが、TR-1の畑とその周辺の畑がネクタリン畑となり、この範囲に約100本植えられており、耕作による破壊も進んでいるものと考えられる。

また、地元の人の話では場整備対象地区南東側の家際の畑で土器の大きい破片がよく見つかるとの話もあり、遺跡中心部はネクタリン畑の南部分から、対象外の畑地になるかもしれない。

なお、遺跡南限にあたる部分は、場対象地区に隣接する位置関係となるが、含まれていない

ので試掘調査は実施しなかった。

宮西遺跡 TR-1~8 8本 1.5×6~12m

遺跡は現在畠地帯となっている部分と思われ、トレンチ調査を実施した。

TR-3 住居址の一部と思われる黒色部分が検出され、焼土部分も残されていた。遺物は住居址付近から土師器破片が少量出土する程度で少ない。

TR-4 住居址の床面とも思われる部分が検出され、土師器破片がやや多く出土する。他のトレンチは遺物がほとんど出土せず、遺跡中心部をはずれていると思われる。

以上のことから遺跡の主体部はTR-3・4付近と考えられる。TR-3・4ともに出土遺物は少ないので、遺構密度は低いかもしれない。

前田遺跡 TR-1~3 3本 1.9~2×10m前後

遺跡は若宮遺跡の西側に並び位置し、東深井集落の西側及び南側の果樹園に広がる遺跡である。

今回の調査は遺跡北限にあたる、果樹園に隣接する水田地帯を行った。

TR-3 トレンチ西側部分で土師器を中心にやや大きい破片が出土している。現在は1枚の水田であるが、西側は基盤層が深く落ち込み、水田床土が3層みられることから、数度の水田造成が行われている。土器は最も下層の砂利層から出土しており遺構との関連で覚えることは難しいと思われる。

他のトレンチは出土遺物も極めて少量のため、遺跡外と思われる。なお、遺跡南限にあたる水田地帯は試掘調査を実施することはできなかった。

(西沢 浩)

以上が平成3年11月1日から同年12月9日にかけて実施された深井地区5遺跡の試掘調査の結果概要である。今回計画されたは場整備対象地内には唐沢遺跡も含まれるが、農道拡幅によりわずかな面積が対象となるだけであり、かつ果樹園もあるため試掘調査は実施しなかった。

この調査結果をもとに、同年12月19日に保護協議を実施し、以下のとおり保護措置が決定した。

次郎瀬遺跡

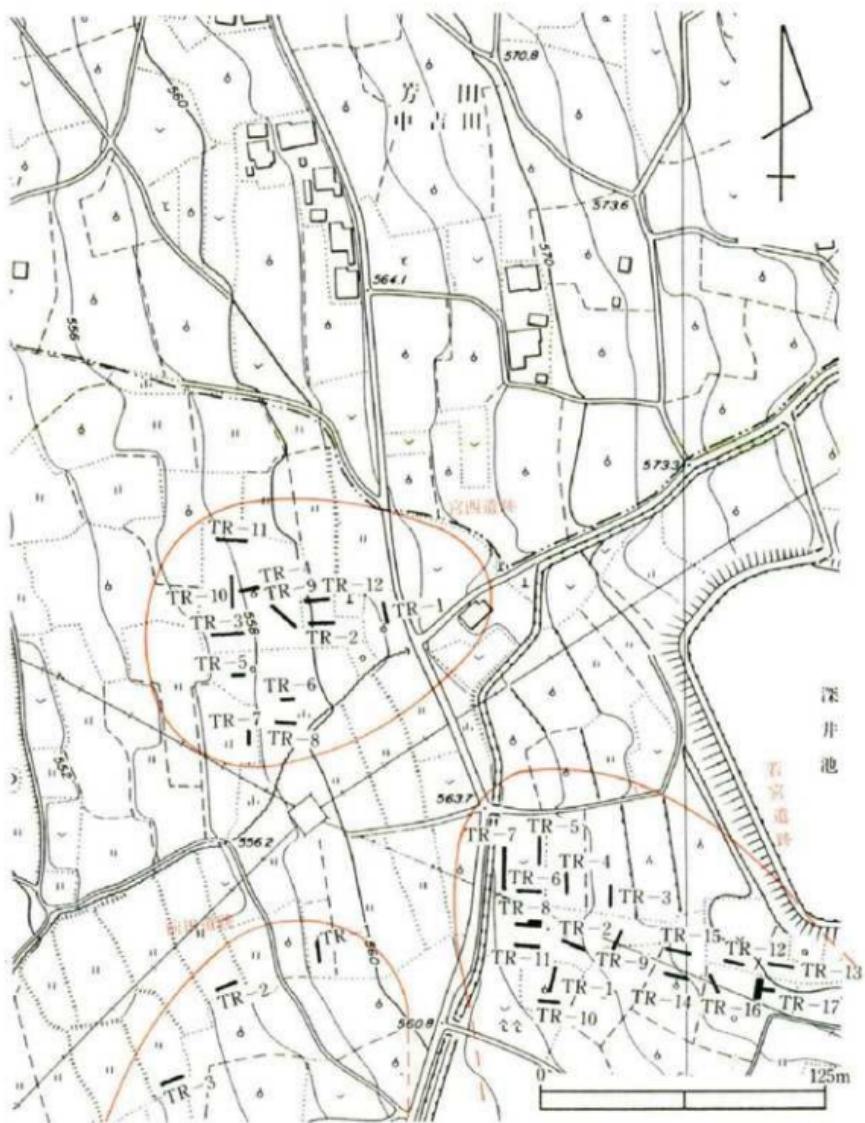
調査対象地は遺跡の縁辺部であり、すべて水田地帯であるため、遺構が残されている可能性は低いが、さらに数箇所でトレンチ調査を行い、遺構が確認された場合は平面発掘を実施する。

十代遺跡

遺構が確認されたTR-14・21・22を中心とする部分及びTR-4・5を中心とする二箇所の平面発掘を行い、さらに周辺でトレンチ調査を追加して、平面発掘を実施する場所の限定をする。

若宮遺跡

遺物の出土量は、試掘調査を実施した5遺跡の中で最大であるが、遺構が残されている可能性



第6図 試掘トレンチ位置図（3）



第7図 試掘トレンチ位置図（4）

は低いと思われる。今回の工事対象となる幹線道路（TR-1・2周辺）を中心にトレントを増設し、遺構が確認された場合は平面発掘を行う。

宮西遺跡

TR-3・4で住居址と思われる遺構が確認され、土師器を主体とする遺物もまとめて出土しているので、周辺の平面発掘を実施する。

前田遺跡

TR-1～3周辺は遺跡北限にあたるが、遺構が残されている可能性はほとんどないものと思われる。遺跡南限にあたる水田地帯でトレント調査を行い、農道が拡幅される地点では立会調査により遺構が確認された場合、平面発掘を行う。

唐沢遺跡

農道拡幅により、南・北それぞれ1～2m程が調査対象となるだけであるので、立会調査を実施し、遺構が確認された場合には平面発掘を実施する。

以上の協議結果及び和地区・東部中央（祢津）地区県営は場整備事業に伴う発掘調査の協議結果により、平成4年度の発掘調査は①3地区同時併行で調査を実施すること・②工事を夏場施行するため8月には調査がほぼ終了すること・③担当者3人がそれぞれ1地区ずつ担当し、状況に応じて人員の流動化を図ること・④調査をスムーズに進行させるため、作物（水稻及びその転作作物・野菜・果樹）の作付を行わないよう地元に協力を求めるなど等を確認のうえ、深井地区は筆者が担当することとなった。

平成4年度になると早々に調査準備を開始し、最大の調査対象面積を有する十代遺跡から着手した。経過については、第二章第四節に記してあるため省略するが、5遺跡ともトレントを増設して試掘調査の補充をしながら平面発掘の区域設定をしたため、その結果についても本節で触れることとする。なお、各トレントの出土遺物・所見については、第2表～第6表のとおりである。

次郎淵遺跡 TR-7～15 9本 1.5～2.0×10～15m

屋敷遺跡と近接する住吉神社南西側のTR-9から、中世の土師質土器（内耳土器）の破片がまとめて出土し、石臼が埋設された状態で検出されたため、幅を2mに拡幅し、さらに南側へ直交するようにTR-15を設定して精査を行った。しかし、新知見は得られなかつたため、これ以上の調査は行わなかった。おそらく、今回の調査対象地に含まれない屋敷遺跡と関連が深い遺物・遺構であろう。石垣（居館址の土星？）により、わずかな場所が保存されていたものと思われる。TR-10・11からは、縄文時代の磨製石斧・石鎌・土器等が少量ながら出土している。しかし、水田造成により遺構面は破壊されており、他の6本のトレントからは遺物もほとんど出土していないため、平面発掘は実施しないこととした。なお、対象地外の畑地・果樹園からは、弥生時代から平安時代の遺物が出土しており、比較的良好に保存されているものと思われる。

第2表次郎淵遺跡試掘トレンチ一覧表

トレンチ番号	出土遺物							備考
	縄文式 土器	石器類	発生式 土器	土師器	土師質土器	須恵器	灰陶	
TR-1	29	11	3	27	13	7	1	
TR-2		2			23	1		
TR-3		1		3	3	2		
TR-4		2			21	8		
TR-5		1			7	4		
TR-6		2						以上平成3年度調査分
TR-7								
TR-8		6			10	4	3	キセル 1
TR-9		2			18	1	3	
TR-10	1	1	1	77	19	1	1	鐵釘 1
TR-11					2	1		
TR-12		3			9	1	1	
TR-13		1			24	9		
TR-14								
TR-15	1				18	1	3	

第3表十代遺跡試掘トレンチ一覧表(1)

トレンチ番号	出土遺物							備考
	縄文式 土器	石器類	発生式 土器	土師器	土師質土器	須恵器	灰陶	
TR-1	3	1	2	2	55	10	3	
TR-2					48	14		
TR-3				8	5	74	6	
TR-4				1		147	1	古墳時代前期土器器あり
TR-5					78	102	1	
TR-6		3				4		
TR-7	1	1			14	49	1	
TR-8	1				2	1		

第3表 十代遺跡試掘トレンチ一覧表(2)

トレンチ番号	出土遺物						備考	
	縦文式土器	石器類	發生式土器	土師質土器	須恵器	灰陶器	中世以降陶器	その他の
TR-9	1			6	1			
TR-10				10	6			
TR-11					2			
TR-12	6			7	8		3	
TR-13	1			91	68	2	7	古鏡 1
TR-14	2			81	49			
TR-15					1			
TR-16				4	3			
TR-17	1			3	10		3	
TR-18	1			6	14			
TR-19				34	14		1	
TR-20	4			27	39	2	3	
TR-21	6		3	63	30	1	5	
TR-22				3	1		1	
TR-23				6	7		3	
TR-24	1			13	26		2	
TR-25	3		1	64	22	2	3	
TR-26			1	51	12		1	
TR-27	2			21	25	2	5	青磁小片 1
TR-28	1	3		153	140	2	4	
TR-29		1		56	73			
TR-30		1		4	1	1		
TR-31				9	7		4	
TR-32				13	12		1	
TR-33				4	3			
TR-34				7	6		1	
TR-35		1		17	19		4	
TR-36				21	4		5	
TR-37				3	2			
TR-38					16	5		
TR-39								

十代遺跡 TR-23~39 17本 1.0~1.5×12m

昨年の試掘調査で住居址が検出されたTR-14・21・22周辺に8本のトレンチを増設して、調査対象地の絞りこみを行った。その結果、TR-36・37等からは中世の土器類が出土しており、屋敷遺跡との関連が考えられるものの、遺構は検出されなかった。TR-34・35等は耕作土の下がすぐに基盤層となっており、水田造成時に破壊されているため遺構は検出されなかった。結局TR-38から22にかけての約3,000m²を調査対象地とし、一帯をA地点と呼ぶこととした。

TR-4・5周辺には8本のトレンチを増設したが、そのほとんどすべてから遺構・遺物が発見され、本来であれば全域を調査対象地とすべきところであるが、調査費用・日程の問題から約1,000m²に限定せざるを得なかった。そのため、遺構密度の高いTR-23周辺と、遺物出土量が多いTR-25周辺の二箇所で平面発掘を行うこととした。前者をB地点・後者をC地点とし、合計1,300m²程の発掘調査を実施した。昨年の試掘調査の結果、「遺構等の残される部分は極めて少ないと想われる」とされた一帯であるが、約2,500m²程は何ら調査することなく破壊されてしまった点は大いに悔やまれる。試掘調査の重要性を改めて思い知らされた。

若宮遺跡 TR-5~17 13本 1~1.5×9~18m

今回の工事では、幹線道路とその北側が破壊されることとなったため、TR-1周辺では2本のトレンチを追加して保存状態の確認を行うだけに留めた。TR-5~7の水田地帯からは、遺物は多量に出土しているものの、遺構は全く確認できなかったため、調査対象外とした。TR-14・15以西のトレンチでは、すべてから遺構・遺物が発見され、道路敷全域を発掘調査することとした。TR-12・13・16では、他より出土量が少なく、遺構も検出されなかったため、平面発掘は行わなかった。TR-17からは、鉄平石がまとまって出土したため、部分的に拡張をして集石遺構(SX-01)1基を検出した。なお、道路敷南側は住宅団地予定地のため、TR-10・11のみを掘り下げたが、TR-11からは縄文時代中期の住居址が確認され、TR-10からも一括土器数点が出土した。この一帯が遺跡中心部と考えられ、団地造成前には十分な調査が必要である。

宮西遺跡 TR-9~12 4本 1~1.5×12~15m

TR-3・4周辺に4本のトレンチを設定したが、TR-9からややまとまった量の土師器の出土があった他は遺構も検出されなかった。土地所有者の話によると、重機により疊を除去した後整地したそうで、部分的に遺構が残されたTR-3・4付近のみを平面発掘することとした。

前田遺跡 TR-5・6 2本 1~1.5×9m

深井氏の居館址推定地に近接する2地点で調査をしたが、土師器・須恵器等が出土しただけで遺構は検出されなかった。TR-4南側の水田から、宅地に使われたと思われる幅2m弱の切石4枚が出土した(34ページ参照)が、居館址との関連は不明である。平面調査は実施しなかった。

第4表若宮遺跡試掘トレンチ一覧表

トレンチ番号	出土遺物							備考
	縄文式 土器	石器類	弦文式 土器	土輪質土器	須恵器	灰陶器	中世以降 陶磁器	
TR-1	多量	32		2	3		4	
TR-2	"	48			2		1	
TR-3	"	10					1	
TR-4	"	18			2		1	以上平成3年度調査分
TR-5	"	69		1	2		3	
TR-6	"	8					1	
TR-7	"	22		1			1	
TR-8	"	27			1		1	鐵片 1
TR-9	"	17			3		3	
TR-10	"	35			1		9	
TR-11	"	35			1		2	
TR-12	"	28			1		8	
TR-13	"	8			3		5	
TR-14	"	21						
TR-15	"	51					2	
TR-16	"	9			1		4	青磁小片 1
TR-17	"	75					3	SX-01 直上

第5表宮西遺跡試掘トレンチ一覧表

トレンチ番号	出土遺物						備考
	縄文式土器	石器類	弦生式土器	土師質土器	須恵器	灰陶器	
TR-1	1			4			
TR-2		4		11	2		1
TR-3		2		21	1		1
TR-4		3		107	2	15	青磁小片 1.
TR-5							
TR-6		1					
TR-7				2			
TR-8						3	以上平成3年度調査分 鉄製品片 1・キセル 1
TR-9		1			42		
TR-10		3			10	1	1
TR-11		2	3		4	1	1
TR-12		1			1	1	
TR-13						1	2

第6表前田遺跡試掘トレンチ一覧表

トレンチ番号	出土遺物						備考
	縄文式土器	石器類	弦生式土器	土師質土器	須恵器	灰陶器	
TR-1	1			2			2
TR-2	6	1					
TR-3				5	37	11	以上平成3年度調査分
TR-4		1					
TR-5		1			3	1	

第4節 発掘調査日誌

十代遺跡・次郎淵遺跡

4月17日 農村活性化住環境整備事業〔長野県深井地区〕の起工式が、関係者多数出席のもと前田地籍で盛大に行われる。

4月20日 十代遺跡にテントを設営し、発掘器材を搬入する。十代遺跡・次郎淵遺跡の発掘調査を開始する。

4月28日 次郎淵遺跡のTR-9より石臼が埋設された状態で発見されたため、周囲を拡張して精査する。南側に直行する形でTR-15を設定し、掘り下げる。

5月6日 十代遺跡において、地元は場整備推進委員・町教育委員会・町遺跡発掘調査団が集まり、鍛入れ式を行う。次郎淵遺跡の調査を試掘調査のみで終了とする。

5月8日 十代遺跡C地点の耕作土を重機により除去する。終了した場所から、遺構検出に着手する。十代遺跡A地点の試掘調査を続行する。

5月12日 十代遺跡C地点の遺構掘りに着手する。

5月13日 十代遺跡B地点の耕作土を重機により除去する。

5月15日 十代遺跡B地点の遺構検出に着手する。

5月19日 十代遺跡B地点の遺構掘りに着手する。

5月21日 十代遺跡A地点の耕作土を重機により除去する。C地点の実測作業に着手する

5月27日 十代遺跡B地点の遺構掘り・実測が終了し、C地点もほぼ終了したので高所作業車に乗り調査区全体の写真撮影を行う。

6月4日 十代遺跡C地点の遺構掘り・実測・写真撮影を終了する。

6月5日 十代遺跡A地点の遺構検出に着手する。

6月12日 十代遺跡の耕作土除去を終了する。

6月22日 A地点の遺構掘りに着手する。

6月26日 A地点・SB-01~04の精査を行う。

7月1日 A地点の実測を開始する。

7月8日 A地点・SB-05~07の精査・写真撮影を行う。



7月11日 西深井公民館と十代遺跡A・B地点で、現地説明会を行う。見学者は60名を超え、好評だった。

7月15日 A地点の遺構掘り・実測が終了し、各遺構の写真撮影を行う。

7月20日 A地点全体の写真撮影を、高所作業車に乗り実施する。

7月27日 A地点の作業がすべて終了する。



宮西遺跡

7月8日 十代遺跡から一班が移動し、宮西遺跡の試掘調査を開始する。

7月16日 連日の雨のため、十代遺跡の作業ができず、全員で試掘調査を行う。

7月21日 十代遺跡の作業がほとんど終了したため、わずかな人を残して宮西遺跡の試掘調査を行う。工事施工業者が伐採した立ち木をトレンチ内にまとめてきてため、作業を中断する。

8月3日 伐採した木を取り除き、重機で耕作土の除去を行う。終了した場所から遺構検出に着手する。TR-13を設定するが、出土遺物はほとんどなかった。

8月10日 遺構検出が終了し、遺構掘りに着手する。

8月12日 遺構掘りがほぼ終了し、実測に着手する。

8月17日 調査区全域の写真撮影を行う。実測を続行する

8月19日 実測・写真撮影が終了し、SB-02~06のカマドを半截後完掘する。

若宮遺跡

7月21日 工事施工業者（香●組）により宮西遺跡の試掘調査が調査不可能な状態になってしまった（一部破壊）ため、若宮遺跡の試掘調査にとりかかる。

7月28日 グリッドを設定し、遺構検出に着手する。

8月3日 宮西遺跡の調査再開により、若宮遺跡の調査を一時中断する。

8月18日 宮西遺跡の調査がほぼ終了したため、若宮遺跡の遺構検出を再開する。

8月24日 田沢・辻田遺跡の調査開始により、調査団を分割して器材搬出を行う。

9月3日 遺構掘りに着手する。昨年度のトレンチ脇から埋蔵-1が検出される。

9月10日 SK-03より縄文時代中期中葉土器と石製有孔垂飾品が出土する。

9月18日 SB-02・03・05等の精査を行い、写真撮影をする。実測を続行する

9月22日 若宮遺跡西側半分の写真撮影を行い、一旦調査を中断する。

10月1日 東側半分の調査区のうち、ネクタリンの収穫・伐採が終了した地区的調査を再開する。重機によりネクタリンの抜根・耕作土除去に着手する。

10月6日 トレンチ調査がほぼ終了し、遺構検出作業に着手する。

10月14日 重機による耕作土除去が終了する。午後雨が強くなつたため、作業を中止する。

10月19日 遺構検出が終了し、遺構掘りに着手する。

10月26日 遺構掘りがほぼ終了したため、調査団を数人に減らす。

10月30日 遺構掘り・写真撮影・実測を終了する。ブドウの収穫が終了するまで再度調査を中断する。

11月5日 調査を再開し、ブドウ園内のトレンチ調査を行う。TR-11より鉄平石がまとまって出土する。拡張してSX-01を検出する。

11月12日 SX-01の実測を行い、発掘器材を撤収する。これをもって、深井地区の発掘調査をすべて終了する。

前田遺跡・唐沢遺跡

11月5日 前田遺跡にトレンチを設定し、着手する。唐沢遺跡南端部の立ち会い調査を行なうが、土師器・須恵器がわずか出土しただけであり、トレンチ調査は実施しなかった。

11月6日 前田遺跡のトレンチを続行するが、ほとんど遺物が出土しないため、これ以上調査を行わないこととした。周辺から平坦な礫が4枚出土したため、工事立ち会いを続行する。

11月12日 立ち会い調査によって、新知見が何ら得られなかつたため、若宮遺跡の作業が終了した本日をもって、本年度の深井地区の発掘調査をすべて終了する。

第5節 遺物整理と報告書の作成作業

平成4年度の発掘調査は、前節に記したとおりであるが、その間出土遺物の水洗・注記作業を並行して行った。現地調査終了時点では、十代遺跡と宮西遺跡の遺物整理作業がほぼ終了し、土器接合・復原に約半分着手した段階までに達していた。その後、十代遺跡と若宮遺跡の遺物整理作業をわずかに行なつただけで、他地区（和地区釜村田遺跡・辻田遺跡他、東部中央地区塚原古墳群・横マクリ遺跡・藏替遺跡他）の整理作業・報告書作成に主力を注いだため、作業は中断してしまった。

平成5年度の整理作業及び報告書刊行について、平成4年9月22日と12月4日の2回にわたり平成5年度に予定されている発掘調査の保護協議と共に話し合われ、平成5年度中の報告書刊行が決定された。

平成5年度は、和・西入の中尾遺跡ほか2遺跡と辻田遺跡、轟津の真行寺遺跡と山の越遺跡等の発掘調査が予定され、発掘調査報告書の刊行も中尾遺跡ほか2遺跡・藏替遺跡ほか5遺跡と本報告書の3冊が作成されることとなつた。

このようなハードスケジュールもこなさなければならぬ上に、平成5年4月1日付で文化財係長が変わり、長年文化財保護行政に携わってきた西沢浩主査が移動になり文化財係が一人減員となってしまった。

さらに困難な状況に追いこまれた平成5年度の整理作業は、7月までに若宮遺跡・前田遺跡等の遺物水洗・注記作業（遺物の発見場所を個々の遺物に記入すること：右写真参照）が終了した。兩天で発掘調査が行われなかつた日には、土器の接合・復原作業を断続的に行い、最終的に遺物の整理作業が終了したのは、平成6年1月になってからである。

造構実測図の製図・トレース作業（右写真）も発掘調査と同時進行で行われ、12月下旬・クリスマス直前まで実施された平成5年度の発掘調査の終了後によく終了した。

団版製作は新年になってから始めたものの、鹿賀遺跡はか5遺跡の報告書作成と重複してしまったため、1月中旬までかかってしまった。これとともに、原稿執筆・編集作業を休日は無論、夜間・深夜までかかって行い、1月下旬になって印刷業者が決定され、2月に団版・原稿を入稿した。

こうした経過で報告書が作成されたため、出土遺物の実測はほんのわずかしか行えず、したがってその説明・考察はできなかった。本筋では言い訳のみ書き連ねてしまった感はあるが、このような実情である点を御了解いただき、御容赦願いたい。報告者のせめてもの罪滅ぼしとして、遺物の写真をできるだけ多く掲載したつもりである。

このような状態の作業進行にもかかわらず、連日誠心誠意報告書作成に携わった関係者の努力により、平成6年3月25日に刊行することができた。



第三章 十代遺跡の調査

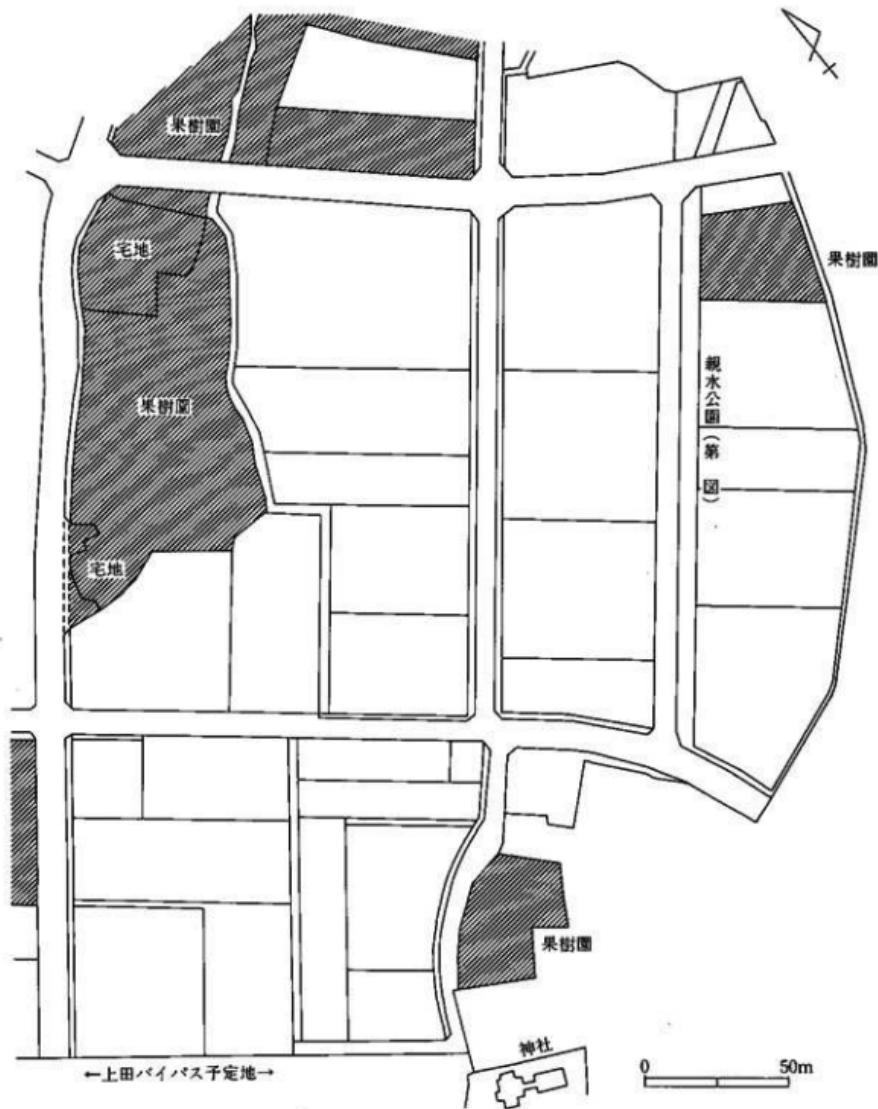
第1節 調査の概略

今回の発掘調査が行われるまで、十代遺跡についてはほとんど考古学上の調査・研究が行われておらず、遺跡の範囲・時代・種類などについてのデータは無いに等しい状態であった。唯一、昭和57年度に行われた遺跡分布図作成のための分布調査により、南北300m・東西100mの広がりを有する縄文時代と平安時代の集落遺跡であると想定された程度で、詳細は明確にされていなかった。耕作者等の話によると、かつては矢じり（石鐵）や赤い土器（弥生式土器）が多く発見されたそうである。

上記の状況であったため、合計40本ものトレンチによりきめ細かな試掘調査を行った（23・24ページ：第5図）結果、縄文時代から中世までの各時代に及ぶ複合集落遺跡であることが明らかになった。地形的には、南側は千曲川・西側は瀬在川が形成した河岸段丘であり、共に第一段丘で眺望はすばらしい。A・B・C三地点からなる遺構集中地点の東側に流れる小河川により開析された凹地との比高は、A地点で50cm～1mとわずかであるが、C地点では5～10m以上もある。また、西側もわずかに低くなっているため、強粘土地帯にあるにもかかわらず、比較的水はけが良く、生活に適した場所であったと考えられる。なお、遺跡東側の凹地に3本のトレンチを設定して掘り下げたが、湧水が多く調査を中断せざるを得なかった。遺物は比較的多く、遺構の存在を全く否定することはできないが、今回の工事では破壊されずに土中深く（1～3m）埋設されているので、機会があれば再調査可能である。水田造成時に移動された土砂と共に土器類が運ばれたものと考えられるが、あるいは古代水田址・用水路址・住居址等が存在した場所とも考えられる。そこで、この凹地をD地点として遺跡の一部と把握しておくこととする。（D地点の範囲については明確ではない。）

発掘調査は、ほ場整備の工事進行に合わせ、南から北へ進めることとし、C地点から着手した。C地点からB地点にかけては、ほぼ全域が工事により破壊されるが、日程・予算の上から約1ヶ月・1000m²程度しか調査できない状況であるため、中でも比較的の保存状態が良好で、遺物の出土量が多い地点のみをわずかに調査したにすぎない。昨年度の試掘調査の不十分さが悔やまれてならない。最終的な発掘調査面積は、C地点約900m²・B地点約330m²である。

A地点では、遺物包含層があまり厚くなく遺構検出が容易であったため、遺構が残されていると思われる範囲の約80%を発掘調査することができた。しかし、たび重なる大雨のため、強粘土地帯の発掘調査は大変であった。雨のたびに水を汲み出し、晴天が続くと水をまきながら掘り下げるという作業のくり返しで、約2,000m²の発掘調査は7月末までかかってしまった。



第8図 十代遺跡 発掘調査地点の現況

第2節 A地点の調査結果

十代遺跡の発掘調査は便宜的にA・B・C3地点に分けて実施したが、本来は連続する一連の遺跡である。そこでグリッド設定についても、同一基準を用いて設定することとした。最初に発掘調査を実施したC地点では、磁北による南北ラインを3m間隔に区切り、これに直行する東西ラインも3m間隔に区切り $3 \times 3\text{m}$ グリッドに分割した。なお、各グリッドは北からA・B・C……、西から1・2・3……と番号を付し、C-2・H-4と呼称することとした。ここで用いた南北東西ラインを延長して、A地点にも $3 \times 3\text{m}$ グリッドを設定した。呼称方法については、大・中グリッド法を用いると複雑になってしまうので、調査区北端からA～R、東西にはC地点の東端からA地点の西端まで番号を統一してその西端から33～63まで統一した。したがってA地点の西端のグリッドはN-33・北端はA-51（このグリッドは、当方のミスにより付図-1に記入されていない。遺構は全く検出されなかった。）である。

遺跡名の略号については、十代=judaiからJUDとし、続けて各地点名を付することとした。すなわち、十代遺跡A地点はJUD-Aとなる。

発掘調査は230グリッド分・約2,000m²において、調査区はオーストラリアあるいは四国の様な形を呈している。ここから竪穴住居址15軒・集石土墳7基・溝状遺構10条・土墳22基・ピット280基などが発見され、そこから弥生時代後期・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世の土器などが出土している。また、遺構外から縄文時代中期～後期の土器・石器、中世以降の陶磁器（青磁破片2点ほか）、火縄銃の玉と思われる鉛球2点、平安時代以降と思われる鉄製品・炭化物・骨片、近世の古錢などが出土している。

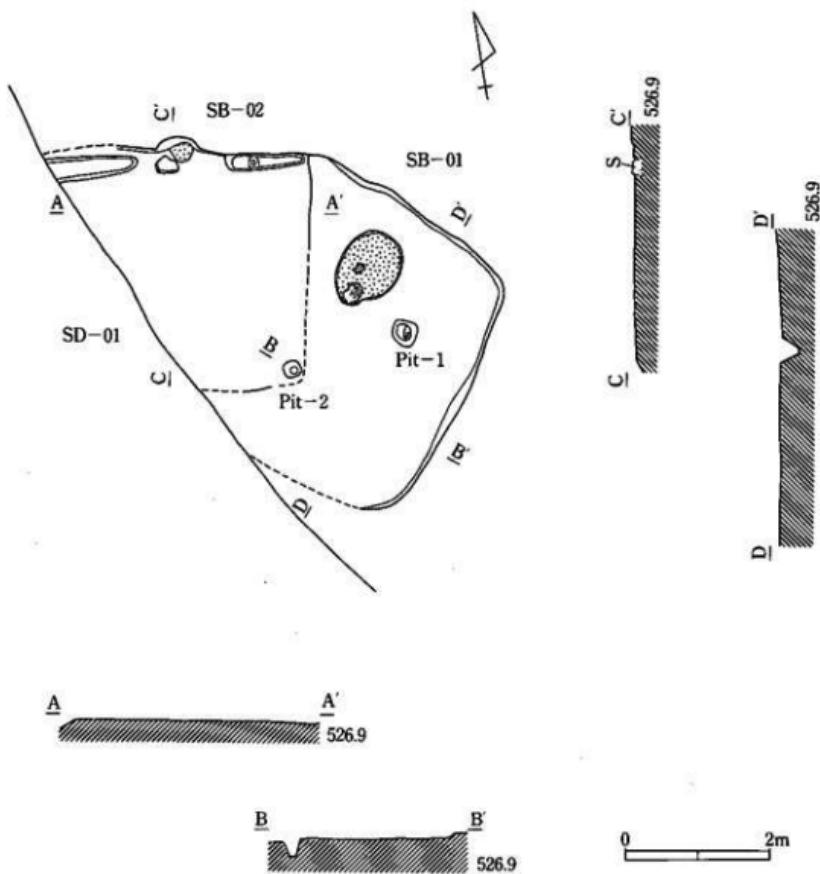
1. 竪穴住居址

今回の調査では、15軒の竪穴住居址が検出されたが、そのほとんどがわずかな掘り込みやカマドの痕跡によりかろうじて確認されたものである。多量に検出されたピット群の中には、床面を失ってしまった竪穴住居址や掘立柱建物址が含まれていると思われるが、抽出することはできなかった。

15軒のうち、SB-01は弥生時代後期・SB-08・11は奈良時代・SB-02～07・12～15は平安時代に属するものと思われるが、出土遺物が少ないものや、切り合い関係を有するものがあり若干事実誤認が含まれる可能性がある。

（1）SB-01（第9図・第10図・図版3-1・2）

調査区北西部・F～G-47～48グリッドにおいて検出された。主軸はN-40°-Eを示し長方形プランを呈すると思われるが、西壁をSB-02に・南壁をSD-01に切られているため、判然としない。長軸4.4m・短軸3.5m（現在長）とやや小形で、壁高は北東コーナーで約5cmを測るが、



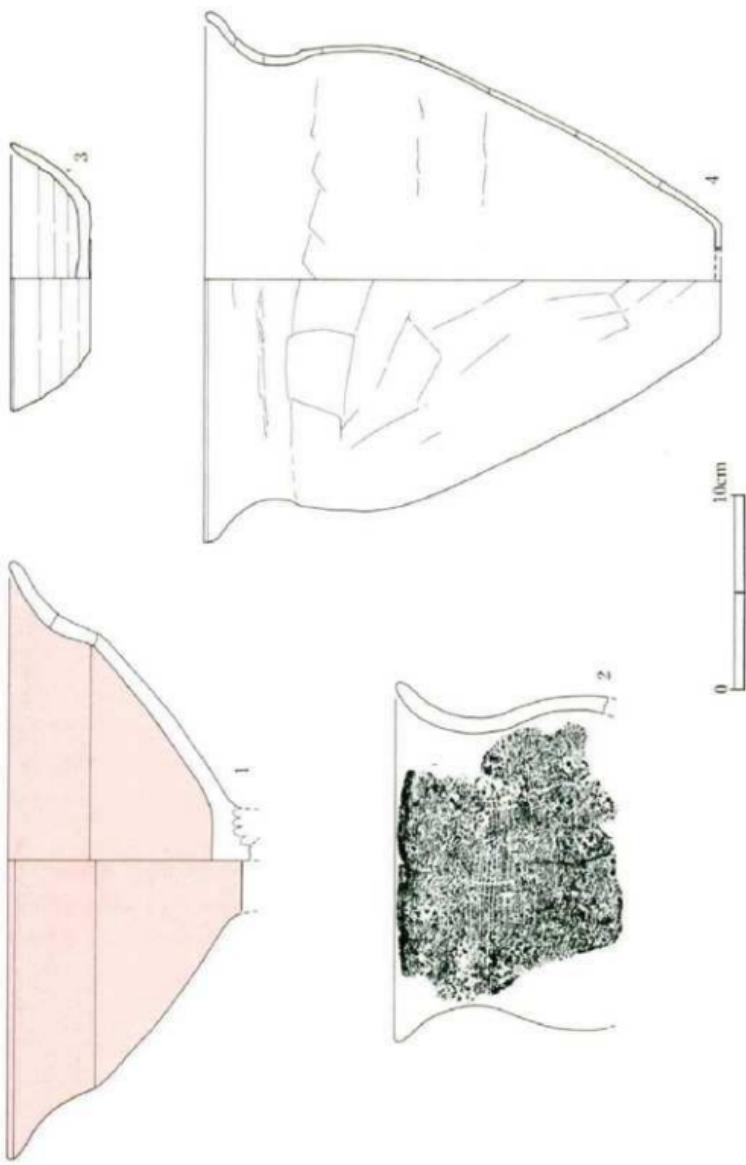
第9図 十代遺跡A地点 SB-01・02 実測図

他は0~3cmとごくわずかである。

床はほぼ全面に貼り床が認められ、平坦で硬い。ピットは炉の東側に一基が検出されただけである。炉は、北壁寄りの柱穴脇に高环の環部のみを正位に埋設したもので、土器が入るだけの浅い穴が掘られている。土器を含む80×100cmの範囲に、炭化物・焼土が広がっている。

遺物の出土量はわずかで、炉体土器である高环（第10図1）・頭部に簾状文を有する壺の口縁部破片（2）・固化できなかったが壺の胴下半部破片の各1個体分が出土しただけである。これらの遺物から、本住居址は弥生時代後期箱清水式期に位置付けられる。

第10图 十代道路A地点 SB-01-04 出土土器 宽测图



(2) SB-02 (第9図・図版3-1)

SB-01の北西側・E~F-46~47グリッドで検出された。主軸方向はN-10°-Eを示すが、西側の1/4をSD-01・02に切られ、南壁は確認できなかったため、プランは不明確である。一辺4m程度の小形住居で、北壁中央やや東寄りにカマドが構築されている。カマドを除く北壁ぞいに幅20~30cm・深さ5~8cmの周溝が巡り、一部東壁ぞいにも認められるが擾乱により破壊されている。周溝を除く壁高は5cm以下で、東壁・南壁はほとんど確認できなかった。

床はカマド周辺に硬い貼り床が認められるが、他はやや軟らかい。ピットは、南東コーナーと北壁周溝内で各1基確認された。カマドは、掘り方と火床部がわずかに検出されただけである。火床部南側から出土した偏平磚をカマドの構築材と考えることもできるが、確認はない。掘り方に磚を埋めた穴は見られなかった。

遺物は小破片が3点出土しただけであり、いずれも図化はできなかった。2点は土師器小形甕の口縁部と胸部破片で、1点は須恵器环の口縁部破片である。これだけで本址の所属時期を限定することはできないが、一応平安時代前期と考えておきたい。

(3) SB-03 (第11図・図版3-3)

調査区の中央付近・I~K-48~50グリッドで検出された。主軸はN-45°-Eを指すと思われるが、カマドが未検出のため、N-45°-Wである可能性も考えられる。南西側半分をSD-01に、北東隅をSB-04に切られている。北側の壁は15~20cmを測り、東壁は5~10cmで壁ぞいに幅20cm・深さ5cm前後の周溝が巡る。北西隅と周溝から、一辺5.8m程のプランが推定される。

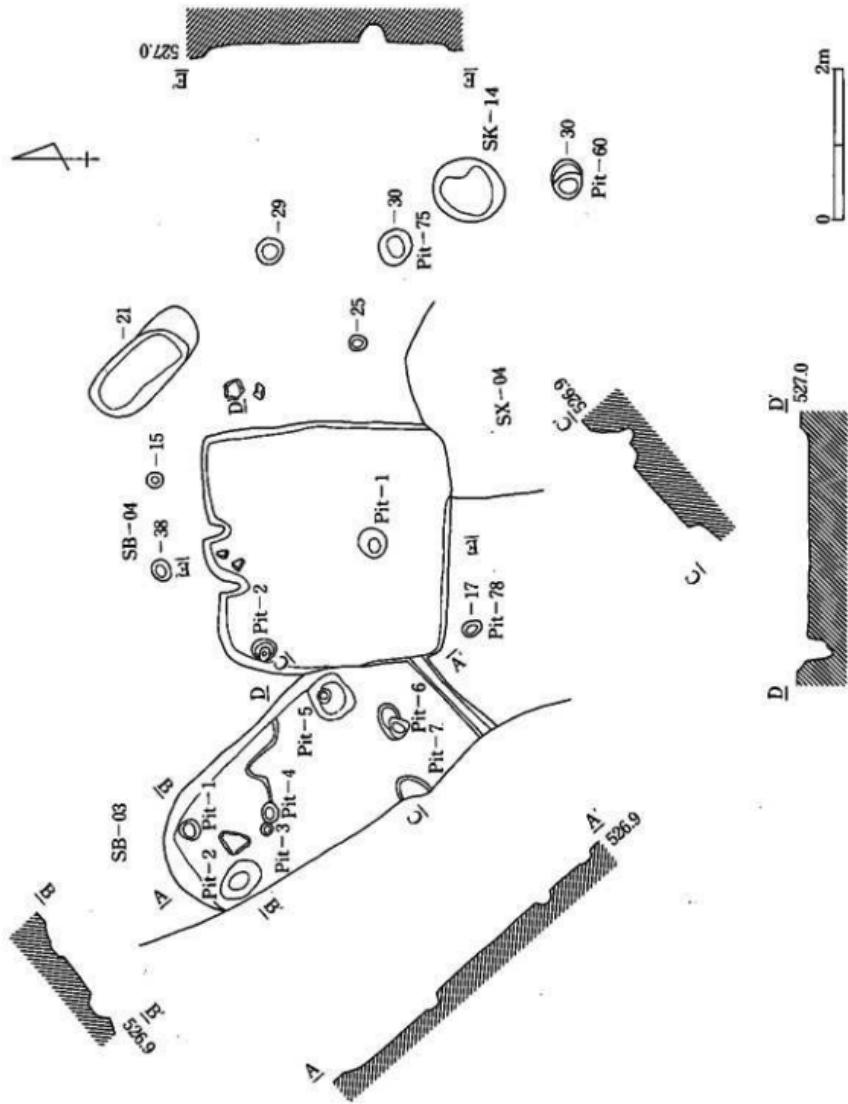
床面は軟らかく、ピット・擾乱等により凹凸がはげしい。ピットは7基検出されたが、本址の柱穴と思われるのは、Pit-1・2・6であり、他は本址廃絶後掘られたものと思われる。なお、本址南西側のSD-01覆土上部から遺物がまとまって出土しており、SD-01が埋まってから本址が掘られたとも考えられるが、確認はできなかった。カマドは検出できなかつたが、擾乱部分～SK-1かけてか、SD-01に切られた場所にあったものであろうか。あるいは、SD-01埋没後の中世・竪穴状遺構であれば、カマドはなかつたとも考えられる。

出土遺物はあまり多くなく、土師器長胴甕（武藏型・北信型）・环（内面黒色）、須恵器蓋？・环・环蓋等の小破片が出土している。SK-1内からも小形長胴甕（武藏型）一個体分が出土していることから、本址は平安時代前期に属すると考えられる。しかし、上記したとおり中世の遺構とも考えられ、はっきりとしない。石器では、敲石が2点出土している。

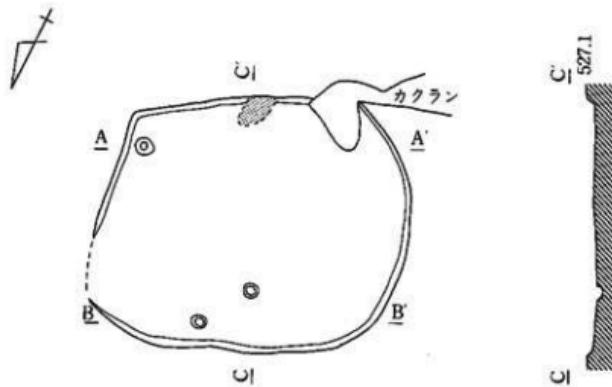
(4) SB-04 (第11図・第10図3・4・図版4-1・2)

SB-03の東側、I~J-50~51グリッドにおいて検出された。主軸方向はほぼ南北で、わずかに西側をさしている。西壁でSB-03を切り、南東隅はSX-04に切られている。一辺3.5mのほぼ正方形プランを呈する小形住居で、北壁中央にカマドが構築されている。壁高は10~15cmを測り、ほぼ直に立ち上がる。

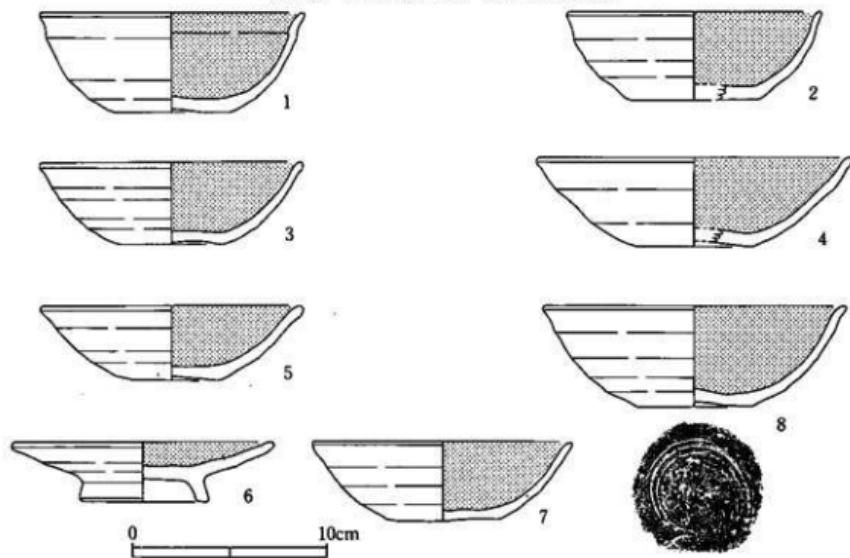
床面は全体的に硬く、ほぼ平坦である。ピットは北西コーナーと中央やや南寄りにある。壁外



第11図 十代遺跡A地点 SB-03-04 実測図



第12図 十代遺跡A地点 SB-05 実測図



第13図 十代遺跡A地点 SB-05·07出土土器 実測図

にPit-78ほか数基のピットが検出されているが、本址との関係は不明である。カマドは、裾の下部がわずかに残っているだけで、芯に石などは使われていない。火床部の上面に接するように2個の偏平礫が出土しており、カマド天井部の芯に用いられたものと考えられる。

出土遺物はあまり多くなく、土師器長胴甕（4；武藏型）・坏・須恵器甕・壺・坏（3）・坏蓋などが各2・3点ずつ出土しているだけである。時期は、平安時代前期を主体とするが、やや古い段階の遺物もわずかに含まれる。石器では、石錐・敲石・台石が1点ずつ出土している。

（5）SB-05（第12図・第13図1～6）

調査区西端・F～G-41・42グリッドで発見された。短径3.4m・長径4.4mの不整長方形を呈し、南東壁中央にカマドの痕跡が残る。カマドによる主軸方向はS-30°-Eと他の住居址と90°以上異なる。南側と北側の壁の一部が、擾乱によりわずかに破壊されている。また、本址検出面に貼り床が確認されたためSB-15としたが、出土遺物がなく、本址との新旧関係は不明である。壁は10～15cmを測り、南西壁は緩やかに、他はほぼ直に立ち上がる。

床はほぼ平坦であるが、SB-15と重複している西側は凹凸が見られる。ピットは3基検出されているが、Pit-3はSB-15の柱穴かも知れない。カマドは南東壁のほぼ中央部で検出された火床部が、その痕跡と思われる。

遺物はややまとまって出土しているが、その一部（5・6等）は時期が若干新しく、SB-15に属する遺物であろう。土師器無高台坏（内面黒色・底部糸切り未調整）が主体で、少量ながら高台付坏・高台付皿・長胴甕・須恵器甕などが出土している。いずれも平安時代初頭から前期に属し、新段階がSB-15に属する。石器は、砥石・磨石・敲石が各1点ずつ出土している。

（6）SB-06（第14図・図版4～6）

調査区西端・I-43～44グリッドよりカマドの痕跡と床が検出された。南側の大半は水田造成により削平されており、プランは判然としない。

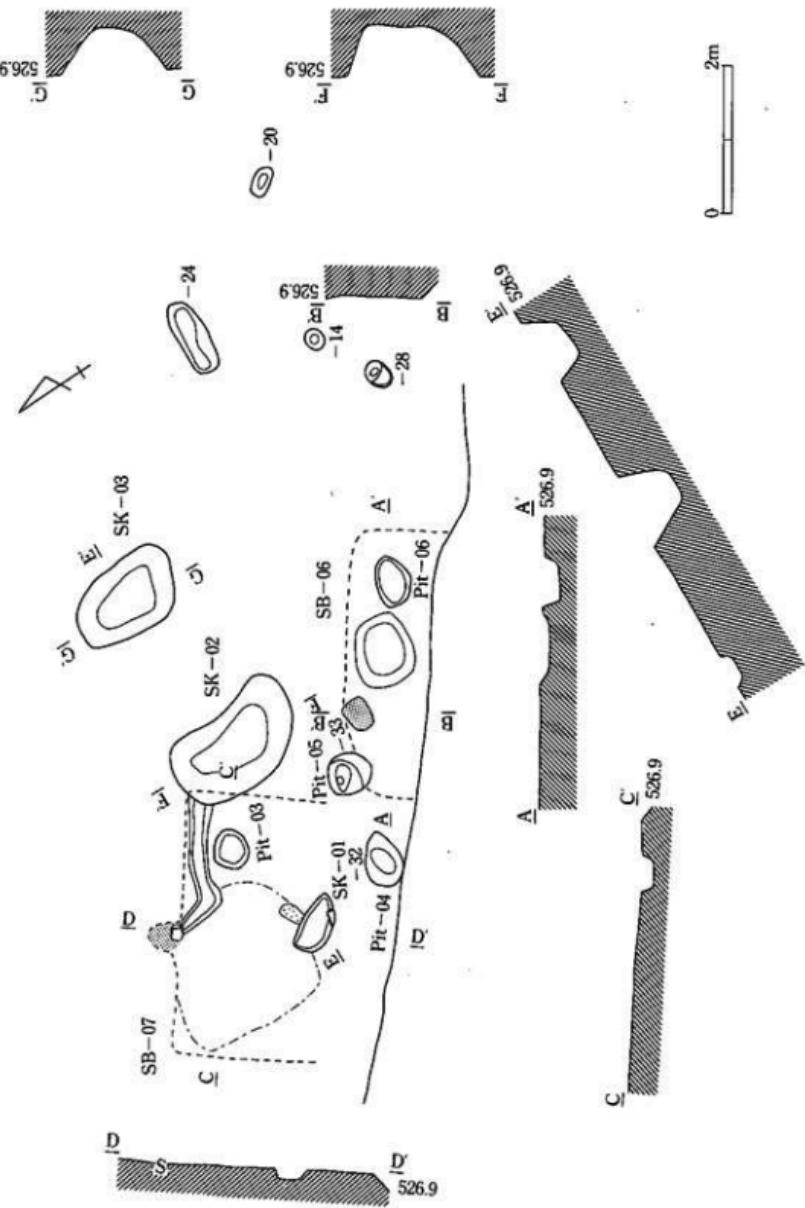
床面はほぼ平坦で硬いが、Pit-05・06等に破壊されており、範囲は明確ではない。SK-1は本址に伴うものと考えたが、遺物の出土はなく中世の土壤とも考えられる。カマドは火床部のみ検出されている。

出土遺物はわずかで、図示しうるものは皆無であった。土師器長胴甕・無高台坏・高台付坏・須恵器甕・坏・坏蓋などの小破片が出土している。本址の所属時期は、平安時代前期と考えられる。

（7）SB-07（第14図・第13図7・8）

SB-05とSB-06の間・H-43でカマドと貼り床が検出され、本址の存在が確認された。南側の一部がSB-06・水田造成により削平されている。また、SK-01・02、Pit-03・04も本址を切っており、壁は確認できなかった。

床はカマド南側に貼り床が確認されており、平坦で硬い。カマド東側の北壁（推定）ぞいに、幅20～25cm・深さ10～15cmの周溝が掘られ、カマド近くで屈曲している。カマドの掘り方と火床



第14図 十代道路A地点 SB-06・07 実測図

部が検出され、その脇からカマドの構築材と思われる平坦な礫が出土している。

遺物はごくわずかで、須恵器甕・壺・土師器無高台坏（7・8；内面黒色）・甕など、平安時代前期の遺物が出土しており、本址の所属時期と考えられる。

（8）SB-08（第15図・図版5）

調査区南側・M～N-48～50グリッドで検出された。南西隅をS-K-20に切られているが、他はほぼ完存している。一辺5.9mの正方形プランで、北東壁のはば中央部にカマドが構築されており、主軸はN-56°-Eを指す。壁はカマド周辺で40cm前後・他は15～20cmを測り、ほぼ直に立ち上がる。

床はほぼ平坦であるが、カマド南西脇にSX-07が掘り込まれており、周辺には多少凹凸が認められる。壁ぞいに周溝が巡っており、その内側および脇にピットが9基検出されている。カマドは、SX-07により破壊されていると思われたが、両袖の石芯と火床部が検出された。火床部の下からは、平坦な礫が數きつめられており、周辺から須恵器甕の大破片が多く出土している。

遺物はややまとまった量の出土があり、その主体は須恵器甕・短頭壺である。これらは、カマドの構築材として用いられたものである。これ以外に、須恵器壺・壺蓋・土師器長胴甕（武藏型）・無高台坏などが出土しているが、いずれも小破片で図示できなかった。これらは奈良時代に属すると思われ、本址の所属時期は奈良時代後半に位置付けられよう。石器は、敲石1点・チップ2点が出土している。また、棒状の鉄製品1点も出土した。

（9）SB-09（第16図）

発掘調査区中央部の南東側・L-N-52～53グリッドより検出されたが、西半分を水田造成により破壊されており、プランは不明である。カマドの痕跡が確認された北東壁のみが完存しており、4.5mを測る。東側の壁の一部をSD-08に切られる。主軸はN-56°-Eを指す。

床はほぼ平坦で、わずかに南西側へ傾斜している。ピットは北東隅の1基のみである。壁は3～10cmと低い。カマドは火床部のみしか検出できなかった。

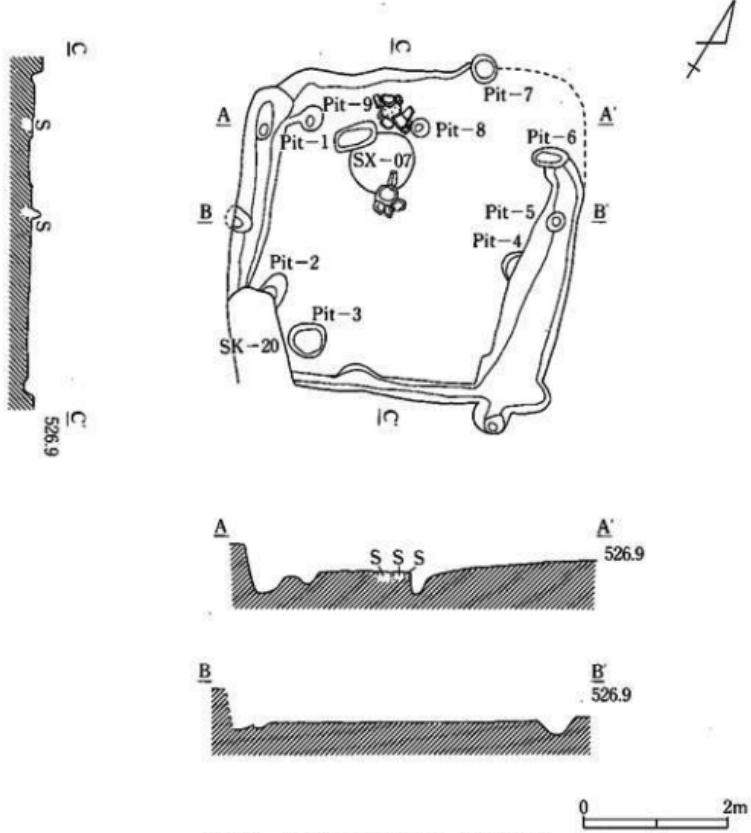
出土遺物は少量で、須恵器甕・無高台坏・土師器長胴甕（武藏型）・無高台坏（内面黒色）の小破片のみである。これにより、本址は平安時代前期に属する住居址と考えられる。石器では、砥石1点・敲石2点が出土している。

（10）SB-10（第16図）

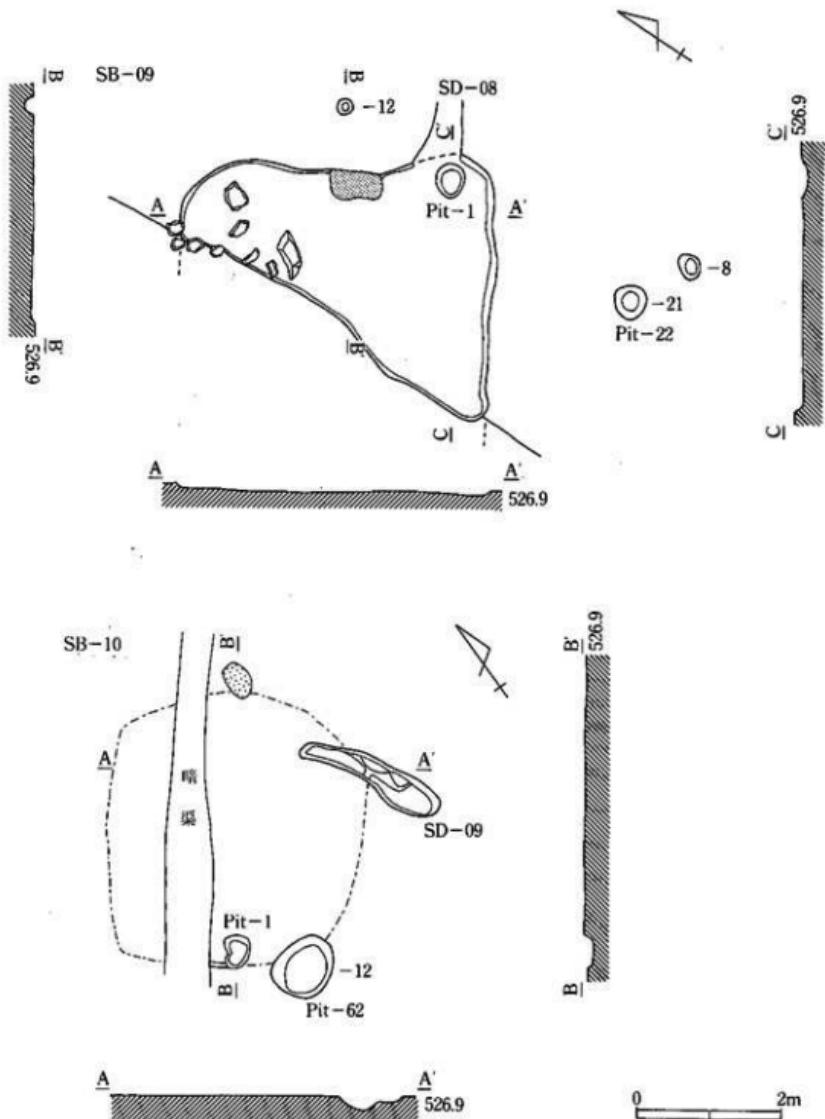
調査区中央やや北東寄り、I・J-55～56グリッドにおいて、カマドの痕跡と思われる火床部と貼り床状の平坦面が検出された。壁と思われる立ち上がりも確認されたため、SB-10とした。ほぼ中央部に擾乱が走り、SD-09・Pit-62等による破壊を受けている。

床は硬く、ほぼ平坦であるが、南西側へ緩やかに傾斜している。ピットは1基のみで、カマドと対峙している。カマドは火床部のみで、周辺は他の床面より硬い。

遺物はほんのわずかで、土師器長胴甕・無高台坏（内面黒色）が数点出土している。これのみで本址の時期は確定できないが、平安時代前期の住居址と把握しておきたい。



第15図 十代遺跡A地点 SB-08 実測図



第16図 十代遺跡A地点 SB-09-10 実測図

(11) S B-11 (第17図・図版6-1)

調査区東端・L~O-59~61グリッドにかけて広がっている。主軸方向はN-40°-Eで、一辺6mを測る正方形プランを里する。南側の壁をわずかにSD-07が切っている。今回の調査中、最大規模を有する住居址であるが、掘り込みはわずかで、遺構検出時に貼り床が露出してしまったほどである。

床面はほぼ平坦で、貼り床がほぼ全面に認められる。ピットは18基検出されたが、主柱穴と思われるのはPit-1・4・11・13の4基で、Pit-7・8などは出入口部に關係のある柱穴と考えられる。本址西側では、数多くのピットが検出されており、これらと関連するピットも含まれていると思われる。周溝は幅15cm・深さ3~6cmを測り、カマドを除く外周を巡っている。カマドは北東壁中央部やや東寄りにあり、火床部が検出されただけである。

遺物の出土量はさして多くなく、須恵器甕・壺・壺の小片少量と、土師器長胴甕數個体が出土した程度である。時期は、奈良時代の古段階に位置付けられよう。この他に、編み物用に使用されたと思われる石鍤24点・チップ2点と、鐵製刀子1点が出土している。

(12) S B-12 (第18図・第28図1・2・図版6-2)

S B-11の南側・O~P-58~59より検出された。S B-13とSD-07にそれぞれ東・北壁の一部を切られ、南側を平成3年度の試掘調査で破壊されている。残存する壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。

床面が確認された範囲はほんのわずかで、南側は削平されているため、プラン・カマドの位置等を確認することはできなかった。ピットは2基検出されたが、Pit-2は本址のカマドの掘り方とも考えられる。

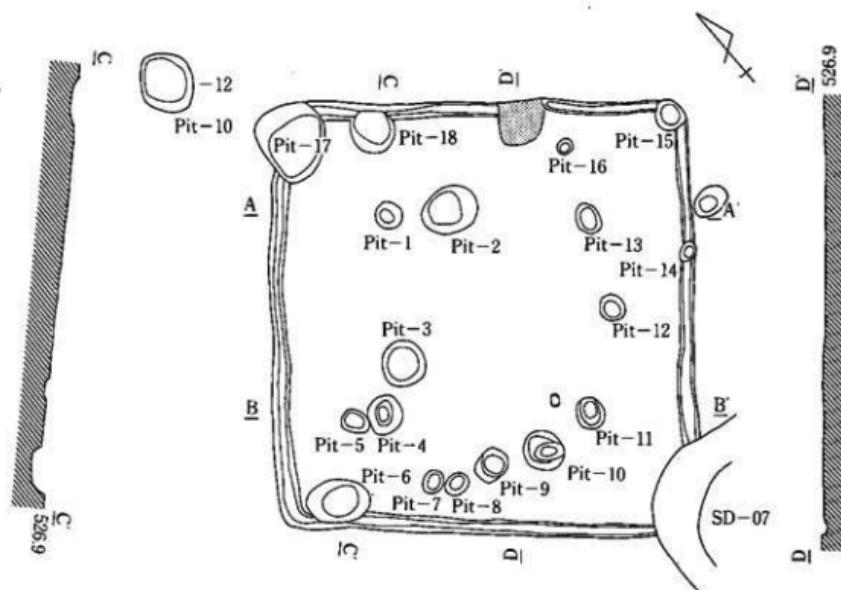
本址に伴う遺物は少量で、須恵器甕・壺・土師器長胴甕・無高台壺(1; 内面黒色)・皿(2)などが出土しており、平安時代前期に位置付けられる。石器は、チップ1点のみの出土である。

(13) S B-13 (第18図・第35図・図版6-2)

調査区東端・O~P-59~60グリッドで検出された。西壁でS B-12を切り、床面をSD-10に切られている。南東側は調査区域外のため、プランは判然としない。壁はいずれもほぼ直に立ち上がるが、南側の壁の一部は掘りすぎているようで、本来の姿を現わしていないものと思われる。本来は方形プランだったのである。主軸はN-50°-Eを示すと思われる。

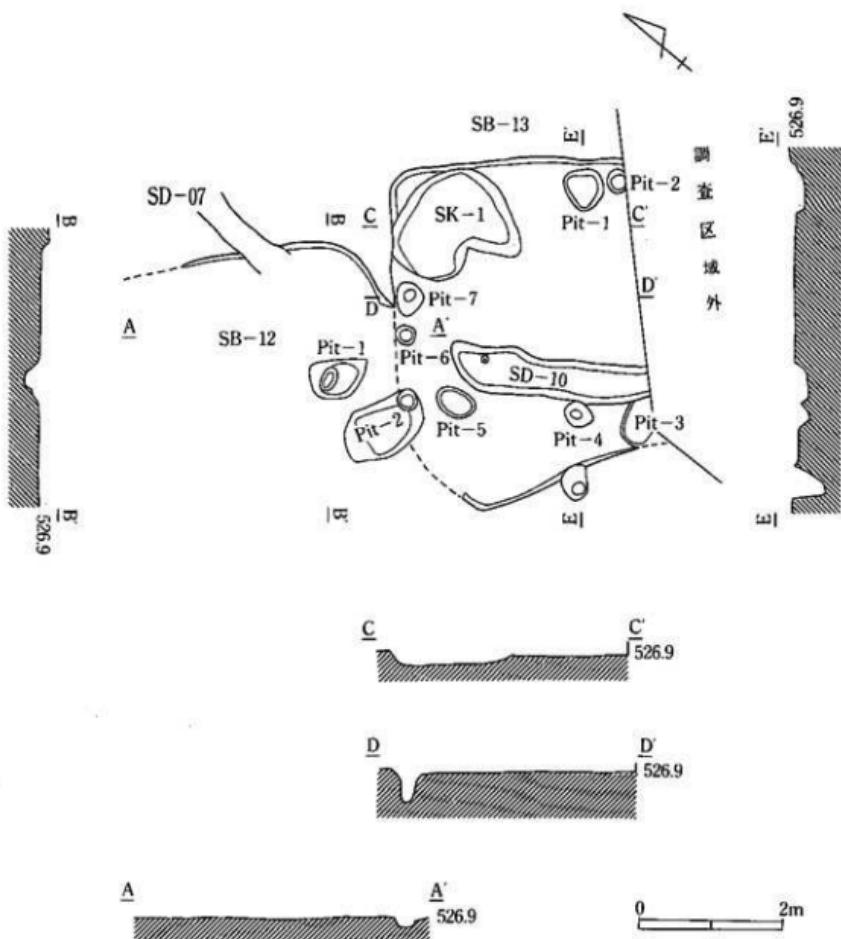
床面はほぼ平坦であるが、ほぼ中央部を東西にSD-10が破壊しており、ピット・土壙のいくつかは本址埋没後掘られたものであろう。Pit-1~5が本址の柱穴と思われる。なお、Pit-6からは、土師器無高台壺(内面黒色)が出土している。

遺物はやや多く、須恵器甕・壺・無高台壺・土師器長胴甕・無高台壺(内面黒色)・高台付壺(内面黒色)・灰釉陶器壺(1点)などが出土している。これらの所属時期から、本址は平安時代前期と考えられる。なお、出土量が多いのは土師器無高台壺で、須恵器甕もやや多い。石器は石鍤2点・敲石1点・チップ3点が出土した。



第17図 十代遺跡A地点 SB-11 実測図

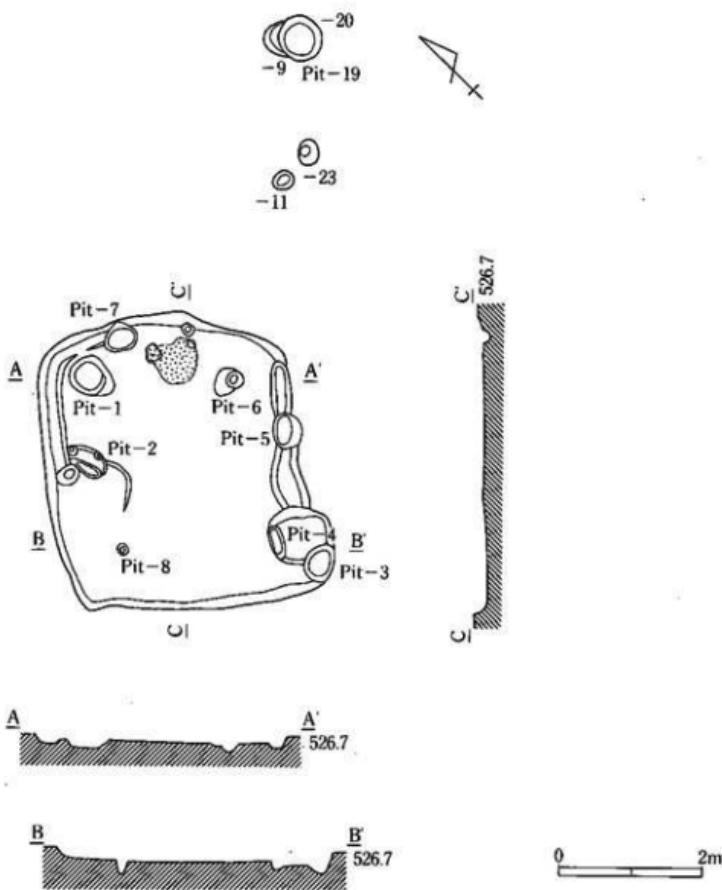
0 2m



第18図 十代遺跡A地点 SB-12・13 実測図

(14) SB-14 (第19図・第28図3・4・図版6-3)

SB-12の西側・N-P-56~57グリッドにおいて検出されたが、平成3年度の試掘調査 (TR-14) すでに発見されていた住居址である。長径4.2m・短径3.7mの不整長方形プランを呈している。TR-14により、壁・床・周溝の一部が破壊されている。周溝は東側と西側の壁にそって掘られており、幅20cm・深さ5~15cmを測る。ピットは10基検出されているが、本址の柱穴と思われるものはPit-1・6で、Pit-7はカマドに関連するものであろう。壁はいずれもほぼ直に



第19図 十代遺跡A地点 SB-14 実測図

立ち上がる。

床はおおむね平坦であるが、全体に軟弱である。カマドは北東壁のほぼ中央部より検出されたが、號を多少掘りすぎたようで、壁内で完結してしまった。火床部・ピット1基・平坦環2個からなるカマドの痕跡から見た主軸方向は、N-40°-Eを示す。

遺物は須恵器が目立ち、甕・壺・無高台环(3・4)が主体を占め、土師器長脣甕・环がややまとまって出土している。平安時代前期の土器類と、石錐・磨石各1点の石器が出土している。

2. 集石土壙

礫を並べたり積み重ねた遺構で、その下部に掘り込みのあるものを集石土壙（S X）とする。土壙の中で、一つだけ礫を含むもの（S K-05・11他）や、小礫を複数含むもの（S K-07他）はこの類には含めない。

A地点において、7基の集石土壙が検出された。規模・集石の状況・礫の大きさ等は、すべて異なるが、横円形を呈し、時期は平安時代から中世に限定される。一つだけ礫を含むS K-02～05他と共に、墓地であろうと考えられるが、骨・藏骨器・古錢等はほとんど出土しなかった。

(1) S X-01 (第20・37図・図版7-1)

調査区北西隅・D-44グリッドにおいて検出された。長径120cm・短径110cmの小判形を呈し深さは23cmを測る。礫は角礫が多く、全体的に大きめの礫を土壙周辺に並べている。出土遺物は、土師器壺の小破片2点のみである。

(2) S X-02 (第20図・図版7-2)

調査区西端・K-44グリッドより検出された。長径130cm・短径100cmの横円形プランで、北壁をピットに切られている。掘り込みはごくわずかで、検出面の削平が著しい。角礫が主体で、土師器壺・壺・須恵器壺・壺が少量ずつ出土している。

(3) S X-03 (第21図・図版7-3)

調査区中央やや南寄り、L-48グリッドで発見された。二基の土壙が連なっており、長径120cm・短径60cmの長横円形の範囲に、小形長円礫が多量に積み重ねられていた。編み物等に用いられたと思われる石錐に類似するが、やや小ぶりである。須恵器壺破片数点と敲石1点が出土した。

(4) S X-04 (第21図・図版8-1)

調査区中央・J-51～52グリッドより検出された。北西壁にてS B-04を切っている。東西約3.5m・南北3m弱の不整横円形を呈し、その北端に集石・東端にピットがある。礫はやや小形の角礫で、集中地点以外には全くない。深さはおむね25cmで、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器壺と須恵器壺・壺などが10数点ずつ出土しているが、平安時代後半から中世の竪穴状遺構である可能性もある。これらの他に石錐2点・敲石2点・骨片小量も出土している。

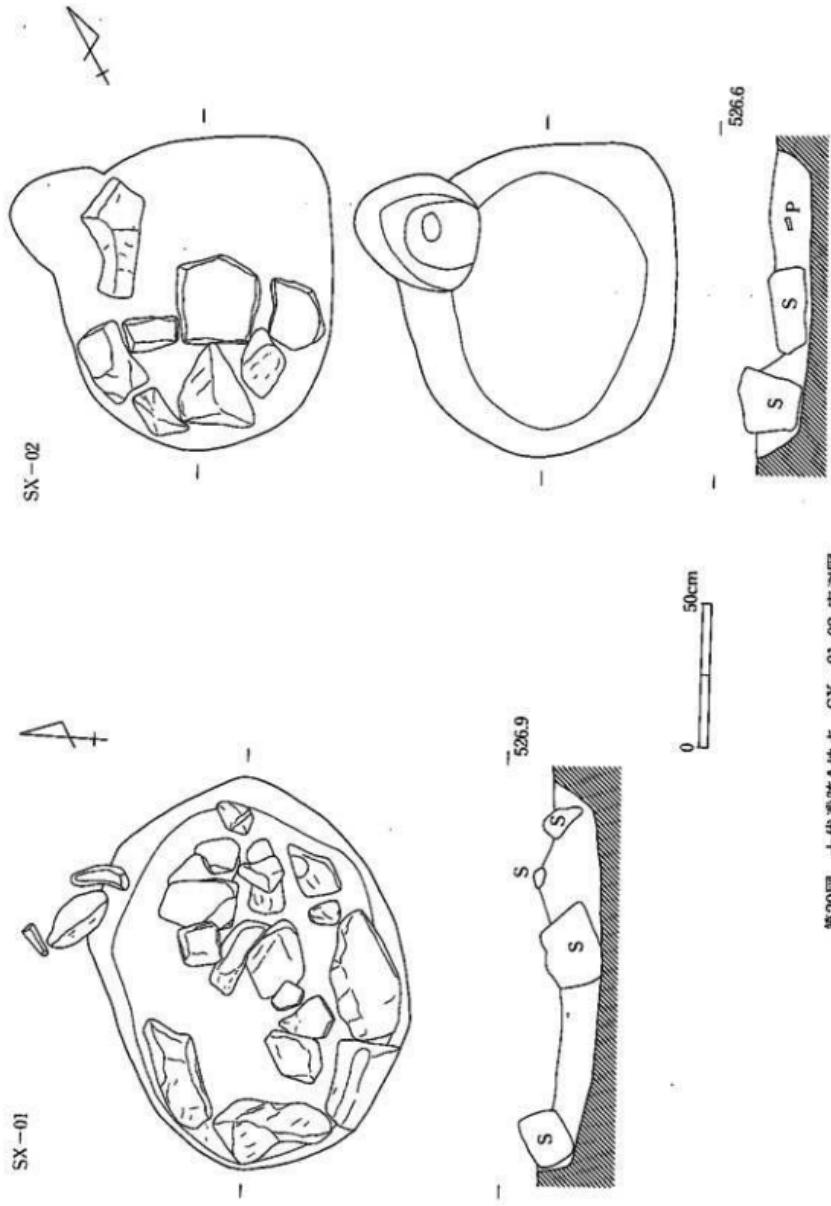
(5) S X-05 (第22図)

調査区東隅・K-59グリッドで検出された。1.2×1.1mの横円形で、深さは約20cmを測る。礫は角礫主体で、偏平礫も含まれる。土師器壺・壺・皿・須恵器壺・壺・土師質土器（内耳土器）などが少量ずつと、砥石・横刃型石器・石錐各1点が出土している。

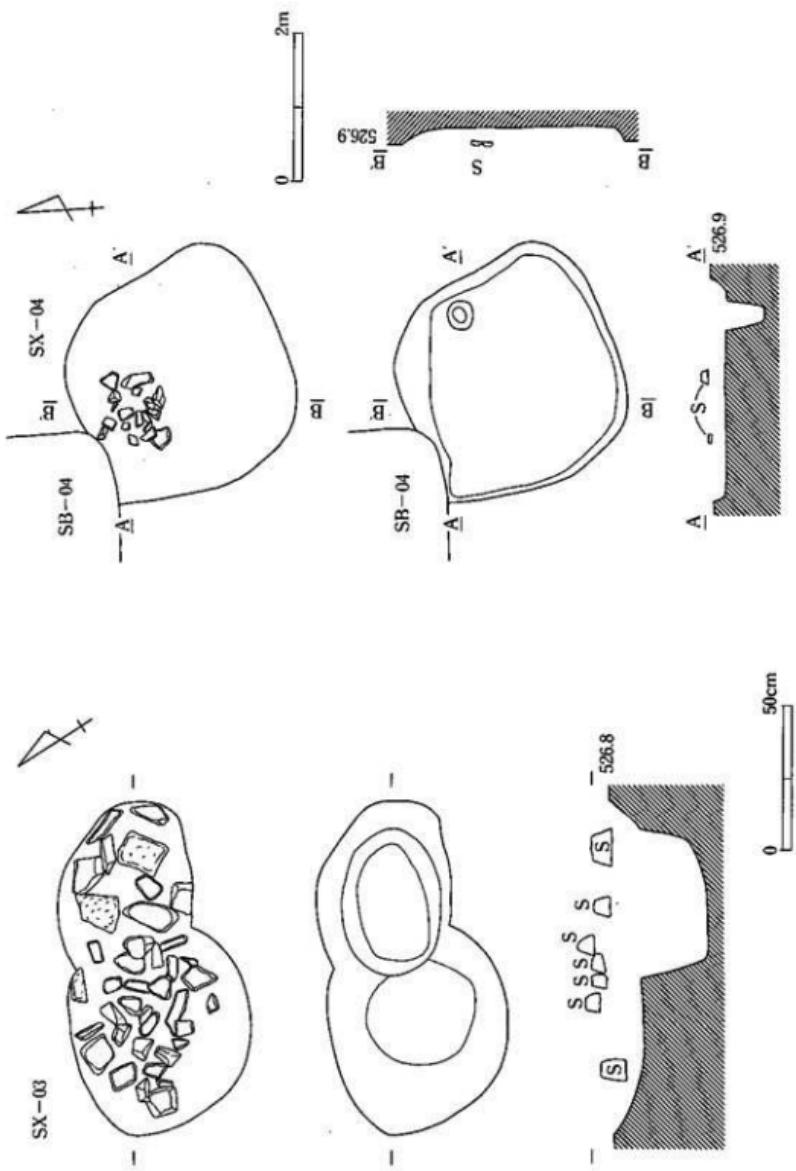
(6) S X-06 (第22図・図版8-2・3)

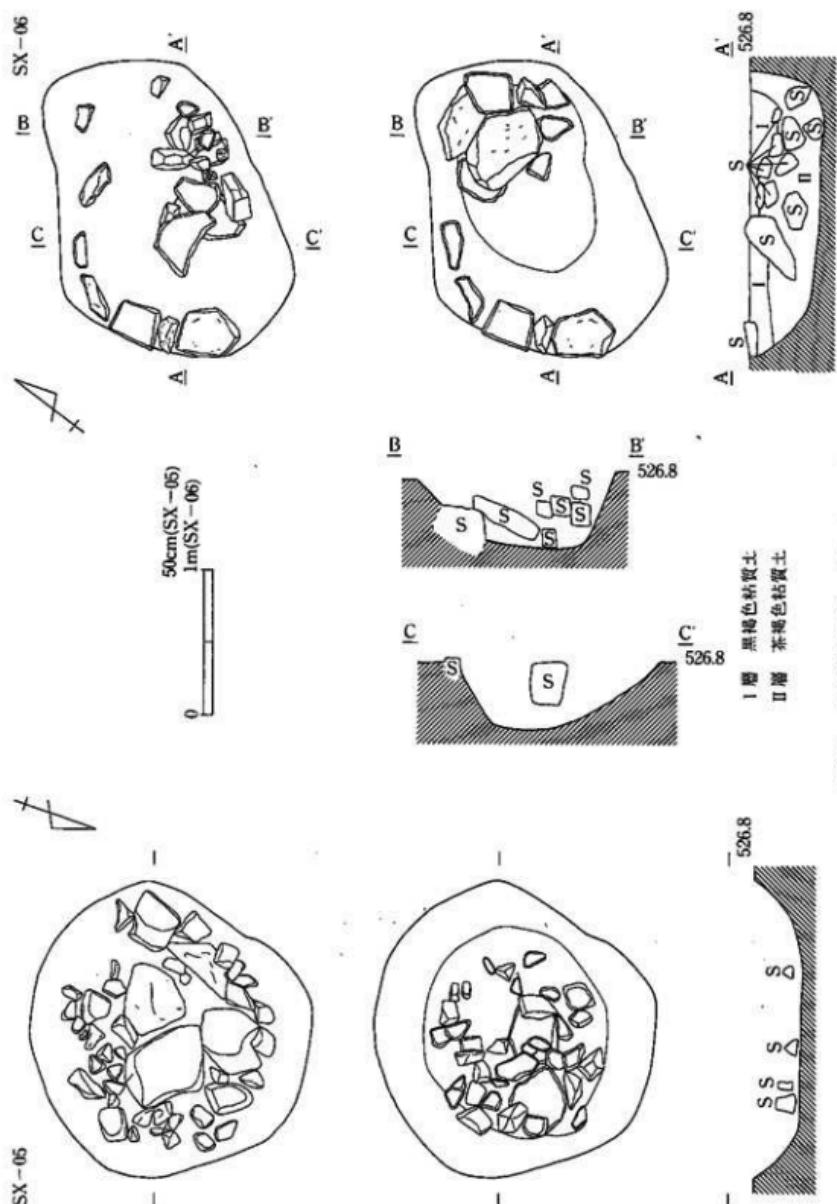
調査区中央やや西寄り、J-48グリッドで検出された。長径2.1m・短径1.8m・深さ50cmを測る大形の集石土壙で、礫もすべて大きい。壁ぞいに偏平礫を立てて並べ、内部から多くの礫が発見された。遺物は比較的多く、土師器壺・壺・須恵器壺・壺がそれぞれ20～30点、石器では石錐・搔器・剥片各1点と敲石2点が出土している。

第20图 十代道跡A地点 SX-01-02 素描图

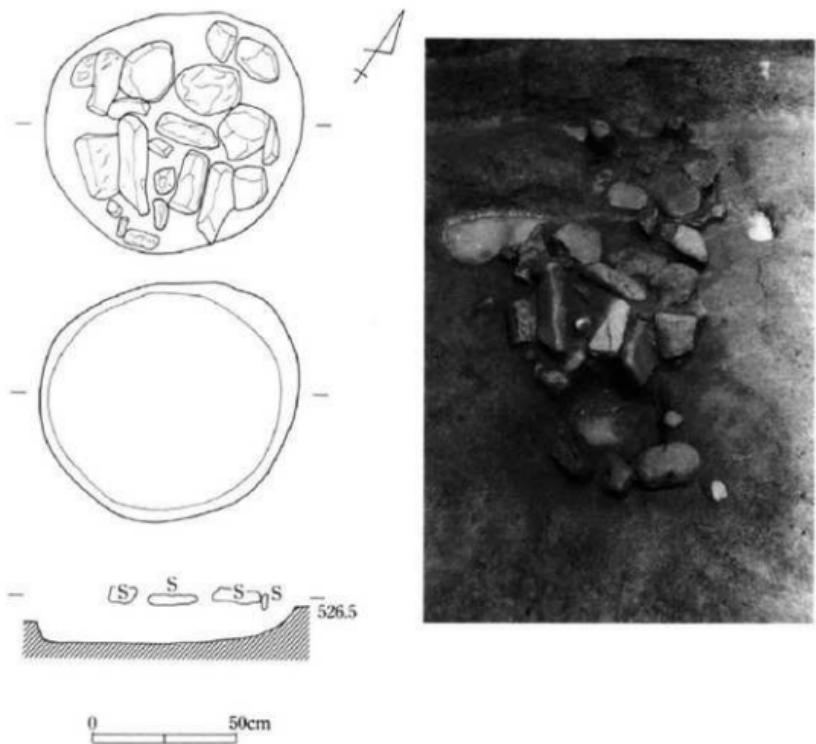


第21図 十代遺跡A地点 SX-03・04 実測図

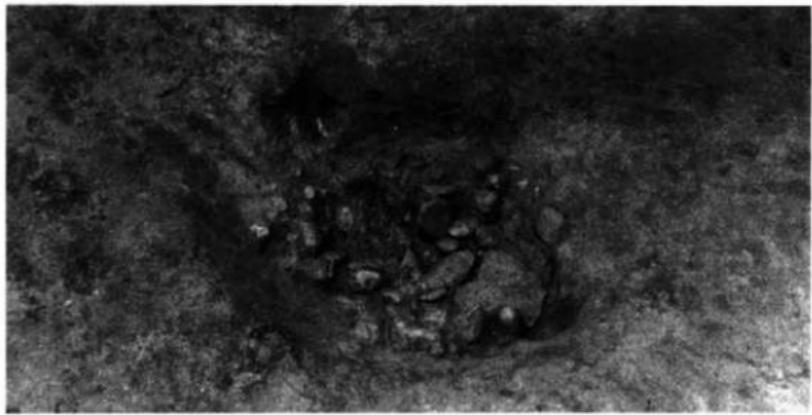




第22圖 十代遺跡A地點 SX-05-06 實測圖



第23図 十代遺跡A地点 SX-07 実測図



(7) S X-07 (第23図・図版5)

S B-08カマド南西脇・M-49グリッドにおいて発見された。角礫を主体としており、大小は様々である。直径1m程の円形に近く、土壤外にも礫がはみ出している。S B-08より明らかに新しいが、出土遺物は土師器甕・壺各1点、須恵器壺3点とごくわずかであり、明確な時代比定はむずかしい。

3. 溝状遺構

おおむね一定の幅を有し、細長く掘られたものを溝状遺構(S D)とする。

大小・長短合わせて10条の溝状遺構を検出したが、長大なS D-01を除くと、S D-03・06からややまとまった量の遺物が出土しただけで、他はほんのわずかである。

(1) S D-01・02(付図-2・図版9-1・2)

発掘調査区を北西隅から南東側へななめに分断する形で掘られている。C-44・45グリッドからL-50グリッドまで掘り上げたが、湧水・擾乱等によりそれ以上掘り進めることはできなかつた。S D-02は、C-45グリッドからE-46グリッドまでS D-01と並行して掘られているが、それ以南は合流しており、分離不可能である。合流地点までのS D-02は、幅30~40・深さ15cm程度、全長10.2mを測る。南側へゆるやかに傾斜し、断面形態はU字状を呈する。遺物は土師器3点・チップ2点が出土しただけである。

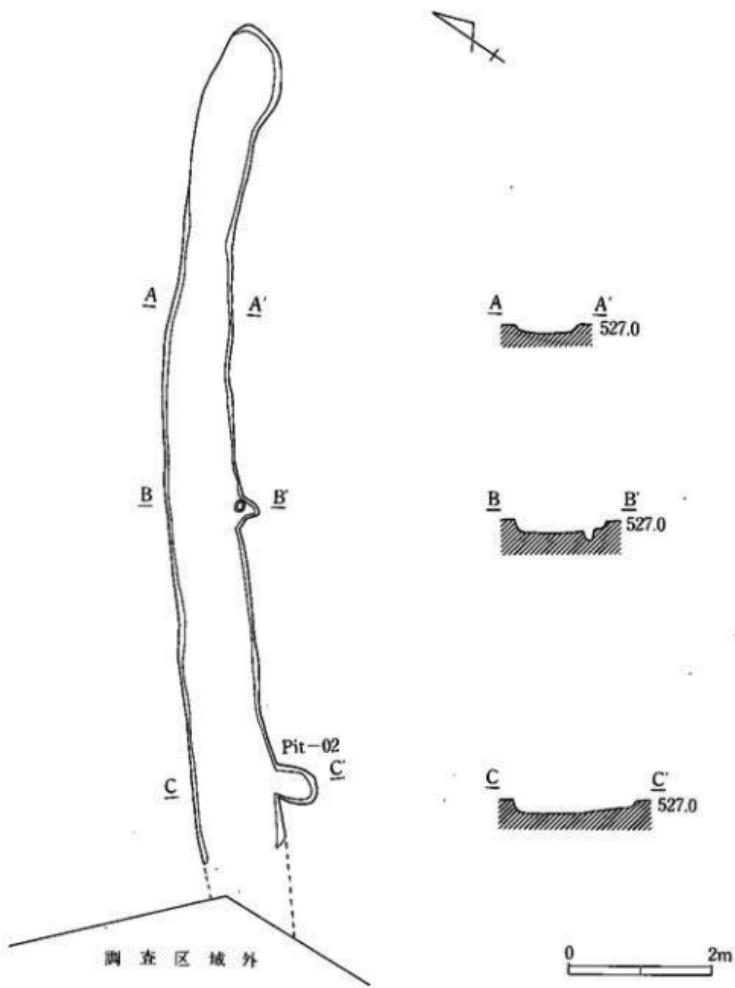
S D-01は、幅1.8~4.1m・深さ57~98cm、全長35.2mを測る。ほぼ直線状であるが、わずかに南西側へ張り出すように弧を描く。北西端と南東端の比高差は約40cmで、緩やかな傾斜である。本址は、S B-01~03を切り、S D-02・06と接している。北東壁は急傾斜で立ち上がり、底部付近に列石状集石(図版9-2)が多く見うけられる。逆の南西壁は一段あるいは二段テラス状の平坦地を有し、緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器・須恵器が多量に出土している。その他灰釉陶器・青磁1点を含む陶磁器・石器(石鐵1・磨石1・石錘2・敲石3・砥石1・チップ16)・鉄釘1点・骨片少量・馬の歯数点・炭化物などが混在している。本址が構築されたのは、S B-02・03を切っていることから平安時代前期以降で、正村屋敷から続く石垣・塙状の凹地と直交する位置関係から、中世居館址の堀として掘られたものと考えておきたい。

(2) S D-03(第24図・図版10-1)

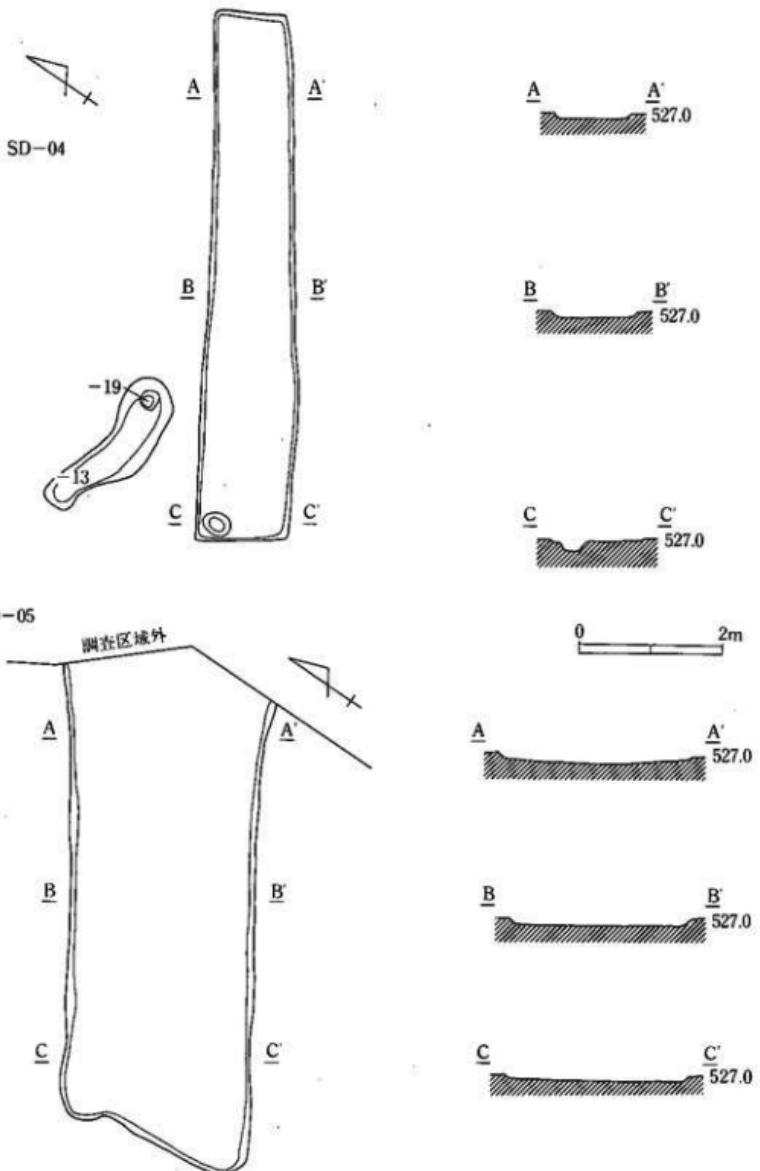
F-45グリッドからH-42グリッドにかけて掘られており、幅70~120・深さ5~12cm、全長11.4mを測る。北側へ張り出すように緩やかな弧を描く。S D-01・02と直行する位置関係にあり、S D-04~06・08とほぼ平行している。出土遺物は、土師器・須恵器が30点前後とやや多く、灰釉陶器・弥生式土器もわずかに含まれる。

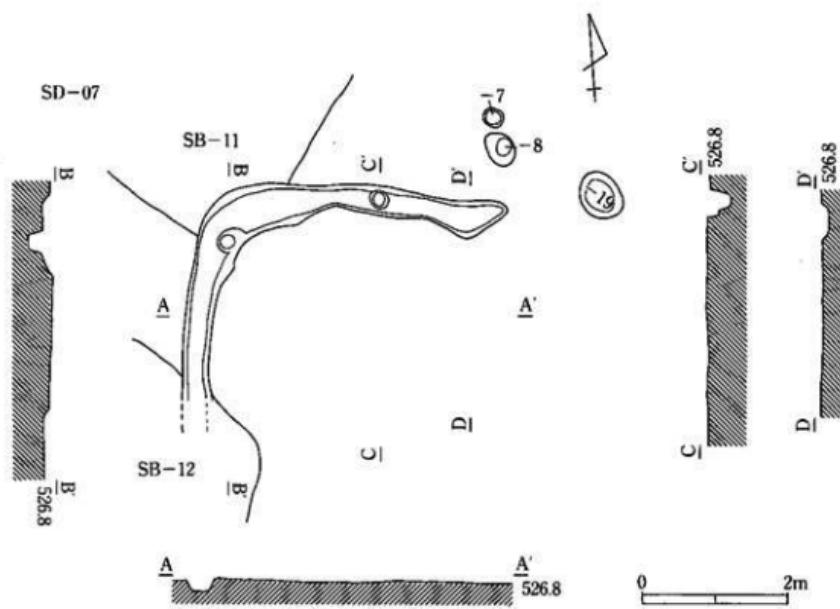
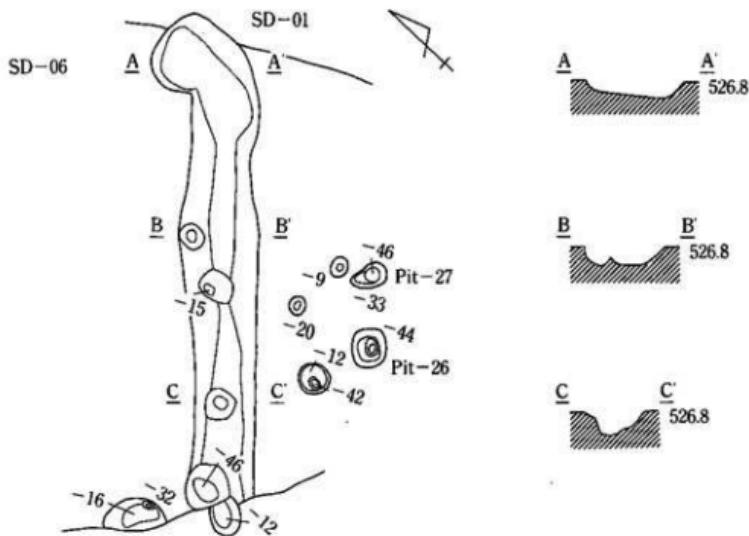
(3) S D-04・05(第25図)

S D-04の南東側壁とS D-05の北西壁が一直線で結ばれるため、同時期・同一目的で掘られた遺構と考えられる。S D-04は幅1~1.6m・深さ7~10cm・全長7.2m、S D-05は幅2.4~2.8m

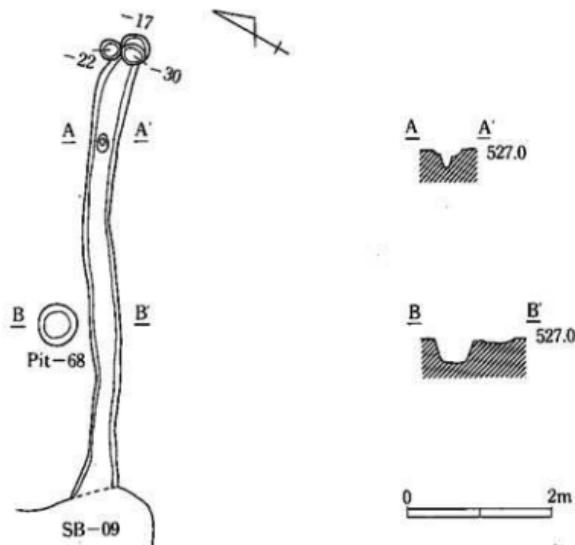


第24図 十代遺跡A地点 SD-03 実測図

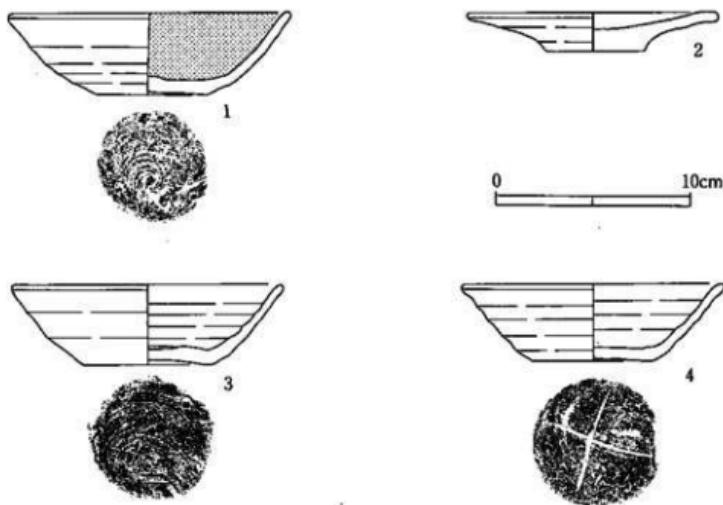




第26図 十代遺跡A地点 SD-06-07 突測図



第27図 十代遺跡A地点 SD-08 実測図



第28図 十代遺跡A地点 SB-12・14 出土土器 実測図

・深さ8~14cm・全長7.2mを測る。遺物は、土師器・須恵器・陶磁器がわずかずつと、SD-05から骨片が出土しただけである。

(4) SD-06(第26図・図版10-3)

調査区中央やや西寄り、I-K-46~48グリッドに位置する。幅1m・深さ35cm・長さ7m程で、6基のピットに切られている。遺物はやや多く、土師器・須恵器が各30点前後、灰釉陶器3点、棒状鉄製品1点が出土した。

(5) SD-07(第26図)

調査区東端・N-59~60より検出された。SB-11・12を切っており、幅40~70・深さ7~18cmを測る。L字状に屈折しており、住居址周溝とも考えられるが、SD-10につながるようでもあり、判然としない。遺物は、土師器4点・須恵器1点のみしか出土しなかった。

(6) SD-08(第27図)

SB-09を切り、L-54~56グリッドに延びている。幅40・深さ6~9cm・全長6m程でピット3基に切られている。遺物は、土師器5点・須恵器7点・陶器1点のみである。

(7) SD-09(第16図)

SB-10を切っている。幅20~45・深さ5cm前後で、全長2.1mと小規模な溝状遺構である。遺物は出土していない。

(8) SD-10(第18図・図版6-2)

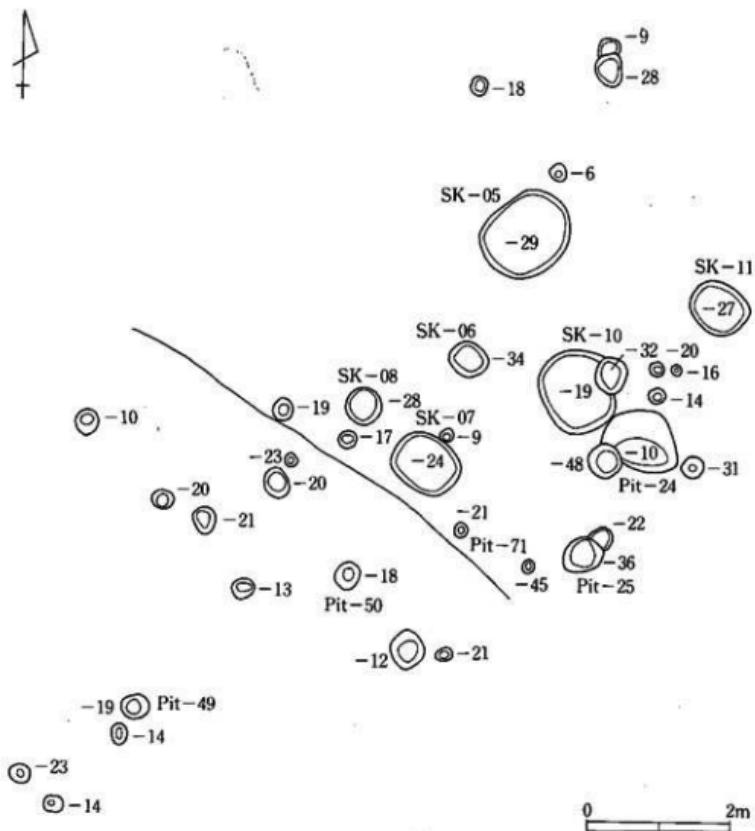
SB-13の床面より検出された。幅65・深さ10~20cm・全長2.6mと、SD-09と同様小規模である。SD-07から連続していたようにも思われるが、判然としない。遺物はSB-13と混じってしまったため、本址に伴うものの抽出はできなかった。

4. 土 壤 (第14図・第29図~第36図・図版11-1~3)

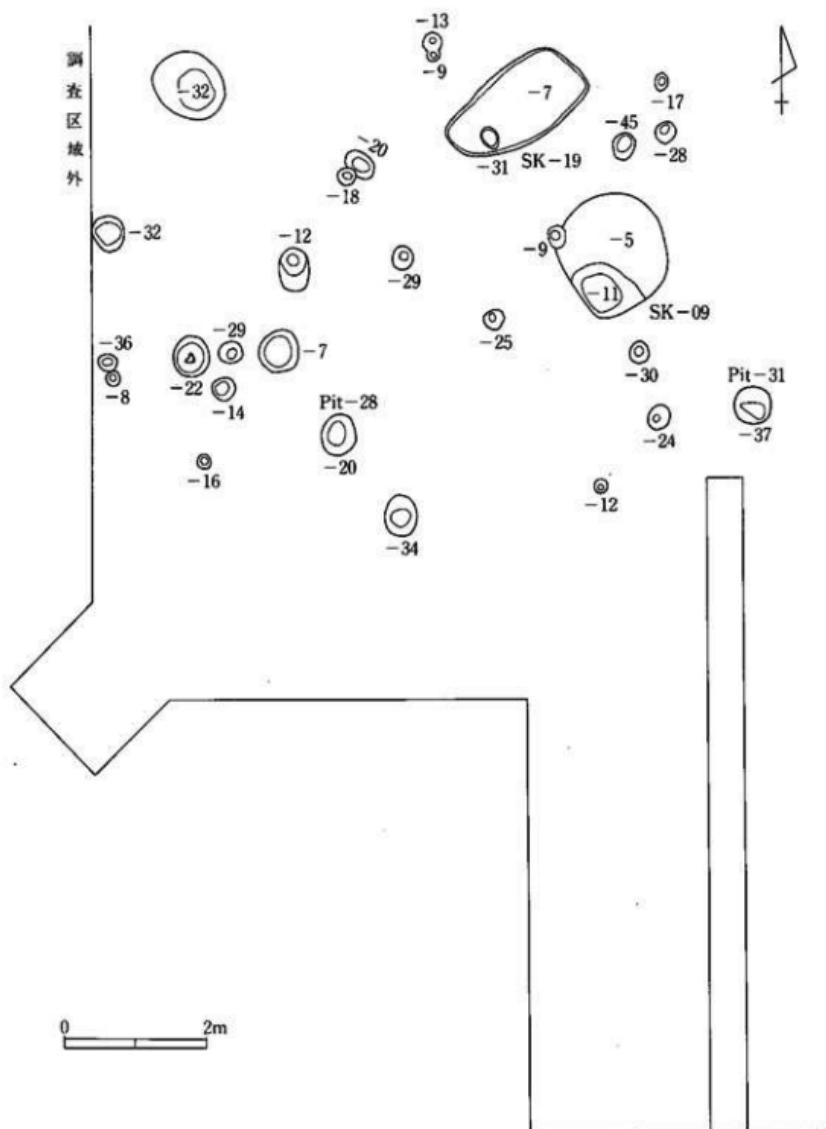
直径1m前後の円形あるいは橢円形の穴を基準として、それ以上のものを土壤(SK)とし、それ以下のものをピット(Pit)とよぶことにした。一般的に、土壤は墓・貯蔵穴等、ピットは柱穴と考えられるが、上記の分類ではあいまいな面が残る。現場での判断にもバラつきがあり、不明確な区分である点を御了解願いたい。

住居址床面で検出された土壤を除くと、22基検出されているが、SK-02・20~22の4基以外は小形で、遺物もあまり出土していない。SK-01・22からやまとまとった量の土師器・須恵器の甕・壺が出土した以外は、数点の土師器・須恵器と1~2点の灰釉陶器・石器の小破片を含む程度で、SK-02~04・07・15~18は全く無遺物であった。

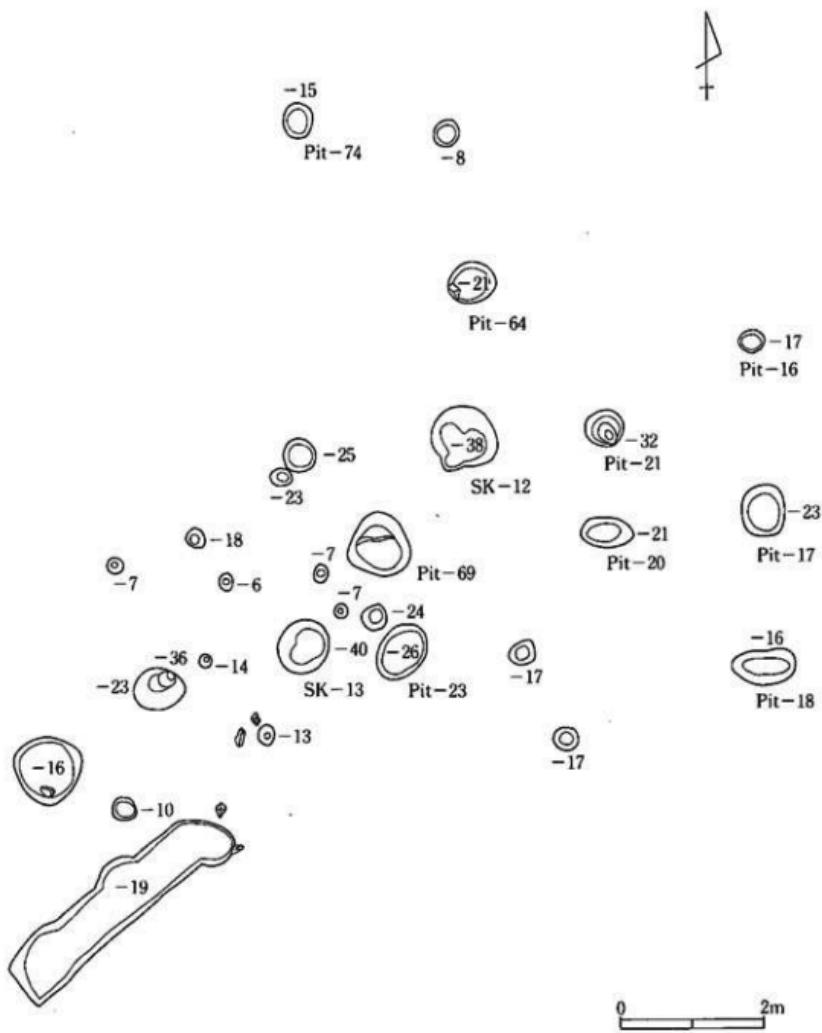
中世の堀・溝と考えられるSD-01・03・06で囲まれた区画内から、SK-01~08・10・11が検出されているが、このうちSK-05~08・10・11は近接しており、墓標と思われる疊が一つ置かれたり、炭化物・焼土等を含むものが多いことから、墓地群と考えられる。しかし、骨は出土しておらず、確定は得られていない。SK-09と19・14~17も同様な遺構であろうか。所属



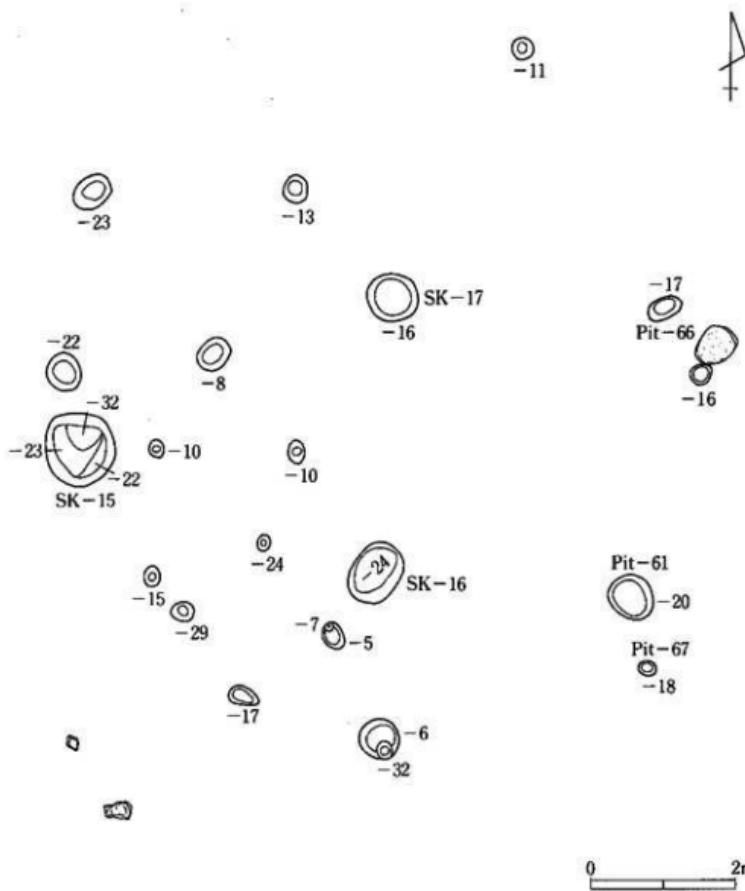
第29図 十代遺跡A地点 SK-05~08・10・11他 実測図



第30図 十代遺跡A地点 SK-09-19他 実測図



第31図 十代遺跡A地点 SK-12·13他 実測図



第32図 十代遺跡A地点 SK-15・16・17他 実測図

時期は、出土遺物から平安時代前期以降と考えられるが、そのほとんどが混入と考えられるため、中世と考えても大過なかろう。集石・配石を伴い古銭を伴出する14~16世紀の墓址とは構造的に大きく異なるため、平安時代末から中世前期の墓址と考えておきたい。

S K-20~22は、S B-08の壁を破壊して構築された連続する土壙群で、二条からなる溝址と把えることもできる。その場合、S D-06と平行する位置関係にあり、S D-06との距離はS D-06と03の間隔のちょうど半分にあたる。中世居館址をとり囲むように作られた町屋の地割りに伴う溝であったと推察することが可能である。

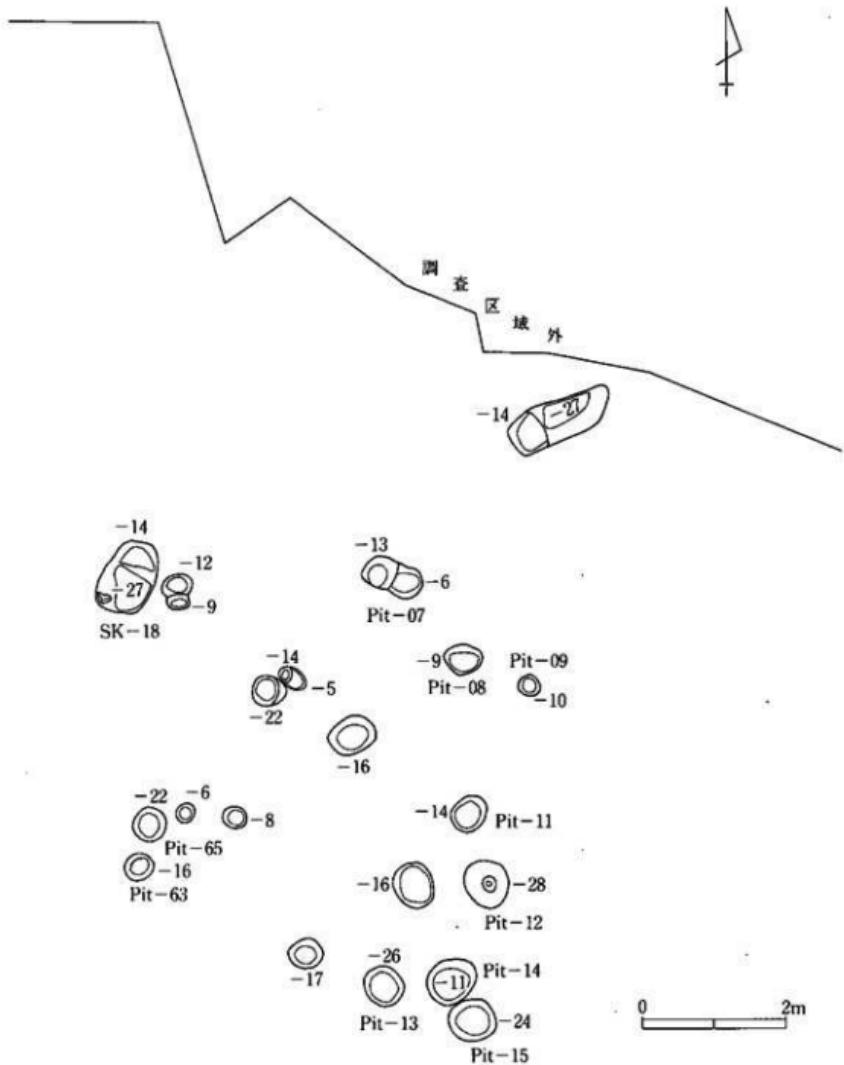
5. ピット（第29図~第39図・図版12-1・2）

単独で検出されたピットは266基で、他の遺構と切り合っているが明らかにその遺構に伴わないと思われる14基と合わせ、280基が検出された。この他に、S B-11・14等の床面で検出されたピットのうちのいくつかは、当該遺構に伴わないものもあるが、分離することは困難であるので加算しないため、総数は300基以上になる。

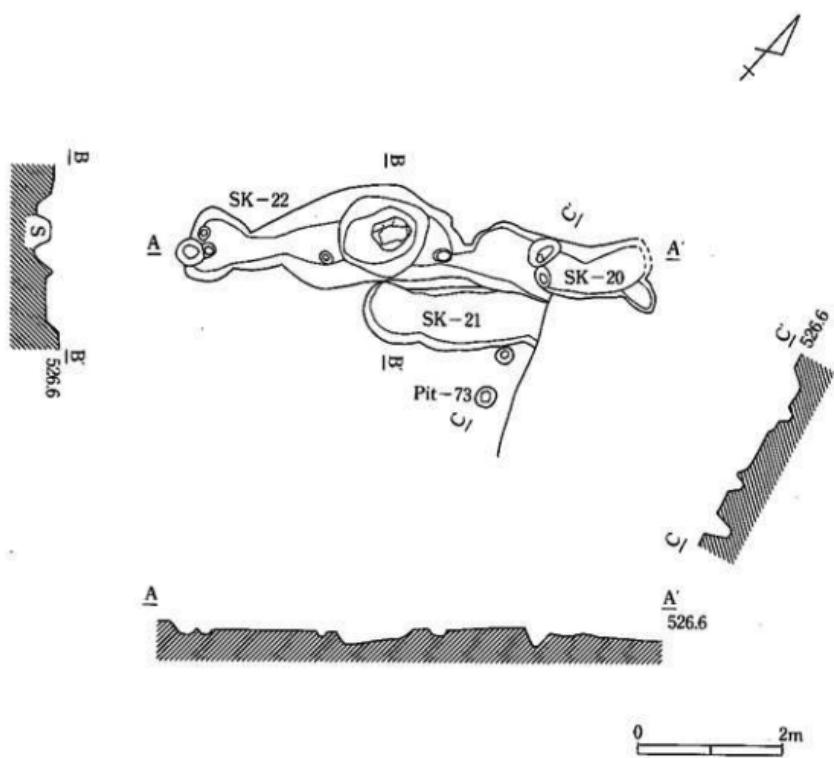
これらのうち、64基のピットから遺物が出土している。そのほとんどは、土師器・須恵器・石器などがわずかに出土しているだけで、まれに灰釉陶器・弥生式土器などが含まれているが、いずれも小破片である。Pit-03・48・52・60・62の5基からは、10点前後の土師器・須恵器が出土しているが、図示しうるものはない。

数多く検出されたピットは、水田造成により大きく削平された場所を除いた調査区のほぼ全域でまばらに分布しているが、J~M-45~47グリッドと、K~N-55~58グリッドではやや集中が認められる。前者はS B-08西側の一帯で、直径40cm前後のやや小形のピットが100基近く集中している。柱穴列あるいは掘立柱建物址として把えられそうな等間隔に並ぶピットもいくつか想定されるものの、あまりにも数が多くて確定し得なかった。もちろん、床面が削り去られて柱穴のみが残された竪穴住居址や平地式住居址などに伴うピットも、数多く含まれているだろう。後者はS B-09~11・14に囲まれた場所で、直径60cm前後のやや大形のピットが60基程集中している。S K-12・13やS B-11内Pit-6・17なども同じ種類の遺構と理解でき、やや大形の掘立柱建物が数棟あったものと思われる。

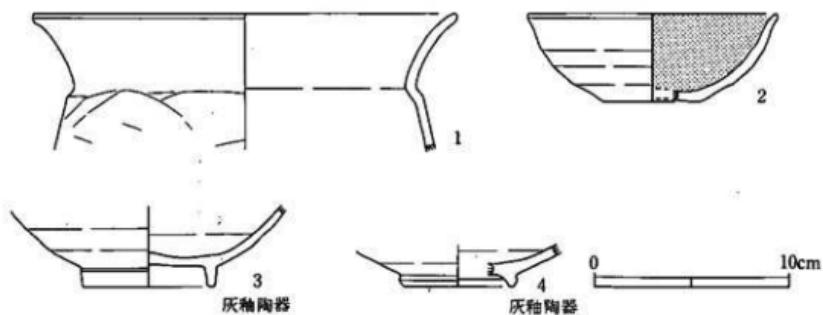
上記2地区の他で検出されたピットについても、同様の推定は可能であるが、いずれも確証を得られなかった。N-35~39・N-40~45・O-43~51・P-43~45では、遺構の検出が皆無に等しく、遺物も少なかったため、深掘りトレンチで確認をしたところ、水田造成によりすでに破壊されていることが判明した。この破壊はN-33グリッドまでは及んでおらず、土壙2基・ピット8基と、それらに伴うと思われる平安時代前期を主体とする土師器・須恵器がややまとまって出土している。この南西側には、破壊を免れた遺構・遺物が残されていると思われるが、日程・予算等に支障を来してしまうため、これ以上の調査は中断せざるを得なかった。なお、ここからB地点に及ぶ地点は地下水位が高く、放置されたままの水田が多かった。



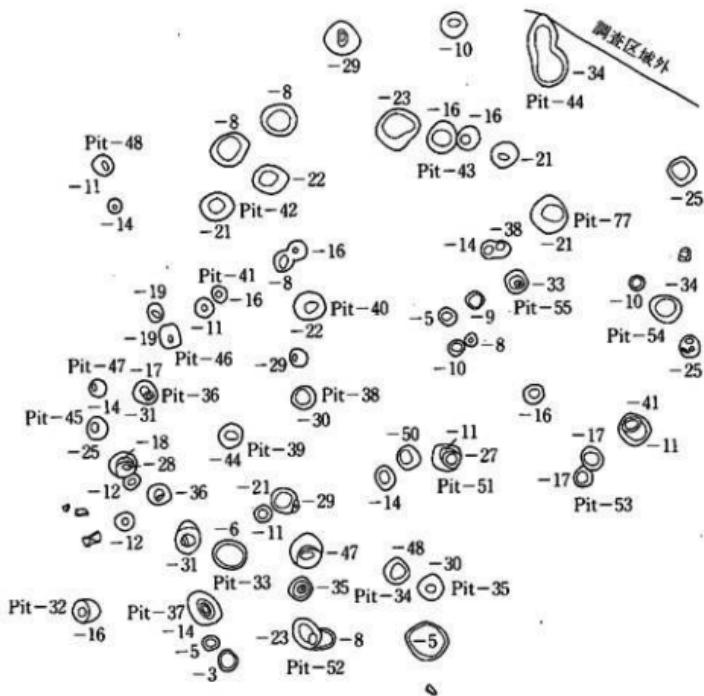
第33図 十代遺跡A地点 SK-18 Pit-07~09他 察測図



第34図 十代遺跡A地点 SK-20~22他 実測図



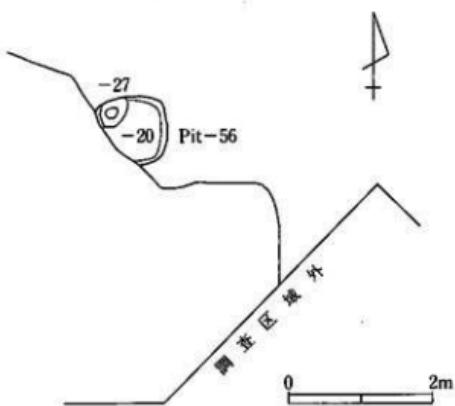
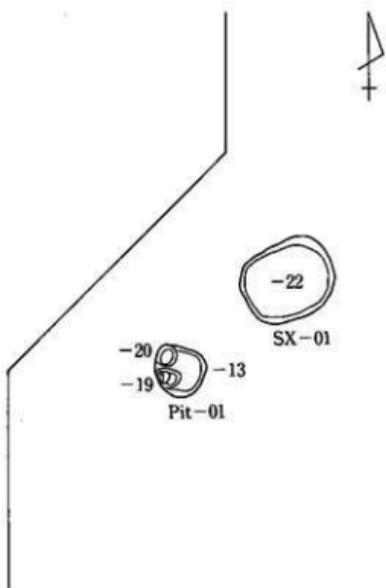
第35図 十代遺跡A地点 SD-01・SK-01他 実測図



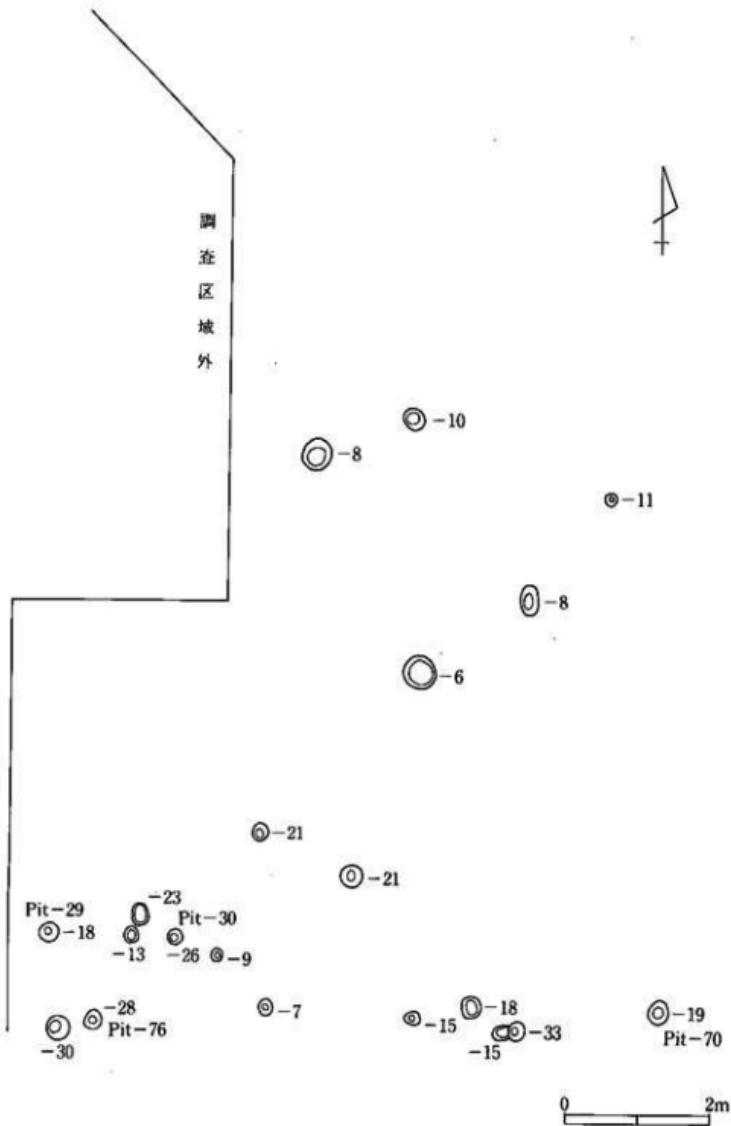
調査区域外

0 2m

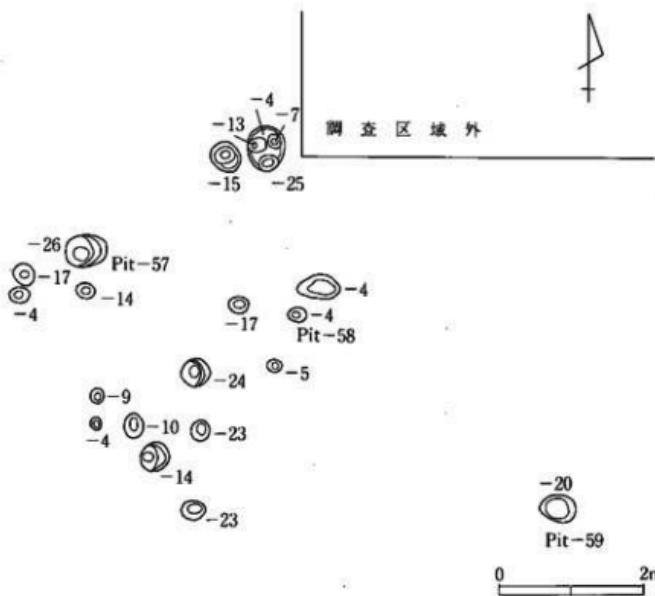
第36図 十代遺跡A地点 SK-32~48他 実測図



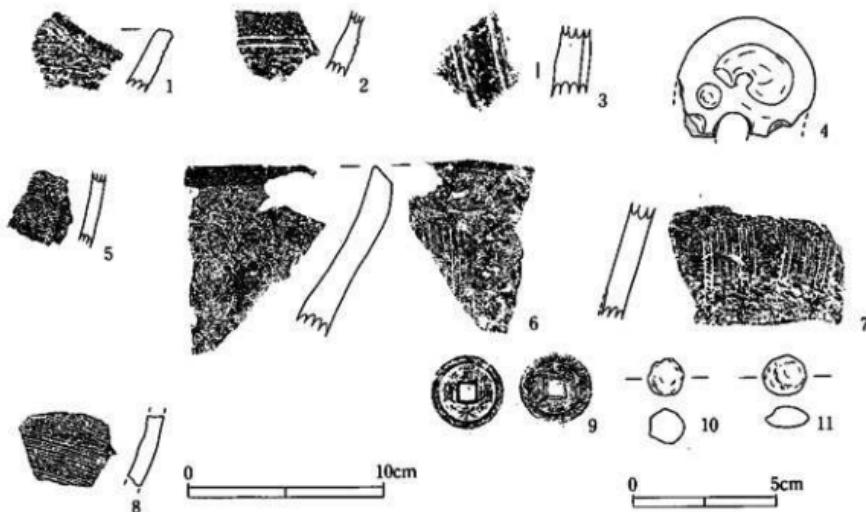
第37図 十代遺跡A地点 SX-01 Pit-01・56 実測図



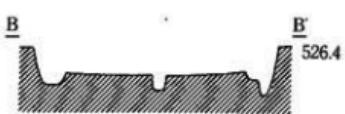
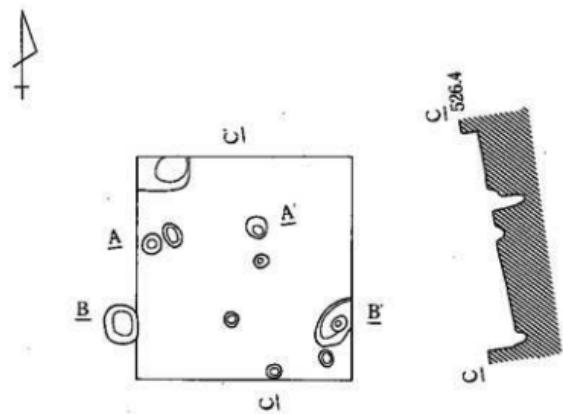
第38図 十代遺跡A地点 Pit-29・30・70・76他 実測図



第39図 十代遺跡A地点 Pit-57~59他 実測図



第40図 十代遺跡A地点 遺構外出土遺物 実測図



0 2m

第41図 十代遺跡A地点 N-33 実測図

6. 遺構外出土の遺物

A地点の発掘調査では、弥生時代後期から中世に及ぶ様々な遺構が、数多く検出されている。遺構の説明と、遺構に伴う遺物については、1~5において簡単に触れてきたが、遺構に伴わない遺物についてはここで時代順に記しておくこととする。

(1) 楠文時代（第40図1~4）

数点出土しているが、いずれもローリングを受けており、土砂と共に運ばれてきたものであろう。屋敷遺跡からの流下か、唐沢遺跡からの移動と思われる。

1・2は前期末の諸磯b式土器で、半截竹管を用いた平行沈線文を充填している。1は口縁部破片で、波状口縁を呈する。

3は中期中葉・藤内式土器で、隆線上に刻み目が認められる。隆線の上下に平行沈線文が走る。

4は、後期堀之内I式土器の口縁部耳状突起である。

(2) 弥生時代（第40図5）

弥生時代の遺構にはSB-01があり、この地に該期集落があったことは確認されている。しかし一軒のみの検出であり、集落の規模・特徴・変遷等は全く知り得ない。遺物の量もわずかで、SB-01以外からは、SK-05・06、Pit-41・43・71から各1点出土しただけで、グリッド出土点数も10に満たない。しかも小破片が主体で、図示し得たのは5のみである。後期稻清水式期の表破片で、櫛描波状文が施される。他に赤色塗彩された高壙・壇などの破片がある。

(3) 古墳時代～平安時代

古墳時代の遺構は全く確認されておらず、該期遺物もほとんど出土していない。奈良・平安時代になると、竪穴住居址を中心とした多くの遺構と、多量の遺物が発見されている。A地点での調査成果の8割以上に及ぶものと思われるが、既に記してきているため、本項では触れない。

(4) 中世以降（第40図6~11）

堀であったと考えられるSD-01をはじめとする溝状遺構と、集石土壙・土壙の一部が該期に含まれる。土師質土器はあまり出土しておらず、須恵器系土器のすり鉢（6・7）や表面に条線が施されるもの（8）などが多い。他に輸入青磁（龍泉窯系統・巻頭図版3-2）・近世陶磁器などが出土している。

金属製品では、寛永通宝（9）・火繩銃の玉と思われるもの（10・11）・鉄滓（巻頭図版3-2）・刀子（巻頭図版3-2）などが出土している。

(5) 石器・石製品（図版13-2）

石錘・敲石等のように、遺構出土の石器のうち伴出遺物であるものも含まれるが、ほとんどは混入と思われる所以、合算してその数のみを報告する。

石錘6・打製石斧1・横刃型石器2・スクレイパー1・石核6・フレイク3・チップ74・磨石7・石錐39・敲石37・砥石5・台石4・原石1、合計186点が出土している。

なお、試掘トレンチ出土の石器類は、出土地点の分離が不明であり、ここには加えていない。

第3節 B地点の調査結果

A地点とC地点のほぼ中央にあたるB地点は、平成3年度の試掘調査の結果では平面発掘調査が必要ではないとされた地点である。しかし、平成4年度の調査開始直後の試掘調査では、どのレンチからもピットが検出され、遺物の出土量も決して少くはなかった。本来であれば、A地点側で約1000m²・C地点側で2000m²程の平面発掘は必要であろうが、調査計画時には予定していないかった場所であるので、調査面積を約一割に限定して発掘調査を行うこととした。

上記の状況のため、やや大形のピットが集中して検出され、遺物の出土量も多かったTR-23周辺を調査することとした。期間短縮のため、重機（バックホー）により、検出面ギリギリまで削土し、グリッドは設定せずに検出作業を行った。（A・C地点と共通する基準杭は設定してある。）したがって、遺構内出土遺物以外は、すべて一括して取り上げた。約330m²の調査区から出土した遺物は、平安時代前期を主体とする土師器・須恵器の小破片がほとんどで、図示しうるものはほんのわずかである。この他に、石器4点（石錐1・敲石2・チップ1）・古墳時代中期の土師器高环脚部破片1点・灰釉陶器2点などが出土している。

検出された遺構はピット55基であるが、規模・形状等から4棟の掘立柱建物址が39基のピットにより想定された。やや無理に想定した面もあり、掘立柱建物址の棟数の増減もありうる。関連を把握できなかったピットが16基あり、他にもレンチで検出されたピットも多数あることから、4棟以外にも掘立柱建物址・竪穴住居址などがあったと思われるが、調査不十分のため明確にはできなかった。また、TR-31とTR-32から溝状遺構が検出され、規模・位置等から連続する溝と考えられる。

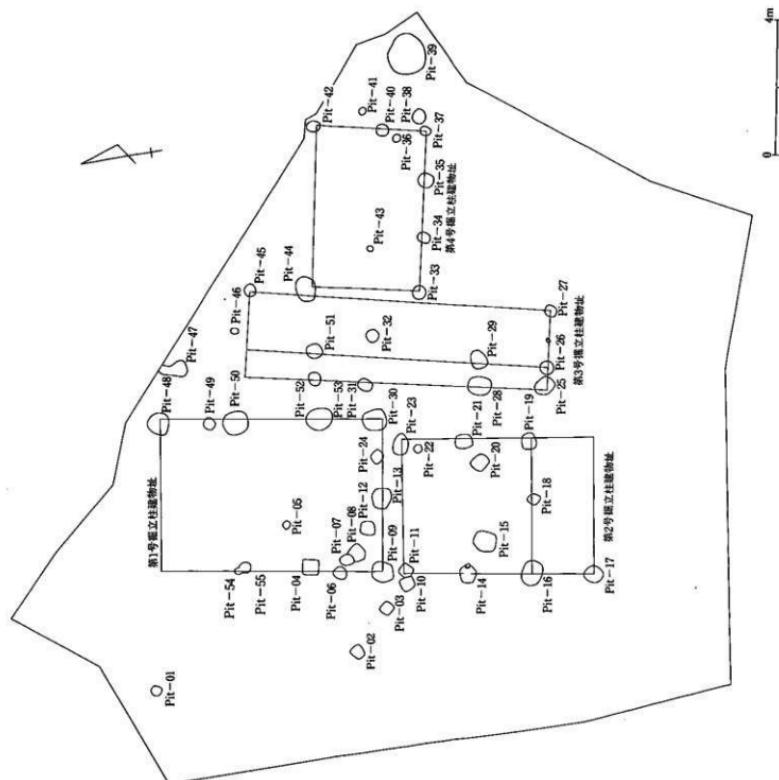
1. 掘立柱建物址

(1) 第1号掘立柱建物址（第42図・第43図）

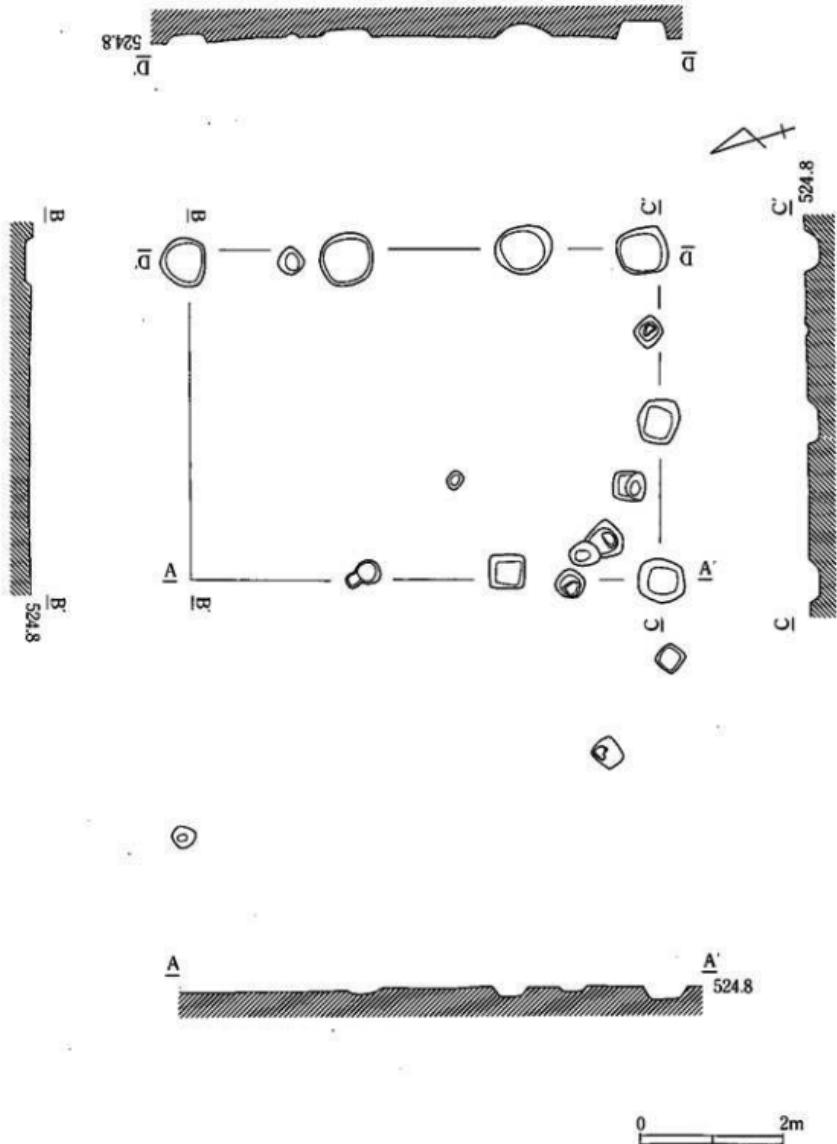
発掘調査面積は330m²とわずかであったが、その北側でやや大形のピットが集中的に検出された。その中でも特に大きく深さのあるピットで構成されているのが本址で、直径約65cm・深さ15~25cmの円形ピット6基・一边約45cm・深さ12cmの方形ピット1基（Pit-04）と小ピットからなる。柱穴内に柱底・礎板等は見られなかった。長軸方向はN-16°-Eを示し、南北3間・東西2間の側柱式である。北西隅とその東隣の柱穴は確認できなかった。Pit-54・55のみがやや小形で、深さもわずかであった。本址の伴出遺物はない。

(2) 第2号掘立柱建物址（第42図・第44図）

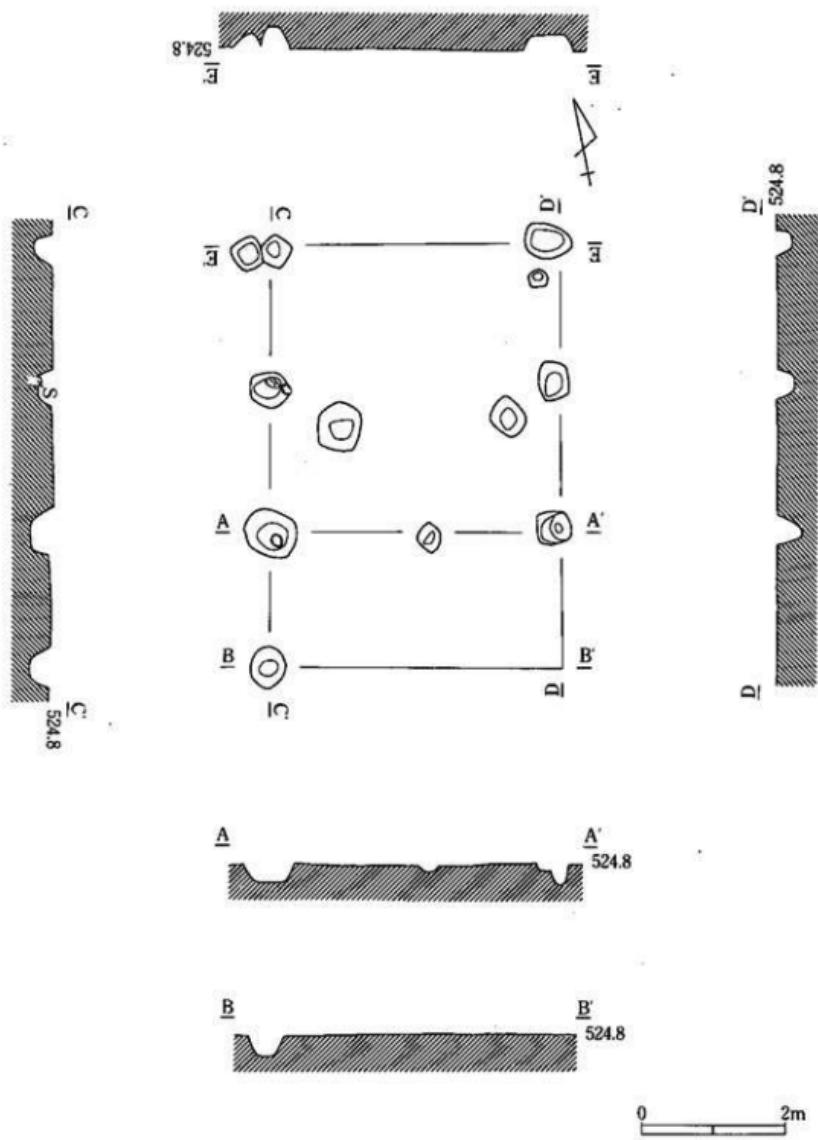
第1号掘立柱建物址の南側に隣接している。直径約40cm・深さ20~35cmの不整円形のピット7基と束柱であろうPit-15・18・20からなる。梁間・棟間ともに第1号掘立柱建物址より20cm前後短く、約2mを測る。長軸方向はN-14°-Eを示し、南北3間・東西2間の側柱式である。南東



第42図 十代遺跡B地点 遺構位置図



第43図 十代遺跡B地点 第1号掘立柱建物址実測図



第44図 十代道路B地点 第2号掘立柱建物址実測図

隅と、南・北辺の中間柱は検出できなかった。Pit-10・22は補助柱穴であろうか。遺物は、Pit-10・15・16・19-21・23から土師器・須恵器の壊・破などの破片が少量ずつ出土しているが、本址に伴うか判然としない。

(3) 第3号掘立柱建物址（第42図・第45図）

第1・第2号掘立柱建物址の東隣から検出されたが、柱穴列あるいは門であったとも考えられる。直径40cm・深さ15~25cmの円形ピットが主体であるが、Pit-28・44は直径約60~70cmと大形で、Pit-27・28は深さ40cm前後を測る。柱穴が2本ずつセットになっており、防護柵の可能性が高い。長軸方向はN-16°-Eを示し、前記2棟とはほぼ同じである。遺物は、Pit-25~27・29・31から出土しているが、ほとんど土師器・須恵器の破片が1~3点程とわずかであるが、Pit-26からは土師器8点・須恵器4点とややまとまった量の出土があった。しかし、図示しうるものや本址に伴う出遺物と言えるものはない。

(4) 第4号掘立柱建物址（第42図・第46図）

調査区の東側から検出されている。直径30~40cmと小形円形ピットのみであるが、深さは18~37cmと全体的に深い。Pit-40のみが例外的に浅く、ピット内の偏平礎下面で9cm・上面で3cmしかない。北辺は両端のピットしかなく、西辺の中間のピットも検出されなかつたが、東西3間・南北2間の剛柱式であろうかと思われる。Pit-36・38・41・43と本址との関連は不明である。遺物はPit-34・35・(36)・37から、土師器・須恵器の小破片が1~3点出土しているだけであり、これらが本址に伴うものか流れこみかはっきりしない。なお、主軸方向は他の3棟とはほぼ90°異なり、S-76°-Eを示している。柱間は1.6m前後($\times N$ 倍)で、第1号・第2号掘立柱建物址よりひとまわり小さい。

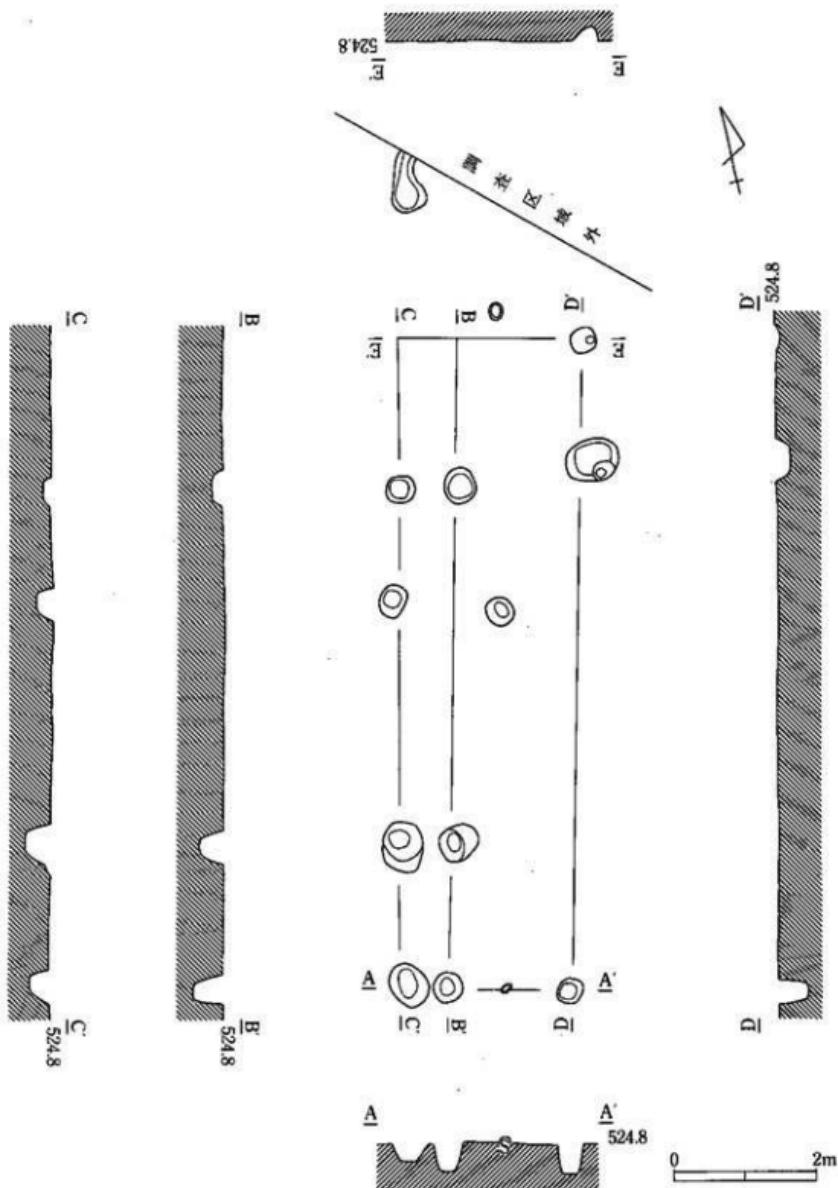
2. ピット

掘立柱建物址の柱穴・補助柱穴・束柱柱穴と把握された39基以外に、16基のピットが検出されている。このうち、調査区東端で検出されたPit-39は、東西120cm・南北110cmの楕円形プランを呈し、深さ15cmを測る土壤であり、上面に数個の角礎が置かれていたため、集石土壤としてとらえておきたい。

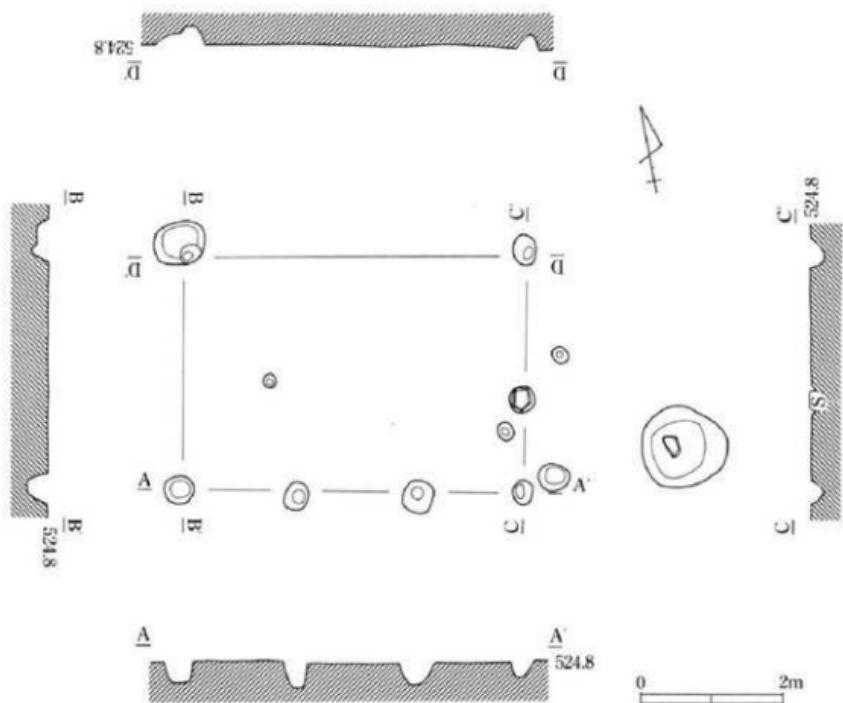
Pit-47は、2つのピットが連結したものと考えられ、第3号掘立柱建物址西辺の延長線上にあることから、関連ある柱穴と考えられる。

Pit-02・03・12・20・24は、一辺30~40cm前後の正方形プランを呈するピットであるが、他遺構との関連は把握できなかった。

遺物が出土したピットは、Pit-24・(36)・41・43・47であるが、Pit-41から土師器3片・須恵器2片出土した以外は、土師器あるいは須恵器の破片いずれか1片出土しただけであり、覆土からの流れこみか、振削時の混入と思われる。



第45図 十代遺跡B地点 第3号掘立柱建物址実測図



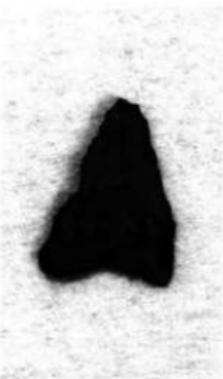
第46図 十代遺跡B地点 第4号掘立柱建物址実測図

3. 遺構外出土の遺物

B地点の調査において出土した遺物の量は、あまり多くはなかった。これは、一帯が水田地帯であり、開田時の造成で遺物包含層が削平されてしまっていることと、調査期間が短かったため、重機で検出面直上まで削土したことによる。また、検出された遺構のほとんどが柱穴であったことも大きく影響している。

遺物の大半は、十代遺跡A地点・C地点の主体時期である平安時代前期の土師器・須恵器の小破片で、わずかに灰釉陶器を含む。いずれも図示し得なかった。

石器は、粘板岩製の無茎石錐（右写真）1点・敲石2点・チップ（Pit-27出土）1点の4点のみである。



十代遺跡B地点出土の石錐

第4節 C地点の調査結果

深井地区における今回の発掘調査で、最初に着手した十代遺跡C地点において出土した遺物は、縄文時代以降各時代に及び、特に多くの時期に亘り、バラエティーに富んでいる。時代順に主なものを列記すると、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器、石器・打製石斧・磨製石斧・横刃型石器・磨石などの縄文時代の石器類、弥生時代中期・後期の土器、古墳時代前期・中期の土器類、古墳時代に属すると思われる管玉、奈良～平安時代の土器類、須恵器・灰釉陶器、平安時代に属すると思われる鉄製刀子・釘・鉄錠、中世以降の青磁・陶器類・古銭などが出土している。

しかし、検出された遺構のほとんどが平安時代前期に属し、土壤の一部に古墳時代前期～中期の遺構が含まれる程度である。おそらく、平安時代前期の遺構によりそれ以前の遺構はほぼ全部破壊されてしまったのである。いずれにせよ、この地が長期間に亘り繰り返し生活の場になつたことは確実であり、良好な生活環境に恵まれていたと言えよう。

検出された遺構は、竪穴住居址6軒・掘立柱建物址2棟・柱穴列3基・土壤40基・溝状遺構3条・ピット165基・旧河道2であり、約900m²という調査面積の割には多くの遺構が発見されている。調査し得なかつた周辺の約2000m²にも様々な遺構が残されていたであろうが、これ以上の調査は不可能であった。試掘調査結果の判断ミスが悔やまる。

調査区は、第2節で既に記したとおり3mグリッドであり、A地点と同様北から南へA・B・C…と付し、西から東へ1・2・3…とした。なお、A・B・C3地点のグリッド設定及び基準杭の測定は、光波距離測機を用いて行った。

1. 竪穴住居址

(1) SB-01(第48図・第52図1～3・図版16-1)

発掘調査区東端近くのK-14～15グリッドよりカマドと北東壁が検出された。南西側は破壊が進み、遺構検出作業時に貼り床が発見される程で、当然壁は確認できなかった。Pit-26・27に南東壁が切られており明確ではないが、北東壁・貼り床の状況から、一辺4.2m程の正方形プランを呈していたと思われる。壁高は10cm前後とわずかであるが、ほぼ直に立ち上がる。

床はほぼ全面に貼り床が認められ、硬くしまる。東コーナー側に3基のピットと、北西壁側に1基のピット・北コーナーに80×70cmの土壤が検出されている。Pit-1・4は柱穴と思われるが、他は不明である。カマドは、北東壁のほぼ中央から焼土が検出され、数点の遺物・偏平碟がその脇から出土したため、その痕跡のみを確認するに留まった。

遺物は、カマドを中心に土器無高台壺(内面黒色)・小形甕・須恵器無高台壺・甕・灰釉陶器碗などが出土している。これらの所属時期から、平安時代前期(9世紀後半)の住居址と考え



第47図 十代遺跡C地点 遺構位置図

られる。この他に、チップ1点が出土している。

(2) SB-02 (第49図・第52図4~6・図版16-2)

SB-01の西隣・K~M-11~13グリッドにおいて、ほぼ完全な形で検出された。一辺5.0~5.3mの正方形プランを呈し、北壁の一部でSB-05と重複している。掘り進めている段階ではSB-05の存在は確認されていなかったが、北壁寄りの床面上10~15cmより堅緻な平坦面が検出され、その存在が判明した。したがって、SB-02が埋まっているからSB-05が構築されており、固化は逆を思わせるが、遺物からも時間差が確認された。壁高は20~10cmを測り、北側ほど高く、ほぼ直に立ち上がる。

床はほぼ平坦であるが、貼り床の確認はできなかった。ピットは2基のみで、中央やや北東寄りと南コーナーから検出された。西コーナー近くに直径30cm程の平坦礫が床面よりやや高い位置に据えられており、柱の礫石であったと考えられる。カマドは確認できなかったが、南東壁の中央部にわずかな凹凸があり、周囲から焼土・炭化物が出土していることから、ここにカマドがあつたものと思われる。主軸方向はN-60°-Wを示し、他の住居址と約90°異なる。

遺物の出土量は比較的多く、土師器無高台壺（内面黒色）・武藏型長胴甕・小形甕・須恵器高台付壺・無高台壺・壺蓋・甕・壺などが主体を占める。このことから本址は平安時代前期（9世紀前半）に属すると思われる。また、弥生時代後期～古墳時代前期の土器および土師器甕・壺・高壺などもまとめて出土しており、本址構築前に該期の遺構がこの地にあったようである。石器は砥石・石臼・横刃型石器・多凹石が各1点と敲石2点・チップ7点が出土している。

(3) SB-03 (第49図・図版17-1)

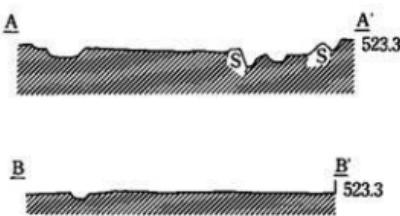
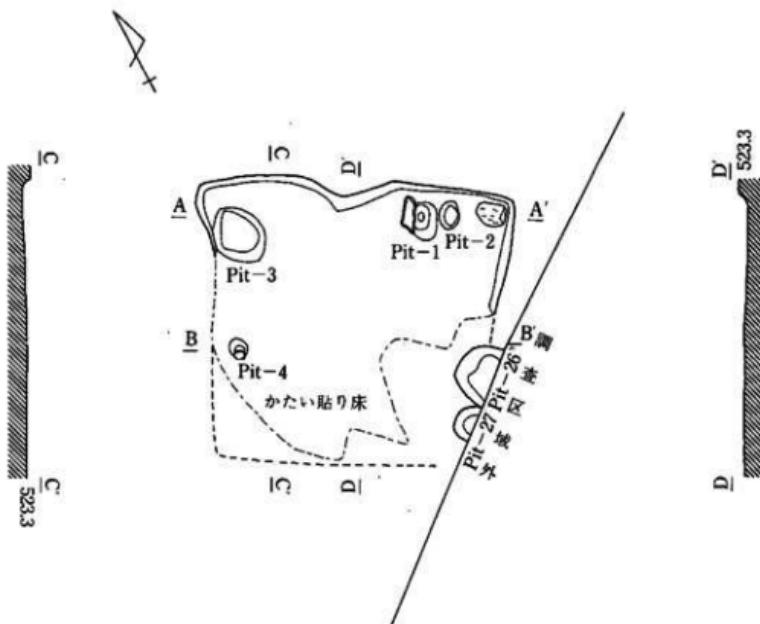
SB-02とSB-04の中間部・M-12グリッドよりカマドの痕跡と壁の一部が検出された。主体部のほとんどは、水田造成により破壊されている。残存している壁は5~10cmとわずかで、カマドも構築礫・焼土・炭化物が集中して検出された程度である。

カマドの構築礫などと共に、須恵器甕・壺の大破片と把手部破片がまとめて出土している。他に土師器高台付壺・無高台壺（内面黒色）・武藏型甕・須恵器壺などの小破片がわずかに出土した。奈良時代末～平安時代初頭に位置付けられよう。

(4) SB-04 (第50図・図版17-2)

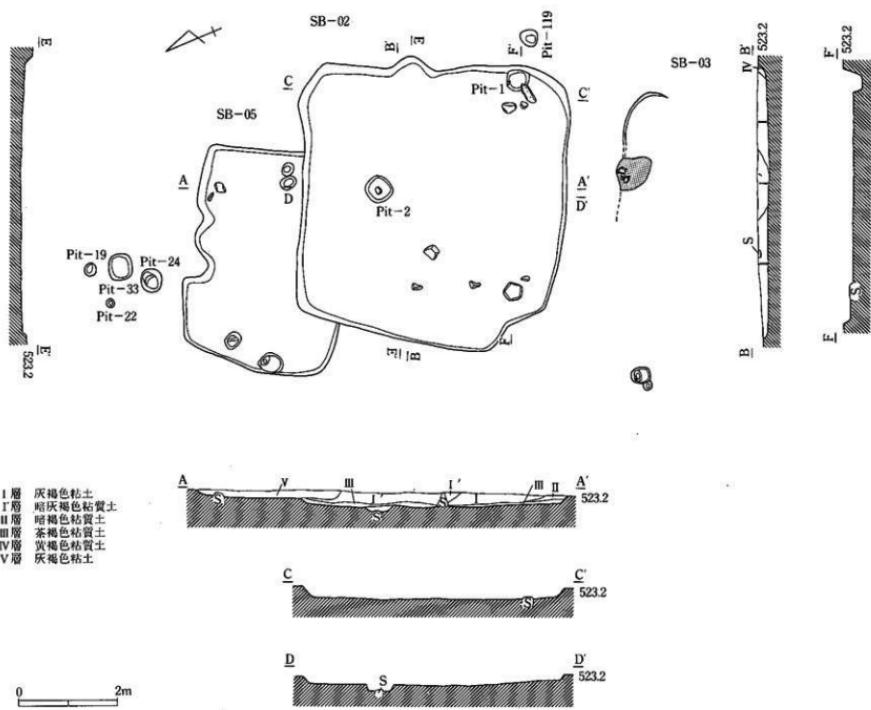
調査区南端・N~P-9~11グリッドにおいて、ほぼ完全な形で検出された。南コーナーから南東壁にかけてわずかに破壊を受けているが、長軸5.4~5.7m・短軸4.6~5.0mの長方形を呈していたと思われる。壁高は5cm程度しかなく、北東壁の一部では確認できなかった。長軸方向はN-38°-Eと他の住居址よりわずかに東側寄りである。

床はほぼ全面に貼り床が認められるが、北側を中心に擾乱により破壊されている場所があり凹凸が著しい。ピットは7基検出されているが、Pit-1~4・6が本址の柱穴と思われる。カマドは、北東壁上のピット及び周辺のピットがその痕跡と思われ、これらの穴に抽石・支脚等を埋設したのであろう。周辺から焼土が検出された。



0 2m

第48図 十代遺跡C地点 SB-01 実測図



第49図 十代道路C地点 SB-02-03-05 実測図

遺物はあまり多くなく、土師器無高台壺（内面黒色）・長胴甕・須恵器無高台壺・环蓋・突帯付四耳壺・甕・灰釉陶器壺破片などが出土しており、平安時代前期の住居址である。石器では、編み物用に使用されたと思われる石錐20個が、西コーナー周辺からまとまって検出された他、石錐2・敲石2・チップ7も出土している。

(5) SB-05 (第49図・第52図・7~8・図版17~3)

SB-02の北側・J~K-11~13グリッドより検出された。既に記したとおり、SB-02埋没後に本址が構築されているが、SB-02を先に完掘してしまったため、南側の壁は確認できなかった。カマドは、北東壁の中央部から痕跡が検出されている。カマドのある壁が長軸で、3.9~4.4m・短軸は3.1mの長方形プランを呈し、主軸（短軸）方向はN-30°~Eを指す。壁は15cm前後で、北東壁は緩やかに他は直に立ち上がる。

床には貼り床が施され、ほぼ平坦で堅緻である。ピットは4基されているが、このうちPit-4はSB-02の壁外柱穴と思われる。カマドは袖の芯に礫・土器片などを用いず、粘土のみで作られており、裾部のみが残されていた。その脇から火床部が確認された。

遺物の出土量は少ないが、器種はバラエティーに富んでいる。土師器高台付壺・無高台壺・長胴甕・ロクロ甕・皿・須恵器高台付壺・無高台壺・甕あるいは壺・灰釉陶器長頸壺・水晶原石1点などが出土している。これらの所属時期から、本址は平安時代中ごろ（9世紀末~10世紀前半）に属すると思われる。この他に、弥生時代後期~古墳時代前期の甕・高壺などが出土している。

(6) SB-06 (第51図・図版18-2)

本址は、Pit-124とその東隣のピットを掘り下げていく段階で、この2基のピットがカマドの痕跡であることが判明し、その存在が確認された住居址である。したがって、床・壁は不明確であり、出土遺物もない。

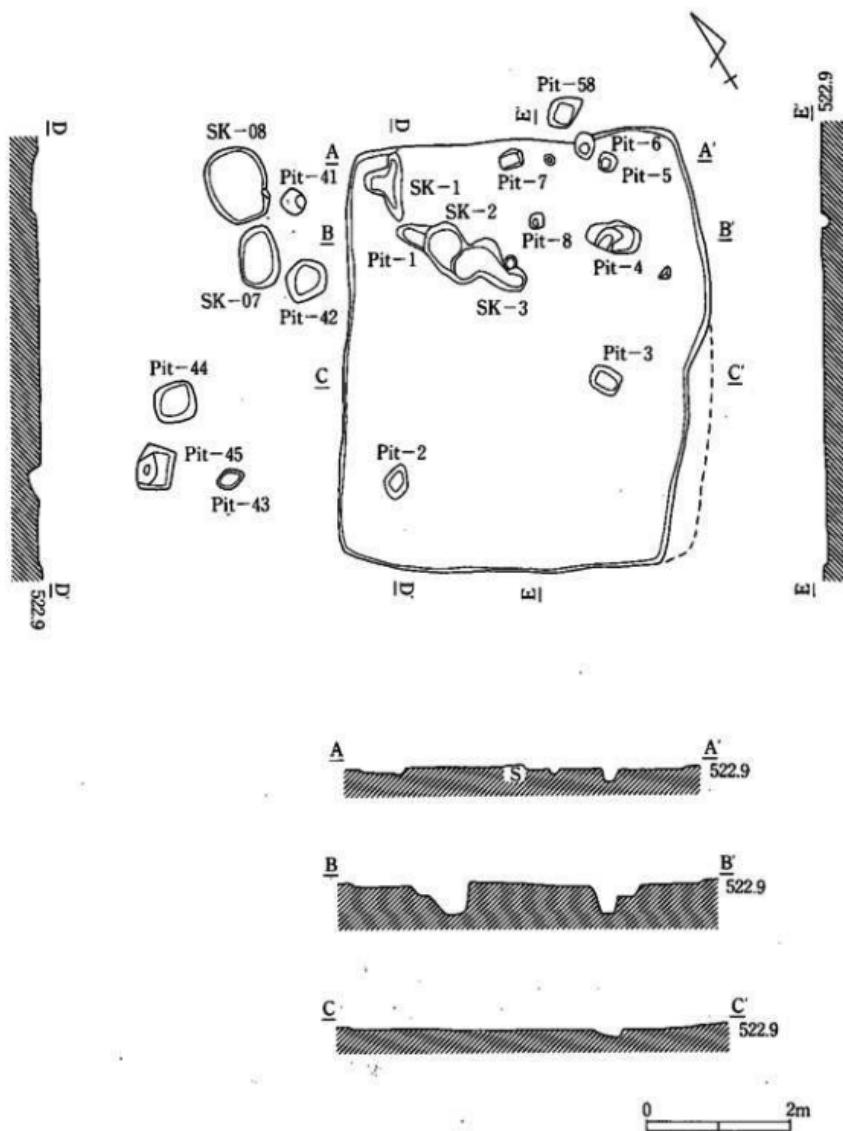
2基のピットには、それぞれ偏平碟が1個ずつ差し込まれており、石芯粘土カマドであったことがわかる。その中間には支脚を埋設したと思われる小ピットがあり、一帯には焼土が認められた。このカマドの痕跡から遺物は出土しておらず、本址の所属時期は不明であるが、SK-24を本址の貯蔵穴と考えると、平安時代中ごろに位置付けられる。

2. 堀立柱建物址

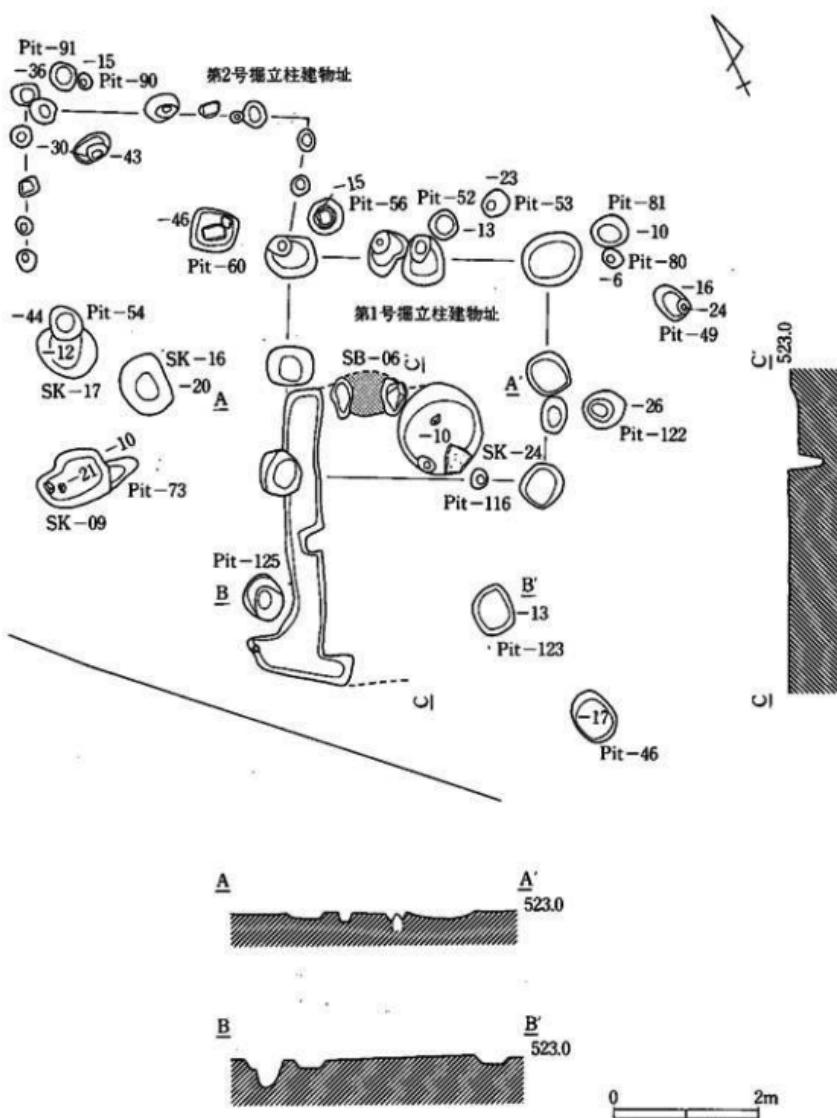
(1) 第1号堀立柱建物址 (第53図・図版18-2)

K~M-7~9グリッドにおいて、SB-06の推定プランと重複して確認された。Pit-47・48・51が直径60cm、Pit-50が70×80cmの円形ピットであるのに対し、Pit-57・59・117は一辺60cm程の方形ピットである。深さは15~30cmを測り、方形ピットがやや深い。

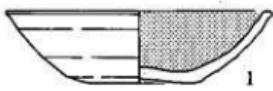
確認できたのは2間×2間のみであるが、さらに広がる可能性がある。柱穴内に柱痕・礎板等は見られず、遺物も土師器・須恵器の小破片が少量出土しているだけである。なお、Pit-48からは何も出土しなかった。



第50図 十代遺跡C地点 SB-04 実測図



第51図 十代遺跡C地点 SB-06 実測図

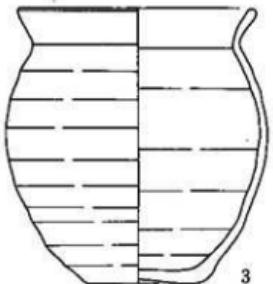


1

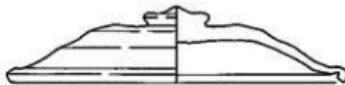


2

灰釉陶器

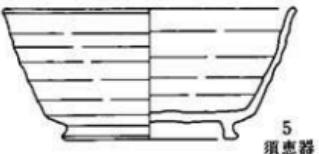


3



4

須恵器



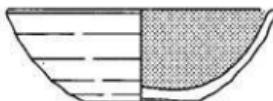
5

須恵器

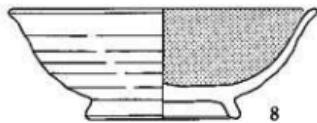


6

須恵器



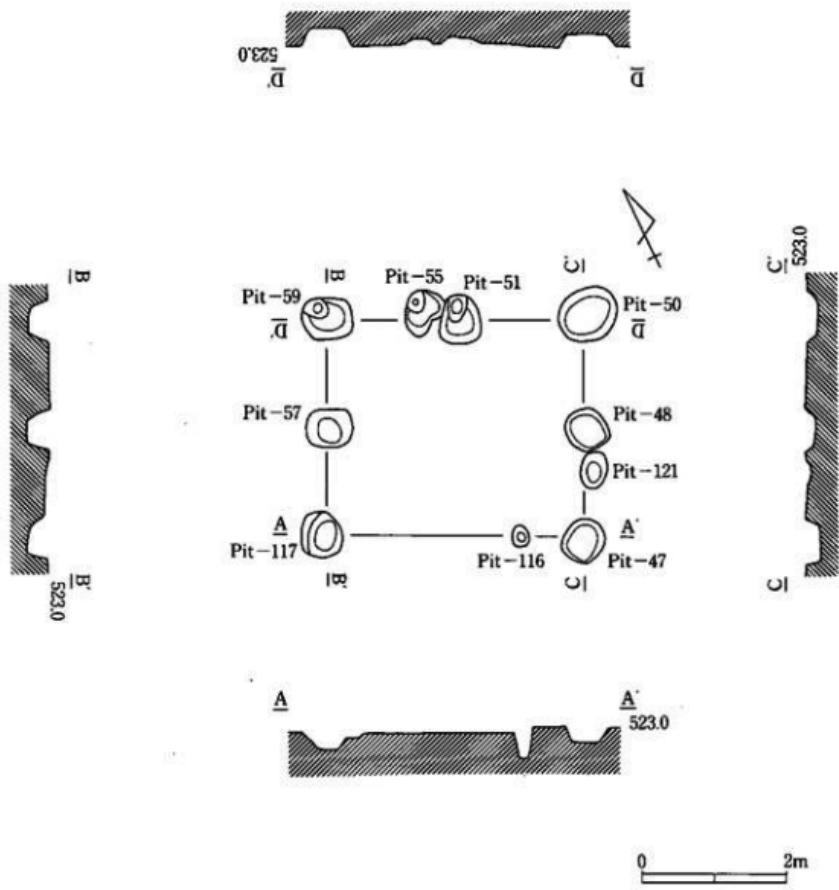
7



8



第52図 十代遺跡C地点 SB-01・02・05 出土土器 実測図

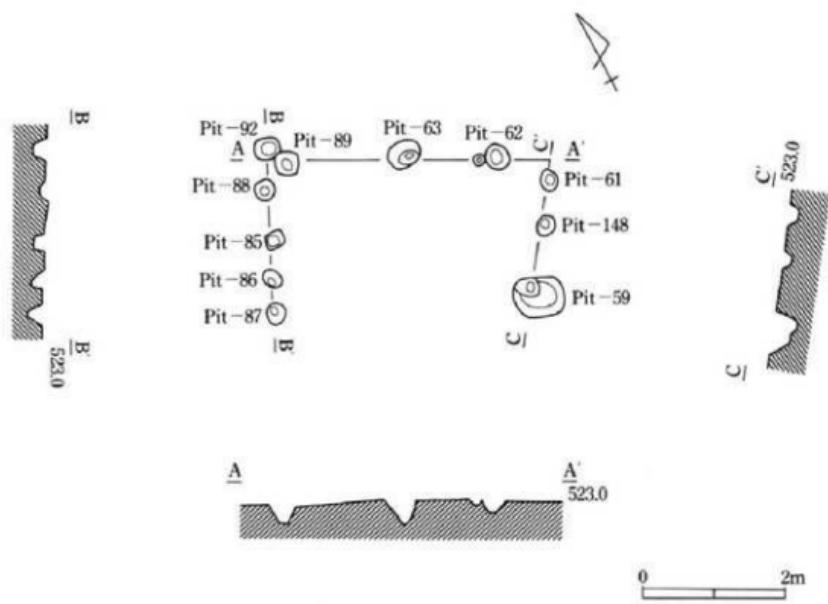


第53図 十代遺跡C地点 第1号掘立柱建物址実測図

(2) 第2号掘立柱建物址 (第54図)

J-L-7~8グリッドより、直径30~40cmの小ピットがコの字状に連続して検出されており、一般的な掘立柱建物址とは異質であるが、一棟の建物であったと理解しておく。柱穴の間隔は不規則で、一直線上に並ばないものもいくつかあり、縄文時代の壁柱穴のあり方に類似している。深さはほとんどが10~20cmで、Pit-59(内部小ピット)・63は30~35cmとやや深い。

遺物は、Pit-63・88(91)から土師器・須恵器が数点ずつ出土しているが、他のピットからは全く遺物の出土はない。柱痕・礎板等も確認できなかった。



第54図 十代遺跡C地点 第2号掘立柱建物址実測図



3. 柱穴列

(1) 第1号柱穴列（第55図・巻頭図版4-2）

調査区西端・G-6グリッドからH-8グリッドにかけて、一辺70cm前後の方形ピットがほぼ一直線上に等間隔に並んで検出された。さらに東側のSK-29にまで延長される可能性がある。4基（あるいは5基）のピットは、調査時に土壌と見えられたものであるが、いずれも不整形を呈し、規模がほぼ同一である上に、辺をそろえて一直線上に並ぶため、整理作業に至ってから柱穴列と把握した。後述するSK-39を井戸址と考えた場合、本址はその覆屋に伴うものと理解することも可能である。また、本址の南あるいは北もしくは西にピットが続き、掘立柱建物址となることも考えられる。

遺物は全ピットから出土しており、特にSK-32からは多量の土師器が出土しており、中には古墳時代前期のS字状口縁甕も含まれている。

(2) 第2号・第3号柱穴列（第56図）

F-H-14-15グリッドにおいて検出され、さらに北・東へ延びる可能性はあるが、未調査であり確認できなかった。いずれも直径約20cm・深さ10-20cmの小ピットで、等間隔で3基の柱穴が並ぶ柱穴列2基が直交している。別の遺構と考えるより、周囲のピットも加えて一棟の掘立柱建物址と考えたい。遺物は全く出土していない。

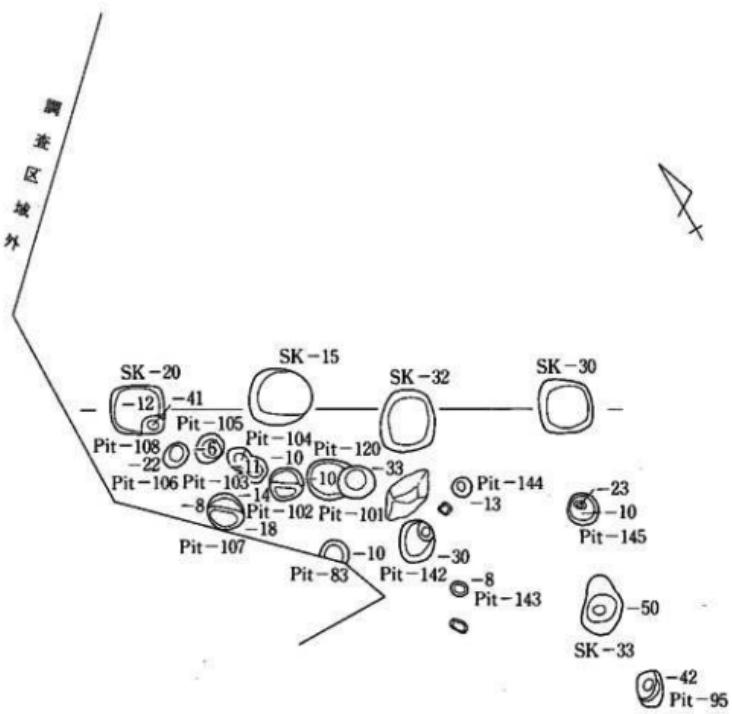
4. 土 壤（第57図～第59図・図版19-1・2・第5表）

C地点からは、総計40基の土壙が検出された。そのうちのいくつかは、他の遺構の一部と把握されたものも含まれる。規模・平面プランは多様であり、位置的にも偏在性はあまり認められない。ここでは個々の説明は省略し、詳細は第5表に表した。

所属時期については、出土遺物からほとんどが平安時代前期と考えられるが、SK-01・03・09・16・28・29・32・36では古墳時代前期～中期の土師器が含まれており、当該期まで遡る可能性も考えられる。

特徴的な土壙として、SK-07とSK-39が上げられる。SK-07は、SB-04の西隣・N-9グリッドより検出された小規模な土壙で、80×55cmの小判形を呈する。深さは10cmとわずかであるが、蔵骨器と思われる灰釉陶器広口壺が出土していることから、墓址と考えられる。これと対照的なのがSK-39で、E-G-7-8グリッドより検出された。長径3m・短径2.6mを測り、不整規円形を呈する。断面形は二段落ちで、最深部で40cmを測るが、湧水のため完掘しておらず、さらに深いことは確かである。下底部には多量の角礫・土器類が投げこまれていた。井戸址と考えられるが、貯水用施設とも考えられる。なお、上記2基のいずれからも鉄滓が出土しており、特にSK-39からは多量に出土している。

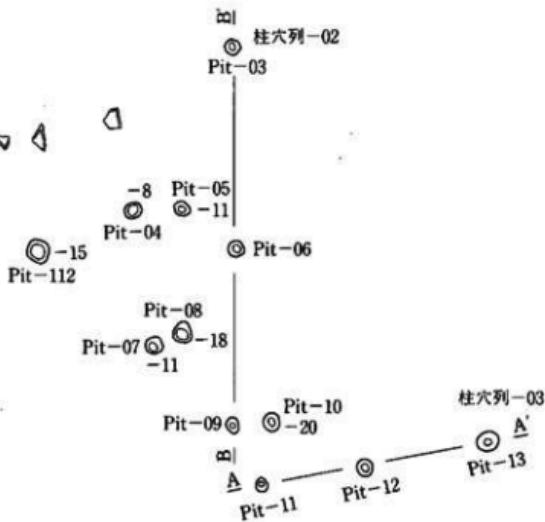
この他に、SK-24から灰釉陶器碗の底部破片・SK-12から砾石・SK-21から石錐・SK-15から鉄片・SK-01から炭化物が、土師器・須恵器などと共に出土した。



第55図 十代遺跡C地点 柱穴列-01 実測図

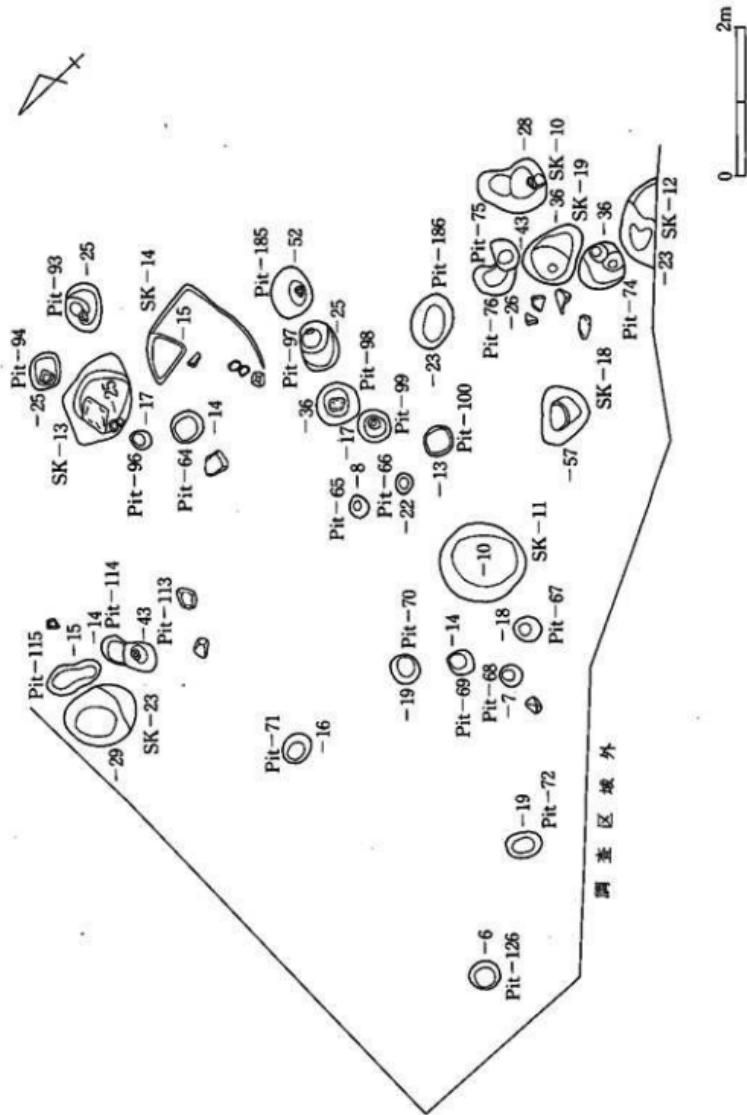
-8@
Pit-01 (O) -17
Pit-02

(O) -7
Pit-183



0 2m

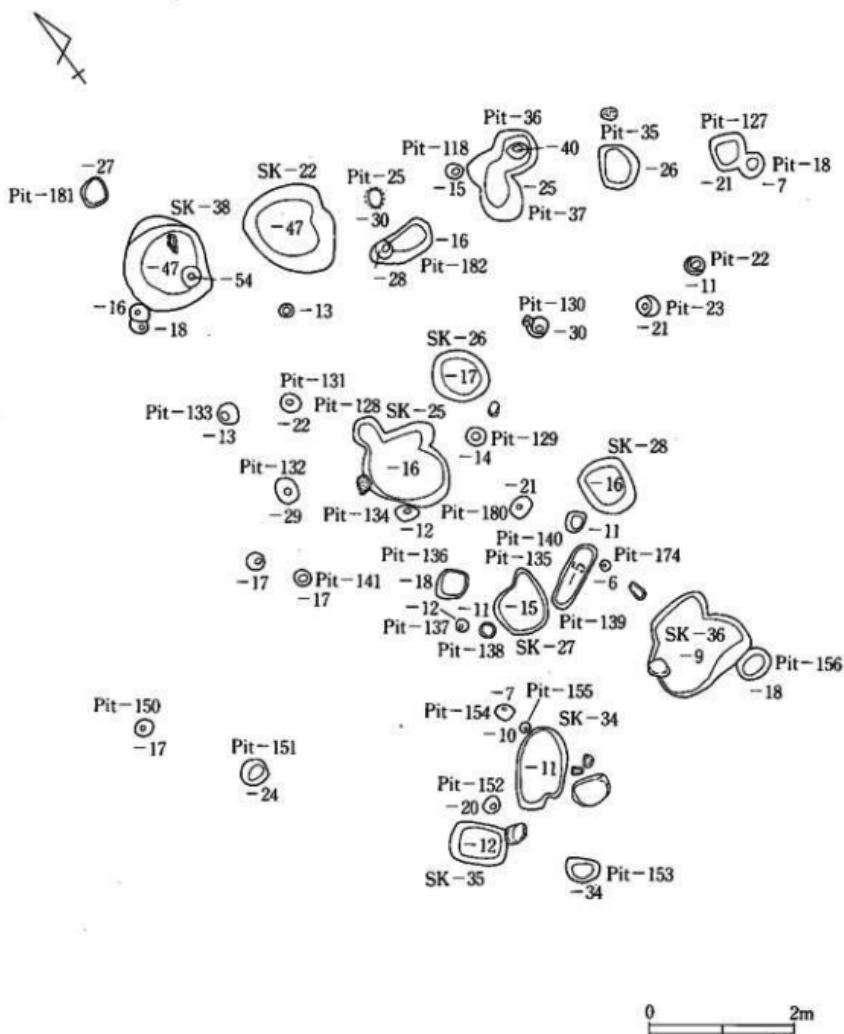
第56図 十代遺跡C地点 柱穴列-02・03 実測図



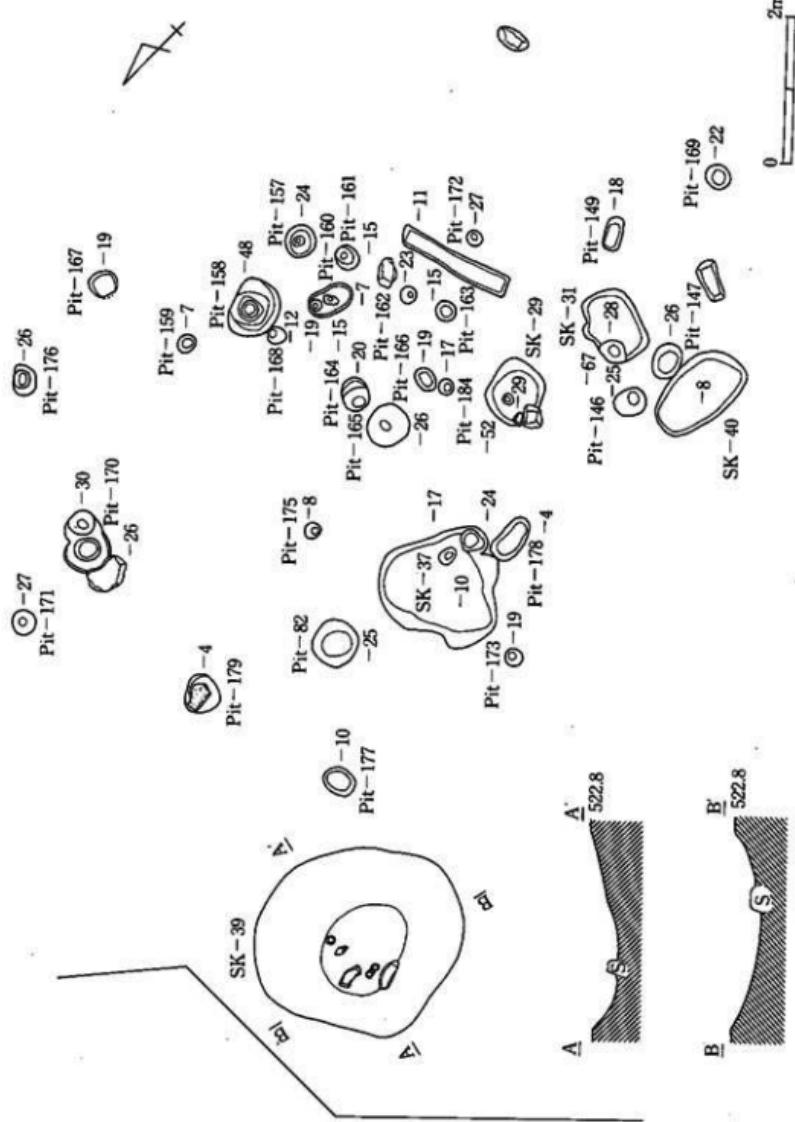
第57図 十代道路C地点 SK-10~14・18・19 地質測図

第5表 十代遺跡C地点土壤一覧表(1)

土壤No.	平面形	規模(cm)			出土遺物		その他の	備考
		長径	短径	深さ	土器破片	須恵器破片		
SK-01	楕円形	98	78	40~52	28	5	石器1、炭化物	二段落ち
SK-02	長方形	100	64	20	17	2	弥生式土器破片1	
SK-03	楕円形	85	70	40~46	10	1		
SK-04	不整五角形	134	98	10~20	33	1	石器1、陶器1	
SK-05	長楕円形	172	104	18~24·51	9	3		小ピット
SK-06	楕円形	100	84	5	2	0		
SK-07	小判形	80	55	10	29	60	灰釉陶器密、鐵津、 弥生式土器破片1	
SK-08	楕円形	100	84	4~16	3	0	弥生式土器破片1	
SK-09	不整楕円形	104	80	25	14	4	石器1	Pit-73と重複
SK-10	不整長椭円形	98	66	20~29	13	0	石器2	
SK-11	円形	120	110	11	10	5		
SK-12	(円形)	(116)	50	(10·26)	8	2	石器1	約半分未発・二段落ち
SK-13	不整椭円形	128	92	31~37	2	3	石器1	
SK-14	不明	(154)	(130)	0~6·16	29	26	弥生式土器破片1、 縄文式土器破片1	號約半分不明・二段落ち
SK-15	不整方形	88	78	12~19	9	1	鐵製品1	
SK-16	楕円形	84	70	21	10	3		
SK-17	楕円形	84	72	6~11	6	5		Pit-54と重複
SK-18	隅丸三角形	80	70	36·59	0	2	弥生式土器破片2	二段落ち
SK-19	不整長椭円形	90	70	10~15·57	6	2	弥生式土器破片2	二段落ち
SK-20	方形	74	66	12	3	2		Pit-108と重複
SK-21	不整円形	70	66	20~36	16	2	弥生式土器破片1、 石器2	二段落ち
SK-22	不整椭円形	128	114	50~54	5	18	弥生式土器破片8	
SK-23	不整円形	100	88	18~29	9	4		二段落ち
SK-24	円形	130	118	8~10	92	11	灰陶器密、 弥生式土器破片3	小ピット
SK-25	不整椭円形	126	120	14~18	6	0		
SK-26	円形	80	76	19	3	0	弥生式土器破片3	
SK-27	円形	72	68	14	13	3		Pit-135と重複
SK-28	不整方形	80	76	20	34	6	弥生式土器破片1、 縄文式土器破片5	
SK-29	隅丸方形	84	74	20~29·52	19	2		小ピット
SK-30	正方形	72	72	13~27	14	7	石器1	



第58図 十代遺跡C地点 SK-22・25~28 他実測図



第五章 地理学与人类学

第5表 十代遺跡C地点土壤一覧表（2）

土壤No	平面形	規模(cm)			出土遺物		その他の	備考
		長径	短径	深さ	土師器破片	須恵器破片		
SK-31	不整形方形	98	80	10~16·48	2	0		ビット
SK-32	不整形方形	84	76	33	114	4	弥生式土器破片1	
SK-33	不整長楕円形	82	50	12·52	19	0		二段落ち
SK-34	長楕円形	116	70	10~17	4	0	弥生式土器破片2	
SK-35	長方形	80	54	8~14	4	0	弥生式土器破片3、石器1	
SK-36	不整楕円形	136	116	12~14	35	6	弥生式土器破片2、縄文式土器破片3、石器1	
SK-37	不整楕円形	172	160	8~14·20	6	8		小ビット
SK-38	不整円形	128	116	50·55	4	0		小ビット
SK-39	不整楕円形	300	260	(40)	158	7	鉄鋤、石器1	
SK-40	長楕円形	130	84	10	0	0		

5. 溝状遺構

(1) SD-01(付図-3)

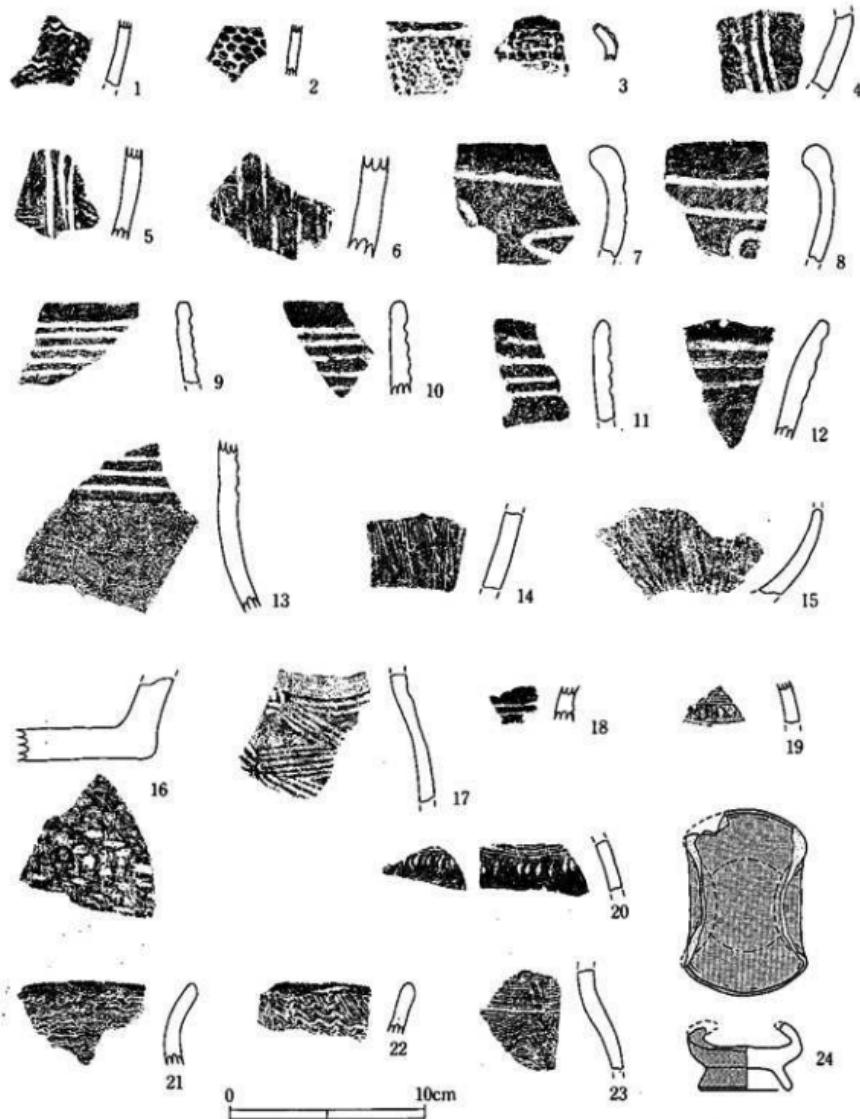
E-8グリッド(一部未掘)からSK-16グリッドにかけて、調査区を横切る形で検出された。全長27.8m・幅72~120cm・深さ10~43cmを測り、Pit-29を切っている。南東側が高く、徐々に低くなっている北西端との比高差は約40cmとわずかである。SD-02も切っているように思われるが、接点における下底面の差が20cmあり、調査時に新旧を判断することはできなかった。同時性も考えられる。断面形は「U」字状を呈し、壁はほぼ直に立ち上がる。

G-11グリッドあたりでわずかに屈折しており、屈折部以西からは拳大~人頭大の角礫が多量に含まれている。遺物はあまり多くなく、平安時代前期を主体とする土師器・須恵器・灰陶器・磨製石斧1点・砥石1点・チップ4点・鉄釘などが出土している。

(2) SD-02(付図-3・図版16-1)

I-K-12~14グリッドにおいて検出された。I-14グリッドでSD-01と直交し、K-12グリッドでSB-05と重複している。全長4m・幅112~132cm・深さ6~17cmを測り、Pit-31・32を切っている。下底面はほぼ平坦で、傾斜は認められない。SB-05寄りの下底面から検出された2基のビットは、本址との新旧関係を明らかにすることはできなかった。

遺物はごくわずかで、内訳はSD-01とほぼ同じである。土器類以外では、横刃型石器・フレイク・チップ各1点、木片1点などが出土した。



第60図 十代遺跡C地点 遺構外出土遺物 実測図

(3) S D-03 (第51図・図版18-2)

S B-06のカマド西隣・L-8グリッドからM-7グリッドにかけて延びている。全長4m・幅40cm前後・深さ5~10cmを測る。溝と考えるより、S B-06の周溝あるいは掘り方の一部であろうと思われる。出土遺物は、土師器・須恵器がわずかである。

6. ピット

掘立柱建物址の柱穴・柱穴列と把握されなかったピットが165基検出されている。もちろんこのほとんどが上記造構や、床面を欠失した住居址等に伴う柱穴と思われる。このうち、Pit-26・27からは、平安時代前期の土師器・須恵器がやまとまって出土しており、未掘部分が半分以上あるとすれば、SK-04などと同質の土壙と思われる。また、Pit-140は32×26cmと小規模ながら、20片以上の土師器と、須恵器数片などが出土している。

ピットのほとんどから土師器・須恵器等が出土しているが、全く出土しなかったのはPit-01・04~09・11・15・17・19・20・31・32・38・40・43・48・49・53・55・56・58・65・67~69・71~73・75~80・83・93・96・99・101~107・109・111~113・115・116・119~121・124~126・128~131・133~135・137~139・141・143~146・149・150・152~154・157・159・161~163・166~168・171~174・176~182の93基である。

7. 造構外出土の遺物

C地点で検出された造構のほとんどは平安時代前期に属するのであるが、遺物は実にバラエティーに富んでいる。そのうち特徴的なものを図示した(第60図)が、図示し得なかった遺物の一部を(図版20-1・2)に示したので、それらについて記することとする。

绳文式土器は比較的多いが、小片が多く一括性に乏しい。1・2は早期押型文土器で、1には山形文・2には楕円文が施される。3は前期末・晴ヶ峰式期に比定される。無地文上に結節浮線文が貼付されている。4は中期に属すると思われるが、磨滅が著しく時期は不明である。5・6は中期後半、7・8は後期前半に属する。9~17は晩期水I式直前期前後の土器と思われ、やまとまった量の出土が認められた。

弥生式土器は少量であるが、東部町内で初めて中期栗林式期の土器が発見された。18~20がそれで、壺が主体をなす。21~23は後期箱清水式土器で、裏のみ図示したが、高环・壺・鉢・蓋なども出土している。

土師器・須恵器では、古墳時代前期~中期のS字状口縁台付壺・高环などの破片が出土している(図版20)が、図示し得なかった。平安時代の壺・壺蓋・甕等が多量に出土したが、24の耳皿のみ図示した。灰釉陶器では、碗・段皿・耳皿・長頸壺などが出土した(巻頭図版5-2)。

石器は305点出土したが、定形石器では石錐26・敲石45・横刃型石器12・管玉1・打製石斧7・磨製石斧2・砥石5・多凹石2・凹石2・石錐2・石匙1・磨石11などがある。

第四章 宮西遺跡の調査

第1節 調査の概略

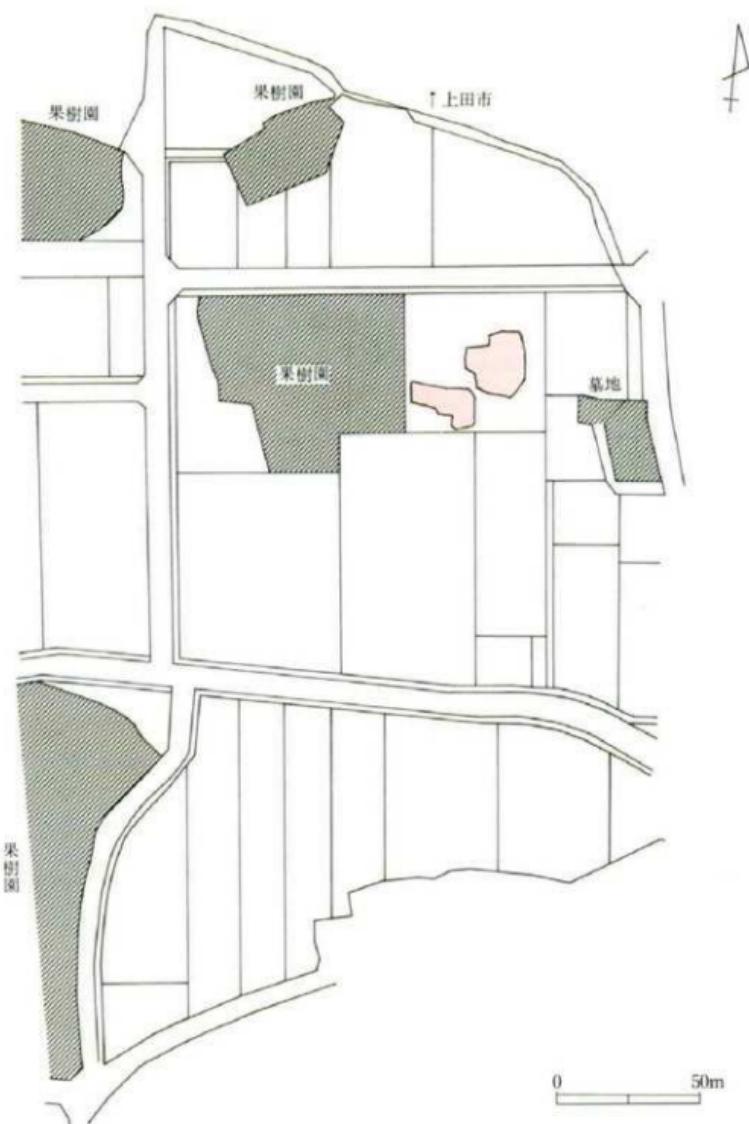
東深井区から上田市中吉田に通じる道路の東側に深井池がある。この池の西側に広がるのが宮西遺跡で、その西側半分（松尾家墓地以西）が調査対象地である。この一帯は、かつて『さくれん林』と呼ばれた場所で、ここから次郎淵遺跡にかけてゆるやかに傾斜している。平成3年度に行われた試掘調査では、TR-5～8から多量の砂礫が検出されており、洪水等により流下した砂礫の集積地であろうと思われる。したがって、かつては、桑・くるみ・ぶどうなどが植えられていたものが放置され、荒地・雜木林と化していた。

発掘調査開始に先立ち、遺構が検出されたTR-3・4を中心として、さらに4本のトレーンを追加した。その結果、TR-9・10からやまとまつた量の出土遺物があったが、遺構は検出されなかった。TR-11・12からは遺物がほとんど出土せず、TR-11以西・以北およびTR-12以東の調査は必要ないものと思われた。したがって、TR-3・4を中心にして、TR-9・10付近まで発掘調査を行うこととした。

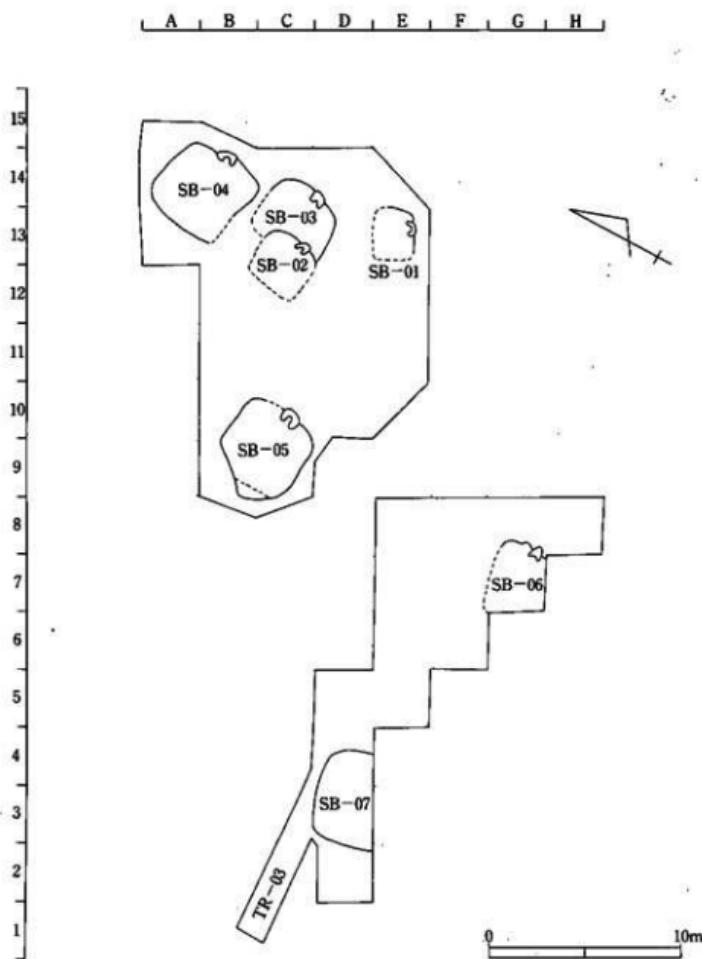
試掘調査終了後、十代遺跡A地点の測量・若宮遺跡の試掘調査に着手している間に、圃場整備工事施工業者の竹花工業の下請け業者（香●組）により、立ち木の伐採とその処理が行われた。その施工方法があまりにもざさんであるため、心配して調査予定地に行ってみると、TR-3・4・9・10はそのまま残されているが、その中に木を大量に入れてあり、周囲は抜根のためにかあちこち穴があいており、とても調査を行える状況ではなかった。早速復旧を申し込まれたが、調査範囲・方法を変更せざるを得なかった。TR-9周辺には大小の穴が掘られ、伐採木を焼却していたため調査をあきらめ、TR-10西側は大型重機で踏み固められていたため、廃土置き場として調査は行わなかった。

こうした経緯により、平面発掘が行えたのはわずか340m²余りだけで、トレーニチ調査を含めても400m²であった。グリッドは、保存状態が比較的良好な壇の形に合わせて設定したため、基準軸はN-56°-Eを指している。グリッド (=Grid: 平面発掘調査時に設定する任意の正方形) は一边3mとし、北西側から南東側へA・B・C…、南西側から北東側へ1・2・3…とした。アルファベットを先に呼ぶことにしたため、グリッド名はB-6・C-4などとなる。遺跡名の宮西(MIYANISI)から、遺跡略号はMIYとする。

調査区のほぼ全域から竪穴住居址が集中して7軒検出されたが、周囲を広く調査していれば、これ以上の住居址及び他の遺構が検出されたことであろう。業者の不誠実な行動が悔やまれる。今後二度とこうした事が発生しないことを望む。



第61図 宮西遺跡 発掘調査地点の現況



第62図 宮西遺跡 遺構位置図

第2節 検出された遺構とその出土遺物

1. SB-01 (第63図・図版21-1)

調査区東端・E-13グリッドにおいてカマドの痕跡が検出されたため、周囲を精査したところ南壁および東壁の一部とピット一基・床面の一部が確認された。ほとんどが削平されておりプランは不明確であるが、主軸方向はS-30°-Eを示し小形方形を呈すると思われる。壁高は0~8cmとわずかで、カマドも袖の裾部と火床部および構築壁2個が確認されたにすぎない。

出土遺物は、カマド周辺から土師器壊（内面黒色）・甕（武藏型）の小破片が1点ずつ出土しているだけであり、所属時期を決定することはむずかしい。一応平安時代前期に位置付けておくこととする。他に、ビエス・エスキュー1点が出土している。

2. SB-02 (第63図・第66図1~2・図版21-2~22-1)

TR-4周辺で実施した北東側の調査区のはば中央部・C-13グリッドにおいて検出された。東壁はカマドを含め完存していたものを、TR-4に破壊されており明確ではないが、一辺3.5m程の方形プランを呈していたであろう。北壁は2.1mが確認されただけで、西側は削平されており確認できなかった。東側から検出されたSB-03を切っている。壁は最大8cmしか確認できておらず、ほとんど4cm以下とわずかである。主軸はS-80°-Eを示すと思われる。

床はほぼ平坦であるが、西側の約半分は削平されており、検出されていない。カマドは偏平磚を「八」の字状に組んだ石組み粘土カマドで、火床部も確認された。

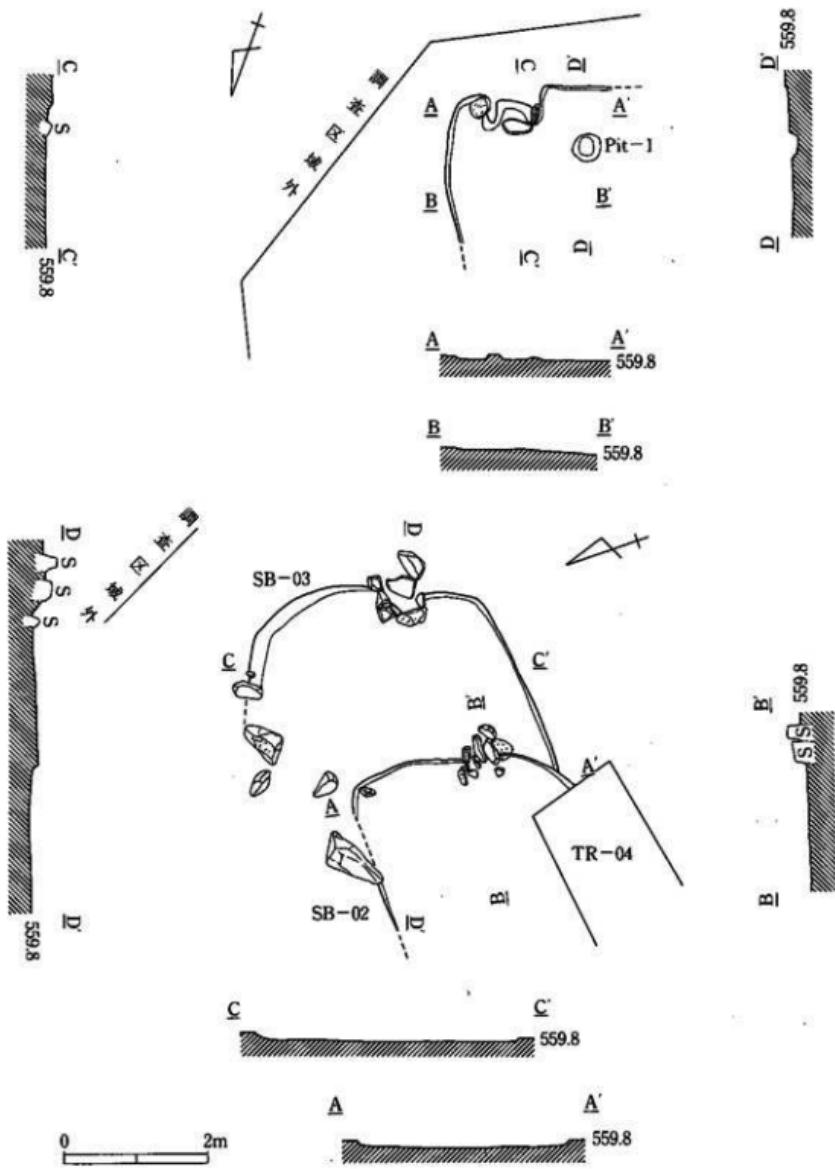
遺物はあまり多くなく、土師器無高台壠（内面黒色）・高台付壠・長胴甕が各数個体と、須恵器壠1点が出土している。平安時代前期後半に位置付けられよう。

3. SB-03 (第63図・第66図3~9・図版21-2.22-2~3)

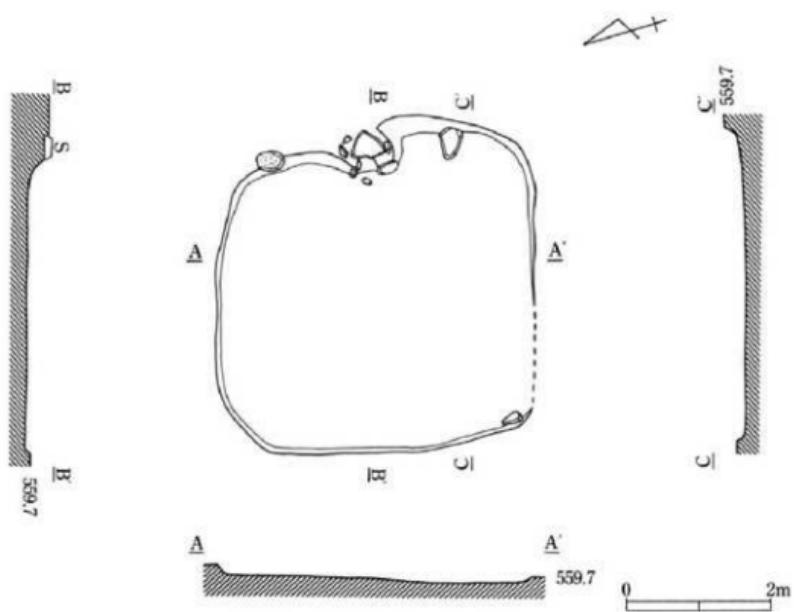
SB-02の東隅・C-D-13~14グリッドにおいて検出された。東壁はカマドを含め完存していた。南壁および北壁は一部だけで、南壁の西側はSB-02の掘り方と誤認しており、本来は約4m四方の正方形プランを呈していたものと思われる。平面上はSB-02に切られているが、本址の床はSB-02のカマド上面より高かったため(C-C')、SB-02の検出面あたりにあったのであろう。壁はカマド周辺で10~20cmを測り、北壁は緩やかに立ち上がる。

床はほぼ平坦で、カマド周辺に貼り床が認められた。ピットはない。カマドは東壁中央部や南から検出され、平坦磚・角磚を「コ」の字状に組んだ石組み粘土カマドで、西側焚き口部の長大磚はカマド天井部の芯材が落下したものであろう。主軸方向はS-82°-Eと指している。

遺物の出土量はやや多く、土師器無高台壠・高台付壠（共に内面黒色）・長胴甕（武藏型）・須恵器無高台壠・壺などの平安時代前期前葉の土器類と、横刃型石器1点が出土している。



第63図 宮西遺跡 SB-01・02・03 実測図



第64図 宮西遺跡 SB-04 実測図



4. SB-04 (第64図・第67図1~7・図版23-1)

調査区北端のA-C-13~15グリッドから、ほぼ全容を把握できる形で検出された。カマドは東壁の中央部に構築されており、主軸方向はS-84°-Eを示す。一辺4.4mの正方形プランを呈するが、南西コーナーがわずかに張り出している。(調査時のミスの可能性もある。)壁はおおむね10~15cmを測りほぼ直に立ち上がるが、カマド脇では20~30cm程あり、やや緩やかに立ち上がる。

床は、カマド焚き口前から北東コーナーにかけて貼り床が検出されている。カマド南側には、床面に厚さ10~15cmの偏平礫が敷きつめられている。貼り床のない床面は、基盤層である礫混ヒリの粘土層に達しているため、貼り床部と同程度に堅緻である。ピットは検出できなかった。

遺物は、土師器長胴甕(武藏型)が数個体出土している他は、あまり多くはない。土師器無高台环・高台付皿(共に内面黒色)、須恵器無高台环などの平安時代前期後半の土器類と、石器13点、鉄津1点が出土している。

5. SB-05 (第65図・第67図8~9・第68図1・2・図版23-2・3)

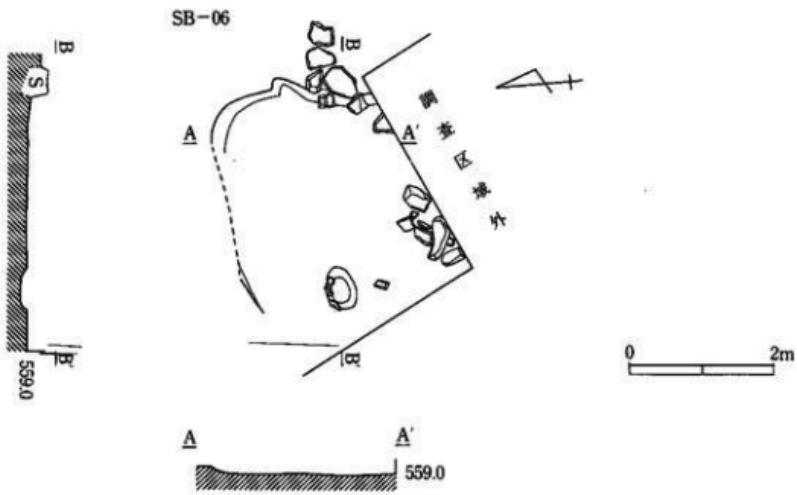
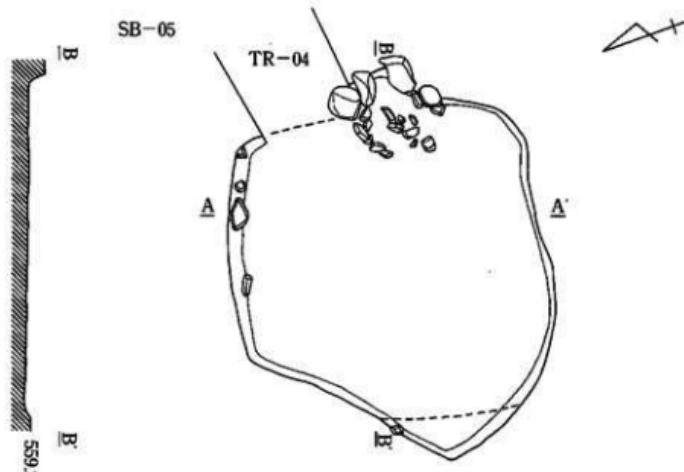
北東側調査区の西端・B-C-9~10グリッドより検出された。東壁のほぼ中央からカマドが検出されているが、そのすぐ北側をTR-4に破壊されている。TR-4はさらに西壁の一部を破壊している(西壁の突出部)。主軸方向はほぼ東西ラインと一致しており、東西約4m・南北4.2mの方形プランを呈する。壁高は5~15cmを測るが、第1節で記したとおり本址の検出面を大型重機が何度も通過しており、調査は困難を極めた。硬く踏み荒らされた造構は、全体が貼り床のようで、精査はできなかった。圃場整備施工業者の心ない行為に憤慨すると共に、手のひらに豆を作りながら一生懸命掘り下げる作業員の皆さんに頭が下がる。

上記の状況のため床面の状態は不明確であるが、貼り床はなかったようである。カマド焚き口南西側には、厚さ5~10cmの偏平礫が敷きつめられており、第68図2の甕と第67図8~9の环などがまとまって出土している。カマドは、角礫及び偏平礫を「八」の字状に組んでおり、広範囲から火床部が検出された。

遺物はややまとまった量の出土があり、土師器無高台环・高台付皿・皿(いずれも内面黒色)・甕(武藏型・ハケ目を有するもの他)、須恵器無高台环など平安時代前期後葉に属する土器類と、砥石・敲石・石鎚・鉄片が各1点出土している。

6. SB-06 (第65図・第68図3~5・図版24-1・2)

調査区南端・G-7~8グリッドからカマドと壁・床の一部及びピット1基が検出された。カマドは東壁に構築されているが、調査区域外であるカマドの南側と北壁の一部は、調査直前に重機で破壊されており、プランは不明である。残存部の壁は10~20cmを測り、ほぼ直に立ち上がる。西側では確認できなかった。



第65図 宮西遺跡 SB-05・06 實測図

床はほぼ平坦であるが、貼り床・敷石等は確認されなかった。ピットは西壁推定地手前にあり、東西60cm・南北42cm・深さ8cmを測る。カマドは、袖部の芯材の角礫2個と、壁外に延びる煙道及びその蓋石（厚さ5~10cmの偏平礫3個）が検出された。

遺物はほとんどが土師器で、無高台坏・高台付坏・皿（いずれも内面黒色）・甕（武藏型）、灰釉陶器碗1片・石器1点が出土している。平安時代前期後半に位置付けられ、SB-02・05とは同時期と考えられる。

7. SB-07（第68図6）

平成3年度の試掘調査において住居址の存在が確認され、周辺を拡張して調査を行ったのであるが、第1節で記したとおり大型重機により大部分が破壊されたため、プランの一部を確認しただけである。C-D-2~4グリッドで検出され、東西約5mを測る方形プランと思われるが、カマドは発見されていない。

遺物はトレンチ及び周辺から平安時代前期の土師器坏（内面黒色）・甕（武藏型）、須恵器坏などが出土しており、本址の所属時期と思われるが、確証はない。

第3節 遺構外から出土した遺物

1. 縄文式土器（第69図1~5）

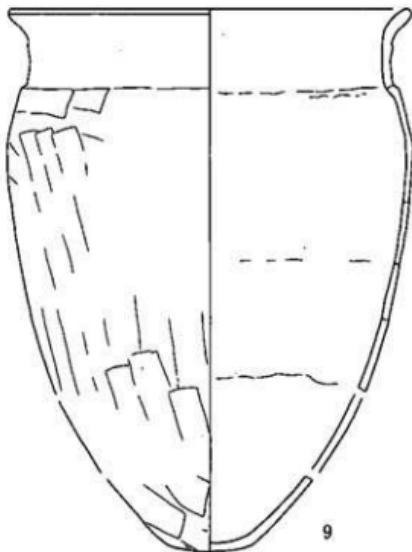
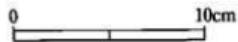
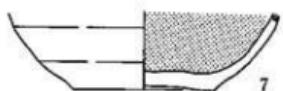
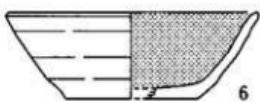
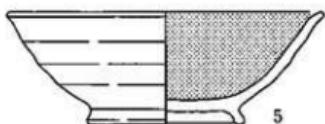
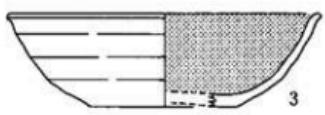
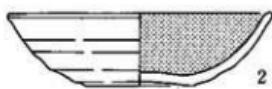
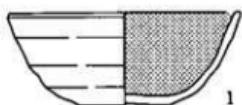
宮西遺跡からは、10点程の縄文式土器が出土している。時期は様々で、1が中期中葉・2が中期後葉・3が後期中葉に位置付けられる。4・5はおそらく晩期前半に含まれるであろうが判然としない。同様な土器が十代遺跡C地点からも出土しており（第60図9~17）、一帯に該期集落が存在した可能性が考えられる。他の時期においても、わずかずつの出土であるため、長期間に亘る定住的な集落ではなく、キャンプ地的性格であったものと思われる。

2. 石器・石製品

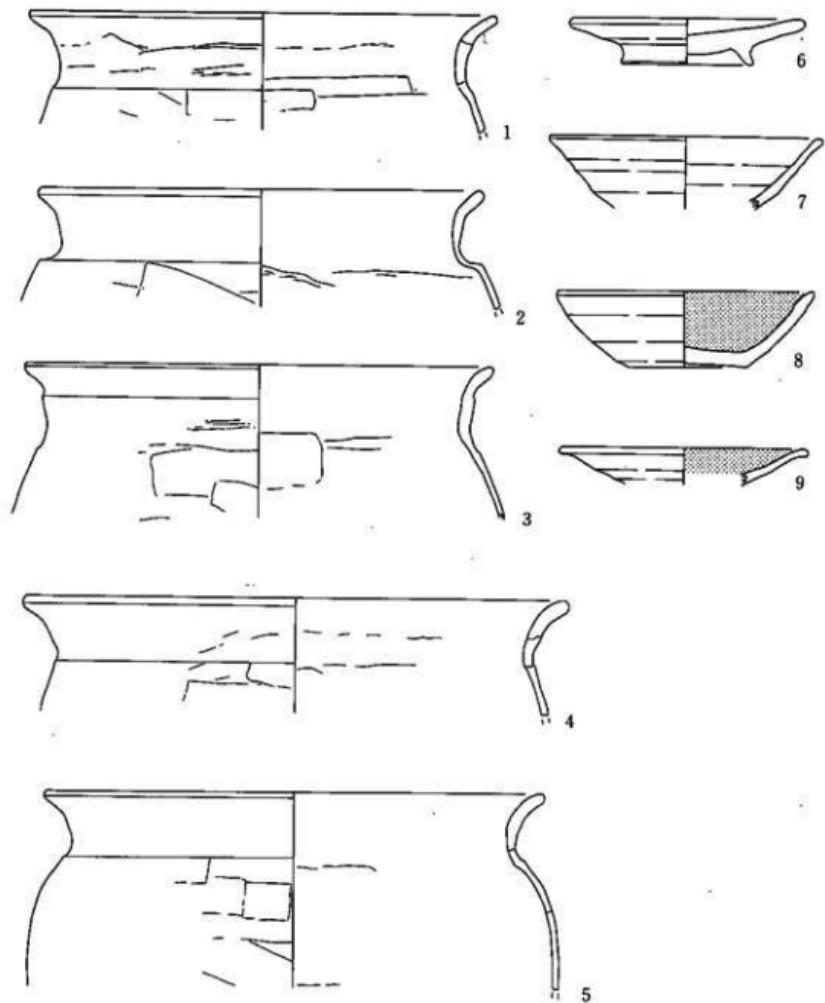
石器類は、試掘調査分を含め63点が出土している。縄文時代に属するものが主体を占めるものと思われるが、砥石・敲石などには平安時代に属するものも含まれる。

内訳は、石鎚4・打製石斧4・横刃型石器8・ビエス・エスキュー1・磨石2・砥石1・敲石2・フレイク4・チップ36・石製円板1である。

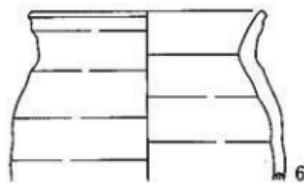
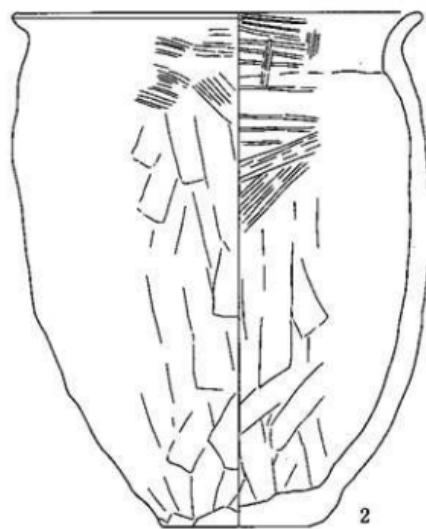
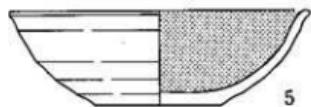
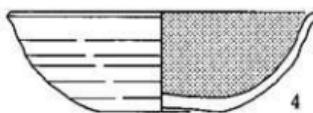
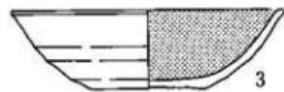
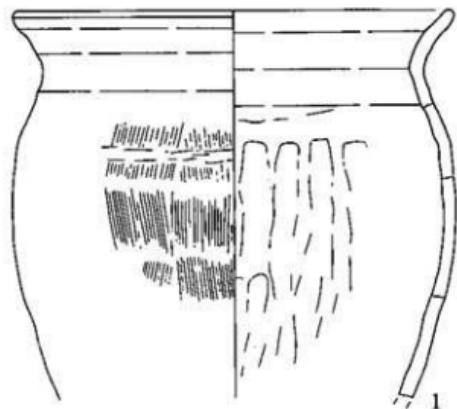
石鎚はSB-05覆土から出土した1点のみが有茎石鎚であるほかは、すべて無茎凹基石鎚である。打製石斧・横刃型石器には完形品がなく、形態の分析はできないが、いずれも縄文時代中期に多く見られる形態を呈している。砥石はSB-05床面出土で、全面に研磨痕が認められ、一部に金属製刃器を研磨したと思われる細い溝がある。敲石の1点はSB-05床面より出土しており、長大礫の両端・棱部に著しい敲打痕が認められる。



第66図 宮西遺跡 SB-02-03 出土土器 実測図



第67図 宮西遺跡 SB-04-05 出土土器 実測図



0 10cm

第68図 宮西遺跡 SB-05-06-07 出土土器 實測図

3. 土師器・須恵器（第66図～第68図）

造構出土の遺物については、第2節において簡単に触れたが、本遺跡出土遺物の大半が造構から出土した土師器・須恵器であり、改めてここで説明を加える。

S B-01出土土器は小破片のため、説明は省略する。S B-02出土の土師器無高台坏（第66図1・2）はいずれも外面にロクロナデ・内面に黒色処理が施される。底部は回転糸切りであり、2はその後回転ヘラ削りを行っている。他は小破片のため図示し得なかったが、土師器長胴壺の底部破片が、カマドからやまとまって出土している。やや厚手で、ヘラケズリが縱方向に施されており、北信型の裏と思われる。

S B-03から出土した坏（第66図3～8）には大形のもの（3～5）と小形のもの（6～8）があり、土師器坏（3～8）はいずれも内面黒色処理が施される。底部は回転糸切り痕を残すものが主体を占める。長胴壺（9）は口縁部が外反し、頸部が『コ』の字状を呈する武藏型であり、頸部以下は斜め方向のヘラケズリが施されている。

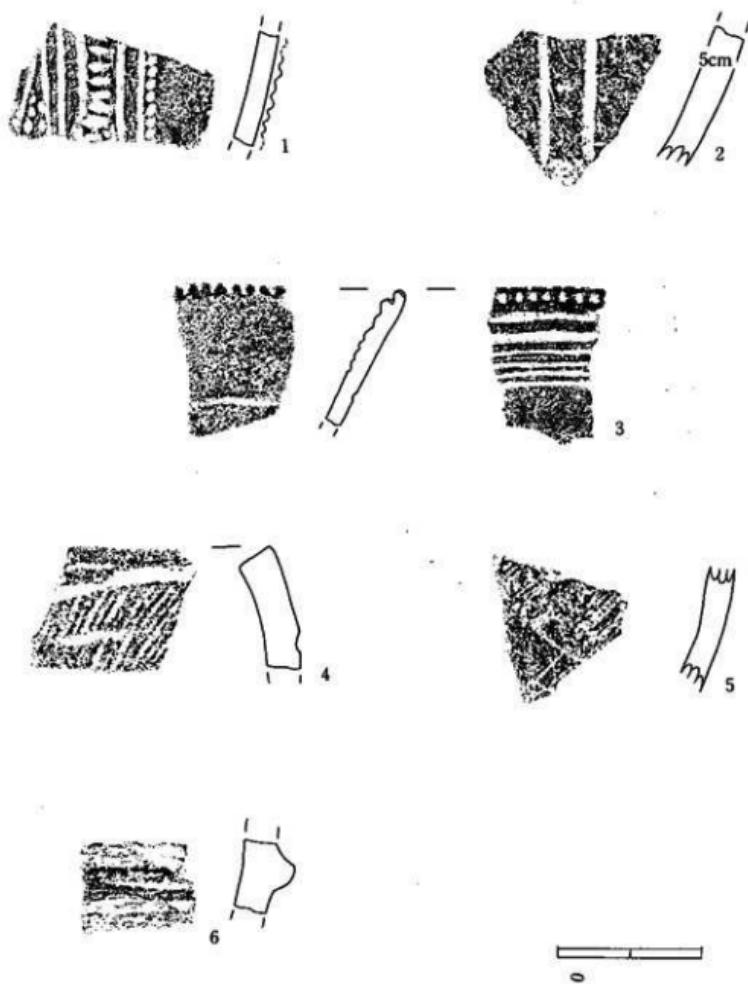
S B-04では、武藏型長胴壺が数個体出土している（第67図1～5）。頸部がやや外反しており、S B-03の裏よりわずかに新しい様相を示すものと思われる。土師器坏・皿（6）は外面にロクロナデが頸著に残り、内面に黒色処理・底部に回転糸切り痕が認められる。須恵器坏（7）の内外面にはロクロナデが施されるが、底部は欠失しており不明である。

S B-05の出土遺物は、S B-04との共通点が多く認められ、ほぼ同時期に位置付けられると思われる。すなわち、土師器武藏型長胴壺の頸部はやや短く且つ外反しており、『コ』の字状の退化が認められる。土師器坏（8）・皿（9）の外面にロクロナデ・内面に黒色処理・底部には回転糸切り痕が施されている。また、土師器裏には頸部以下に縱方向のハケ目を有するやや厚手のもの（第68図1）と、外面のほぼ全面に縱方向の雜なヘラケズリが施される厚手のもの（2）が含まれる。前者は、中・南信地方に多く見られるもので、赤褐色を呈する。後者も中・南信地方から出土する裏に類似しており、不明瞭なヘラケズリが底部を含むほぼ全面に施される。口縁部にはヨコナデが看取され、數ミリとやや薄い。内面頸部以上は横方向のヘラケズリが、頸部以下は縱方向のヘラナデ・指頭によるナデが認められる。底部は直径9cm・厚さ1.5cmと安定感のある作りである。

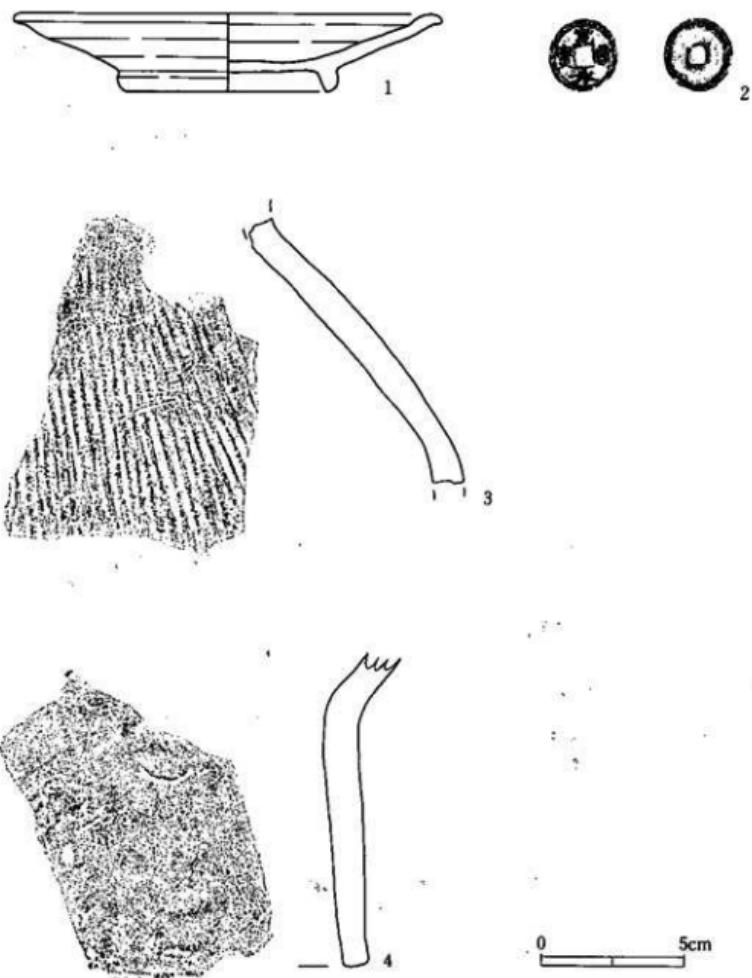
S B-06から出土した遺物の大半は土師器で、カマド及びカマド周辺から集中的に出土している。坏（3～5）・皿はいずれも外面にロクロナデ・内面に黒色処理が施され、底部にはすべて回転糸切り痕が残されている。裏は『コ』の字状口縁を有する武藏型長胴壺が主体を占め、胴部は斜め方向のヘラケズリにより3～6mmと薄く仕上げられている。時期はS B-05とほぼ同じかわずかに古い段階に位置付けられると思われる。

S B-07では確実な伴出遺物はないが、そのほとんどはS B-03とほぼ同時期に比定されると思われる。6は頸部以下にカキ目を有する小形ロクロ裏で、本址に伴うと思われる。

この他にも出土しているが、ほとんど上記の時期及び器種に含まれており、説明は割愛する。



第69図 宮西遺跡 遺構外出土遺物 實測図(1)



第70図 宮西遺跡 遺構外出土遺物 實測図(2)

4. 灰釉陶器・陶磁器（第70図1）

宮西遺跡からは、S B-06カマドから出土した碗口縁部破片と、D-13グリッドから出土した高台付皿（1）の2点の灰釉陶器が出土している。1は高台部が屈折して、接地面をできるだけ少なくした所謂『三ヶ月高台』で、黒庵90号窯式に対比されると思われる。

陶磁器では、中世の青磁碗破片1点と、近世以降の染め付け陶器十数点などが出土している。青磁は口縁部破片で、幅の広い蓮弁文が連続して施文されており、中国の龍泉窯系青磁である。同時期の青磁は、古屋敷遺跡・不動坂遺跡・大平寺遺跡などから出土しており、いずれも中世豪族である称津氏・海野氏に関連の深い場所からの出土である。本遺跡では、中世の遺構が発見されておらず判然とはしないが、若宮遺跡では堀と思われる「コ」の字状に連続する溝状遺構が検出されており、何らかの関係があるかも知れない。

5. 金属製品（第70図2）

鉄製品としては、刀子1点、釘2点、不明5点が出土しているが、いずれも小破片であり、図示しなかった。また、S B-04から楕円漆1点が床面より出土したが、小鍛冶遺構等は検出されていない。

この他に、寛永通宝（2）1枚がB-13グリッドから、またキセルの雁首1点がT R-9から出土している。



第五章 若宮遺跡の調査

第1節 調査の概略

深井池の西側から始まり、東深井区の南端（和酒店東側）まで広がる若宮遺跡は、笠石川左岸に位置する。この一帯は、和地区を広範囲に覆い尽くす金原川・成沢川が形成した扇状地の扇端部にあたり、南西側へ緩やかに傾斜している。東深井区の大半の人家を内包し、耳塚古墳・深井氏居館址推定地も含む。畠地・果樹園等から、多量の縄文式土器・石器、土師器、須恵器、土師質土器などが表面採集できる。縄文時代の集落が展開していた北部と、平安時代以降の集落及び居館址があったと思われる南部を別の遺跡とする考え方もあるが、遺物の分布状態・地形などから不可分であり、約75000m²の面積を有する一連の遺跡と把握しておく。

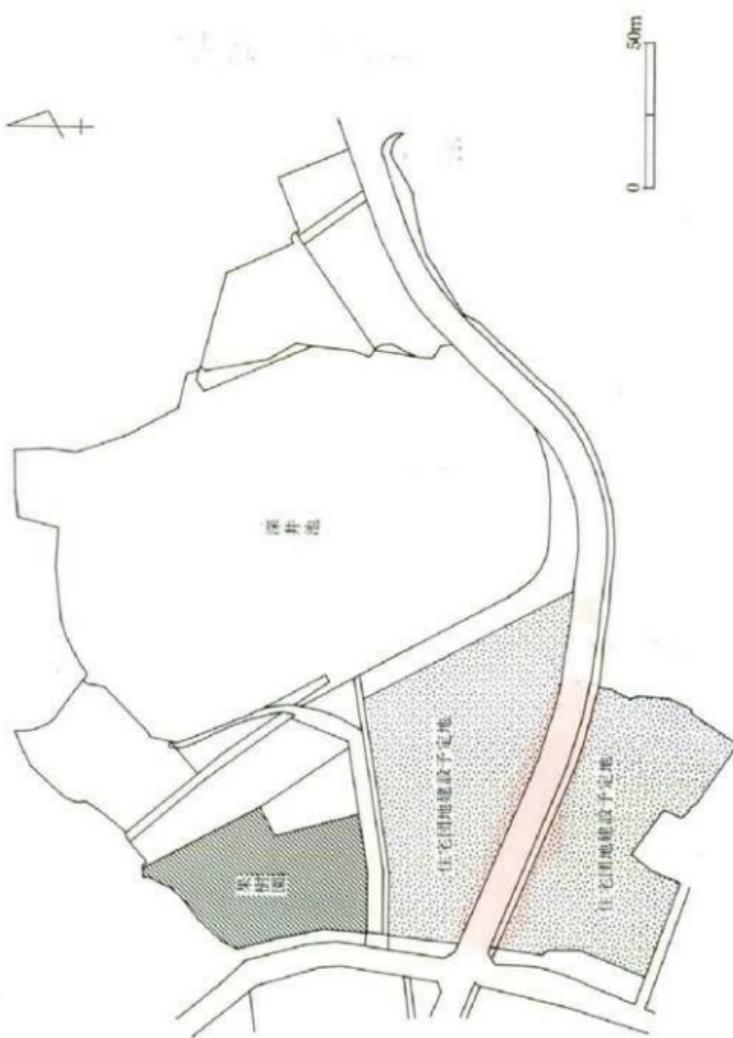
調査対象地は、遺跡の北端部で実施される圃場の区画整理と、道路・水路等の建設工事区域である。幹線道路の南北で計画している住宅団地造成予定地は、事業主体が異なるため調査は行わなかった。しかし、調査開始後になってその一部（道路北側水田）の土砂を圃場整備に使用することとなつたため試掘調査を行った。（TR-5・10・11）が、遺構の存在は確認できなかつた。結局、幹線道路とその周辺の一部の平面発掘を行い、調査面積は約1200m²に達した。調査区東隣のアドウ園においても発掘調査が必要と思われたが、アドウの収穫終了まで着手できなかつたため、トレンチ調査で遺構が確認されたTR-17周辺をわずかに拡張できただけであった。

最終的に、トレンチ調査を含め1300m²余りの調査を行つたのであるが、整理用深型コンテナで約60箱にのぼる多量の遺物が出土した。これは、今回実施した深井地区における発掘調査で出土した遺物の70-80%にも及ぶ。遺構も實に様々で、縄文時代中期中葉～後半の竪穴住居址10軒・同時期を主体とする屋外埋葬4基と土壙18基・縄文時代後半前葉の石棺墓1基・時代不明の溝状遺構16条・中世の堀址1条などが検出された。

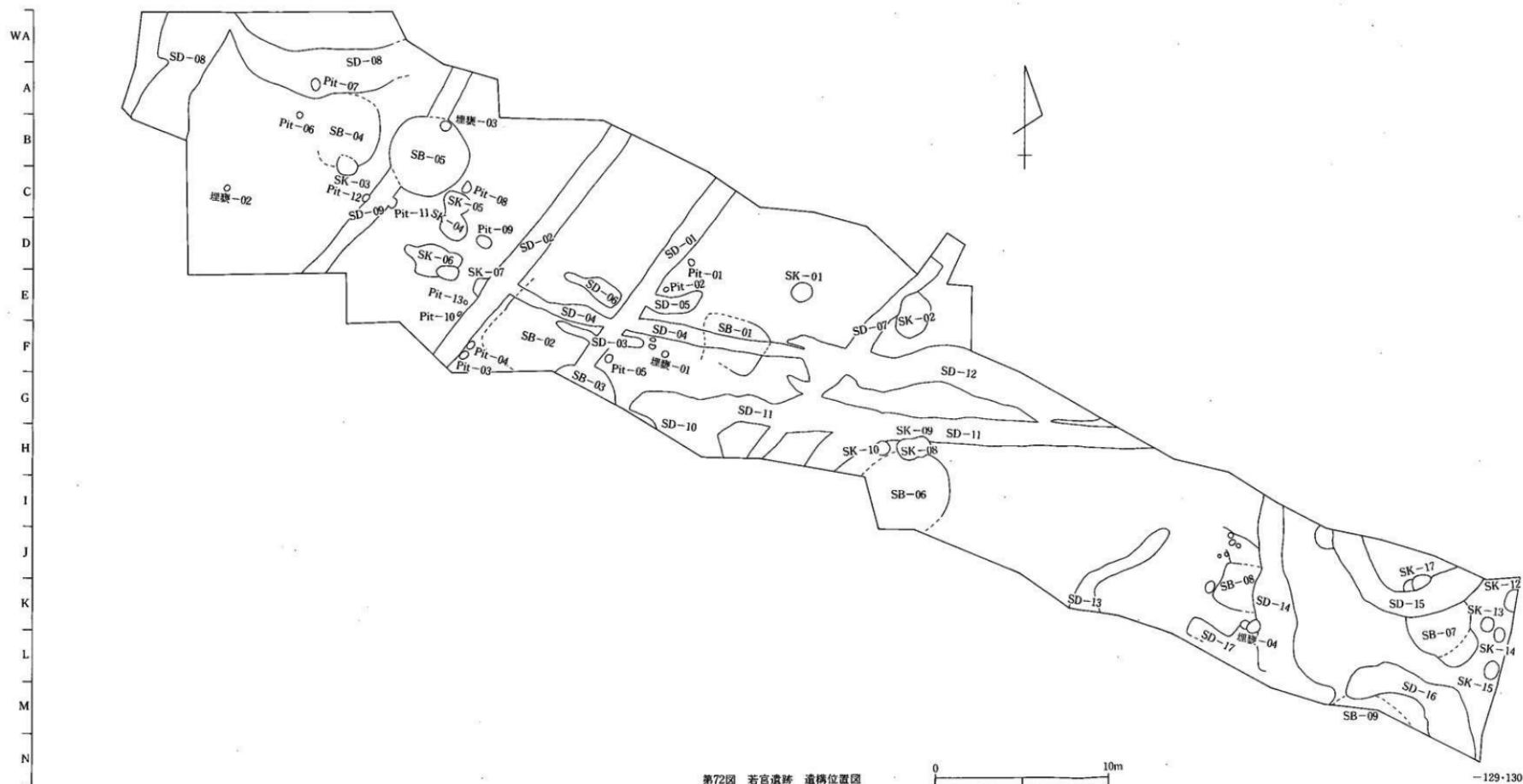
調査方法は、試掘調査により確認された遺構検出面付近まで小型重機（バックホー）で耕作土を除去した上で、磁北を基準とする任意座標を設定した。これをもとに3mグリッドを組み、北から南へA・B・C…と付し、西から東へ1・2・3…と付した。遺構検出は北西端から行ったのであるが、A-9-12にかけて弧状の遺構が検出され、遺物もまとめて出土したことから、さらに北側へ拡張することとした。そこでA列の北側の列を、WAKAMIYAから2文字を用いてWA列と呼ぶこととした。また、遺跡の略記号も同様に、WAKAMIYAから3文字を用いてWAKとした。

7月21日に開始し、二回の中止をはさんで11月12日まで長期間に及んだ発掘調査は、多大な成果を上げることができた。しかし遺物整理は不十分であり、改めて詳細を報告する予定である。

第71図 若吉遺跡・発掘調査地点の現況



6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33



第72图 若官遗跡 遺構位置図

0 10m

第2節 検出された遺構

1. SB-01 (第73図・図版26-3)

北西から南東に細長く延びる調査区の中央部・E~G-17~19グリッドより検出された。壁を検出し得たのはわずかであり、プランははっきりとしないが、方形あるいは台形状を呈するものと思われる。中央部をSD-04に切られ、床面付近まで耕作等による破壊を受け、辛うじて検出できた遺構である。

床面には、部分的に粘土による貼り床と思われる堅鐵な場所が所々に残される。ピットは北壁推定地盤から1基検出されただけである。炉と思われる石組みが、中央やや南側より検出された。偏平礫を床面にはば垂直に立て、その両脇に角礫が置かれていたが、焼土は検出できなかった。本址は住居址ではなく、竪穴状遺構と考えておきたい。

土器はあまり多くなく、ほとんどが小破片でローリングを受けている。時期的にまとまりはない。縄文時代中期中葉洛沢式期から井戸尻式期・同中期後葉曾利I式期からIII式期・同後期前葉塙之内式期と実に様々である。本址は、中期中葉井戸尻式期と想えておくが、確定な根拠はない。また、平安時代前期に属する須恵器壺2点・甕1点が出土しているが、混入であろう。

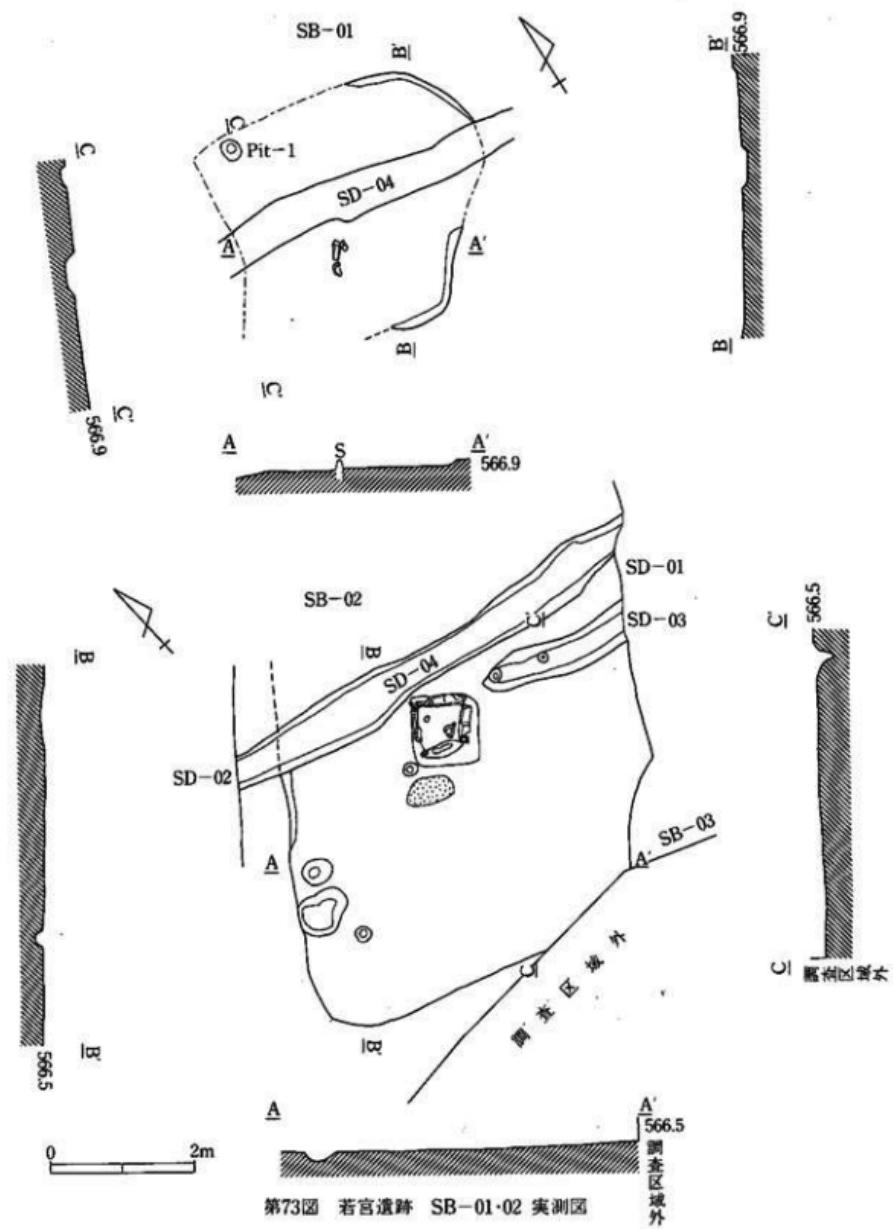
石器では、打製石斧6・横刃型石器2・フレイク8・チップ51の合計71点が出土している。石器はいずれも無茎凹基で、黒曜石製である。打製石斧の中で形態が把握できるものは、全て短骨型でやや小ぶりである。

2. SB-02 (第73図・第77図・図版28-1・2)

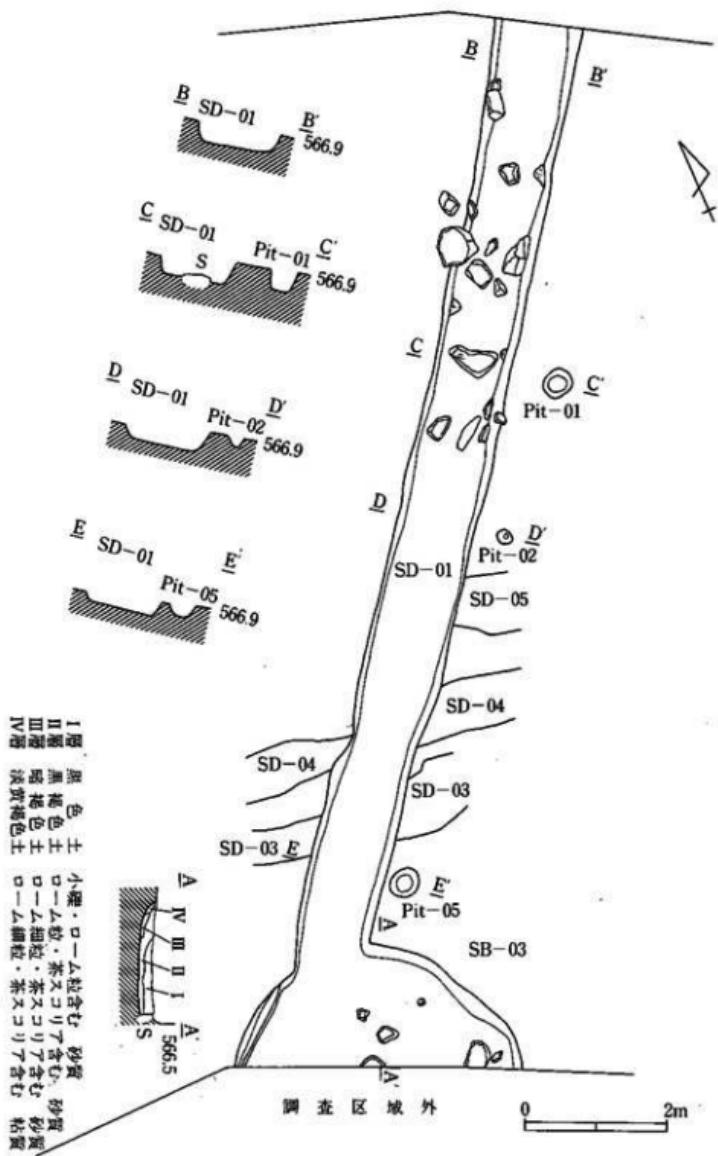
SB-01の西側約10m・E~F-13~15グリッドにおいて検出された。遺構検出時に大形の炉が発見されたため、周囲を精査したところ壁と貼り床の一部が確認された。したがってプランははっきりしないが、一辺5m前後の方形プランを呈すると思われる。SD-01・03・04に切られ、南側の一部は調査区外・SB-03にまで広がるようである。壁は西壁が1m程検出できただけで、壁高は4~8cmとわずかである。

床は、炉の南側と西側から貼り床が検出されているが、東側から北側にかけては不明である。ピットは床面で4基・SD-03底面から2基検出された。炉の西側のピットは、直径15cm・深さ8cmと小形である。石棒が立てられていた穴と推定しておく。Pit-3は攪乱である。炉は一辺90cm以上もある大形の石圓い炉で、正方形を呈する。南北側は礫を抜き取った穴が残され、南東側と北西側は礫の下部のみが残存している。炉の南西側に焼土が確認されているが、炉から搔きだされたおきが置かれた場所であろうか。

遺物はあまり出土していない。縄文時代中期中葉の土器も含まれるが、炉内出土土器により本址の所属時期は、中期後葉曾利III式期と考えられる。石器では、石器2・横刃型石器1・敲石1



第73図 若宮遺跡 SB-01・02 実測図



第74図 若宮遺跡 SB-03・SD-01 実測図

・フレイク2・チップ46の合計52点が出土している。

3. SB-03 (第74図・図版28-3)

SB-02の南隣・F-G-15~16グリッドにおいて北側の一部が検出され、南側の半分以上は調査区域外に延びる。直径4m以上の円形プランを呈すると思われ、北壁と床面の一部をSD-01に切られている。壁は10~23cmを測り、東側では緩やかに、西側ではほぼ垂直に立ち上がる。

床はほぼ平坦であるが、貼り床は確認できなかった。床面には、平坦疊及び角疊が数個散在しているが、ピット・炉は確認されていない。

遺物の出土量はわずかで、縄文時代中期中葉から後葉への移行期の土器がややまとまっている程度である。所謂『焼町土器』が含まれており、その最も新しい段階に本址を位置付けておく。石器は合計17点とわずかで、内訳は石鏃1・打製石斧1・ビエス・エスキュー1・石核1・チップ13であった。

4. SB-04 (第75図~第77図・図版29-1・2)

調査区の北西隅・A-B-10~11グリッドより半壊の状態で検出された。遺構検出面と本址の床面がほぼ同じレベルであり、東壁の一部以外は検出されず、プランも不明である。南壁をSK-03に切られている。検出された壁は4m程で、壁高は3~5cmとわずかである。

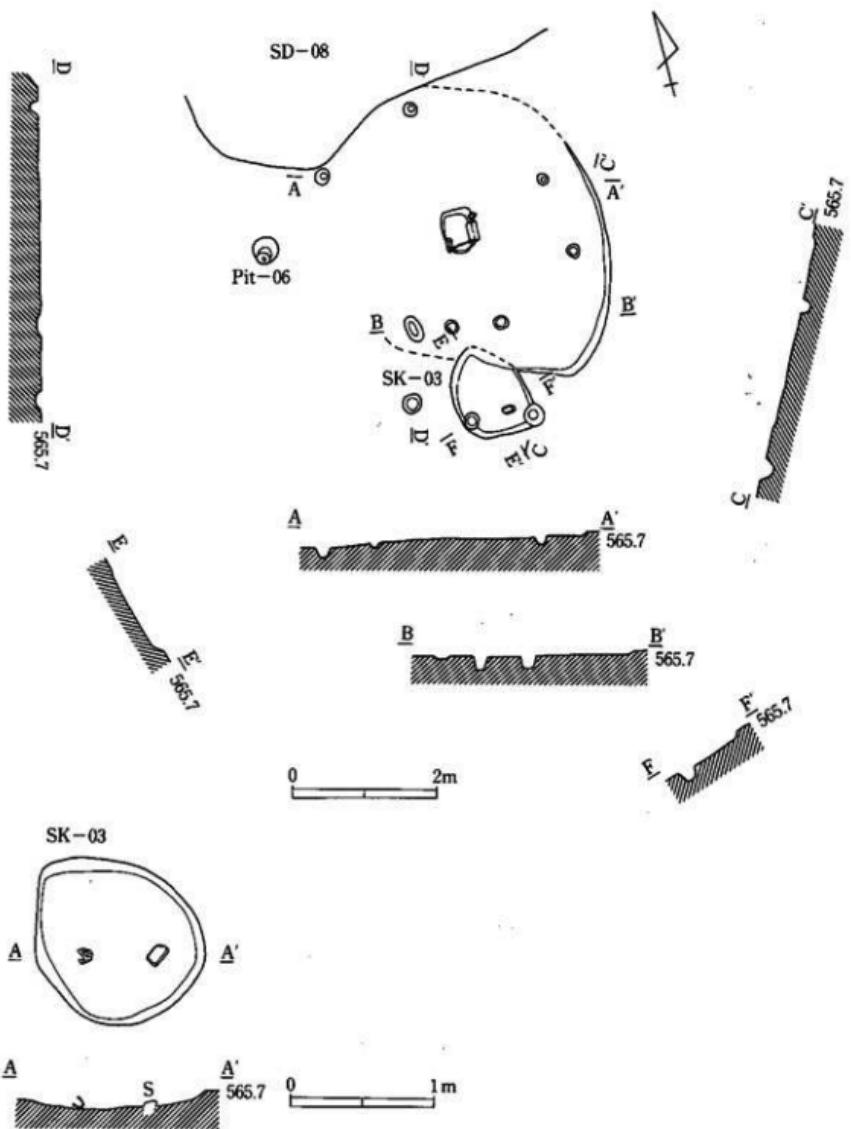
床は炉西側では削平が進み、東壁際より10~15cm低くなる。東半分はほぼ平坦であるが、貼り床は見られなかった。ピットは、床面及びその推定範囲内から8基検出されており、そのうちの6基が主柱穴と思われる。Pit-7・8は補助柱穴であろう。また、SK-03壁脇の2基と、壁推定ラインの外側の2基のピットも本址に伴うものと思われ、壁外柱穴と理解しておく。このピットのあり方から、本後は直径4m程の円形プランを呈していたと推定される。炉はほぼ中央部にあり、南北60cm・東西45cmの長方形で、深さは約5cmと浅い。縁辺部に偏平疊・角疊を据えられており、本来は全周に置かれていたのである。内部には焼土が厚く堆積していた。

遺物はわずかで、縄文時代中期中葉の土器が主体を占める。北陸地方に分布する上山田I式土器も含まれており、本址は藤内II式期に位置付けられると思われる。石器には、打製石器1・石匙1・横刃型石器2・磨石1・鉄平石2・フレイク3・チップ18の合計28点がある。

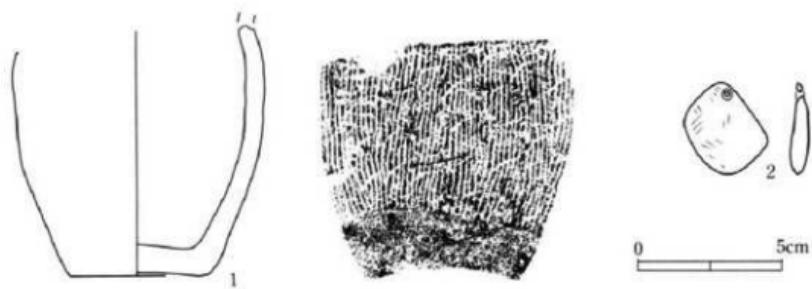
5. SB-05 (第78図・図版29-3)

SB-04の東隣・B-C-12~13グリッドにおいて検出され、直径4.5mの円形プランを呈する。中央やや北西側をSD-09に切られているが、他はほぼ完存している。壁は6~18cmでほぼ直に立ち上がる。

床は東壁側が高く、西壁側・南壁側が5~10cm低くなる。貼り床はないが、基盤層である粘土層まで掘り込んでいるため、堅緻である。ピットは8基検出されているが、柱穴と思われるものは



第75図 若宮遺跡 SB-04・SK-03 実測図

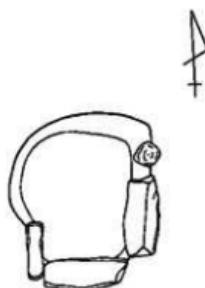


第76図 若宮遺跡 SB-04・SK-03 出土遺物 実測図

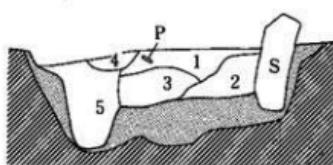
SB-02炉



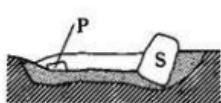
SB-04炉



566.2



565.7



- 1層 暗茶褐色砂質土 土器片、黒曜石片を多く含み、硬くしまる
 2層 茶褐色砂質土 焼土、小礫を含み、硬くしまる
 3層 黒褐色砂質土 焼土、炭化物、骨片を含みしまりはあまりよくない
 4層 暗褐色土 小礫を含み、硬くしまる搅乱
 5層 黒色砂質土 砂粒を多く含み、しまりがなくボソボソしている。炉石をねいた穴

0 50cm

第77図 若宮遺跡 SB-02・04炉 実測図

壁沿いの5基で、Pit-1には角柱礎が埋められていた。他の2基は補助柱穴であろう。東壁脇のSK-1は、南北80cm・東西60cmの不整椭円形を呈し、深さは13~17cmを測る。ここから遺物は全く出土しておらず、本址埋没後の搅乱とも考えられる。炉は北西側の半分程がSD-09に切られているためはっきりしないが、南北70cm・東西40cmの楕円形ピットの縁辺部に小礎が並べられており、SB-04の炉に類似している。深さは3~5cmとわずかであるが、下面には焼土が多量に広がり、炭化物と共に骨片が含まれている。

遺物はやや多く、縄文時代中期後葉の曾利I式期の土器がほとんどである。わずかに焼町土器が含まれており、焼町土器最終段階に位置付けられる住居址である。なお、北壁脇から一括土器が検出され、中期後葉の土器と思われたことから、本址埋没後に埋設された屋外埋藏と把えて、埋藏No.3としたが、本址出土土器とほとんど時間差がないため、本址出土遺物と考えておく。石器は67点出土しており、打製石斧1・磨製石斧2・横刃型石器1・スクレイバー2・磨石1・敲石1・フレイク6・チップ53点とバラエティーに富む。

6. SB-06 (第79図・図版30)

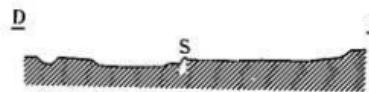
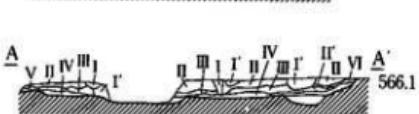
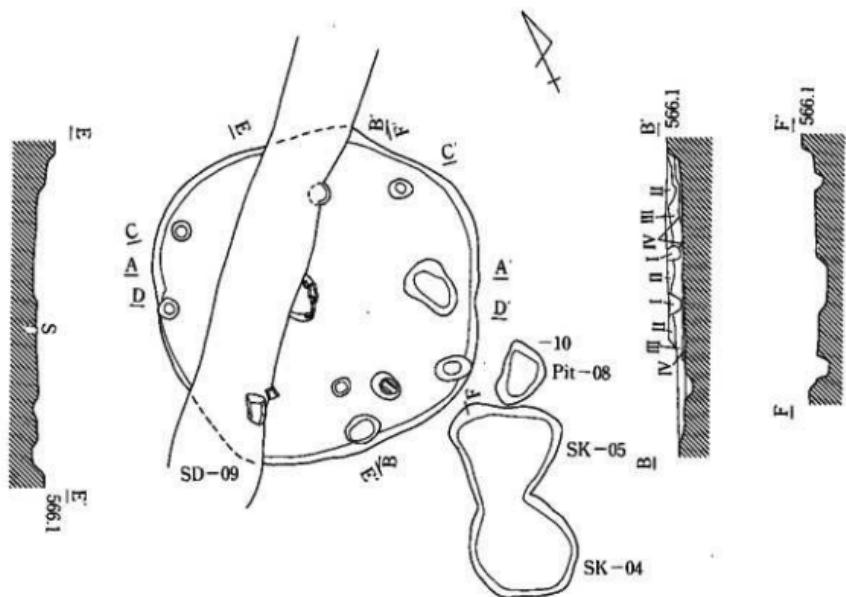
発掘調査区のほぼ中央部であるH-I-20~22グリッドより検出された。炉・ピットと東壁が確認できたが、他は既に削平されてしまっており、プランは不明である。北壁はSK-08・09に切られており、SK-08以西では検出し得なかった。また、南壁もわずかで途切れおり、未検出である。残存していれば、調査区外にまで延びているであろう。東壁の壁高は、3~5cmとわずかしか確認されていない。

床面は、炉の南側及び西側では削平・搅乱を受けており、傾斜・凹凸しているが、東半分程はほぼ平坦である。ピットは5基あるが、Pit-1・4・5が主柱穴と考えられ、未検出のものと合わせて4本柱の住居であったと思われる。これをもとにプランを推定すると、南北4.5m・東西5m程の隅丸方形を呈していた可能性が高い。炉は、南北1m強・東西70cm程の長方形を呈し、縁辺部に偏平礎を直に埋めこんであり、中央部に30×40cmのピットが掘られている。このピットには、口縁部を欠失する土器底部破片が正位に埋められていた(図版30-6)。

遺物はあまり出土していない。床面上及び炉から縄文時代中期中葉末の土器が出土していることから、本址の所属時期は井戸尻III式期と考えられる。石器には、石鎌・打製石斧・横刃型石器・磨石・台石・フレイク各1点とチップ31点があり、合計37点と少ない。

7. SB-07 (第80図・第81図・第83図・図版31-1・2)

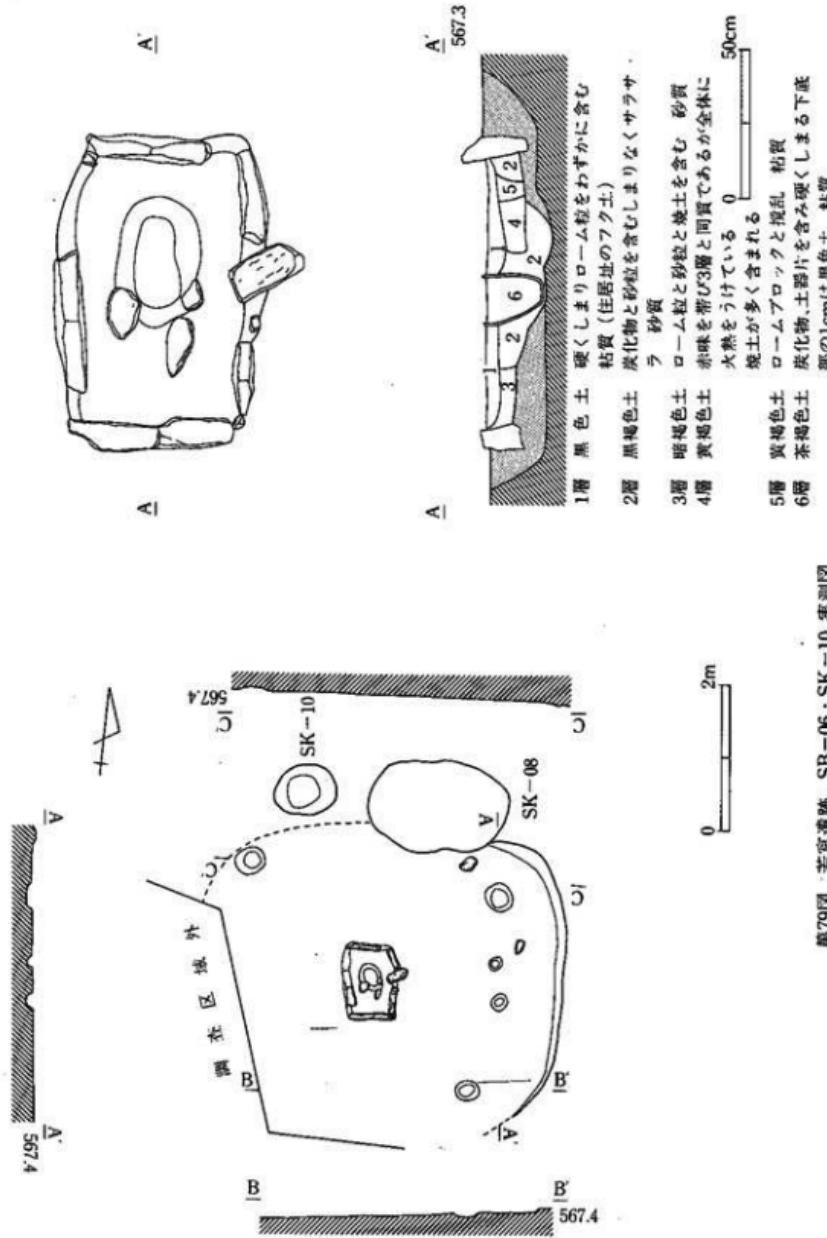
調査区東隅・K-L-31~32グリッドにおいて、北壁をSD-15に切られた状態で検出されている。南壁は、幅2.5m・長さ80cm前後張り出しているが、これは本址の壁ではなく、調査時のミスか別造構によるものである。したがって、本址は直徑3.7m程の円形あるいは隅丸方形を呈していたと思われる。壁高は、東側で7~10cm・西側で3~6cmと共にわずかである。



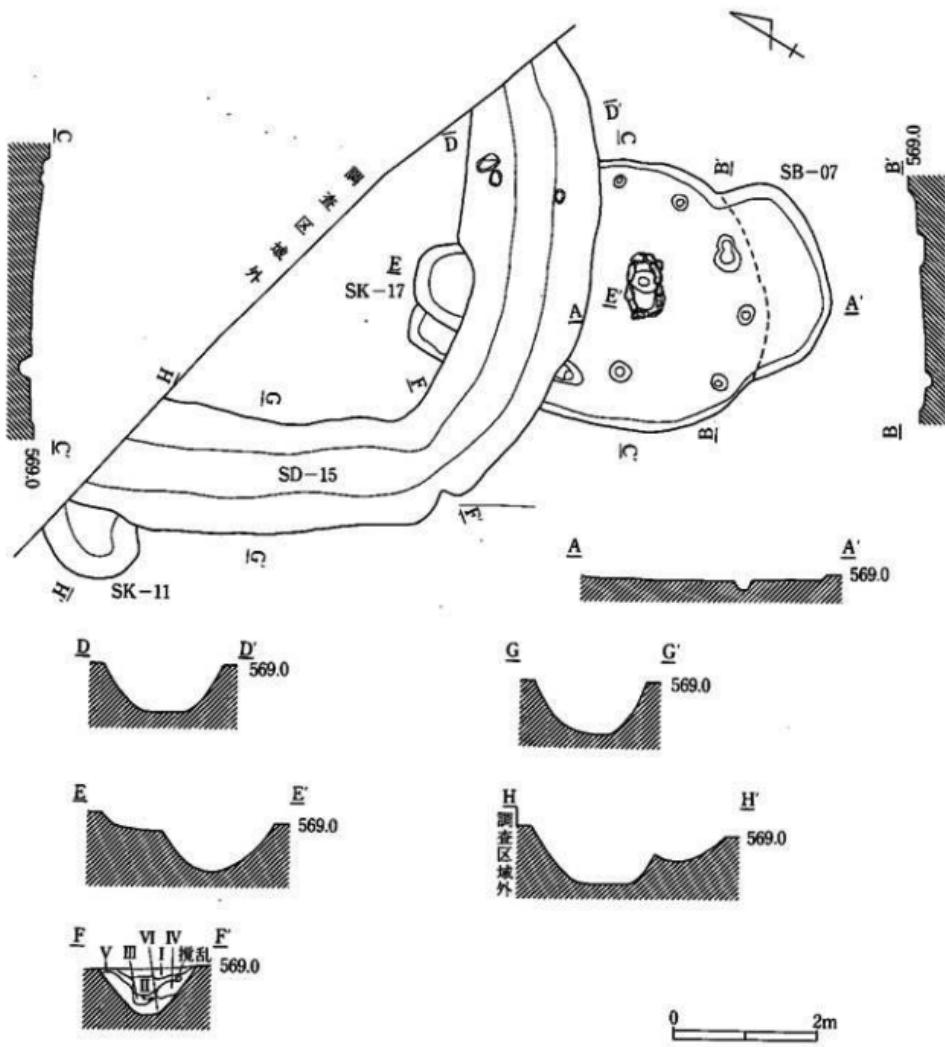
- | | | |
|-------|---------|-----------------------------------|
| I 層 | 灰褐色砂質土 | 小礫を含むサラサラした土 |
| I 層 | 灰褐色砂質土 | I 層より硬くしまっている |
| II 層 | 暗褐色砂質土 | 小礫、炭化物、遺物を多く含む粘土ブロックを含む |
| II 层 | 暗褐色砂質土 | 小礫、炭化物を多く含む II 层より硬く、粘土ブロックが主体になる |
| III 层 | 黒灰色砂質土 | 小礫、炭化物、遺物を多く含む |
| IV 层 | 暗黃褐色粘質土 | ローム粒、スコリアを多く含み、粘性の強い土 |
| IV 层 | 暗褐色粘質土 | IV 层とはほぼ同様だが、やや粘性が乏しい |
| VII 层 | 赤褐色砂質土 | サラサラしたしまりのない土 |

0 2m

第78図 若宮遺跡 SB-05・SK-04-05他 実測図

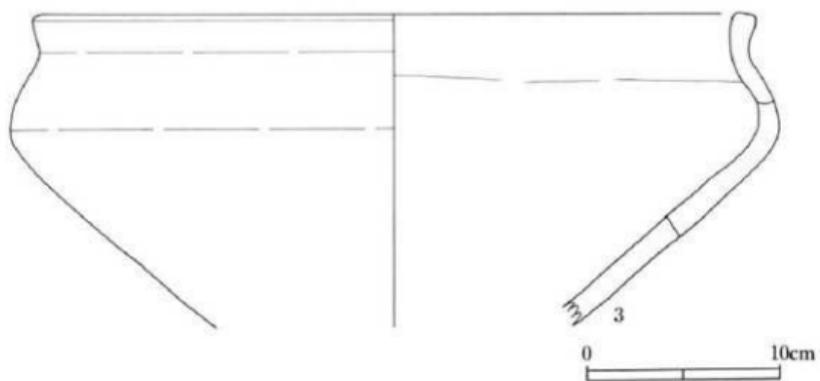
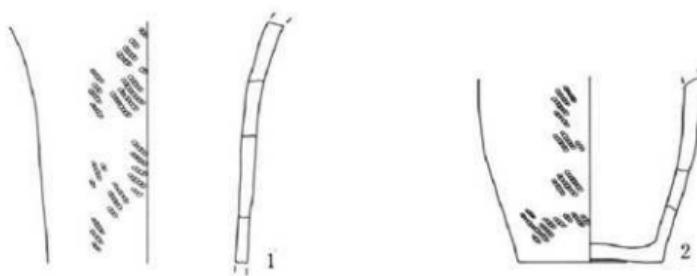


第79図 若宮遺跡 SB-06・SK-10 実測図

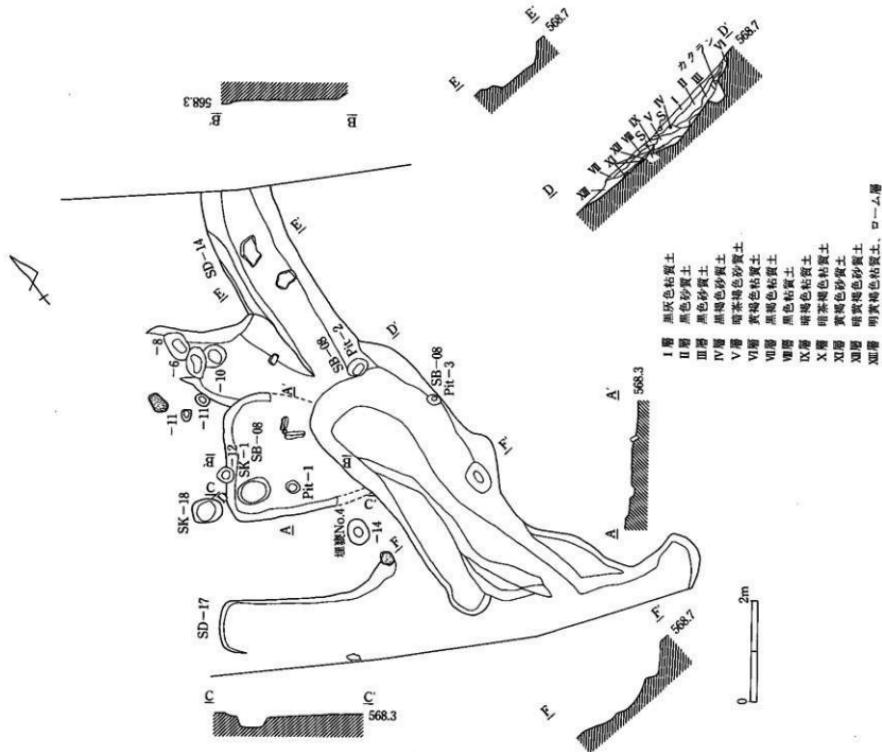


- I層 黒色土 振乱
- II層 黒色砂質土 やや硬くしまり砂粒、白スコリアを含む
- III層 黑褐色砂質土 小礫、遺物を含む
- IV層 黑褐色粘質土 砂粒、炭化物を含み硬くしまるローム粒
- V層 暗黒褐色砂質土 砂粒とローム粒を含む
- VI層 灰褐色砂質土 ローム粒、炭化物を多く含む

第80図 若宮遺跡 SB-07・SK-11・17・SD-15 実測図



第81図 若宮遺跡 SB-07 出土土器 実測図



第22图 若官道# SB-08·SK-18·SD-14·17 美制图

床はあまり堅緻でなく、東側から西側へ緩やかに傾斜している。壁に沿って8基のピットが検出されている。炉は85×55cmの長方形を呈し、中央部に浅いピットが掘られている。炉の縁辺部には直方体の小角礫が並べられており、内部には焼土・炭化物・骨が認められ、炉周辺から土器がまとまって出土している。

出土した土器は、縄文時代中期後葉・曾利I式期に属するものが多く、わずかに同中期中葉・弥生時代後期の破片も含む。石器には、炉石に転用されていた石皿1点の他に、打製石斧・敲石・フレイク各1点・チップ17点があり、合計は21点である。

8. SB-08 (第82図・第83図・図版31-3)

調査区東側で検出されたSD-14を掘り下げる際に、『L』字状の石囲い炉が発見されたため、竪穴住居址の存在が明らかになった。しかし、この段階では既に床面はなく、検出できたのは本址の掘り方だけである。大部分をSD-14に破壊され、炉の一部と本址の柱穴と思われるピットが数基残されていた。なお、炉が検出されたのはJ-28グリッドで、炉の位置とピットのあり方から推察すると、直径5m弱の円形プランを呈していたと思われる。壁の推定ライン上に埋甕No.4が位置しており、本址の一部と考えることも可能である。

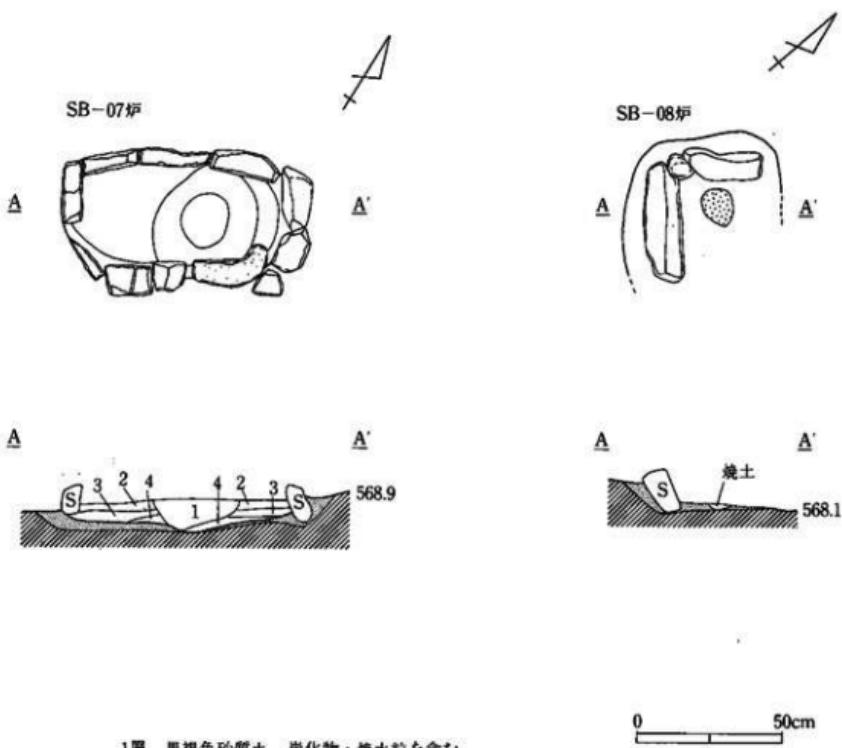
上記の状況であるため、床面は検出されておらず、掘り方より3~5cm程上位に貼り床による床面があったものと思われる。ピットは、掘り方底面の2基と、SD-14内の2基・SD-14脇の2基が本址の柱穴と考えられる。炉は、偏平礫2個でL字状に組み、その接点に小角礫が置かれており、その内面から焼土がわずかに検出された。

遺物についてもこうした状況のため、本址に伴うとして取り上げられたものはわずかで、縄文時代中期後葉・曾利II式期の土器が最も多い。埋甕No.4も同時期であり、位置的にも同一造構と見ることができる。また、同期前葉・堀之内II式期の土器も少くないが、炉の形態から中期後葉の可能性が高い。石器は、打製石斧4点と横刃型石器・石皿・磨石・鉄平石各1点とチップ9点で、合計17点とわずかしか出土していない。

9. SB-09・10

上記の8軒の竪穴住居址の他に、検出はしたもの未調査の住居址が2軒ある。一軒は調査区内に壁がわずかに含まれたSB-09で、調査区南東端・M-30~31グリッドにおいて検出された。SD-16の南側から弧を描く落ち込みが発見されたが、最大幅60cm程しかなく、掘り下げることは困難であると判断されたため、未掘である。SD-15・16と同様の溝状造構とも考えられるが、直径が5m前後と推定され、竪穴住居址とした。所属時期は不明である。

調査区西端の南側に設定したTR-11から、SB-10が検出された。この場所は住宅団地造成予定地であるため、一括土器を取り上げただけで、埋め戻してある。縄文時代中期後葉・曾利II式期の住居址と思われるが、プラン等詳細は不明である。



第83図 若宮遺跡 SB-07・08炉 実測図

10. 屋外埋甕

豎穴住居址に伴わないと思われる埋甕は、調査時において4基確認されている。しかし、SB-05の頂で既に記してあるとおり、埋甕No.3はSB-05に伴う可能性が高い。また、SB-08の頂に記したが、埋甕No.4がSB-08に伴う可能性も考えられる。

(1) 埋甕No.1 (第84図・図版32-1)

F-17グリッドにおいて検出された。直径50cm程の円形を呈するピットに、検出面における直径40cmの土器底部破片が正位に埋設されていた。縄文時代中期後葉・曾利Ⅲ式期の深鉢で、二本四単位の隆帯が垂下しており、地文には縄文が施文されている。

(2) 埋甕No.2 (第84図・第86図1)

調査区西端・C-8'グリッドから出土した。直径40×48cmの楕円形ピットから、正位に埋設された縄文時代中期後葉・曾利Ⅲ式期の深鉢が検出された。ピット底面の平坦礫に土器の底面がわずかに接していた。二本二単位の隆帯が垂下し、地文にはR.L.縄文がほぼ全面に施文されている。

(3) 埋甕No.3 (第85図・第86図2)

B-13グリッド・SB-05覆土上面において一括土器が横位で検出された。土器を取り上げると浅いピット状を呈しており、ピット下底面はSB-05床面より数cm高位にあることから、本址埋没後に埋設された土器と考えたが、住居址出土土器とほぼ同時期であり、住居址に伴う可能性が高い。しかし、埋甕である可能性を全く否定するものではない。曾利Ⅰ式期直前期に属する。

(4) 埋甕No.4 (第85図・図版32-2・3)

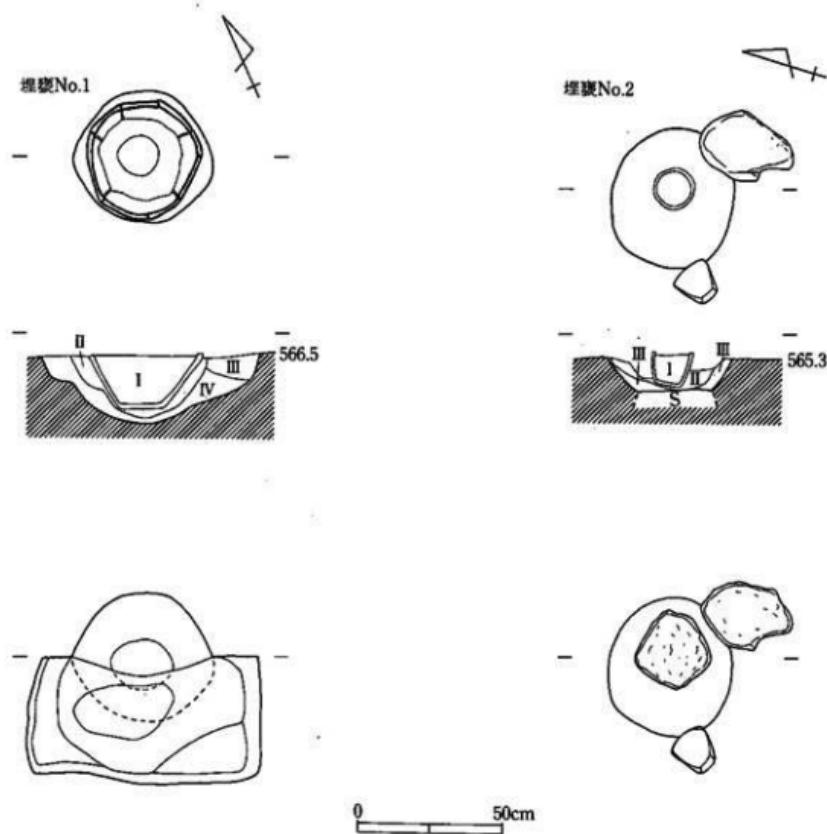
K-28グリッド・SB-08南側に位置し、上面に数枚の偏平礫が並べられ、その直下にはほぼ完形の土器を正位に埋設してある。SB-08に伴う可能性も考えられるが、積極的に肯定し得る根拠はない。縄文時代中期後葉・曾利Ⅲ式期に属する深鉢である。

11. 土 壤

住居址床面で検出された土壤を除くと、18基の土壤が検出された。形態・大きさ・遺物出土量等実に様々であるが、所属する時期はいずれも縄文時代中期と考えられる。個々の説明は第6表に記すので省略するが、SK-01・05・10・14等は縄文時代以降の遺構か擾乱である可能性も考えられる。

12. 石棺墓 (第87図・図版34-1・2)

TR-17及びその拡張区から1基検出されている。全長約3m・幅45~60cmと長大であるが、南西側の破壊が著しく、壁が確認されていないため、別遺構である可能性も考えられる。南西隅に直径20cm・長さ50cm程の円柱状の礫が横たわっており、当時は石柱として立てられていたと思われる。中央部は一面に偏平礫・鉄平石が敷きつめられ、北東隅からミニチュア土器2個・骨・炭化物・土器破片等が出土している。縄文時代後期前葉・塙之内II式期に属する遺構である。

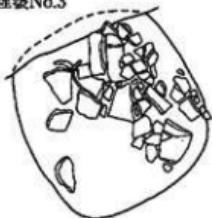


I層 暗褐色粘質土 小礫・スコリア細粒を含む
 II層 暗褐色砂質土
 III層 暗褐色砂質土 I層より黒味
 IV層 明褐色砂質土 小礫を含む

I層 暗褐色砂質土
 II層 暗褐色土 基盤層(粘質ローム層)
 の細粒が混入
 III層 基盤層 細粒を含む 砂質土

第84図 若宮遺跡 埋葬No.1・2 実測図

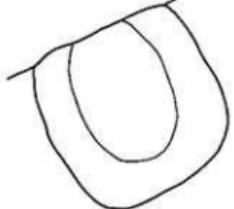
埋甕No.3



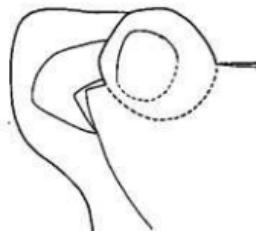
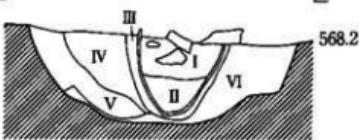
埋甕No.4



SD-09



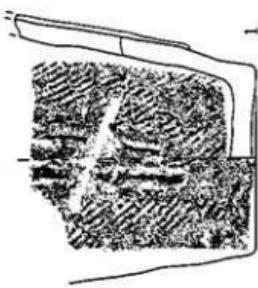
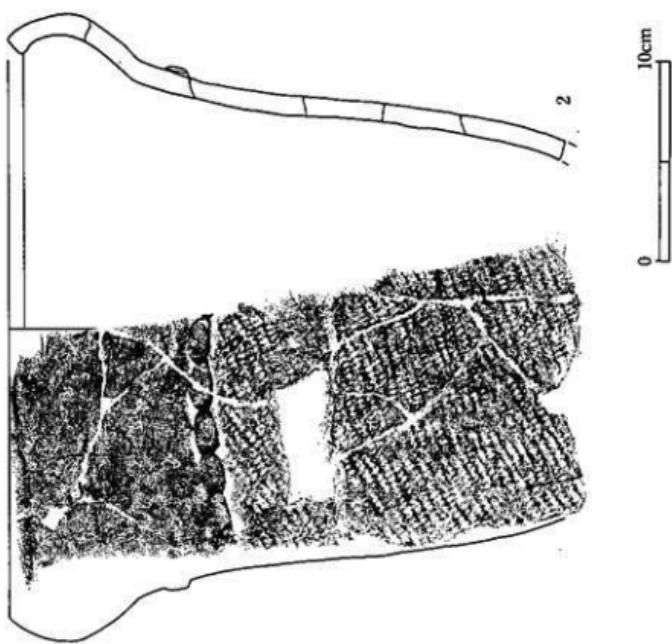
0 50cm

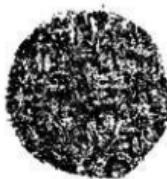
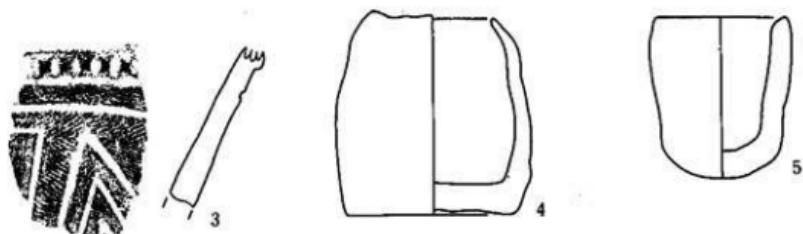
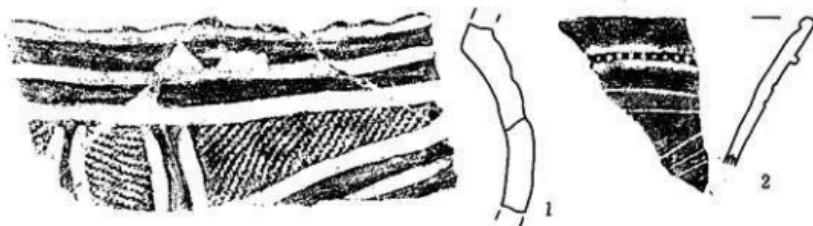


I層	暗灰色土	炭化物・土器片含む	砂質
II層	暗黄褐色土	小礫・炭化物・ローム粒含む	砂質
III層	暗黄褐色土	ローム粒・炭化物含む	粘質
IV層	茶褐色土	炭化物・小礫・ローム粒・骨片含む	粘質
V層	黄褐色土	ロームブロック・小礫含む	粘質
VI層	明黄褐色土	基盤土・ソフトローム	粘質

第85図 若宮遺跡 埋甕No.3・4 実測図

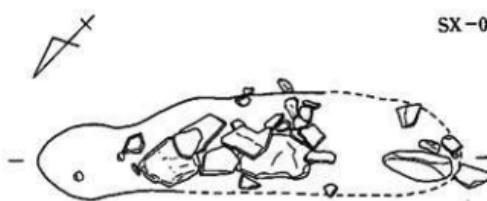
第86圖 若宮遺跡 墓葬No.2・3出土土器 實測圖





0 5cm

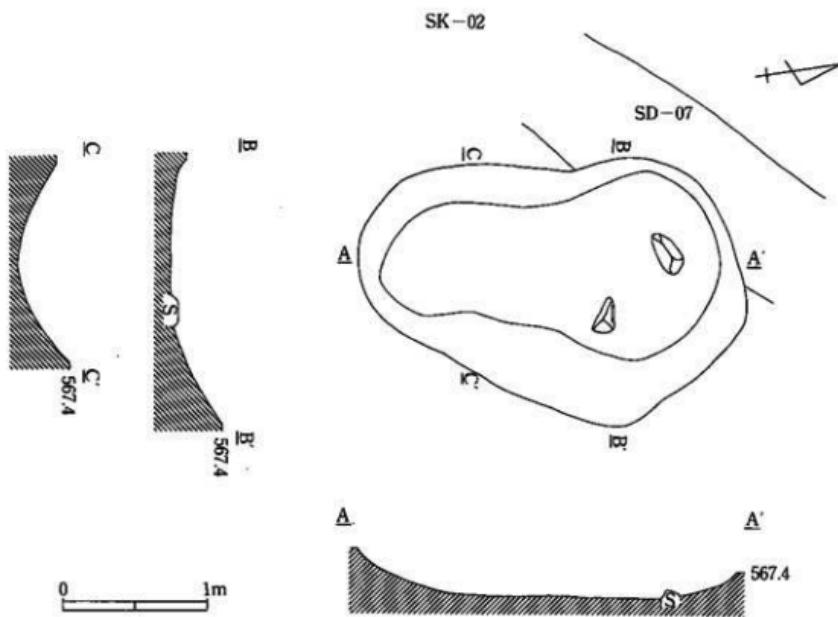
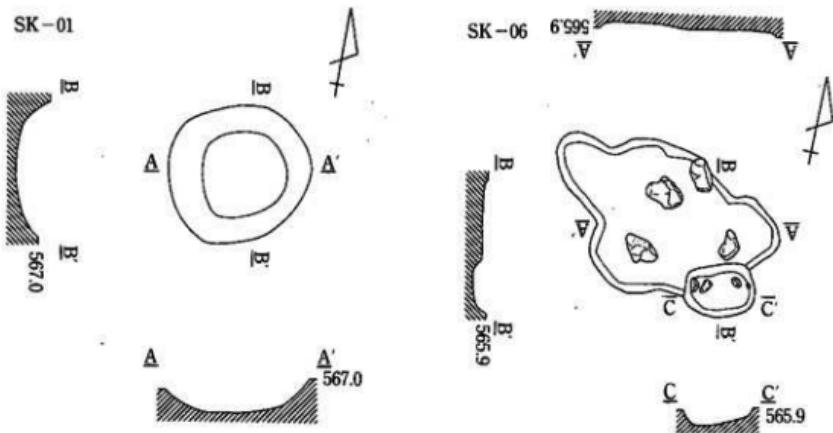
SX-01



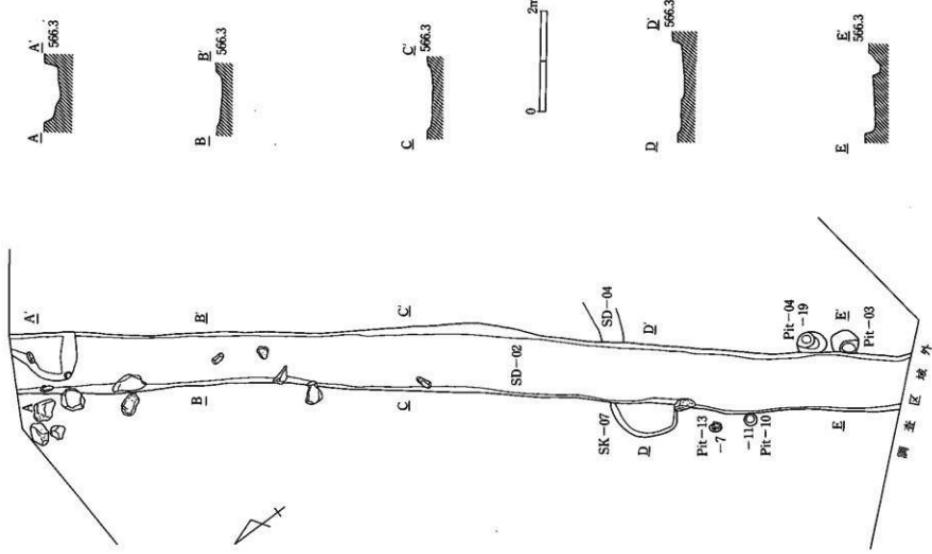
570.0

0 1m

第87図 若宮遺跡 SX-01 実測図



第88図 若宮遺跡 SK-01・02・06 実測図



新85区 若宮遺跡 SK-07, SD-02 實測圖

13. 溝状遺構（付図-4・第89図・第91図～第96図他）

中世の堀と思われる1基を含め、17条の溝状遺構が検出された。このうち調査区西半において検出されたSD-01・02・07・08の西側の一部・09は平行して掘られており、規模がほぼ同じであることから、同時期に同一目的のために掘削されたものと思われる。一帯は水はけが悪いことから、桑園であった時に（重機で？）掘られた溝であろう。また、これらと交差しているSD-03・04・05・06及び調査区東側のSD-17は、同時期かその前後に掘られた跡と考えられる。

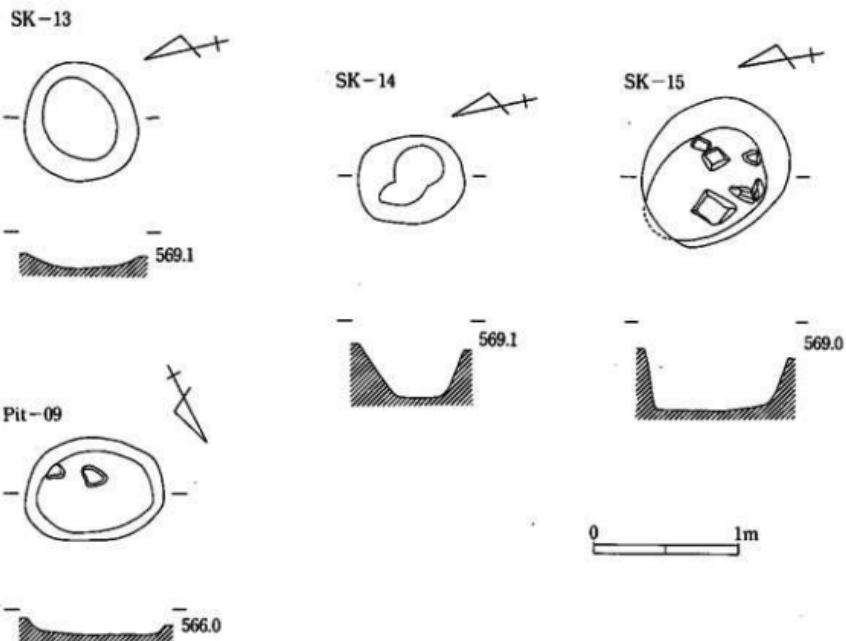
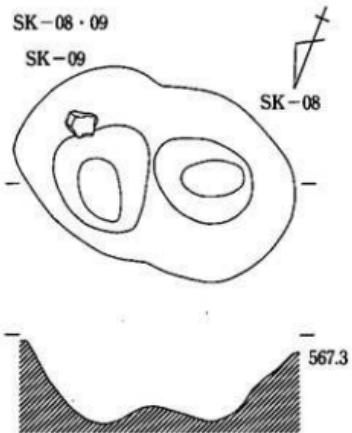
中世の堀と思われるSD-11は、幅1.2～1.5mではほぼ一定しており、ほぼ東西方向に約25m直線的に延びる。西側の二箇所で南側へ折れ曲がっており、東側では直交する位置にSD-14が延びている。

SD-10・12は自然流路と考えられ、砂礫及びローリングを受けた遺物が多量に出土している。SD-08・15・16は同様な弧を描き、深さはSD-08・15で40cm以上・SD-16で約30cmあり、多量の遺物が出土しているが、性格は不明である。

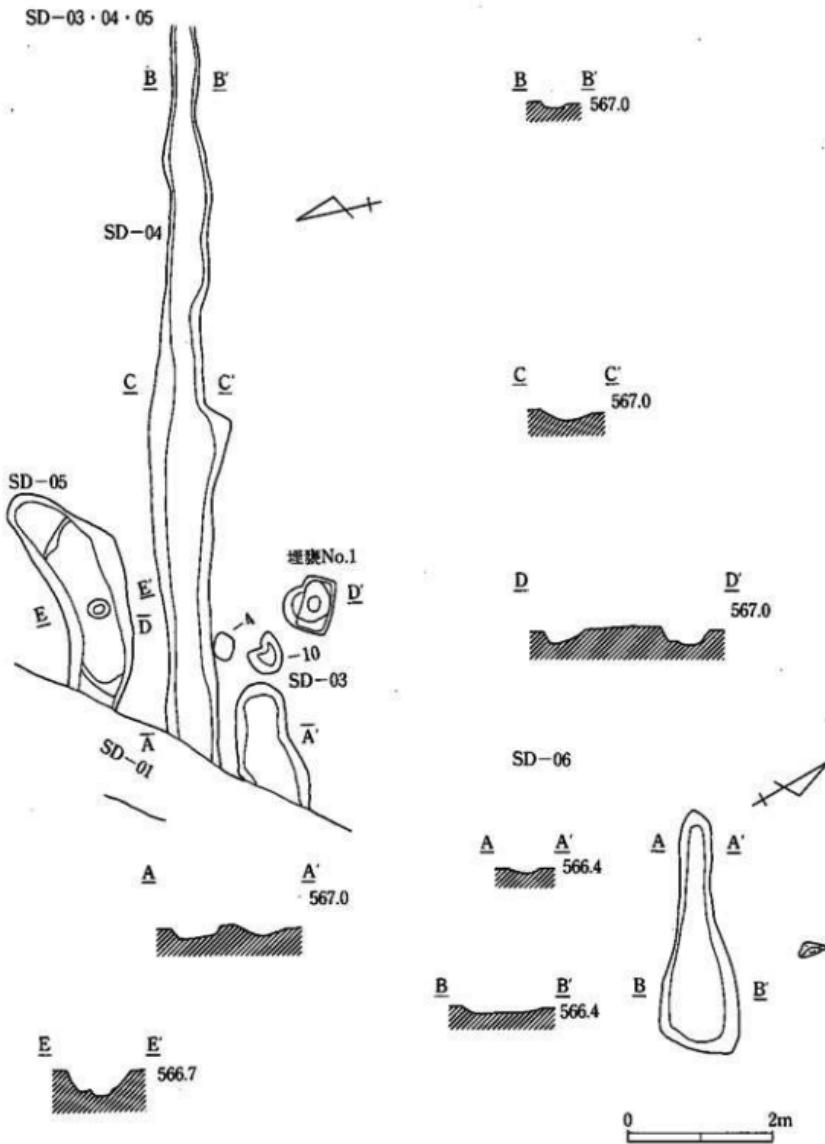
上記のはかに、遺構との関連が明らかではないピット7基・火床・集石（？）などがわずかに検出されているが、伴出遺物がほとんどないため、説明は割愛する。

第6表 若宮遺跡土壌一覧表

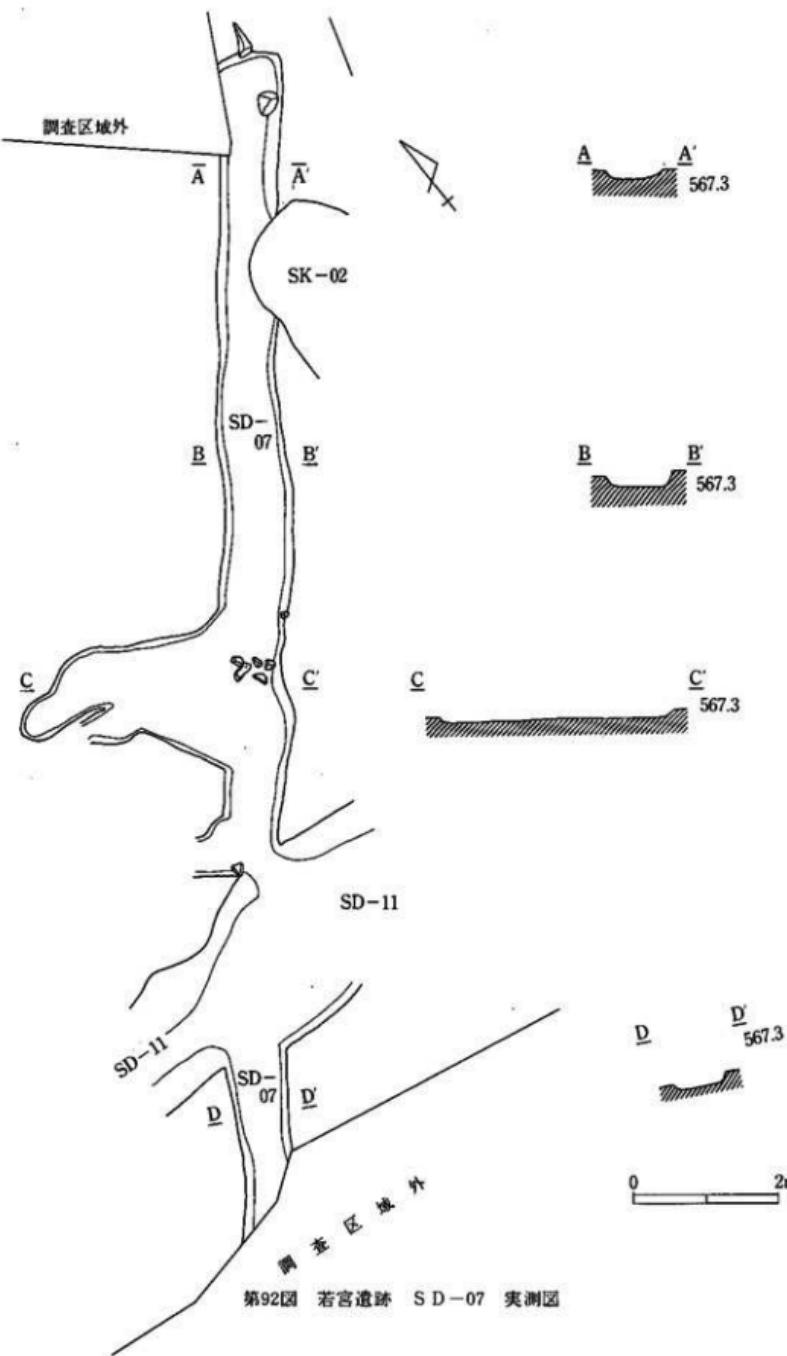
土壌No.	平面図	規模(cm)			出土遺物			備考
		長径	短径	深さ	縄文時代中期	縄文時代後期	石器	
SK-01	不整円形	100	90	22	少量	わずか	1	骨片
SK-02	長楕円形	280	185	30～39	多量	なし	44	「焼町土器」含む
SK-03	五角形	130	100	5～7	わずか	なし	2	
SK-04	不整円形	150	140	15	少量	なし	10	「焼町土器」含む
SK-05	三角形	145	145	15	わずか	なし	1	SB-04を切る
SK-06	不整長楕円形	335	210	10～20	少量	なし	2	土器器・瓦芯器・わずか
SK-07	楕円形	120	(70)	12	少量	なし	5	SD-02に切られる
SK-08	円形	135	120	47	多量	なし	10	土偶 1 SB-06を切る
SK-09	不整円形	130	115	55	わずか	なし	0	SK-08と複合
SK-10	楕円形	85	70	37	なし	なし	1	
SK-11	楕円形?	130	(100)	38	多量	少量	7	堀之内Ⅱ式土器含む
SK-12	楕円形?	115	(70)	50～60	多量	わずか	2	「焼町土器」含む
SK-13	円形	85	80	14	なし	なし	0	
SK-14	楕円形	75	60	37～41	なし	なし	0	
SK-15	楕円形	105	90	40	わずか	わずか	2	
SK-16	-	-	-	-	多量	わずか	48	SB-08に変更・欠番
SK-17	楕円形?	110	(80)	28	わずか	わずか	1	
SK-18	楕円形	60	48	9	なし	わずか		

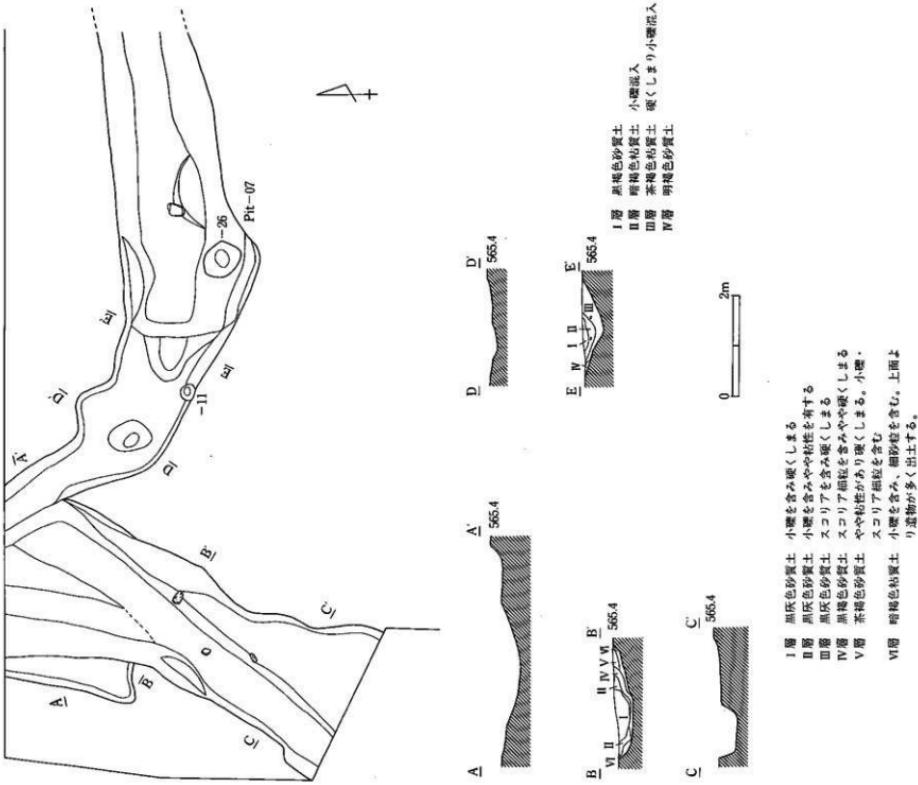


第90図 若宮遺跡 SK-08·09·12~15 Pit-09 実測図

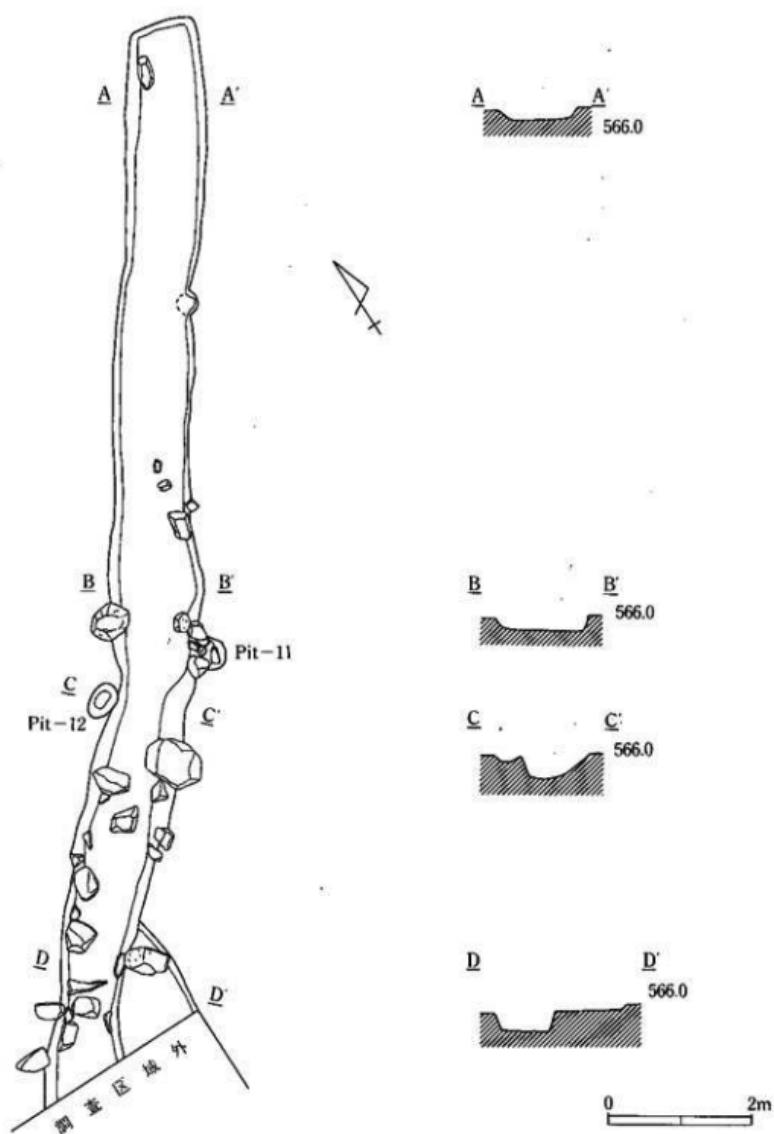


第91図 若宮遺跡 SD-03~06他 実測図

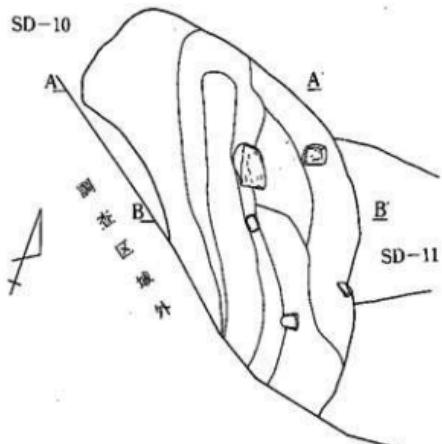




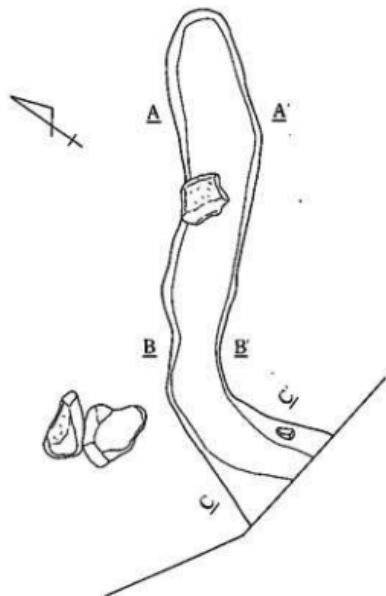
第93図 若宮遺跡 SD-08. Pit-07 実測図



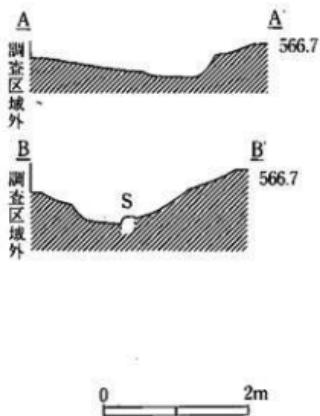
第94図 若宮遺跡 SD-09. Pit-11・12 実測図

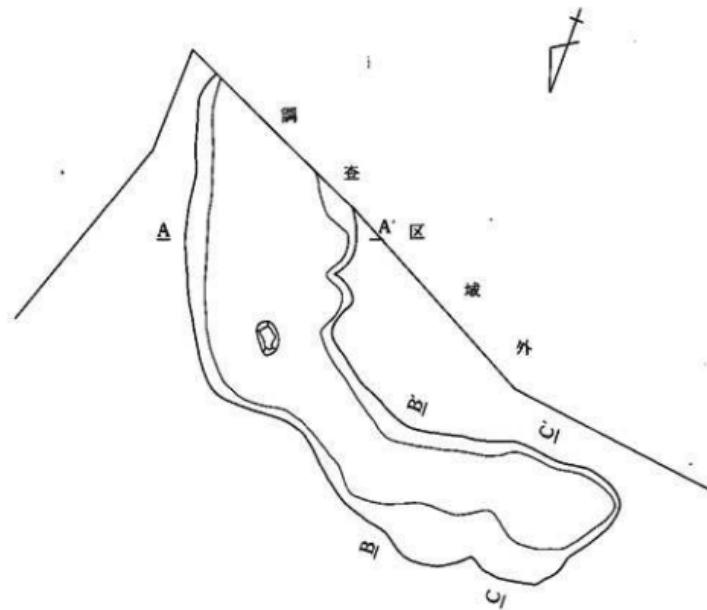


SD-13



第95図 若宮遺跡 SD-10・13 実測図





I 层	黒褐色粘质土	砾遗物含む
II 层	黑色砂質土	砾遗物・ローム粒含む
III 层	黄褐色砂質土	ローム・砂粒含む
IV 层	暗褐色粘質土	ローム粒含む

0 2m

第96図 若宮遺跡 SD-16 実測図

第3節 遺構外から出土した遺物

若宮遺跡では、整理用コンテナ（深型）で約60箱に及ぶ多量の遺物が出土した。その約7割は竪穴住居址・溝状遺構等の遺構から出土しており、遺物の大半は遺構と同じく縄文時代中期中葉から後葉に属する。同後期・堀之内II式期と中世の遺構もわずかに検出されているため、当該期の遺物も少量含まれるが、遺構外から出土した遺物の所属時期は、ほとんどが縄文時代中期中葉から後葉である。ここでは、該期以外の遺物について記すこととする。

1. 弥生式土器

遺構（SB-07・SD-14等）への混入及びグリッドから少量出土している。ほとんどは小破片であるが、SD-14出土の壺は頸部以下が復原できた。頸部径約4.5cm・胴部径8.9cm・底部径3.6cm・現在高7.2cmと小型で、外面に赤色塗彩が施される。所属時期は不明である。この他に、高壺・甕などが出土しているが、時期比定は困難である。

2. 土師器・須恵器

出土状況は弥生式土器と同様であり、出土量もわずかである。溝状遺構及び周辺グリッドから古墳時代前期の土師器がややまとめて出土しており、溝状遺構のいくつか（SD-14・15他）は該期に属する可能性が考えられる。しかし、縄文時代中期の土器が圧倒的に多く、上記遺物により溝状遺構の時期を決めるには問題が残る。

この他に、平安時代前期を中心とする土師器・須恵器の壺・甕などが少量ずつ出土している。

3. 土製品（巻頭図版7-2）

土偶11点・土製耳飾り1点・土製円板2点などが出土している。土偶はいずれも破片で、胴部2・頭部1・腕部1・脚部7と脚部が多い。頭部は、頂部が平坦になる所謂『カッパ型土偶』である。脚部は両方とも女性を示し、一方は胸部に乳房、他方は性器をリアルに表現している。

土製耳飾りは1点のみの出土で、白型を呈し中央に一孔が貫通している。

縄文時代中器の遺跡を発掘調査すると、土製円板は通常多量に出土するのであるが、若宮遺跡からは2点しか出土していない。土製円板は土錐・紡錘車・呪術等様々な用途を想起できるが、分類は現在のところ不可能である。

4. 石器・石製品

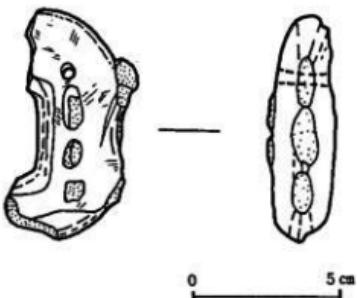
遺構出土品も含め、総数3437点の石器類が出土している。大部分は縄文時代中期中葉から後期前葉に含まれるが、弥生時代に属する有孔磨製石錐が1点含まれている。

第六章 次郎淵遺跡・前田遺跡・唐沢遺跡の調査

第1節 調査の概略

1. 次郎淵遺跡の調査

平成3年度に6本・平成4年度に9本のトレンチを設定して調査を行ったのであるが、屋敷遺跡に近接するTR-9から、石臼が埋設された状態で検出された以外には、遺構は発見されていない。遺物についても、TR-10から自然流路と思われる黒色土の落ち込み内から、土師器・須恵器等がまとまって出土した以外には、目を引く出土遺物はない。なお、本遺跡・上田市分からは、滑石製子持勾玉1点（第97図）と滑石製紡錘車1点が採集されている。2点共古墳時代の遺物である。



第97図 次郎淵遺跡出土の子持勾玉

2. 前田遺跡の調査

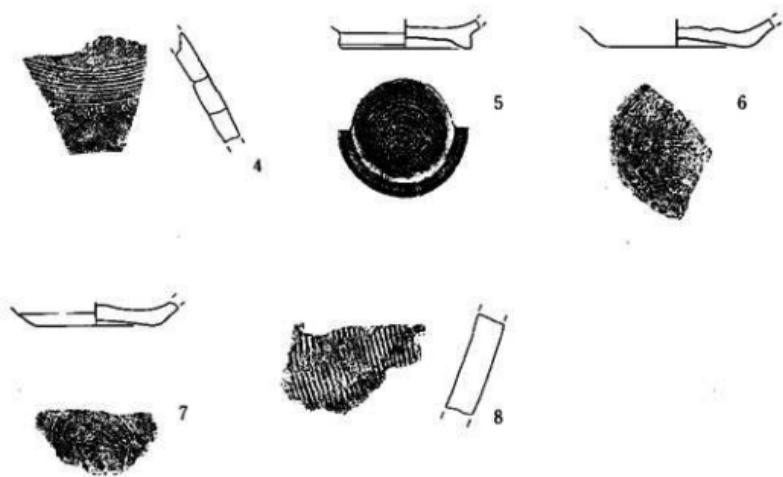
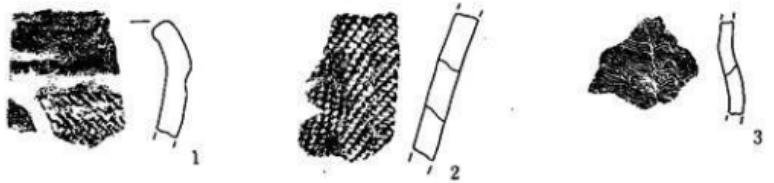
平成3年度に3本・平成4年度に2本のトレンチ調査を行い、平成4年度と平成5年度に立会調査を行った。トレンチ調査では、TR-3から古墳時代前期の土師器と平安時代の土師器・須恵器がややまとめて出土した以外に成果は上がらず、遺構は全く検出されなかった。

平成4年度の立会調査においては、TR-4南側の水田から、宅地に使われたと思われる平坦な切石4枚が出土した（図版36-2）だけで、遺物もほとんど発見されなかった。

平成5年度の立会調査では、深井氏居館推定地北側の道路拡幅により、堀推定地の掘削・埋め立て工事が実施されるのに合わせて、土層観察・遺物採集を行った。しかし、ここは最近の水路改修により土砂が大きく動かされ、中世の遺構に関連する発見はできなかった。

3. 唐沢遺跡の調査

遺跡の中央部を東西に走る農道の拡幅工事が行われた平成5年度に立会調査を行った。南側は擁壁を作り盛り土をし、北側は切り土をしてU字溝を設置する工事であり、現道よりそれぞれ約2m拡幅される。下水道工事もほぼ同時期に行なったため、立会調査は数回しか行えなかつたが、遺構は全く検出されず、遺物も平安時代に属すると思われる土師器・須恵器の小破片が数点ずつ採集されただけであり、図示し得る遺物はない。



第98図 前田遺跡 出土土器 実測図

第2節 検出された遺構と出土した遺物

1. 次郎淵遺跡

直径36cm・高さ27cmを測る石臼の下石が、直径42cmの円形ピットに約8cm埋設されていた。ピットからは、石臼以外何も出土しておらず、墓址等の可能性は低い。南側に広がる屋敷遺跡の核とも言える『正村屋敷』の土塁から延びる石垣直下にあり、石垣に直交するTR-15からは、堀と思われる落ち込みがあったことから、この石臼は土塁・堀に伴う何らかの施設の礎石と考えることが可能である。また、土塁補強用に埋設されたとも考えられるが、わずかな調査面積のため不明である。大部分が現集落西側の畠地・果樹園として残されている屋敷遺跡の発掘調査が、この謎を解く鍵であることは確かである。

遺物はわずかであるが、平安時代前期を主体とする土師器・須恵器がやや多い。縄文式土器は中期後葉が主体で、後期前葉もわずかに含まれる。石器は、打製石斧2・磨製石斧1・横刃型石器1・磨石2・敲石1・砥石2・石臼1・フレイク2・チップ15の27点が出土している。砥石と石臼は平安時代から中世に属すほかは、縄文時代の遺物であろう。これらの他に、弥生式土器・陶磁器・鉄製品が少量ずつ出土している。

2. 前田遺跡（第98図1～10）

遺構は検出されていないので、遺物についてのみ記す。1は縄文時代中期末・加曾利E IV式期の口縁部破片で、口唇部は無文になる。2は縄文のみの施文であるため判然とはしないが、1とほぼ同時期と考えられる。3・4は弥生時代後期の土器で、3が甕・4が壺の破片である。5～9は平安時代の須恵器で、5～7の壺底部にはいずれも回転糸切り痕が残る。9は須恵器壺で、环よりやや古い段階に位置付けられよう。10は土師器無高台環で、内面に黒色処理が施される。

図示し得なかった遺物には、石器3点（敲石・フレイク・チップ各1）・古墳時代前期の土師器（壺；一括土器）・近世以降に属すと思われる陶磁器の小破片2点などがある。

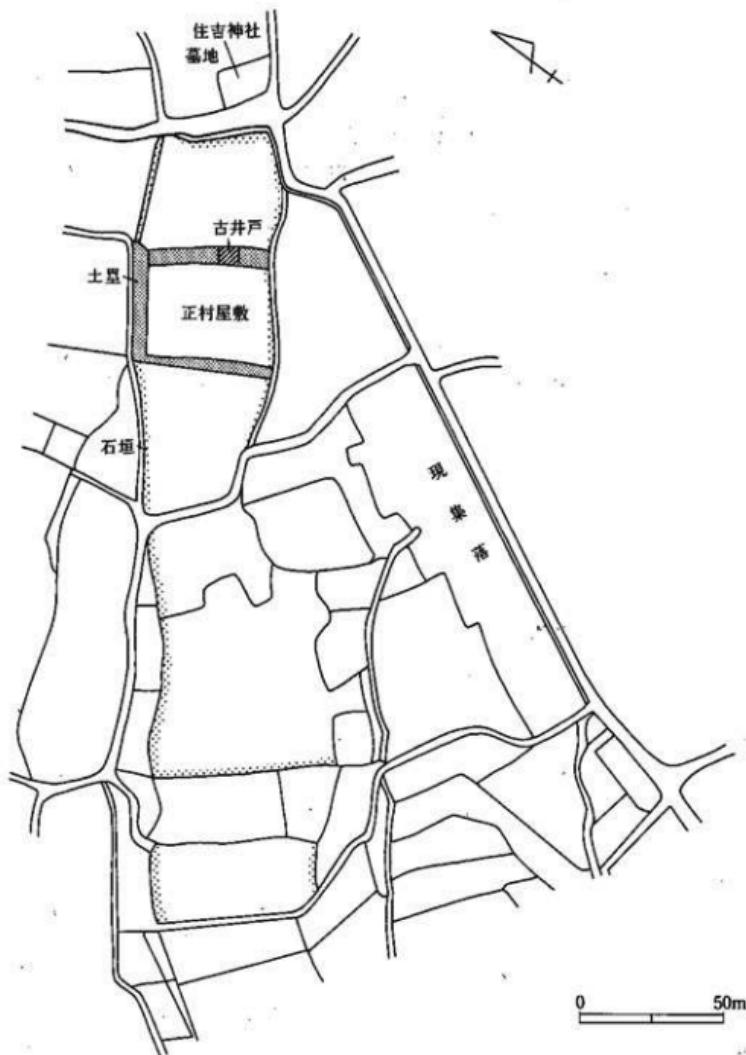
3. 唐沢遺跡

本遺跡の調査においては、遺構が発見されておらず、遺物もわずかしか採集できなかった。しかも遺物は小破片のみで、図示し得るものは1点もない。

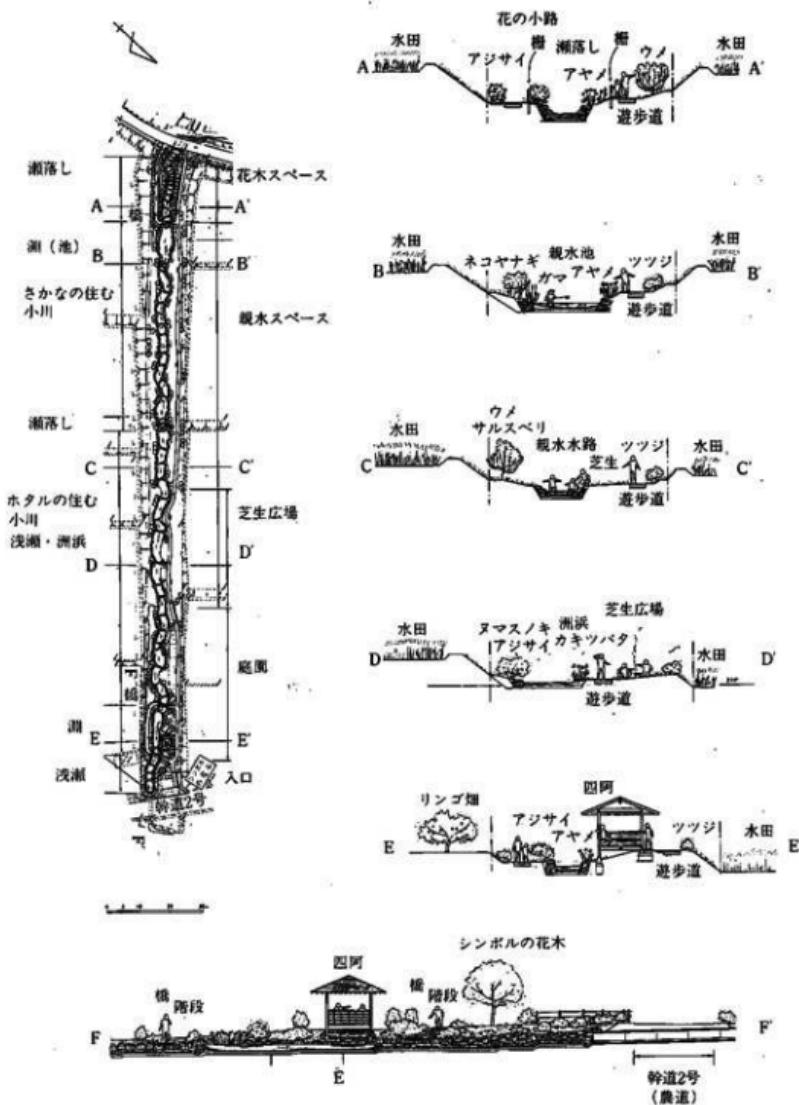
縄文式土器が1点出土しているが、中期に属すると思われる。

土師器は4点あり、うち3点は無高台環で、内面に黒色処理が施される。残る1点は長胴甕の口縁部破片である。

須恵器は6点出土しており、壺4点・甕1点・壺1点が含まれる。壺はいずれもロクロナデが看取され、底部破片は無高台で回転糸切り痕が残る。甕・壺は極小破片で、詳細は不明である。



第99図 「正村屋敷」とその周辺の地割



第100図 西深井・親水公園とそのイメージ図

おわりに

深井地区は東部町最西端に位置し、町の中心部と比較すると、生活環境は決して良好とは言えない。特に道路幅がせまく、あちこちで行き止まりとなり、農道が取り付けられていないために放置された水田もあるほどである。また優良宅地が少ないため人口があまり増加せず、行政面でも様々な不利益があったと思われる。

こうした現状を改善するため、農村活性化住環境整備事業が計画され、さらに下水道整備・住宅団地造成が引き続き行われることとなった。現在までに上記の約半分が終了しているが、工事完了後には住民にとって、快適な住環境が整備され、深井地区の活性化につながる地域づくりが行われることを望む。また、そのために今回の発掘調査の成果が、何らかの形で活用されることがあれば幸いである。

十代遺跡の発掘調査は、A・B・C 3地点に分けて実施したが、本来は一連の遺跡と考えられる。平安時代前期を主体とする集落跡が発見され、21軒の竪穴住居址・6棟の掘立柱建物址などが検出された。この一帯に大規模な集落が営まれていたのであろうが、調査面積がわずかであることと、床面を欠失したため柱穴しか検出できなかった住居址が多数あったと思われること等の理由により、わずかな情報しか得られなかった。とはいっても、B地点で検出された掘立柱建物址群の特徴的な位置関係・竪穴住居址のカマド位置がほぼ三方向を示し、それが時間差に関連しそうであることと、他地域の土器群と在地土器群のセット関係等、今後の詳細な分析により明らかになりうる知見を得ることができた。また、今まで東部町内ではあまり発見されていない縄文時代早期・晚期及び弥生時代中期の土器・古墳時代前期から中期にかけての遺物（管玉を含む）が出土したことは、遺跡の立地・分布等を考える上で重要である。

宮西遺跡ではわずかな面積の発掘調査しか行えなかったが、十代遺跡と同じく平安時代前期の集落跡が発見された。試掘調査の結果から、遺跡範囲はあまり広くなく、集落が継続した時間も短いと思われる。この時代には、新田開発が活発に行われ、各地に莊園が成立したのであるが、これに伴い、町内各地に大小様々な遺跡が残されている。若干時期は異なるが、本遺跡から唐沢遺跡にかけて、条里制に間連のありそうな地割が認められる。今後の研究に期待したい。

若宮遺跡からは、縄文時代中期の集落がわずかながら姿を現わした。平成6年度には団地造成が予定されており、発掘調査の計画も立てられている。両調査の結果により、不明な点の多い縄文集落の様相が、わずかでも明らかになる事を望む。出土量が多い『焼町土器』についても詳細な分析が可能となるであろう。

次郎淵・前田・唐沢の三遺跡は、わずかな調査であったが、遺跡主体部が今回の工事で破壊されなかっただけでも幸いである。

最後に、今回の発掘調査関係者全員に感謝すると共に、調査の成果が活用される事を望む。

(堀田 雄二)

参考・引用文献

- 長野県 1936 『長野県町村誌・東信篇』
- 松尾 砂織 1959 『和村誌・歴史編』
- 松尾 砂織 1974 『東深井区誌』
- 平凡社 刊 1979 『長野県の地名・日本歴史地名大系20』
- 上田・小県誌刊行会 1980 『上田・小県誌 第一巻 歴史編上(二)古代・中世』
- 東部町農協刊 1985 『ふるさとの民話』
- 会田 進 他 1986 『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会
- 青木和明 他 1988 『宮崎遺跡』 長野市教育委員会
- 赤山容造 他 1990 『三原田遺跡』 第2巻 群馬県企業局
- 五十嵐幹雄 1986 『東部町の遺跡と文化財』
- 島田哲男 他 1990 『一津』 大町市教育委員会
- 高橋 保 他 1992 『五丁歩遺跡・十二木遺跡』 新潟県教育委員会
- 千野 浩 他 1987 『塙崎遺跡群 V 殿屋敷遺跡』 長野市教育委員会
- 寺内隆夫 他 1991 『松本市南中島遺跡』 松本市教育委員会
- 直井雅尚 他 1990 『松本市郷町遺跡(図版編)』 松本市教育委員会
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編』 全1巻(4) 遺構・遺物
- 花岡 弘 他 1991 『閑口A・閑口B・下柏原』 小諸市教育委員会
- 百瀬長秀 他 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—』
長野県教育委員会
- 森 幸彦 他 1991 『企画展 繩文絵巻』 福島県立博物館
- 森嶋 稔 他 1990 『円光房遺跡』 戸倉町教育委員会
- 矢口忠良 他 1988 『浅川端遺跡』 長野市教育委員会
- 綿田弘実 他 1992 『瀧ノ上遺跡』 丸子町教育委員会

1 十代遺跡A地点
調査区北西部
(SB-01・02他)

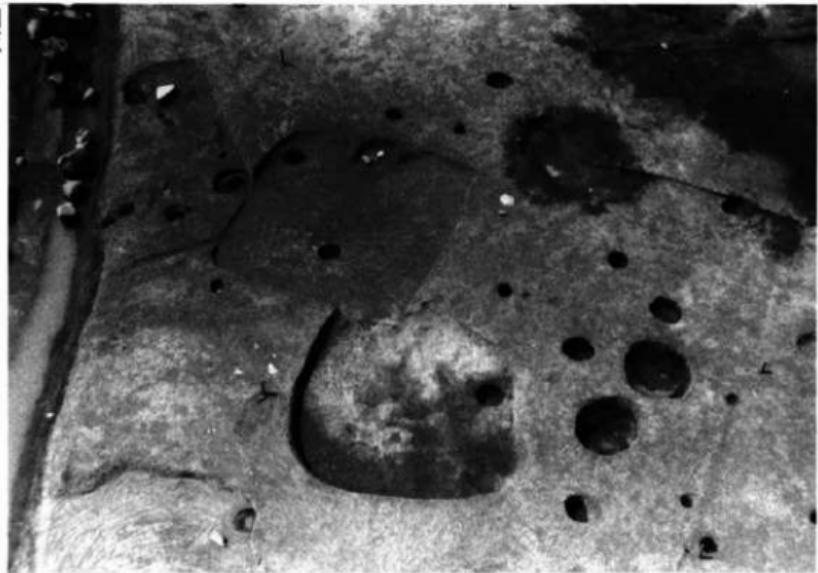


2 十代遺跡A地点
調査区北東部
(SB-11他)



3 十代遺跡A地点
調査区南東部
(SB-12・13・14他)





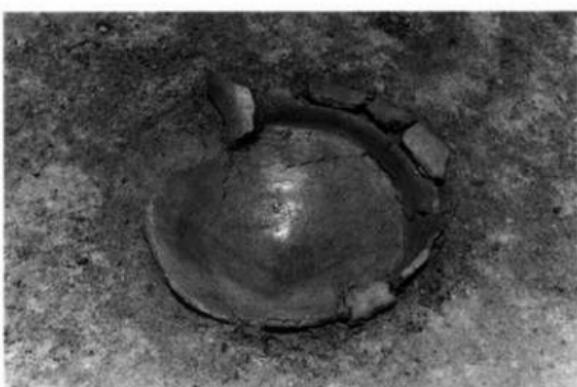
1 十代遺跡A地点 調査区中央部 (S B-03・04他)



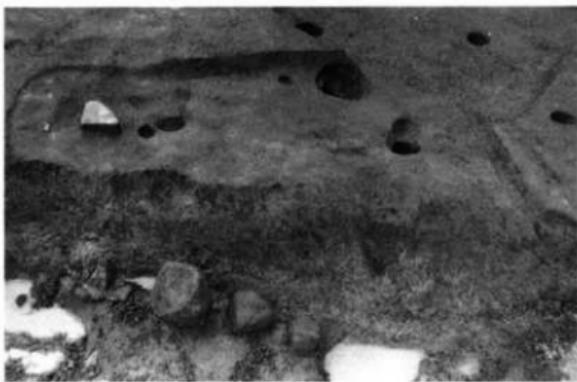
2 十代遺跡A地点 調査区南西部 (S B-08他)



1 十代遺跡A地点
S B -01・02



2 十代遺跡A地点
S B -01 炉



3 十代遺跡A地点
S B -03



1 十代遺跡 A 地点
S B -04



2 十代遺跡 A 地点
S B -04 カマド



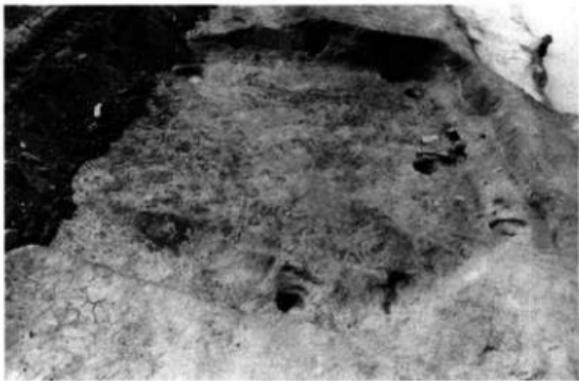
3 十代遺跡 A 地点
S B -06



1 十代遺跡 A 地点
S B - 08



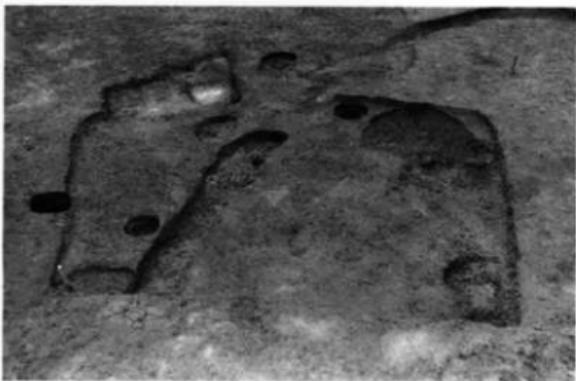
2 十代遺跡 A 地点
S B - 08 カマド



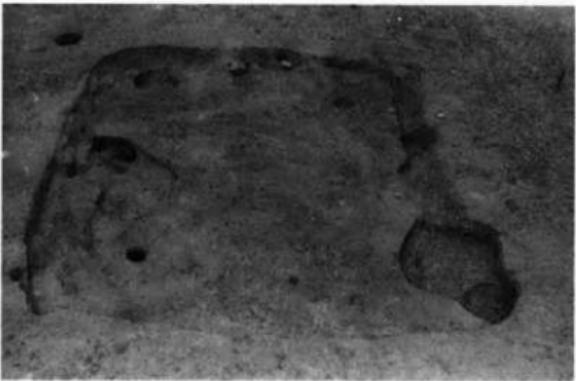
3 十代遺跡 A 地点
S B - 08 破壊状況
(調査中に重機が削土した)



1 十代遺跡 A 地点
S B - 11



2 十代遺跡 A 地点
S B - 12-13



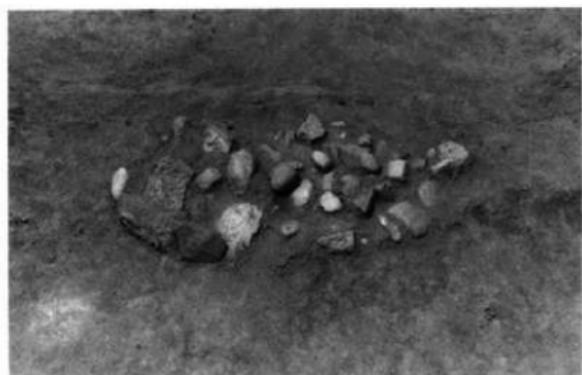
3 十代遺跡 A 地点
S B - 14



1 十代遺跡A地点
SX-01 檢出状況



2 十代遺跡A地点
SX-02 檢出状況



3 十代遺跡A地点
SX-03 檢出状況



1 十代遺跡 A 地点
S X -04 檢出状況



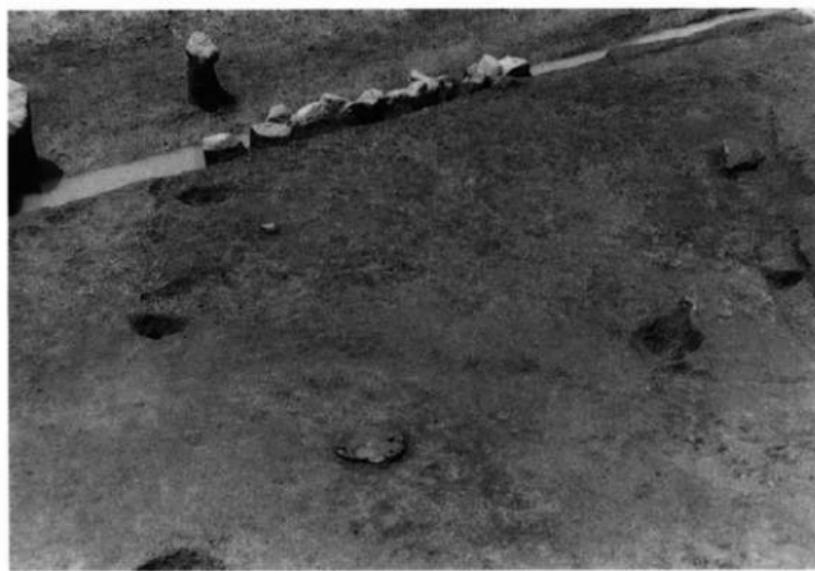
2 十代遺跡 A 地点
S X -06 斷面



3 十代遺跡 A 地点
S X -06 完掘



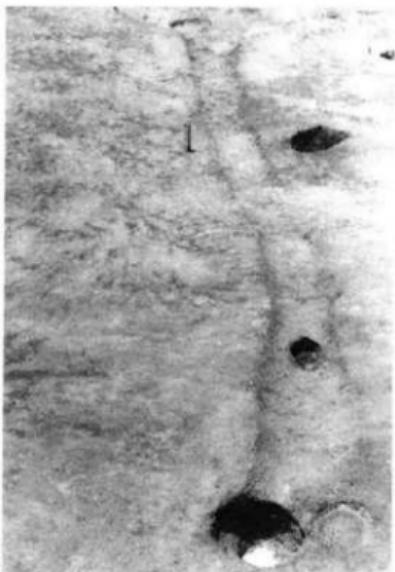
1 十代遺跡 A 地点 S D -01・02



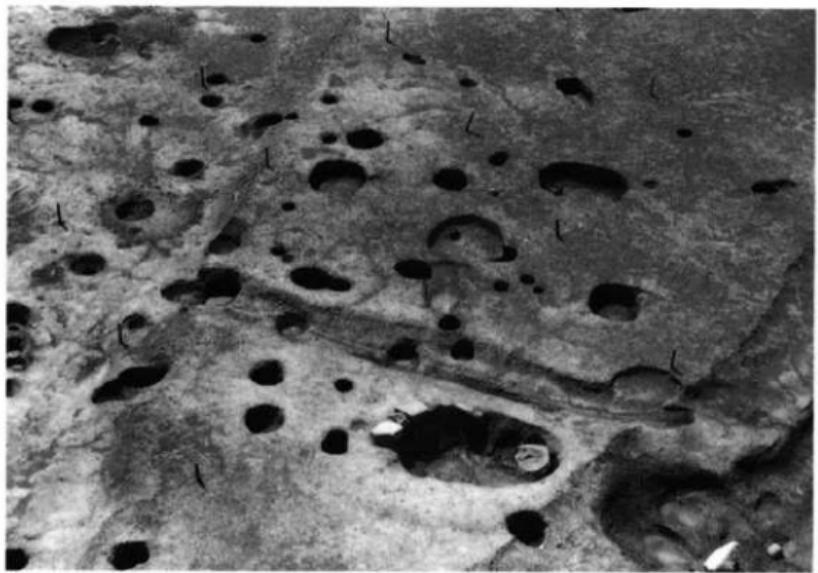
2 十代遺跡 A 地点 S D -01内列石状集石 (手前が S B -01・02)



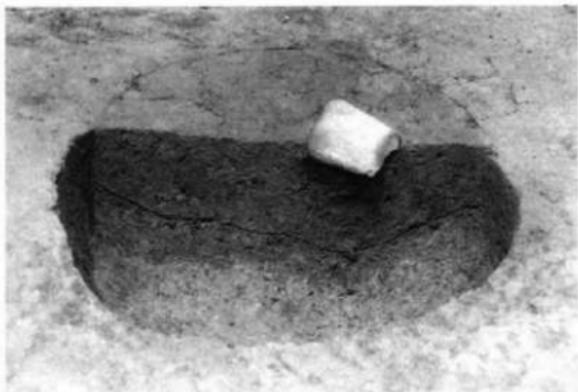
1 十代遺跡A地点 SD-03



2 十代遺跡A地点 SD-08



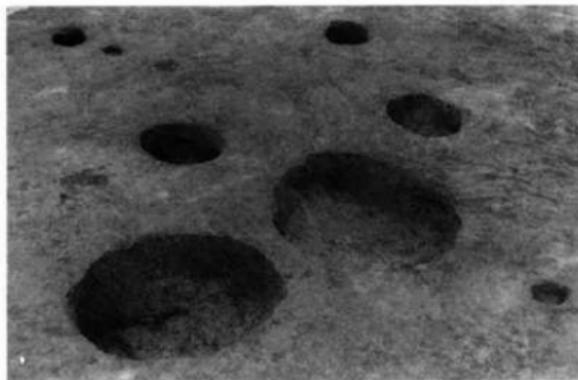
3 十代遺跡A地点 SD-06と土壤群・ピット群



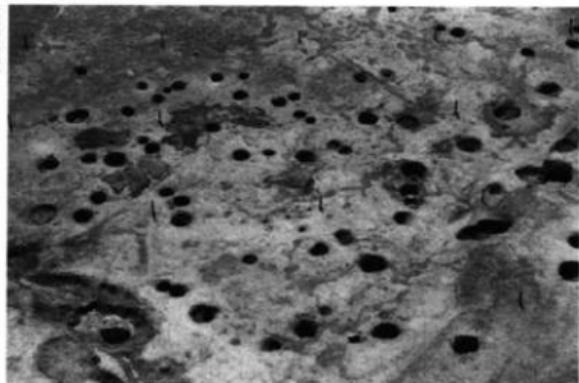
1 十代遺跡A地点
SK-05 斷面



2 十代遺跡A地点
SK-07 斷面



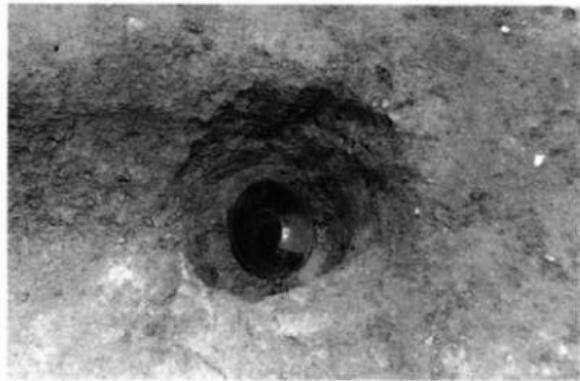
3 十代遺跡A地点
SK-14・15他



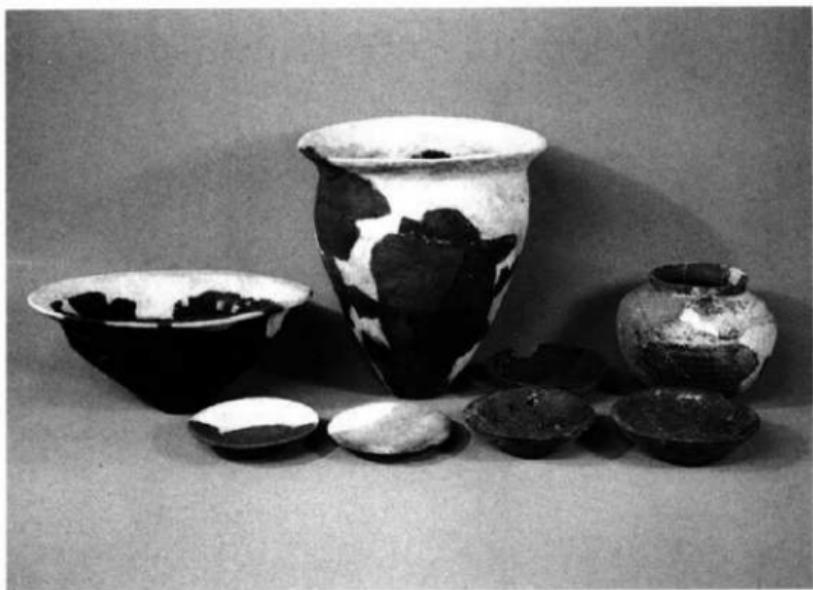
1 十代遺跡A地点
S B - 08 西側の
ピット群



2 十代遺跡A地点
N - 33 グリッドの
ピット群



3 十代遺跡A地点
S B - 12 · Pit - 2
遺物出土状態



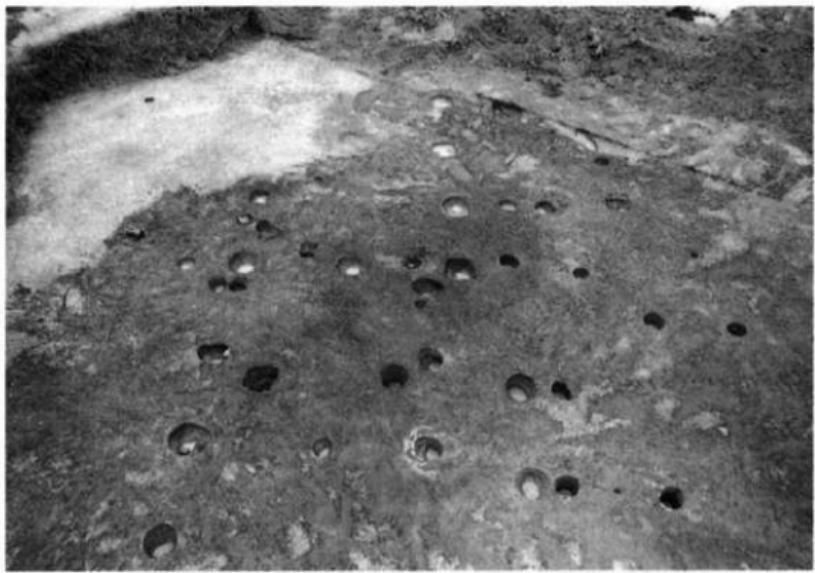
1 十代遺跡A地点 出土遺物



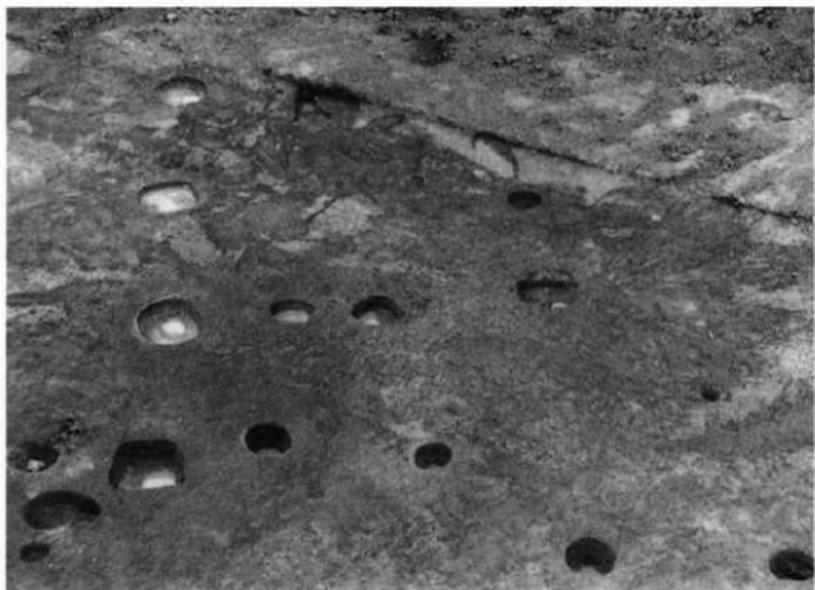
2 十代遺跡A地点 出土遺物



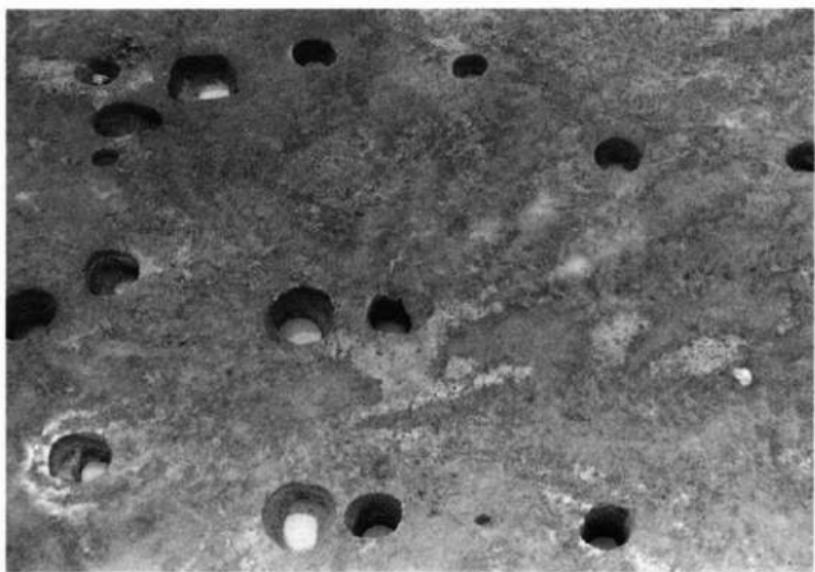
1 十代遺跡B地点・C地点 遠景



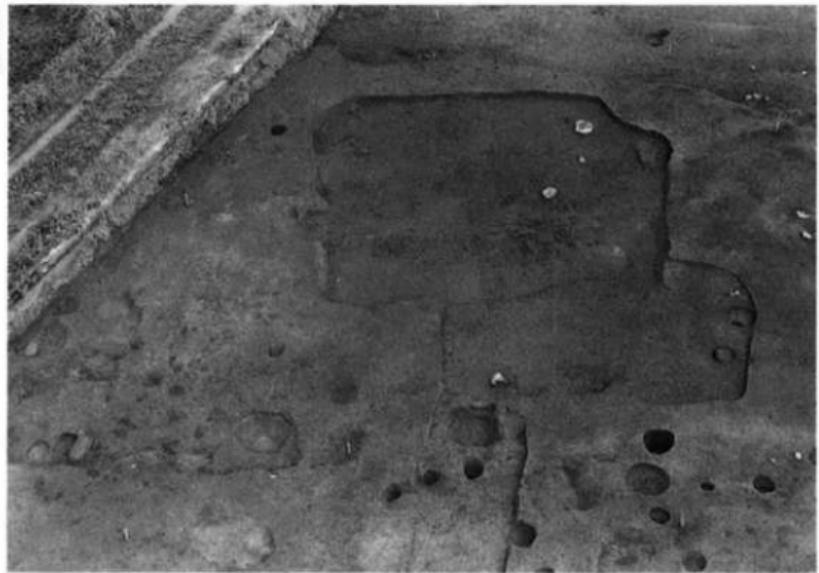
2 十代遺跡B地点 挖立柱建物址群



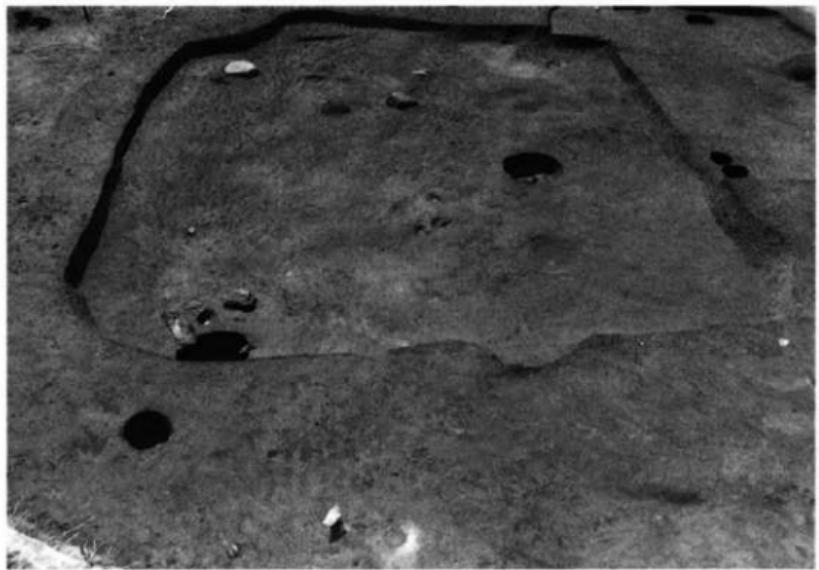
1 十代遺跡B地点 第1号掘立柱建物址



2 十代遺跡B地点 第3号掘立柱建物址



1 十代遺跡C地点 SB-01・02・03・05



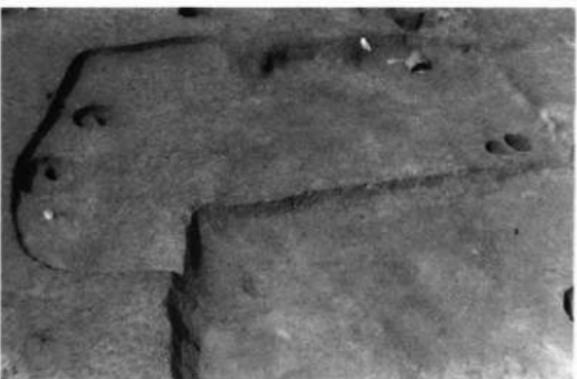
2 十代遺跡C地点 SB-02



1 十代遺跡C地点
S B - 03-04-06



2 十代遺跡C地点
S B - 04



3 十代遺跡C地点
S B - 05



1 十代遺跡C地点 SB-05 出土遺物状態



2 十代遺跡C地点 SB-06・第1号掘立柱建物址